ね 一蝋 (名) 【動】はりねずみ(針鼠)に同じ。

ね 一園 (助數) 兩手をひろげてかかふる大きさ。凡そ六尺。太平記(世九、六、原野花會)「本堂の庭に、十圍の花木四本あり」

ねーあい 一遺愛 (名) 故人の生前に愛したる遺物。朗詠「遺愛甘棠勿剪諸」太平記(四十中、人皆柿本の遺愛を戀ふるのみならず」

ねーあい 一畏愛 おそれ且親しむこと。敬愛。

ねーあかす 居明 (他動四) 其處にねて夜を明かす。萬三「居明(ヰカシ)て君をば待たむ、ぬばたまのわが黒髪に霜はふるとも」枕三物語「してねあかして見れば」

ねーあく 一帷幄 (名) 【雅と幄と。とばりとあげばりと。史記(封禪書)賜列侯、甲第、僮千人、乘輿斥車馬帷幄器物、以充其家」 【幕の中に居て作戰計畫をすること。漢書(張良傳)「運籌帷幄之中、決勝千里之外」 【大元帥陛下が軍事に關する機密を計畫し給ふ所。軍事參議院條例第二「軍事參議院は帷幄の下にありて重要軍務の諮詢に應する所とす」

ねあく じゃうそう 一帷幄上奏 軍事の機密又は軍令に關し、帷幄の中にて上奏すること。此の上奏をなし得る者は帷幄の機務に參與する者、即ち陸海軍大臣・參謀總長・教育總監及び海軍軍令部長とす。

ねーあつ 一威壓 威力を以て壓迫すること。威光を以て壓服すること。

ねーあづかり 居預 (名) 僧侶の役名。寺院にねて調度を取り扱ふ僧。

ねーあはせる 居合 (自動下) 折柄其の場に居る。恰も其の處に居る。

ねーあはせる 居合 (自動下) 前條の口語。

ねーあひ 居合 (名) 居ながら敏速に太刀を抜きて敵と立ち合ふ術。林崎重信に起こるといふ。下文を見よ。人倫訓蒙圖彙「ねあひは大刀打の根元なり(中略)長短の打物によって扱きやう品品あり、又は所の廣狭、地形の高下と、坐したると立ちたるとあり」(書言節用)「居合(ヰアハセ)(御物、林鐘、信家、浪也、又写之)」

ねあひ-ごし 居合腰 (名) 居合をなす腰つき。居合の身構。源氏烏帽子折「兩方りきむ居合腰」

ねあひ-ぬき 居合抜 (名) 居合の技を演じて人を集め、商磨などを賣る大道商人。香具師一件(中略)以香具付「愛敬藝術を以て賣藥仕り候居合抜・獨樂廻し之類」

ねーあを 位襖 (名) あを(襖)を見よ。令義解(衣服令)「衛府官佐(中略)牙笏・位襖(註解)無襖之衣也」近衛府式(中巻)「少將以上並著位襖・横刀・靴」

ねーあん 一慰安 慰め安んずること。漢書(韓延壽傳)「所以周急繼窮、慰安元元」便利百姓之道、甚備」

ねーい 一遺意 (名) 前人の遺志したる意志。故人のこころざし。後漢書(劉般嗣子慎傳)「父遺意、致國弟憲」

ねーい 一透迤 まがりくねるさまにいふ語。阮籍文(東平)「透迤漫衍、繞以大壑」

ねーいう 一畏友 (名) おそれうやまふべき友人。舒頤詩「王君我畏友、時寄五色鮮」

ねーえき 一胃液 (名) 【醫】消化液の一。胃腺より分泌せられ、無色・透明なり。蛋白質を消化す。

ねーおう 一威應 威光の他に感應すること。威力の他に及ぼすこと。盛衰記(十九、文覺)「心操(ココロバセ)(操シヲ)うして威應の相おはします」同廿、合戰)「南海西海の鱗に至るまで其の威應に隨ひ」

ねーおん 一遺恩 (名) 故人より受けたる恩。盛衰記(五、大臣)「專依(ヨリ)禪閤之恩言、被宥(ユルス)頼朝之死罪、爭忘(ワスレン)遺恩、忽に有反心哉」

ねーかい 一位階 (名) 【ゐ(位)は一位・二位の類、かい(階)は正從上下の別の義。くらゐの階級。現今には一位より八位まで各正・從に分かれ、十六階あり。續紀(六、和銅六年、五位以上同ゐ位階)者、因年長幼、以爲列次」舊刑法(第三百三、官職位階を詐稱し」

ねーかい 一遺誡 遺戒 後の爲めにいひ置く訓誡。遺訓。後漢書(馮魴傳)「臨死遺誡」

ねーがい 一遺骸 (名) 死したる體。なきがら。むくろ。死骸。太平記(四、六、原野人)「遺骸を烟となし」

ねーがいちゃう 居開帳 (名) 他所へ出でず、其の本地にて行ふ開帳。(出開帳の對)德川禁令考(四十三、享)「居開帳差免度儀、御書面、御知行(中略)光院居開帳願之儀」

ねーがう 一遺稿 (名) 死者の生前に書きおけるる草稿。宋史(蘇頌傳)「得韓愈遺稿於廢書簏之中」

ねーがう 一遺香 (名) ゐくん(遺薫)に同じ。

ねーがう 一位號 (名) くらゐの稱號。續紀(三、大寶元年)「始依新令、改制官名・位號」

ねーがき 井垣 (名) 鳥居などの兩脇より造りつけた井の字形の垣。漢魏草(六)「井垣」曾我扇八景(上)「墓の圍ひも地を擴げ、ゐ垣も申しつけん」

ねーかく 居懸 (自動下) すわりかく。平(法勝寺)「右の袖の上に居懸けられ」

ねーかく 一威嚇 おどすこと。おどかし。

ねーがく 一居樂 (名) 坐して雅樂を奏すること。又、その雅樂。歌謠品目(上)「居樂(ヰガク)(ゐ)(ゑ)(ゑ)(ゑ

きたり」

ねくとりあれざあ (名) 【植】睡蓮科、ねくとりあれざあ屬の水草。全部に刺を有す。葉は大にして直徑六尺内外に達し、圓形、其の緣邊上方に曲がりて稍盆狀を呈す。花はねむにすに類似す。南米あまぞん河に產す。形態奇なるを以て各所の植物園に栽培せらる。

ねぐび 猪頸 (名) 頸短くして猪の如きもの。又、胃など、仰のきて著けたるさまにいふ語。平治物語「白星の兜に鍬形打つたるを猪頸に著なし」

ねぐび 堰杙 (名) 堰(せき)。又はねぜきに打ち並ぶる杙。記「よさみの池の韋具比(ゐどうち)」新六帖「山川のせぜのねぐひを打添へて、早くも水をせきおとすかな」

ねぐひ 居食 (名) ざしよく(坐食)に同じ。機略比事「ゐ喰ひにしても、此のたくはへ盡くる世あらじ」

(諺)居食すれば山も空し 働かずして食ふのみにては、山の如き財貨も遂には皆無となる。

ねぐら 居座 (名) 氷魚を捕るために柵を構へて居る處。堀河百首「ひをのよるたびにぞ拂ふ田上や、ねぐらにかかるあじろ木の布」

ねぐら 居藏 (名) 取引所の語。取引所の所有する倉庫、又は取引所と特別の契約ある他人所有の倉庫の稱。

ねぐら-わたし 居藏渡 (名) 取引所の語。證書の交付により、居藏に入れあるままにて貨物の受渡しを濟ますこと。

ねぐらめ (名) 居馴住み馴れたること。(雨月物語)

ねくわ 燈心草科 (名) 【植】顯花植物、單子葉類の一科。一年生或ひは多年生草本。禾本科に似たる細長き葉を有するものあり、又細長き緣色の莖を有して鱗狀の葉を生ずるものあり。花は通常兩性、各花一箇の小苞を具ふ。花蓋は六片より成りて二層に排列し、一見穎の如くとりて宿存す。雄蕊は通常六箇なれども稀に三箇なることあり。子房は上生、三室を有し、各室に一箇乃至多數の胚珠を有す。果實は朔、有胚乳種子を含む。凡そ七屬二百九十種より成り、我が國に自生するもの凡そ二屬二十六種。蘆表用或ひは編物用等に供し、蘆の心を燈用に供するものあり。とうしんさうくわ。

ねくわう 威光 (名) 畏れ敬ふべき勢ひ。權威。威勢。義經記「七直(しちじき)に見ながさるる「いづれも威光は劣らせ給はぬことなれども」

ねくわくやう 胃擴張 (名) 【醫】胃蠕の筋肉の收縮力衰廢して胃の擴張する病。暴食・慢性胃加答兒などによりて起こる。

ねくわん 位冠 (名) くわんゐ(冠位)に同じ。大安寺伽藍緣起并流記資財帳「位冠冠貳拾捌」

ねくわん 位官 (名) 位階と官職と。

ねくわん 位官 (名) 位階と官職と。官位。

ねくわん 尉官 (名) 陸海軍の武官たる大尉・中尉・少尉の總稱。金鵄勳章敍陽條例「第三尉官の初敍に功五級とす」

ねくわん 偉觀 (名) 偉大なる觀物。壯觀。大觀。蒲道源詩「除國陽開增偉觀、月明風冷憶清秋」

ねくわん-そく 維管束 (名) 【植】植物學上の用語。高等植物の體を構成する一組織。纖維及び導管より成り、液體の通路を作り、又體を支持する骨骼となる。往往維管束鞘により圍繞せらる。

ねくん 偉勳 (名) 偉大なる勳功。拔群の功。大いなるいさを。

ねくん 遺薫 (名) 物に移り殘りたる香。うつりが。殘香。遺香。

ねくん 道訓 遺言の教訓。遺誡。盛衰記「十四(山門僧)延暦・園城兩寺者門跡嗣分慈覺・智證之遺訓所學是同實頼悟之教文」史記「孟嘗君列傳「賦事行刑、必問於遺訓而咨於固實」」

ねけ 蘭筍 (名) 飯を盛る筍。(稚訓四時祭式「盛蘭筍、納櫃居」案」名義抄「蘭筍ケ」

ねけい 畏敬 おそれうやまふこと。易經「威如吉。象曰、皆畏敬」

ねけいざい 違警罪 (名) 【法】重罪及び輕罪と共に、舊刑法の定めたる犯罪の三大區別の一。即ち、拘留又は科料に處せらるる罪。新刑法にては此の區別を廢したれども、此れ等拘留・科料にあたる罪は、他の法律の適用に就きては舊刑法の違警罪と看做さるるものとす。舊刑法第二「凡法律に於て罰すべき罪別て三種となす中略違警罪」刑法施行法第三十「拘留又は科料に該る罪は他の法律の適用に付ては舊刑法の違警罪と看做す」

ねけいざい そくけつ 【違警罪即決】【法】警察署長・警察分署長又は其の代理たる官吏が、其の管轄地内にて犯したる違警罪を、裁判の正式手續を用ひず、被告人の陳述を聽き證憑を取調べて直に判決の言渡しをなすこと。此の言渡しに不服あるものは違警罪裁判所に正式の裁判を請求することを得。明治十八年九月布告第三十一號「違警罪即決例」

ねけいざいさいばんしょ 違警罪裁判所 (名) 【法】違警罪の正式裁判をなす裁判所。即ち、區裁判所。明治十八年九月布告第三十一號違警罪即決例第三「即決の言渡に對しては違警罪裁判所に正式の裁判を請求することを得」

ねけいーどうもく 違警條目 (名) 【法】違警罪の條目。明治八年三月太政官第二十九號行政警察規則第七「違警犯人は其の犯罪を按し違警條目に依り處斷して後長官に具申し」

ねけいれん 胃痙攣 (名) 【醫】胃に痙攣を起こすこと。胃のひきつりて、きしこむこと。又、其の病。

ねけう 遺教 死期に臨みていひ殘したる教訓。續紀「(延暦元年)臨終遺教薄葬不受鼓吹」

ねけうぎやう 遺教經 (名) 次條の略。親長卿記「文明七年(千本釋迦堂遺教經始行」言繼卿記「天文十四年(千本維教經に參詣」

ねけうぎやうくわい 遺教經會 (名) 佛語。二月九日より同十五日まで、京都五辻千本の大報恩寺にて遺教經を訓讀する法會。訓讀會。遺教經。「(開寶年中行事大成)(今日讀)(又共ニ)(上京五辻千本ニアリ中略)此の經は釋尊入滅の時、佛弟子の爲に遺誡し給ふの經なり、故に遺教經、云ふ、訓讀會とは此の經を訓讀するの謂なり」

ねけうーぶし (名) 淨瑠璃節の一派。半太夫節の祖坂本粟雲の門人井けうの語り出だしたるもの。半太夫節よりふしこまやかなりと。譚海「增上寺所化に井けうといふ僧ありて、半太夫弟子に成りて中略後還俗して淨るり語りとなり、一流を語りいだし井けうぶしといふ、半太夫よりは節こまやかにして、こっつりとして花やかにはなきもの也」

ねーげげ 蘭下下 (名) 緒細き蘭の草屬。女のはくもの。蘭金剛、鎌倉年中行事「正月廿三日、御香役御輿の左の方より廻りて、御ねげげをめさせ申す」

ねーげた 井桁 (名) 【一】方形なる井戸の化粧側の上に、井の字形に組みたる緣木。運歩色葉「井桁」【二】總て井の字形に組みたるもの。【三】紋所の名。井の字を菱形に畫きたるもの。かげのねげた・からねげた・ひしねげた・ふとねげた・みつねげたなど種種あり。長倉追罰記「山中は日扇溝口は井桁」

(三)

ねけふ 遺業 (名) 前人が遺しおきたる事業。遺緒。晉書王導「受父遺業」

ねけふ 偉業 (名) 偉大なる事業。

ねけみ 居檢見 (名) 檢見の一。知行高の少なき小給所等に檢見に遣はすべき役人なき時、名主を呼び出して其の年の田來高と比較し、又は五箇年間の取米の平均額を標準として其の年の取高を定むるもの。請免。地方凡例錄「請免・居檢見の事」

ねけん 威權 (名) 威光と權柄と。

ねけん 威勢 (名) 威光と權柄と。權威。漢書「萬世安」

ねけん 遺賢 (名) 用ひられずして、野にある賢人。朗詠「營未出遺賢在谷」書經「野無遺賢、萬邦咸寧」

ねけん 違憲 憲法に違反すること。

ねけん 威嚴 (名) 威ありて嚴なること。いかめしきこと。太平記「上無威嚴、下必可有侮慢心」禮記「行法非禮、威嚴不行」

ねけんち 居檢地 (名) 檢地の一。檢地すれば反別も石高も增加すべき古檢の地を、村方の請願により竿入れをなさず石高も定めずして、見計ひを以て增高を課するもの。其の高と年貢とを增すのみを以て、村高の内書には無地增高と記して、年貢は本高に組入るるものとす。地方凡例錄「(檢地)居檢地と云ふこと稀にあり、是れは古檢の場所、地味よく地廣きゆゑ、地押に致さば打出し有るべき場所といへども、村方の願ひにて竿入をなさず、見計ひて增高を申し付け、反別は改めざるに付き、何ほど增すと申すことも成りがたく、高・年貢計り相增すゆゑ、無地增高と唱へ、村高の内書に記し本高に組入るるなり、是れを居檢地と云ふ」

ねこ 遺孤 (名) 忘れがたみの子。遺子。魏志「(毋丘)儉有存者、遺孤老弱」

ねご 懷風藻「以箸圍棊」屢見「賞遇」續紀「十三、天平十年七月丙子「政事之隙、相共圍棊」

ねご 違期 期限を過ぎること。保元(朝)「以前の事は合戰の時節なれば力なし、事既に違期せり」

ねこう 偉功 (名) 偉大なる手柄。すぐれたる功。

ねごころ 居心地 (名) ゐる心もち。落ち著きの具合。住みごこち。

ねーごころ 居心 (名) 前條に同じ。俳諧新選「一の家の居心問はん花の原」

ねこう 遺骨 (名) 死者の骨。法然上人行狀畫圖「遺骨をひろひ、寶瓶にをさめ奉り」通鑑「(開元)齊人收永安上黨二王遺骨葬之」

ねごばん 圍棊盤 (名) ごばん(棊盤)に同じ。宇治拾遺「圍棊盤をうらがへして」

ねこぼる 居溢 (自動) あふるる程まで居る。

ねーこむ 居籠 (自動) 内にをる。こもる。つめをる。大鏡「ねこみたりつる人も、みなくづれ出づる程に」

ねこん 遺恨 【一】恨みを遺すこと。殘念。遺憾。大鏡「遺恨のわざをもしたりけるかな」崔國輔詩「古人不達酒不足、遺恨精爽傳此曲」【二】忘れ難き憎み。うらみ。讐憤。宿怨。平家「鹿ヶ谷加階越えられ給ひぬるこそ遺恨の次第なれ」謠正尊「梶原が逆櫓の意見を承引し給はざりし遺恨により、我が君を讒奏申し」

ねごん 遺言 【一】ゆゐごん(遺言)に同じ。晉書「(謝)諷遺言、不若親承音旨」【二】【法】死者が其の死後に私法上の效果を生ぜしむる目的にてなしたる意思表示。民法「(第九百六十)遺言は本法に定めたる方式に從ふに非ざれば之を爲すことを得ず」

ねごんがら 蘭金剛 (名) うらなし(裏無)に同じ。嫁入記「くらゐの人はゐこんがうたるべし、あしだは黑塗、草履はしもべがたの事なり」

ねごん-しっからしゃ 遺言執行者 (名) 【法】遺言の旨に從ひて執行をなすべき任務を有する人。民法「(第八百九十五)遺言者は遺言を以て一人又は數人の遺言執行者を指定し」

ねごん-しょ 遺言書 (名) 遺言を記載したる書面。民法「(第九百六十一)(第九百九十八)被相續人の遺言書」

ねごんたちあひにん 遺言立合人 (名) 遺言に立會ふ人。

ねさい 偉才 (名) 器量のすぐれたること。又、その人。秀才。謝朓文「(解褐)以冠世偉才、眷予以國士」

ねさい 委細 くはしきこと。つまびらかなること。つぶさ。つばら。委曲。東鑑「(建仁元年)不能委細談話」歸畢」

ねざい 遺財 (名) 死者の遺したる財產。遺產。法曹至要抄「父遺財支配事」古事談「令」注「遺財等」

ねざいそく 居催促 (名) 其の場にすわりこみて催促すること。浮世風呂「執れことしの發市にと、附に從いたる居催促」

ねさう 遺草 (名) ゐかう(遺稿)に同じ。蘇頲文「(開元)部尚書中(張)相如有文作、沒者竟傳遺草」

ねざかや 居酒屋 (名) みせにて酒を飲まする酒屋。ねざけを飲ませる酒店。膝栗毛「居酒屋へはよったが、居飯屋へはよらなんだ」

ねさく 遺策 (名) 【一】計略に手おちのあること。呂氏春秋「所言無遺策」【二】前人の遺(のこ)したる策略。賈誼文「(孟秋)蒙故業、因遺策」

ねさく 違作 ふさく(不作)に同じ。

ねざけ 居酒 (名) 居酒屋に居りて酒を飲むこと。又、其の酒。五元集「名月や居酒のまんと頻かぶり」

ねさぶらふ 居候 (名) 他人の家に寄食する人。かかりうど。食客。

ねざま 居樣 (名) 坐ゐりたる容子。ねずまひ。坐作。

ねさらひ 臀 (名) 【膝行(ゐざり)の延】と。坐わる時、席に著く處。尻。ねしき。和名「臀(良比)坐處也」

ねさり 墊 (名) 宇鏡「耒底(利)」和名「墊(加良比)坐處也」

ねざり 居行 (名) 【一】ねざること。【二】足立たずして、ねざり行く不具者。こしゐ。蹇者。大藏狂言「片輪」座頭が目を開き、膝行(ゐざり)が立ち」

(諺)蹇三百文 ねざりて行き得る程の近所に轉宅するも、尚三百文を費やすとのこと。引越しには存外費用のかかるをいふ。

（諺）蹙に雲駄　役に立たざる譬へ。
（諺）蹙に煮え茶浴びせるやう　盲に煮湯をかけるに同じ。めくら（盲）の條を見よ。
（諺）蹙の衣物て尻拔いてる　尻ぬくを知りぬくにかけたる地口。
（諺）蹙の睾丸　すれて居るとの謎。

ねざり-うを（名）【動】魚類中、硬鰭類の一種。ねざりうを科に屬す。體は長さ三四寸、長楕圓形、蒼灰色にして、黑き長形又は種種なる形の斑點を有す。頭部は大にして、口は斜めなり。吻端に一本の毛を生じ、先端三分し、之を動かして餌となる動物を誘ふといふ。我が國、各地の淺海に產す。

ねざり-はひ　居行這（名）小兒の居ながら尻にて這ふこと。ねざること。

ねざり-まつ　居行松（名）はひまつ（這松）の異名。浦島年代記「翁委のねざり松」

ねざる　居行　膝行（自動）一坐わりたるまま進み行く。膝行す。源氏蜻蛉ねざり出づる人あなり」二尻を下につけたるまま進み行く。榮華島邊若宮日にそへて美はしうおほしまして、這ひねざらせ給ひて」三水少なくして舟など進み遲し。土佐日記「から舟を引きつつ上ぼれども、川の水なければねざりにのみぞねざる」

ねさん　一遺產（名）一死者の遺したる財產の上に、其事訴訟法第四十二相續人に歸せざるもの。民法第六條特に、死亡せる家族の遺したる財產の、未だ相續人に歸せざるもの。民法第五編第三章第三節第三款「遺產の分割」

ねさん　一違算（名）一計算の相違すること。算當のちがふこと。勘定ちがひ。二計畫の相違すること。みつもりのちがふこと。見當ちがひ。

ねさん-さいけんしゃ　一遺產債權者（名）【法】遺產者の債權者。破產法第千「遺產債權者及ひ受遺者」

ねさん-さうぞくにん　一遺產相續人（名）【法】遺產相續をなすべき人。其の法定の順位は、第一は直系卑屬、第二は配偶者、第三は直系尊屬、第四は戶主とし、直系卑屬又は直系尊屬の間にありては親等の近きものを先にし、親等の同じきものは同順位にて共に相續人となる。民法第九百三條被相續人の直系卑屬は左の規定に從ひ遺產相續人と爲る」

ねさん-しゃ　一遺產者（名）遺產を遺して死亡せる人。民事訴訟法第三十二條遺產者死亡の時」

ねさん-ぶつ　一遺產物（名）遺產を組成する箇箇の動產と不動產と。破產法第千「現存する遺產物」

ねざんまい（名）ねざま。ねずまひ。すわりやう。

ねし　一闈司（名）後宮十二司の一。宮闈の管鑰及び出納を掌るもの。後宮職員令「闈司」

ねし　一位子（名）大寶の制、內六位以下、八位以上の嫡子、年二十一以上にて役任なき者を、毎年京國の官司勘檢簡試し、分かちて三等となし、儀容端正にして書算に工みなるを上等、身材强幹にして弓馬に便なるを中等、身材劣弱にして文算を識らざるを下等とし、上等・下等を式部に、中等を兵部に送り、上等を大舍人、下等を使部、中等を兵衛となすこと。（陰子の對）續紀四、和銅元年、賈人位子、无考之日、浪入常選、白丁冒名預貢人例、此色且多、此由式部不察之過、爲中略亦其位子、准令、嫡子唯得貢用、庶子不合、今卽兼用、此亦式部違令」

ねし　一遺子（名）忘れがたみの子。遺兒。

ねし　一遺志（名）前人の遺ゐしたる意志。生前の意志。高允文藝園學報「中略祖宗之遺志」

ねし　一遺址（名）殘りてある建物などのあと形。袁皓詩「梵林遺址在松巖」

ねし　一遺矢　座しながら大小便を漏らすこと。ねびたり。史記「略略雖老尙善飯、然與臣坐、頃之三遺矢矣」

ねし　一違旨　趣旨にたがふこと。仰せにそむくこと。

ねし　一遺事（名）一古より傳はり殘れる事跡。二死者の遺ゐしたる事柄。

ねし　一遺兒（名）一わすれがたみの子。わすれがたみ。二すてご。棄兒。

ねじ　一位次（名）位の高下によりて座次を定むること。又、その座次。位階の順次。公式令「凡文武職事散官、朝參行立、各依位次爲序」後宮職員令「外命婦准夫位次」史記「張丞相「以絳侯勃爲右丞相位次第一、平徒爲左丞相位次第二」

ねじかる（自動）すわる（坐）をいふ、內の方言。物類呼稱

ねしき　居敷（名）一座。席。座席。神功紀「敷草爲坐」應神紀「上坐於宴席」二ゐさらひ。尻。浮世風呂「大きな尻」

ねしき　一位色（名）たうじき（當色）に同じ。式部省式「凡諸節會行列次第中五位已上位色不同、雖是下官、猶先高色」桃花藥葉「當色謂位色也」

ねしき　一違式　格式にたがふこと。法式にたがふこと。類聚三代格十二太政官符、慶雲正年「違式罪」

ねしき-あて　居敷當（名）衣服の尻の當たる裏につくる切地。しりあて。

ねしく　居敷（他動）すわる。座す。移植民間童人「若事違彈例、卽科違式罪」大鏡狂言記「暫く居敷いて居りましたに依つて、しびりがきれました」

ねじくゐん　一位次官（名）位或ひは官の高下によりて座次を定むること。又、其の座次。位次と官次と。

ねしこばる（自動）（居醜張るの義）相撲人の片足つつあげ、力をこめて踏む。しこをふむ。しこをくむ。

ねしつ　一委悉　つまびらかに盡くすこと。甚だ細かなること。詳悉。委細。肅子良文「比見君別更委悉也」

ねしつ　一違失　あやまつこと。しくじり。過失。後漢書「有違失辱勅之」

ねしつ　一遺失（名）一とりのこすこと。とりおとすこと。忘るること。遺忘。史記「其精微深妙、多所遺失」二あやまち。缺點。杜甫詩「雖乏諫諍奏、恐君有遺失」三動產の占有者が、其の意にあらずして其の占有を失ふこと。とりおとすこと。遺失物法第一「他人の遺失したる物件を拾得したる者」

ねしつ-しゃ　一遺失者（名）物を遺失したる當人。遺失主。遺失物法第一「遺失者又は所有者」

ねしつ-ぬし　遺失主（名）物を遺失したる持主。遺失者。民法第百九十三條「被害者又は遺失主」

ねしつ-ひん　一遺失品（名）次條に同じ。

ねしつ-ぶつ　一遺失物（名）遺失したる物。民法第百九十三條「盜品又は遺失物」

ねし-しづまる　居鎭（自動）座につき

て靜かになる。席におちつく。神代紀下「坐定（オチヰテ）因問其來意」枕「講師上りつれば、皆ねしづまりて」

ねしぶ　一蝟集　蝟（ハリネズミ）の毛の如く、物事のより集まること。金安期文「華榱蝟集而綴橫」

ねしゃ　一慰藉（藉は助くる義）なぐさめたすくること。なぐさめ力をそふること。なぐさめ。後漢書「其風塵、報以殊禮、略所以慰藉之良厚」黃庭堅詩「富貴不相忘、寄聲相慰藉」

ねしゃう　一威將（名）威望ある將帥。川中島合戰「共に下り居る床几の上、威將の會とも云ひつべし」

ねしゃう　一圍障（名）かこひ。かき。民法第二百三十五條「讓界に圍障を設くること」

ねじゃう　一委狀（名）ねにんじゃう（委任狀）に同じ。證券上諸國の富める者に、我れ所負主に成りて委狀を書かせ、判を加へて米を借りて、其の所其の郡其郷村村、餓死せんとする者の所望に隨つてむらなく借し給へけり」

ねしゃうけん　一圍障樞（名）【法】二棟の建物が其の所有者を異にし且つ其の間に空地ある時、各所有者が他の所有者と共同の費用を以て其の境界に圍障を設くるを得る權利。

ねじゃく　一胃弱（名）胃の消化力の衰弱する病氣。

ねしゅ　一遺珠（名）一拾ひ殘されたる玉。張籍詩「赤水今何處、遺珠已渺然」二轉じて、古人の詩歌などにて、未だ世人に知られざる傑作。

ねじゅう　一威從（名）威儀師と從儀師。江次第「威從著長橋上床子」

ねしゅく　一萎縮（名）なえちぢむこと。衰へしぼむこと。

ねしゅく　一畏縮　おそれてちぢむこと。金史「皆畏縮、而不敢行事」

ねしゅ　一遺緒（名）（緒は絃緒）先代の遺せる事業。書經「惟予小子、嗣守文武成康遺緒」

ねしょ　一遺書　一死後のために書き遺せる文書。かきおき。遺言狀。榮陰比事「遂呼族人、爲遺書、悉以財屬女」二活處に散逸せる書。漢書「使謁者陳農、求遺書於天下」三後世に遺せる著書。遺著。大學「大學孔氏之遺書」

ねしょ　一位署　官位・姓名を公文書に署すること。又、其の法式。ねしょがき（位署書）を見よ。職原抄「位署體、先官次位」

ねしょう　一稱唯　上より仰せありたるとき、おおと應答すること。讓位と音近き故避けて、逆にねしようと訓むを故實とす。貞觀儀式「大臣喚召使二聲、召使稱唯、迫立舍前」

ねしょがき　位署書（名）（しょ（署）は名書をする義）官位・姓名を書き連ぬる書式。官と位と相當の時は官を上に、位を下に書く（例へば中納言從三位）。不相當の時は位を上に、官を下に書く。又、位高く官卑ければ行の字（例へば正二位行大納言）、官高く位卑き時は守の字を加へ（例へば從四位上守治部卿）、兼官の時は相當官を上に、餘官は高くとも下に書するを例とす。例（ば中納言兼彈正尹從三位の類。貞丈雜記）

ねしょく　一委囑　ねたく（委託）に同じ。生前のたのみ。生前の委託。

ねしょく　一遺囑

ねじょく　居職（名）印判師・裁縫師・縫箔師等の如く、自宅に居て仕事に從事すること。又、其の人。

ねじょくにん　居職人（名）居職を營む人。居職。民法第百七十七條三號「居職人及ひ製造人の仕事」

ねしる（自動）にじるやうにして近よる。じりじりとねざりて近よる。ねぢよる。

ねじろ　居城（名）きよじやう（居城）に同じ。甲陽軍鑑「武州松山の城を取り持つ、己が居城（ヰキ）は岩付也」

ねしん　一遺臣（名）前朝又は先代より遺（ノコ）れる臣。

ねしん　一威信（名）威嚴と信義と。後漢書「聞、後威信、遠自江南、不期俱降」

ねしん　一維新（名）一萬事總て改まり新しくなること。明治五年十一月二十八日徵兵告諭「大政維新、列藩版圖を奉還し」書經「成興維新」詩經「雖舊邦、其命維新」二特に、明治初年に於ける新政の改革の稱。明治十年八月內務省乙第七十六號達「維新以來醫術を以て諸官廳及地方公立病院に奉職從事し」

ねじん　一偉人（名）すぐれて立派なる人。偉大なる性格を具へたる人。大人物。魏志「此三公者、乃一代之偉人也、後世殆難繼矣」

ねしんしれう-へんさんくわい　一維新史料編纂會（名）文部大臣の管理に屬し、維新の史料の蒐集及び編纂を掌る合議制の官廳。總裁・副總裁・顧問・委員を以て組織す。維新史料編纂會官制第二「維新史料編纂會」

ねしん-りう　一唯心流（名）ゆゐしんりう（唯心流）に同じ。

ねす　委（他動）一ゆだね。まかす。二すつ。委棄す。

ねすがた　居姿（名）すわりたるすがた。ねざま。ねずまひ。二代男「居姿の女、忽然と驅れ」吉野忠信「居姿氣高き扮粧」

ねすくまる　居竦（自動）次條に同じ。

ねすくむ　居竦（自動）ねながらすくむ。すくみて動かれず。すくむ。ねすくまる。榮華「女房達ねすくみてたつ心ちいとわびし」

ねすぐり　居勝（名）敵人の我が隊中に紛れ入りたるを慮り、兼ねての相圖に從ひ俄かに居坐わりて、擧動の一致せざる敵人を見出だすこと。太平記「夜討・强盜をして歸る時、立ち勝り居勝りと云ふ事あり。是れは約束の聲を出だして、諸人同時に颯と立ち颯と居、かくて敵の紛れ居たるをえり出ださん爲めの謀なり」

ねすまひ　居住（名）すわれるさま。名義抄「坐作（ヰヅ）」枕「藏人中將高ひざまづきとかやいふねすまひ」

ねすまう　居相撲（名）すわりずまう（坐相撲）に同じ。大矢數「居相撲は作法の外の手取にて見た所よりすわる腰骨」

ねすわり　居据（名）一ねすわること。遁退せざること。二取引所の語。相場が其の儘にて變動せざること。「中先兩期は殆ど居据りの儘」

ねすわる　居据（自動）一坐を占めて動かず。すわる。二其のままにて動かず。動搖せず。

ねずみ　一萎莖（名）【植】あまどころ（萎莖）に同じ。

ねせい　一威勢（名）たけきいきほひ。いきほひ。太平記「太原崇孚今若乘其勢徵不討之、取高時法師逆惡、加高氏威勢上者なるべし」管子「人主之所以制臣下者威勢也」

ねせい　一遺制（名）昔時の制度の、今に遺（ノコ）りたるもの。續後紀「承和七年勅後太上天皇崩後、國忌荷前陵戶等事、宜遵

遺制、以停奉行一焉」白居易詩「鋪張對天之鴻休、揚厲無前韓愈文「潮州謝上表」儒助「郊祭高祖太宗之遺制」

ねせい 〔遺精〕 睡眠中など不隨意に精液を洩らすこと。もうざう。

ねせい-あらそひ 〔威勢爭〕 (名) ねせいを爭ふこと。勢ひを競ふこと。狂言「大山伏」「互ひにねせいあらそひの樣に、何彼と言ひ合はせられては埒が明きませぬ」

ねせう 〔遺詔〕 帝王の遺言。續紀「三、大宝三年十二月、太上天皇崩、遺詔勿二素服擧一哀」史記「秦始皇本紀」「化及二無窮、遵二奉遺詔一、永承重戒」

ねぜう 〔遺詔〕 前條に同じ。

ねぜう-の-そう 〔遺詔奏〕 遺詔を奏聞する儀式。後成恩寺關白諒闇記「御葬儀以前有二遺詔奏一（後院宣旨、外記、若上卿、上卿、上卿、上卿、使申詞云、中略、外記、若上卿、上卿、上卿、上卿、

と申して苦しからず」

ねちよ 遺著（名）死後に遺せる著書。又、後世に遺せる著書。

ねちよう 威重（名）威厳ありておもおもしきこと。史記高祖本紀「奈何令二人主一拜二人臣一如此則威重不レ行」

ねちよく 違勅（名）勅命に違ふこと。みことのりにそむくこと。續紀六、神龜六年三月壬午「賣及買人、並科二違勅罪一」同八、天平宝字元年三月乙卯「如有犯者、以二違勅論一」

ねちん 遺塵（名）前人の遺せるあと。遺蹟。朗詠「曲水離杯、遺塵遠絶、書二巴字而知二地勢一」左思文機皇先生之柔梓、列聖之遺靈」

ねつう 胃痛（名）胃のいたむこと。又、其の病氣。

ねつき 居著（名）ねつくこと。すみつき。

ねつきぢぬし 居著地主（名）その所有地内に住居を構へ居る地主。

ねつきちやうにん 居著町人（名）江戸にて、自分所有の地内に住居を構へ居る町人の稱。家持。守貞漫稿四、当宅地を買得て自地に住居する者を、戸籍には家持某と署す、俗には是れを居付町人と云ふ」

ねつく 居著（自動）一来たりて其のまま居る。歸らずに居る。枕廿、いひにいきたるが、やがてねつきて物いふなり」二其の地又は家に住みて安んじ居る。安んじて住みつづく。すみつく。すみ馴る。字治拾遺三、此の塚の傍近くは、げすなどもえねつかず、むつかしき事ありと昔ひ傳へて、大かた人もえねつかねば」

ねつづ 井筒（名）一木又は石等を以て地上に構へたる井戸の圍ひ。ねどがは。けしやうがは。又、ねげた。勢語「つつゐづつゐづつにかけしまろが髪、すぎにけりしないも見ざるまに」散木集一、石井づつひま漏る水にたはぶれて、つつにも夏を聞きわたるかな」二紋所の名。井戸がはに象れるもの。からづつ・ちがひづつ・はながたづつ・ひらねづつなど種種あり。

ひらねづつ
輪違ひづつ
ねづつ
ねづつ
ね

るる中人の住むあたりに、かかる人おちあふれけん」

ねなかぶ 田舎（自動ニ）ゐなかじむ。ゐなかめく。ひなぶ。宇津保俊蔭上「今もゐなかびず、よしよししく」源顕国「ゐ中びずよしありて」

ねなかぶう 田舎風（名）ゐなかびたるふう。田舎の風習。

ねなかぶし 田舎武士（名）ゐなかざむらひ。源氏冷泉節「情も知らぬ田舎武士」

ねなかま 田舎閭（名）家造りに用ふる尺度の名。曲尺六尺を一閭となすもの。（京閭の對）猿蓑「田舎閭のうすべり寒し菊の宿」頓鼠漫筆十五「屋敷地の歩数の定めに京閭・田舎閭と云ふ事は、古代よりの制と思へどいまだ其の所出を知らず、且方六尺五寸を京閭と稱ひ方六尺を田舎閭と稱ふも、何をもて割り定めけんものとも更に其の所據を知らず」

ねなかまはり 田舎巡（名）方方の田舎をへめぐること。田舎をまはりありきてかせぐこと。又、其の人。

ねなかまぢゅう 田舎饅頭（名）つぶし餡なる、田舎風のまんぢゅう。

ねなかみそ 田舎味噌（名）麥麹にて造りたる味噌。色赤黑くして、味ひ鹹し。

ねなかみやげ 田舎土産（名）ゐなかづと（田舎妻）に同じ。

ねなかむき 田舎向（名）田舎にむくこと。田舎人の趣好に適すること。

ねなかむしゃ 田舎武者（名）田舎に住む武士。田舎育ちの武者。ゐなかざむらひ。十訓上「田舎武者の情もあはれも知らぬありけり」

ねなかむすめ 田舎娘（名）田舎の娘。村女

ねなかめ 田舎目（名）昔時、斤兩に用ひたる秤の目の一。甲斐國志二「食古へ秤に京目・田舎目と云ふ事あり、斤兩の數今未レ詳中略金壹兩者京目五十枚金四兩貳分壹朱爲中目（ナカノ）貳百枚金五兩貳分貳朱壹厘五なりは爲中目中略按之京目方强しと知るべし」金銀圖錄「禁裏樣江黃金三兩（田舎目中略）御進上候」

ねなかめく 田舎（自動四）ゐなかふる。ゐなかだつ。若風俗に見ゆ。ゐなかぶる。

ねなかもの 田舎物（名）田舎にて作りたるもの。田舎にて製作せる器物。枕八「遺戸・づし何も、ゐなかものはいやしげなり」

ねなかもの 田舎者（名）一田舎の人。ゐなかうど。田夫。十訓「此の解狀は田舎ものの草にあらず、學生・儒者などの書きたるにこそ」二不作法なる人を罵りていふ語。

ねなかや 田舎家（名）田舎の家。田名めける家。公任集「春ゐなか家に遊びしたる所に、まらうどの來て」

ねなかやくしゃ 田舎役者（名）田舎芝居の役者。田舎廻りの俳優。又、俳優をおとしめ罵りていふ語。謡藝太平記五「田舎役者の初上げ」

ねなかやまぶし 田舎山伏（名）田舎の山伏。太平記五大塔宮「年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける」

ねなかよね 田舎の遊女。傾城反魂香上「むだことなしの云ひ捨ては、田舎よねとて笑はれず」

ねながら 居乍（副）坐したるまま。家に居りながら。神武紀「吾必不二假鋒刃之威一坐平天下」伊勢集「おひ風の我が宿にだに吹きこずば、ゐながらよその花を見ましや」

ねなかる 居流（自動ニ）席を列ねて並ぶ。列坐す。ゐならぶ。平家八「信義勢、來座には八箇國の大名・小名居流れたり」

ねなかわざ 田舎業（名）田舎のしわざ。田舎めけるこしらへ。源須磨「碁・雙六の盤・調度・だきの具など、ゐ中わざにしなして」

ねなかわすれ 田舎忘（名）田舎の事を忘るること。盛衰記十「丹波上流「鬼界島中略」戲呼哀れなる所にこそ實にさこそ思ひ給ひけめ、早早出仕し給ひて田舎忘れあるべし」

ねなかわたらひ 田舎渡（名）田舎に行きて生活すること。田舎に出稼ぎすること。勢語「ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとに出でて」

ねなかをとこ 田舎男（名）田舎者の男。村夫。

ねなぎぐさ （名）【植】ゐのこづち（牛膝）の異名。

ねなげ 居投（名）相撲の手。投げの十二手の一。古今相撲大全下天四十二・八手分類十二中略居投ナゲ

ねなじむ 居馴染（自動四）久しく居りて馴れ親しむ。長らく住みてなじみとなる。ゐなる。續猿蓑「燕の居なじむ空や郭公」

ねなほり 居直（名）一ゐなほること。二天條の略。

ねなほりがうだら 居直强盜（名）竊盜に入りたる者が家人に見咎められ、態度を變じて强盜となること。又、其の者。

ねなほる 居直（自動四）一改めてすわる。すわりなほす。ゐすまひを正す。枕五「ゐなほりなどして久しう待ちつるも」源若菜「宮もゐなほり給ひて、御物語し給ふ」二急に態度を變ず。舉動を改む。著聞七「其の折りきと居なほれば」

ねなみ 居並（名）ゐなむこと。すわりてゐならび。

ねなむ 居並（自動四）ならびすわる。ゐならぶ。列座す。宇津保俊蔭「ごだち・うなゐども中略ゐなみたり」

ねならぶ 居並（自動四）席を列ねて並ぶ。列坐す。ゐながる。ゐなむ。

ねなり 居爲（名副）一其のまま居ること。少しも進退せざること。夫木四「今朝見れば花も杉生になりにけり、風はゐなりに吹くと見つれど」三河物語下「小笠原與八郎手がにりをしてゐなりに成りければ、信長手を失ひ給ひて」二住みしままなること。櫻陰比事四「借宅を居なりに買ひ求めけるに」

ねにん 委任（名）一ゆだねまかすこと。太平記廿七「武將に委任せられば、誰れか其の家を輕んじ、誰れか舊功を續がざらん」史記薄昭「委任而責成功」二【法】契約の一。當事者の一方が法律行爲をなすことを相手方に委託し、相手方がこれを承諾するによりて成立するもの。民法第三編第十節三「委任」

ねにんけいやく 委任契約（名）【法】前條二に同じ。

ねにんけいり 委任經理（名）他人の委任を受けて會計事務を處理すること。

ねにんけんげん 委任權限（名）【法】委任によりて與へられたる權限。

ねにんしはらひめいれいくわん 委任仕拂命令官（名）各省大臣の委任によりて仕拂命令を發する權限ある官吏。

ねにんじむ 一委任事務（名）委任せられたる事務。民法第六百四十四條「委任事務を處理する義務」

ねにんしゃ 委任者（名）委任をなしたるもの。（受任者の對）民法第六百四十五條「受任者は委任者の請求あるときは何時にても委任事務處理の狀況を報告し」

ねにんじゃう 委任狀（名）委任者が委任の旨を記載して受任者に交付する證書。鏡寶法第十四「鏡寶の公告を爲し及ひ通知を發したることを證する書面及ひ委任狀」

ねにんだいり 委任代理（名）【法】委任契約によりて生ずる代理。

ねにんだいりにん 委任代理人（名）【法】代理人の一。委任によるもの。委任代理たる人。

ねにんめいれい 委任命令（名）【法】命令の一。法律の委任によりて立法事項又は法定事項を定むるもの。

ねぬ 率寢（他動ニ）ひきゐてねる。連れてねる。ともねす。記上「沖つ鳥鴨どく島に我が草泥（ナレ）し、妹は忘れじ世のことごとに」萬四「飛鳥川堰くと知りせば數多夜も、爲爾（ナリ）てこましを堰くと知りせば」

ねぬき 居貫（名）船底の緣（ノリ）。

ねねう 圍繞（名）かこみめぐること。とりかこむこと。とりまくこと。枕三「さぶらひの者ども數多、かしこまりゐねうしたるものをかし」呉志「卓畜圍繞數重、定近營ニ是往乃去」

ねねう 遺尿（名）寢小便をすること。いびたれ。よつばり。

ねねうーち 圍繞地（名）或る土地を圍繞する土地。袋地の周圍の土地。民法第二百十條「或土地か他の土地に圍繞せられて公路に通せさるときは其土地の所有者は公路に至る爲め圍繞地を通行することを得」

ねねらーめん 圍繞面（名）【數】空間に於て隔りある部分を取り圍みたる面。

ねーねむり 居眠（名）ゐねむり（居眠）に同じ。宇津保藤原「御帳のとのつちゐにおしかかりて、ゐねぶりし給へり」名義抄「睡ネブル」

ねーねぶる 居眠（自動四）ゐねむる（居眠）に同じ。狂言鬼「ゐねぶってばかり居って」

ねねむり 居眠（名）ゐねむること。ゐねぶり。かたねぶり。

ねねむる 居眠（自動四）すわりたるままねむる。居ながらゐねむる。ゐねぶる。百合若大臣野守鏡「是れは居睡った、なんと鮮にかかなんだか」

ねーの 維那（名）佛語。禪家にて、維那（ノウ）の稱。庭訓往來十月「禪家者中略藏主・維那（ノウ）・知客」運歩色葉「維那（ノウ）（禪家之）」

ねーのーあし 猪足（名）「其の兩端、猪の足に似たればいふ」機の具の名。織り成せる布帛を卷きつくるもの。ゐっめ。きぬまき。まへがらまき。和名計「織複（井乃之孫反）曰、織複、機之卷、猪者也」

ねーのーいひ 牛膝（名）【植】ゐのこづち（牛膝）の異名。字鏡「牛膝（又云乃保比）」

ねのうへーぶし 井上節（名）淨瑠璃節の一派。寛永年中、大坂の人井上播磨掾愛榮の語り出だせるもの。本朝世事談綺三淨「大阪井上節、井上市郎兵衛といふもの也」

ねのうへーりう 井上流（名）砲術の流儀の一。慶長・元和の頃、播磨國の人井上外記正繼の創めたるもの。外記流。國朝砲熕權輿錄「古今火術の諸流中略井上外記正繼より出でし流派は井上流と稱し」

ねのき 居退（名）居退くこと。又、住居したる家などを其の儘にして立ち退くこと。

ねのく 居退（自動四）居りたる所よりしりぞく。たちのく。宇治拾遺三「我が妻にあらざりければ、さればよと思ひてゐのきける程に」

ねのーくち 堰口（名）井堰より水を落とす口。

ねのくーづち （名）【植】ゐのこづち（牛膝）の異名。字鏡「牛膝（ゐのこづち）」夫木「ましこゐるゐのくづちはらうち拂ひ、汀かたてし背懸ひしも」

ねーのげげ 蘭下下（名）蘭にて作りたる草履。ゐげげ。安齋隨筆「ゐのげげと云ふは蘭がらにて作りたるざうりも」

ねーのーこ 亥子 玄猪（名）一十月の亥の日の稱。此の日餅を食ふ時は萬病を祓ふといひ、又猪は子を多く生む故に子孫繁昌を祝ふ爲といふ。一說、摩利支天を祭りて運を祈る爲ともいふ。禁中には內藏寮より餅を奉り、之を厳重（ゲンジウ）の餅といふ。看聞日記「嘉永廿四年（ゲンジウの餅）の餅といふ。看聞日記「嘉永廿四年十月五日「今夜亥子也」宗吾大草紙下「於中略十月「十月ゐのこの時、御ミゐり切りとて、きんとんのやう成るもち參り候」二ゐのこもち（亥子餅）の略。建武年中行事十月「ゐのこは子餅の略。建武年中行事十月「ゐのこは くられうより參る、朝がれひにて參らす」

ねのこ のいはひ 亥子祝 十月亥の日餅を食ひて祝ふこと。又、其の祝ひ。ゐのこ（亥子）を見よ。成氏年中行事十月「亥子之御祝三度ある時は、三度ながら御祝有レ之」

ねのこ のもちひ 亥子餅 ゐのこもち（亥子餅）に同じ。源葵「その夜さり、ゐのこのもちひ參らせたり」

ねーのーと 豕（名）【動】ぶた（豚）に同じ。

ねのこ のやきがは 豕燒皮 豕の燒皮料理。やきがは（燒皮）を見よ。天神記「朝夕の膳部中略家の燒皮・熊の掌」

ねのこーぐも 猪雲（名）黑雲のむらむらとして猪の形したるもの。夫木「雲拂ふ月の光りにおひにけり、走り過ぎたるゐのこ雲かな」

ねのこーさす 豕扠首（名）さす（扠首）の異稱。

ねのこーしば （名）【植】はひのき（灰木）の異名。

ねのこーづち 牛膝（名）【植】莧科、牛膝屬の多年生草本。高さ二四尺に達す。莖は方形、膨大せる節を有す。葉は長卵形或ひは楕圓形にて尖り、全邊にして對生す。花は小形、綠色を呈し、莖の上部に生じて穗狀花序に排列す。我が國、原野に自生す。地下部を收斂藥及び利尿藥として用ふ。こまのひざ。つなぎぐさ。ふしだか。ゐなきぐさ。ゐのくづち。

ねのこーひきめ 亥子墓目（名）はんひきめ（牛蒡目）に同じ。了俊大草紙「小笠懸引目は目を四つにするなり、猪子引目の如し」

ねのこーもち 亥子餅（名）亥の子に搗く餅。ゐのこ（亥子）を見よ。著聞「何よりも心にぞくゐのこもち、ぴんぐうなる物と思へば」

ねーのこり 居殘（名）ゐのこること。特に勤め先などにて、規定の時刻後まで止まりて執務すること。

ねのこりーつめばん 居殘詰番（名）居殘りたる詰番。泊御番心得「泊御番病氣に而引込み之節、居殘詰番より直に泊御番相勤め候はば、右病氣之者出勤之節、泊り之桁江割入れ、居殘詰番共、前前申合せ之通り相勤め可レ申候」

ねのこる 居殘 （自動四） あとにのこる。遅くまでとどまる。

ねのしし 野猪 （名） 【動】哺乳動物中、有蹄類の一種。形豚に似て、頸短く、脚長し。全身に黒褐色の粗毛を生じ、尾は稍太くして、毛は叢生す。牡は犬齒上方に向かひ、後方に曲がるものあり。山野又は濕原に穴を掘り、落葉・枯草を集めて巣となし、晝は潜み夜出でて食を求む。肉は美味、革は上等の馬具を作るに用ひらる。くさゐなき。しし。のじし。やちよ。崇峻紀「有レ獣ニ山猪一二」散木集「上「向かひの山ぎはに、大きなるゐのししの見えけるを」

ねのしし-だけ 猪茸 （名） 【植】かうたけ（茅蕈）の異名。

ねのしし-むしや 猪武者 （名） 前後の思慮無く突進する武者。むかう見ずの武士。保元「白河殿ニ「かたかは破りの猪武者」

ねの-した （名） 【植】かたくり（片栗）の異名。

ねの-しりされ 蘭尻切 （名） 蘭にて編みたる尻切れ草履。

ねのしり-ぐさ （名） 【植】やぶたばこ（天名精）の異名。

ねの-つな 綆 （名） うしのつな（牛綱）に同じ。名義抄「綆ナワツナ」

ねの-つめ 猪爪 （名） ゐのあし（猪足）に同じ。

ねので （名） 【植】水龍骨ノ科、をしだ屬の常緑多年生羊齒植物。葉は地下の根莖より生じ、略三角形を呈する二回羽狀複葉にて、葉面に微細の毛茸を有し、各小葉は緣邊に微鋸齒を有す。子嚢群は各小葉の上部に生じ、暗褐色にて小圓狀を呈す。我が國、山野の陰濕地に自生す。

ねの-とときぐ （名） 【植】にがかしゆう（黄獨）の異名。本草和名「緒斐乃止」

ねの-なか 井中 （名） 一井戸の中。二水をいふ、宮女の語。大上萬御名之事「詞」

（諺）井の中の蛙 井底の蛙に同じ。せいてい（井底）の條を見よ。大原問答青葉笛「他力の大乘なる事を曾て知らず、實に井の中の蛙」

（諺）井の中の蛙大海を知らず 前條に同じ。寶物集「花池寶閣の淨刹を願はざるは、井の内の蛙大海の廣きことを覺らざるに似たり」毛吹草「井のうちの蛙大海を知らず」

ねの-ふ 胃腑 （名） ゐ。ゐぶくろ。

ゐの-ふに おつ 胃腑落 合點ゆく。了解す。今宮心中「きさめが申した分では、さらさら胃の腑に落ちませぬ」

ねの-ふし 豕節 （名） 豕の足跡を刻といふより轉じて、時刻の義にいふ語。

ねのめ 猪目 （名） 琵琶「名所。びは（琵琶）を見よ。

ねの-もと-さう 井口邊草 鳳尾草 （名） 【植】水龍骨ノ科井口邊草屬の多年生羊齒植物。葉は八九寸乃至二尺餘に達する羽狀複葉にて、細長き小葉より成り、葉軸に翅を有するを特徴とす。子嚢は小葉の下面の緣部に生じ、反捲せ緣邊によりて覆はる。山中に自生し、又觀賞用として栽培せらる。けいそくしだ。

ねのんど 蒔蘿 （名） 【植】繖形科、蒔蘿屬の一年生或ひは二年生草本。高さ二三尺内外に達す。葉は互生して廣き葉鞘を有し、細長き小葉より成る一回或ひは二回羽狀複葉。花は小形、複繖形花序に排列し、黄色の花瓣を有す。東印度の原產。葉及び莖を香味料とし、果實を藥用に供す。

ねはい 一位牌 （名） 死者の法名を書して佛壇に安置するもの。古制は笏形なりしを、後に上に屋蓋、下に蓮臺を添へて塔形となる。靈牌。太平記「卓の上に立つたりける位牌」曾我「二人の位牌の前にも花・香同じく供へ」

ねはい を けがす 汚位牌 祖先、又は先代の名譽を損す。曾我「御身の恥ぢはもとより位牌を汚し給ふかや」

（諺）位牌に泥を塗る 前條に同じ。

ねはい 違背 たがひそむくこと。もとること。庭訓往來八月「就レ違背散狀一者、直被レ下二知于訴人一」宋書「義無二違背一」

ねはい-じょ 位牌所 （名） 位牌を安置する所。總見院殿追善記「位牌所として一宇の精舍を建立し、總見院と號し」

ねはい-じろ 位牌白 （名） さくつき（笏額）に同じ。

ねはい-だう 位牌堂 （名） 位牌を安置する堂。新編相模國風土記稿「三清淨光寺、位牌堂、日供堂とも唱ふ」

ねはい-ぎゃう 位牌知行 （名） 先代の勳功又は知行により、其の後を繼ぎて受くる知行。繼留「親の讓りの金銀にて身を過ごすは武士の位牌知行取って暮らすに同じ」

ねはう 位袍 （名） 一官位の高下によりて色を異にしたる袍。。當色二の袍。左經記「長元六年六月六日「今日素服公卿、有二議不一脫二位袍一、其上著二素服一矣」二天皇の服御にて、黄檀染の袍。江次第「大嘗祭儀出御位袍」

ねはう 遺芳 （名） 一後世にのこる名譽。晉書「后承二前訓一奉二遠遺芳一」二後世にのこれる筆跡。遺墨。

ねはう 彙報 （名） 集めたる報知。雜報。

ねばう 威望 （名） 威光と人望と。威力と名望と。

ねばう 遺忘 わすること。忘却。漢書「廣心浩大者、戒二于遺忘一」

ねばく 威迫 おどしせまること。脅迫。

ねばく 帷幕 （名） 帷（ヰ）と幕（マク）と。たれまくとひきまくと。太平記「夜色窈溟として、甍城皆帷幕を低る」周禮「天官」

ねばしょ 居場所 （名） ゐどころ（居所）に同じ。

ねはち 遺鉢 （名） 佛語。遺し傳へられたる法統。

ねはつ 遺髮 （名） 死者のかたみにのこせる髮。

ねはぶ 遺法 （名） 古人の遺しおきたる法則。詩經「若二齊有一太公之風一、衛有二康叔之化一、其遺法仍在、詩人懷二舊之一也」

ねはふ 違法 法令に違ふこと。

ねはふ-かうゐ 違法行爲 （名） 違法

ねはふ-しょぶん 違法處分 （獨 Rechtswidrige Verfügung） （名） 【法】權限を超え、又は法規に違反したる行政處分。大日本帝國憲法第六十「行政官廳の違法處分に由り權利を侵害せられたりとするの訴訟」

ねはやし 居囃子 （名） 謡と拍子とにて能樂一部を演じ、仕手の立ちて舞はざるもの。

ねはり 威張 （名） ゐばること。

ねはる 威張 （自動四） 威勢を張る。たかぶる。押柄なり。りきむ。

ねはん 違犯 （名） 法規・處分等の國家の命令に違ふこと。明治二十三年法律第八十四號「命令の條項に違犯する者」說苑「刑法違犯」

ねはん 違反 たがふこと。太平記「十七、四三、綸言を誠と存じて、忽ちに違反の志を插み候」

ねはん-しゃ 違反者 （名） 違反する人。

ねび 萎靡 なえしをること。弱り縮むこと。

ねびたる 居浸 （自動下二） 入り込みたるままにて他へ移らず。入りびたる。浮世床「這入込みの、直に居びたれて又居候」

ねびゃう 胃病 （名） 【醫】飲食物の不養生などより、胃に起こる病の總稱。

ねふ 位封 （名） 大寶の制、諸王・諸臣の三位已上年十月生ては四位上に、位階に從ひて賜はりたる食封（ジキフ）。續紀「三、慶雲三年二月決實「案令、諸王・諸臣位封、自二正一位三百戶一、差降止二從三位一百戶一」同「七、元年八月朔」從三位和氣王坐二謀反一誅中略從四位上大津連大浦爲二日向守一奪二其位封一」

ねふ 一畏附 畏れて附き從ふこと。唐書「大問屯田、沙陀畏附」

ねふ 委付 【商】保險の目的たる被保險物が被保險者の過失によらずして殆ど全損するか、被保險者に復歸せざるか、又は復歸の見込みの全く絶えたる時、其の物及びこれに附屬せる一切の權利を保險者に付與すること。此の付與により被保險者は保險金額の全部を請求することを得。商法第六百七十條「被保險者は保險の目的を保險者に委付して保險金額の全部を請求することを得」

ねふ 慰撫 なぐさめいたはること。漢書「上敕以二詔書一慰撫」

ねふ 威武 いさましくたけきこと。武威。孟子「滕文公下」貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫」

ねふ 威風 （名） 威光の他に及ぼすこと。威光。本朝三國誌「威風遠暢」民草」後漢書「馮異傳」威風震叡」

ねふう 遺風 （名） 後世に遺せる風化。又、遺れる風俗。史記「吳太伯世家」有二陶唐氏之遺風一乎」

ねふぎゃう 井奉行 （名） 井戸などの事を取り扱ふ奉行。長曾我部元親百箇條「井普請之事、在所井奉行並爲二庄屋一、無退轉・樣堅可二申付一」

ねふく 威福 威を以て人をおどし、禍を以て人に施すこと。書經「洪範「臣無有作福作威玉食」」

ねふく 遺腹 （名） 夫の死する頃、まだ婦の胎内にありし子。わすれがたみ。淮南子「說林訓」「遺腹子、不二思一其父一」史記「魏世家」「朝之婦有二遺腹一」

ねふく 畏服 畏れて服從すること。漢書「魏相傳」禁二止姦邪一、豪彊畏服」

ねふく 威服 武力を以て服從せしむること。戰國策「秦、威服天下鬼神」

ねふく 畏伏 畏れて平伏すること。南史「孝義傳」素爲二鄉里一畏伏」

ねふくろ 胃袋 （名） ゐ（胃）に同じ。

ねふたぎ 韻塞 （名） ゐんふたぎ（韻塞）に同じ。枕草子「ゐふたぎの明け、とうしたる」中務集「堀川中納言、ゐふたぎの所に召したりけるに」

ねふつ 遺物 （名） 一死者の遺し置きたる物。かたみ。ゆゐもつ。集古文書「瓦十六、造二件地元者、内侍所女官三條之年來所從男行貞死去之後、有二遺物沙汰一之日、於二藏人所一依二彼此訴一、被二對問一、半分各被二分配一了」二忘れ物。又、おとしもの。遺失物。宋史「孝義傳」「行路得二遺物一、必訪二主歸之一」

ねふ-さうしこみしょ 委付申込書 （名） 【商】委付をなさんとする被保險者より保險者に差出す書面。

ねふ-ぶん 遺文 （名） 生前に書き置ける文。朗詠「遺文三十軸」史記「太史公自序」「百年之間、天下遺文古事、靡不二畢集一太史公一」

ねふん-しじん 一位分資人 （名） 大寶の制、五位以上の諸王・諸臣に、位階に依りて賜ひたる資人。外八位以下の子及び庶人を取りてこれに充つ。續紀「八、靈亀三年、始以二外六位内外初位及勤七等子年二十以上一、爲二位分資人一」八年「廢二一位分資人、右外正五位五人、從五位四人、女亦同」

ねへん 一草編 （名） 草とぢの書物。史記「孔子世家」「孔子晚而好二易一、韋編三絕」

ねへん 一違變 そむきたがふこと。へんがへ。運歩色葉「違變」

ねほとけ 居佛 （名） 坐像の佛。

ねほん 一違犯 ゐはん（違犯）に同じ。運歩色葉「違犯」

ねま 居閑 （名） 常に起臥する室。部屋。居室。狂言「鬼入「居間に居て聞く程に、いかにも高らかに讀うでおくりやれ」

ねまう 一威猛 威勢の猛きこと。猛威。太平記「十六、正成下二四兵庫一」「元弘の初めには、平太守の威猛を一時にくだかれ」

ねまく 一帷幕 （名） ゐまく（帷幕）に同じ。太平記「十七、金剛寺炮」「帷幕風捲いて、貞松千株の花を敷けり」

ねます 居戻 （名） すっぽん（鼈）を見よ。

ねまち 居待 （名） 座にゐて待つこと。

ゐまち の つき 居待月 一ゐまちづき（居待月）に同じ。平家「七、竹生島」「卯月中の八日中略漸う日暮れ、居待の月指出でて」二楊弓・大弓にて錢を賭物にする時の十八錢の隠語。掻りの谷。「隠語集」物類名稱」

ねまち-づき 居待月 （名） 陰暦十八日の夜の月。稍遲れて出づる故、座し居て待つべき程なるよりいふ。（立待・寝待の對）

ねまち-づき 居待月 （枕） 居待の月の明きより明石にかく。萬三「座待月（ゐまちづき）あかしのとゆは」

ねまはり 居廻 （名） あたり。もより。近所。附近。

ねまはる 居廻 （自動四） めぐりにならびゐる。宇治拾遺「我がみたるうつほ木の前にゐまはりぬ」同「鬼ども出できたり、ゐまはりて酒のみ遊びて」

ねまん 一帷幔 （名） 帷と幔と。たれまく。後漢書「馮異傳」「紹盛二帷幔一、大會二諸將一、見レ洪」

ねみん 一遺民 （名） 其の當時より猶生存せる民。遺風を傳へ存する民。朗詠「再三憐汝非二他事一、天寶遺民見漸稀」史記「吳太伯世家」周德之衰乎、猶有二先王之遺民一」

ねむき 猪向 （名） わき目もふらぬこと。「俚言集覽」

ねむしろ 蘭席 （名） 蘭にて編みたるむしろ。

ねむら 居村 （名） もとより自分の居住せる村。本村。

ねめい 一威名 （名） 威力ある名譽。漢書「趙充國傳」「發伏海濱、聞二暴公子威名一舊矣」

ねめい 一遺命 死期に臨みて遺言せる命令。皇室典範「第十「先帝遺命を以て太傅を任せさりしょき」

ねめい 一違命 命令にたがふこと。

ねもり 井守 蠑螈 （名） 【動】脊椎動物中、兩棲類の一種。長さ三四寸、形やもりに似て、背黑く腹赤し。池沼等に棲む。

ゐもり の あと 井守痕 ゐもりのしるし井守印」に同じ。建保四年百番歌合「疑ひしゐもりの跡はそれながら、人の

心のあせにけるかな」

ねもり の くろやき 井守黒焼　ねもりの雌・雄を黒く焼きたるもの。粉末としして振りかくれば、男女無墓の情起こるといふ。

ねもり の しるし 井守印　井守の血を女の臂に塗りおくこと。男に接すれば忽ち消ゆといふ。支那にて守宮の血を宮女に塗りし故事を誤りたるものをいふ。しゆきゆう(守宮)の例を見よ。新六帖「あはれ又つくる心のよしぞなき、ねもりのしるしそれと見ながら」

ねもん 〔慰問〕慰むる爲めに訪問すること。後漢書「帝使中黄門慰問」に

ねもん-し 〔慰問使〕(名) 慰問のために遣はす使者。

ねもん-じゃう 〔慰問狀〕(名) 慰問のために贈る書狀。

ねもん-ぶくろ 慰問袋 (名) 出征軍人などを慰問するため、樣樣の品を袋に入れ、各箇別封にして戰地に送るもの。

ねや 禮 (名) ねやまふこと。うや。禮。神代紀「盡主人之禮」敏達紀「以禮葬」

ねや 居家 (名) すまひする家。住家。方丈記「ただねやばかりを構へて」

ねやう-ちやう 横笛 (名) よこぶえ(横笛)に同じ。伊呂波字類「横笛」

ねやく 〔違約〕色葉「違約」

ねやく-きん 〔違約金〕(名) 違約の損害賠償又は制裁として拂ふ金。民法第四百三十一條「違約金は之を賠償額の豫定と推定す」

ねやく-しょぶん 〔違約處分〕(名)【法】違約者に制裁を加ふる處分。明治二十六年七月農商務省令第十三號取引所法施行規則第五條第十七號「違約處分に關する事項」

ねやーごと 禮事 (名) 禮儀に關する事。禮。

ねやーじ 禮代 (名) ねやじり(禮代)に同じ。祝詞「神禮自利臣禮自利」

ねやーしき 居屋敷 (名) かみやしき(上屋敷)に同じ。天明集成絲綸錄「面面、居屋敷・中屋敷・下屋敷・抱屋敷・坪數・井所附相認、向寄之屋敷改迄可差出候」

ねやーじり 禮代 (名) 敬禮のしるしに奉る物。禮物。ねやじろ。ねやじ。祝詞式「禮代」

ねやーじろ 禮代 (名) 前條に同じ。祝詞式「悅己備嘉志美禮代乃幣帛乎」

ねやーなし 禮無 (形) 無禮なり。不作法なり。なめし。應神紀「死禮狀」

ねーやひ 居合 (名) ねあひ(居合)の訛り。傾城反魂香「りき・み・そり打ち・ねやひの節似」

ねやひ-ごし 居合腰 (名) ねあひごし(居合腰)の訛り。博多小女郎波浪「詞は下げても居やひ腰、いやといはば切りかけんず氣色」

ねやーぶ 禮 (他動) ねやまふ。うやまふ。續紀「天社國社乃神等乎毛爲夜」

ねやーまひ 禮 (名) ねやまふこと。禮儀。天智紀「朝廷之禮儀」

ねやーまふ 禮 (他動) うやまふ(敬)に同じ。崇神紀「禮尊神尚未盡耶」續紀「畫毛夜毛倦怠尼止無久謹美禮末比仕奉」

ねやーやか 禮 (副) うやうやしきさま。禮儀正しきさま。土佐日記「家の人の出で入り、にくげならずねややかなり」

ねやーやし 禮禮 (形) (ねや(禮)を重ねたる語)恭しむさまなり。うやうやし。源氏「あなかしこ、ねやねやしく書きなし給へり」名義抄「禮禮」

ねやねやしーけ 禮禮氣 (副) ねやねやしきやう。ねやねやしさう。

ねやねやしさ 禮禮 (名) ねやしきさま。ねやねやしき度合。源氏「限りあるねやねやしさを盡くして」

ねゆ 〔慰諭〕なぐさめさとすこと。慰めなだむること。漢書「朝因者」論中以自慰諭」

ねよう 〔威容〕(名) 威嚴のある顏かたち。威ある態度。華陽國志「杜鑒爲尚書郎、威容可觀」

ねよげ 居善氣 (副) ねる心もちのよきさま。ねごこちよささう。俳諧新選「若草や居よげに見ゆる鶴の脚」

ねーらい 〔委賴〕委せたのむこと。依賴。宋史「深所委賴至家事亦參之」

ねーらう 〔遺老〕(名) 生き遺りたる老人。史記「吾適覽周世其遺老」

ねーらう 〔慰勞〕慰めいたはること。勞を犒ふこと。蜀志「遣人慰勞之」

ねらう-きん 〔慰勞金〕(名) 慰勞のため給する金錢。

ねらう-くわい 〔慰勞會〕(名) 慰勞のために催す會。

ねーらん 〔違亂〕たがひ亂るること。法を亂すこと。秩序を亂すこと。轉じて、苦情を述ぶること。盛衰記「九、民部笠「在在所所の八幡の御放生會、及違亂の事、冥の恐れあり」太平記「四十中「かかる大會は聊の故障もある事なるに、一事の違亂煩ひなく、無爲に被遂行」ぬれば」綿綿卯月紅葉「娘おかめ聟奥衞夫婦に讓り申候、外よりねらん少しもなし如件」

ねーり 〔遺利〕(名) 餘れる利益。とり殘されたる利益。漢書「地有遺利」民有餘力」

ねーりう 〔遺流〕(名) 子孫。後裔。運歩色葉「遺流」

ねーりう 〔遺留〕(名) ①死後にのこしとどむること。②持主の置き忘れたること。

ねりうーひん 〔遺留品〕(名) 持主の置き忘れたる品物。

ねりう-ぶん 〔遺留分〕(名) (英 Legal portion) 【法】被相續人の遺産中、其の自由處分を禁じて、相續人のために必ず遺留すべきものと定められたる部分。其の額は相續人の直系卑屬たると否とによりて異なり、直系卑屬は被相續人の財産の半額、其の他の遺留分權利者は三分の一とす。民法第五編第七章「遺留分」

ねりうぶん-けんりしゃ 〔遺留分權利者〕(名)【法】遺留分を受くべき權利ある人。即ち、遺産相續人たる直系卑屬・配偶者・直系尊屬及び家督相續人。民法第千三百三十三條「遺留分權利者」

ねりき 〔威力〕(名) ねりよく(威力)に同じ。運歩色葉「威力」

ねりりう 〔威力〕(名) 死後に遺こしたる所領。東鑑「故匠作遺領事、末分死去之間、任去年十二月廿三日總目錄、被安配子息等」

ねりーりう 〔遺領〕(名) 死期に臨みて遺こしたる詔令。遺詔。文德實錄「仁壽三年、遺令薄葬、不稱山陵」

ねりーりう 〔違令〕命の規定に違反すること。令義解「縱三月內理者、科違令罪、不可更合離也」

ねりーりう 〔威稜〕(名) 天子の御威光。みいつ。稜威。漢書「威稜警乎隣國」

ねりーりく 〔威力〕(名) 他をおどす力。威勢。晉書「仰威力、座雪國家之恥」

ねりーりく-ていさつ 〔威力偵察〕(名)

きやうかうていさつ(强行偵察)に同じ。

ねる 居 (自動) ①其の處に在り。をり。をる。存す。記「ほつえは鳥韋枯らし」貳烈紀「琴がみにき謂屢かげ堅、玉ならばあがほる玉のあはび白玉」所居神功 ②坐す。すわる。据わりをる。平になる。萬「春柳のかつらぎ山にねる雲の、立ちても座しても妹をし思ほゆ」土佐日記「立てば立ちねれは又ねる、吹く風と浪とは思ふどちにやあるらん」③其の地位にをる。其の位にすわる。源紅葉「七月にぞ后ねる給ふめりし」狹衣「親をただ人にて御門にねる給はん事はあるまじきことなり」④懸かる。留まる。殿きてあり。萬「かすみ爲流流ふじの山びに吾がきなば、いづち向きてか妹がなげかむ」源若菜下「契りおかん此の世ならでもはちす葉に、玉ねる露の心隔つな」⑤凝る。泣つ。凍る。張る。千載冬「いづくにか月は光をとどむらん、やどりし水も氷ねるにけり」⑥はえてをる。生ず。枕「池などのある處はみくさねる」

(誹)居ずは出合へ 居らずと知りて空威張をなすにいふ。

(誹)居た所べったり 懶惰なるにいふ。

ねる 鰤 (自動) 酢「きものなど食して幽浮く。和名「鰤酢井」

ねる 艇 (自動) 船、水底につきて動かず。坐礁す。すわる。和名「艇俗云ふね篤馬」船著沙不行也」

ねる 率 將 帥 (他動) 身に副へ著く。引き連る。伴なふ。ひきねる。記上「沖つ鳥鴨どく島に吾が韋ねし、妹は忘れじ世のことごとに」萬「はしだてのくまき酒屋にまぬらるやつこわし、さすひたて率てきなましを、まぬらるやつこわし」率 [illegible]

ねるり (名) ねろり(圍爐裏)の訛り。運歩色葉「圍爐裏」甲陽軍鑑「「長ねるりにて、うしろあぶりしてゐたるを」

ねるる 〔遺類〕(名) 遺りたるもの。史記「項羽嘗攻襄城、襄城無遺類」皆院之」

ねーれい 〔威靈〕宣揚德美、廣耀威靈」

ねーれい 〔威令〕(名) 威光ある命令。詩經「不承天子威令」

ねーれい 〔遺令〕命令を死後にのこすこと。又、その命令。

ねーれい 〔違令〕命令に違反すること。明治十四年十二月布告第七十二號諸廟例處斷方第四「違令違式に照し處斷す」

ねーれい 〔違例〕①常例に違ふこと。②病に冒されること。不快。太平記「劍笠論死をもせで」

ねーれい 〔違戾〕たがひもとること。

ねーれい 〔偉麗〕すぐれてうつくしきこと。立派。後漢書「容儀偉麗、數上言政事、桓帝愛其才貌」

ねーれい-ざい 〔違令罪〕(名)【法】陸海軍刑法の罪名の一。軍人の犯罪にして陸海軍刑法の他の犯罪を構成せざるもの、殊に軍令に違反したるものの總稱。陸軍刑法第十一章「違令の罪」海軍刑法第十一章「違令の罪」

ねーれい-し 〔遺令使〕(名) 女院の遺令を奏し、又傳へ行ふ使。百練抄「十四、嘉元年「右中辨光俊朝臣、爲遺令使」參陣、因關雪固事被宣下、又諒闇儀也」

ねれい-せん 〔威靈仙〕(名) 【植】くさいさう(草本威靈仙)の異名。

ねれい-の-そう 遺令奏 (名) 女院の遺令を奏する儀式。

ねーれつ 〔位列〕(名) 座の順序。座次。

ねーれつ 〔遺烈〕(名) 先代の遺されたるいさをし。唐書「高宗言五王遺烈、乃求其後、秩以官」

ねーれつ 〔威烈〕威光はげしきこと。後漢書「度遼將軍鴻、梁帥卜陽潘鴻等、畏尙威烈、徙入山谷」

ねーろう 〔遺漏〕のこりもることもれのこること。脫漏。晉書「陶侃、千緒萬端、罔有遺漏」

ねーろく 〔位祿〕(名) ①くらゐと祿と。②大寶の制、四位以下(慶雲三年二月五位以下大同三年八月六位以下三位以上)に位階に從ひて賜ひたる祿。續紀「年十一月既然、先是五位有食封、至是代以位祿一也」同同慶雲三年「准令三位以上、已有食封之例、四位以下定有位祿之物」

ねろく-さだめ 位祿定 (名) 古昔、毎年二月中旬公卿陣の座に集まりて、位祿を給ふべきか否とを議定せる儀式。江次第「位祿定二月中旬可行之、上卿有職貴族、侍從人行之、十二月、今日必可有和奏、先可著陣也」中右記「嘉承二年十九日、有位祿定」

ねろり 〔圍爐裏〕(名) ろ(爐)に同じ。心中宵庚申「圍爐裏の下、焚き付けぬか」

ねろり-の-ま 圍爐裏閒 (名) 圍爐裏の設けある室。煮燒をもする場所。庭訓往來三月「御厩・會所・圍爐裏之間」

ねーわく 居分 (他動) 分かれ居らしむ。枕「かた人の男女ねわけて」

ねね 〔唯唯〕(名) 謹みて應答する聲。戰國策「范雎曰、唯唯」

ねる だくだく 〔唯唯諾諾〕先方の言ふがままに承諾することにいふ語。

ねーねん 〔委員〕(名) 選擧又は任命によりて一定の職務を委囑せられたる人。

ねねん-くわい 〔委員會〕(名) ①委員の會議。議院法第二十「委員會の經過及結果」②委員を以て組織する合議制の國家の機關。「測地學委員會」

ねねん-せいど 〔委員制度〕(名)【法】委員によりて一定の事項を調査又は處理せしむる制度。

ねねん-ちゃう 〔委員長〕(名) 委員を指揮して委員會の事務を整理するもの。

ねねん-ふたく 〔委員附託〕(名) 委員に議案の審査などを附託すること。

ねーねんざ 蘭圓座 (名) 蘭にて編みたる圓座。掃部寮式「蘭圓座一枚徑三尺料蘭圓八枚」

ねん 〔院〕(名) ①一構へをなして、周圍に垣ある家。勢語「かた野のなぎさのねんの樣」②上皇・法皇の御所。轉じて、直ちに上皇若しくは法皇を稱し奉る語。一時に二人以上います時は、第一の上皇を一院又は本院、次を中院、其の次を新院といふ。源藤「院の上、おどろおどろしき御惱みにはあらで」③女院のゐます御所。又、女院の稱。枕「ねんの殿上人は誰れ誰れかありつる」榮華布引「きさきを院になし奉らんと思しめす」④院の御諡號に附する語。皇年代略記「堀河院、同廿四日戊申、追號堀河院」於堀河院、同廿四日戊申、追號堀河院」帝王編年記「廿二保元元、崩於鳥羽殿」中略號鳥羽院」⑤僧侶又は道士の居所。⑥身分ある者の戒名に附する語。⑦學校又は人の多く集まる所、又は官舍など、壯大の建築物などに附けいふ語。「學館院」「勸學院」「衆議院」

ねん のはいらい 院拜禮 正月元旦、小朝拜以前に、院の御所にまうでて行ふ朝賀の儀式。其の儀、大むね小朝拜に同じ。爲房卿記「延久元年「院拜禮中略午剌諸卿以下參集」」中右記「天永二年「昨日院拜禮、誠希代勝事也、大臣五人列立、未曾有之例也」

ねん 〔尹〕(名) ①彈正臺の長官。風俗

を肅清し、非違を彈奏することを掌る。職員令「尹一人（掌二畿内諸風俗一）」〔二〕大平寶字五年二月より同八年九月まで、一時左有京職の大夫を改めていひたる稱。續紀「廿三（天平寶字元年）年閏八月癸巳、其管左右京二並任二一人、長官者五年以爲尹、官位准二正四位下官一」

ねん　〔名〕　員　かず。一人前のかず。數。史記「以遂備員而行矣」

ねん　〔名〕　〔一〕聲音の末の響き。〔二〕漢字を其の韻の相應ずるものによりて類別したるもの。古くは二百七韻にて之を古韻また廣韻といひ、後には合して百六韻として之を今音また平水韻といふ。又別に聲調の類似によりて平（ひょう）・上（じょう）・去（きょ）・入（にっ）の四聲に分かち、又上・去・入を合して仄韻ともいふ。本朝文粹「春雪賦（以二尺方韻一）」菅家文草「昨且求衣賦一首（以二秋夜思一詩何選韻字用韻之）」

ねん　に　じす　次韻　じねん（次韻）に同じ。

ねん　に　ほす　歩韻　前條に同じ。

ねん　に　わす　和韻　和韻をなす。

ねん　を　おす　押韻　作詩にて、同韻の文字を句脚に用ふ。

ねん　を　さぐる　探韻　たんねん（探韻）に同じ。

ねん　を　ふむ　蹈韻　ねんをおす（押韻）に同じ。詩轍「詩韻、押韻、和俗に韻を蹈むと云ふ、詩體には古今の異もあれども、韻を蹈むことは古今一轍也」

ねん-か　〔名〕　韻歌　韻をふみたる歌。又、同じ韻若しくは同じ所屬の韻を用ひて唱和する歌。拾遺愚草「「韻歌、百廿八首和歌（建久七年九月十日、太政大臣家仙洞入文十人）」」奉。いつしかと出づる朝日をみかさ山けぶよりはるのみねのまつ風。かすみぬる昨日ぞ年はくれ竹の、一夜ばかりの明ぼのの空。夏。春の草の又夏草にかはるまで、今と契りし日こそ遲けれ。見るごとに猶めづらしきかざしかな、神代かけたるけふの葵に」

ねん-がつ　〔名〕　院號　〔一〕退位の帝、又は皇太后・准母等に附する尊號。玉葉（建久二年六月廿日）「法皇最第三姫親子內親王、有二院號事一（中略）非二后位一、非二母儀一、蒙二院號一之例、今度始也」〔二〕死者の戒名に、何何院と院の字を附すること。久昌寺法式「近世僧徒、不レ論二士庶一、悉授二院號一、是大訛也」〔三〕修驗者など、年功を經たる者に附する稱號。女殺油地獄「山上講、俗體乍ら數度のお山、院號請けたる若手の先達」

ねんがら-さだめ　院號定　〔名〕　院號の宣下を議定すること。親長記（文明十三年七月廿六日）「院號定、仰曰以二後土御門院一准儀准后藤原朝臣一可レ奉レ稱二嘉樂門院一」

ねん-がく　〔名〕　韻學　おんゐんがく（音韻學）に同じ。諸藝太平記「韻學は三雲新四郎」文會雜記「春臺は（中略）韻學は殊に精しかりしと也」

ねん-かん　〔名〕　院勘　上皇若くは法皇より勘當せらること。山槐記（治承三年四月廿三日）「有二院勘一、籠居」

ねん-き　〔名〕　韻器　探韻の用に供するため、紙に韻字を書きて入れ置く器。西宮記（九月九日、取二韻器一、昇自二東階一、入二文臺筥一退下」

ねん-ぎ　〔名〕　院議　院の稱なる國家の機關又は關體などの議決。

ねん-きゅう　〔名〕　院給　太上皇・女院に賜はる年給。ねんくわんねんしゃく（年官年爵）を見よ。

ねん-きゃう　〔名〕　韻鏡　漢字の音韻の事を記したる書。又、音韻の事を究むる學。

ねん-きゃく　〔名〕　韻脚　詩の句脚に韻を踏みたること。又、其の韻。

ねん-きゅう　〔名〕　院宮　上皇・女院と三后・東宮との稱。建武年中行事（正月）「院宮の御申文めしにつかはさんと奏す」

ねんきゅう　の　きふ　院宮給　院宮に給はる年給。ねんくわんねんしゃく（年官年爵）を見よ。西宮記（尊卑分脈、西宮記）「院宮御給申文體」

ねん-ぐわい　〔名〕　員外　〔一〕數のほかなること。定員外なること。曾我（八幡宮參詣記）「我れ等をねんぐわいに思ひ給ふ故なり」唐書（百官志）「大宗省內外官、制爲二七百三十員一、曰吾以此待二天下賢材一足矣、然是時已有二員外置一、其後又有二特置一同二正員一」〔二〕特に大寶令にて定められたる定員外の官なること。かずのほか。續紀（世祖天武天皇元年六月朔日）「宜二內外文武官員外之任、一皆解却一」類聚三代格「勅、諸國郡司主帳已上、員外之職、遭喪解任、更莫二復任一」〔三〕天應元年六月以前、官名に冠して、大寶令の員外官たることを表はしたる語。續紀（天應元年六月廿一日）「正三位員外中納言兼宮內卿右京大夫石川朝臣豐成」同（世祖天武天皇元年六月朔日）「從五位上美和眞人上生爲二員外左少辨一」

ねんぐわい-あしゃう　〔名〕　員外亞相　權大納言また權中納言に同じ。江史部集「秋夜陪二右親衛員外亞相亭子、守二庚申一」

ねんぐわい-さくわんほ　〔名〕　員外議官補　明治十四年十月廿一日太政官に置かれたる參事院の職員。諸官の書記官より補し、本職主任の件に限り臨時議事に列席するもの。同十八年十二月廿二日參事院と共に廢せられたり。明治十四年十月太政官達第八十九號參事院職制「員外議官補無定員」

ねんぐわい-くわん　〔名〕　員外官　規定の正員以外の官。特に大寶令に定められたる正員以外の官の稱。

ねんぐわい-こくし　〔名〕　員外國司　大寶令に定められたる定員外にて、公廨の配分に與らしむるため臨時に置きたる國司。續紀（廿七天平寶字元年十月丙戌）「員外國司赴レ任者、一切禁之」

ねんぐわい-し　〔名〕　員外刺史　國守の權官。菅家文草「「喜レ被レ遷二兼賀州員外刺史一」」

ねんぐわい-なふごん　〔名〕　員外納言　權大納言・權中納言・權少納言の總稱。江史部集「「陪二員外納言文亭一」」

ねん-くわう　〔名〕　隕鐵　〔地、鐵〕地上に落下せる流星の破片。

ねん-げ　〔名〕　院家　堂上の子弟の出家して、門跡に屬する寺中の院に住するものの稱。薩戒記（永享元年五月廿五日）「院家與二出世一、官次差別之事」海人藻芥「興福寺者、一乘院大乘院以下、諸院家多被レ補二別當一也」

ねん-ご　〔名〕　韻語　漢文の一體。韻をふみたる文章。卽ち、賦・贊・頌・銘の類。韻文。操觚字訣「韻文（文章四）、散文（中略）韻語と云ふは韻字をふみたる文なり、賦・贊・銘・頌の類の如き是れなり」

ねん-ざん　〔名〕　院參　院の御所へ參ること。（延喜中家三天文博士）「光能卿院參せらる」

ねんざん-しゅう　〔名〕　院參衆　江戸時代、納言以下、交替して院中に參候して事務を執るもの。禁裏祕抄（院參）「當時法皇御所へ參勤之御方を院參衆と云ふ、是れは諸家の中より院中へ被レ召出一事なれば」

ねん-し　〔名〕　院司　職員の總稱。ねんのつかさ。家司。枕「院司・上達部などと、この度はかたへぞつかふまつり給ひける」

ねん-し　〔名〕　院使　院よりの御使。徵古文書（中殿文書所識文書）「院使行向、地頭打定勝示一畢」

ねん-し　〔名〕　韻士　風流の人士。文人。

ねん-じ　〔名〕　韻事　風流なる事がら。

ねん-じ　〔名〕　韻字　詩・韻文の韻脚に用ふる文字。歌經標式（延喜廿三）「韻字有二二種一、塵韻、夜麻（やま）・他麻（たま）・志麻（しま）・婆麻（ばま）等之類也、二、細韻、之利（ゐり）・御利（ゐり）等之類也」

ねん-しゃう　〔名〕　院掌　院宮の雜仕。官掌の類。拾芥抄（中末「院司、廳官等在之」）

ねん-じゃう　〔名〕　韻聲　ねん（韻）に同じ。庭訓往來（三月）「序表賦題、傍絕韻聲」

ねん-じゅ　〔名〕　院主　ねん（韻）に同じ。

ねん-しょ　〔名〕　韻書　音韻學に關する書物。

ねん-す　〔名〕　院主　ねんじゅ（院主）に同じ。醒睡笑「院主も同宿も留守なりしに」

ねん-ず　〔名〕　員數　かず。數。盛衰記（十九、圓覺寺八員）「八百部の功既に終へ給へらば、本意をとげ給ふべき員數なり」

ねん-せい　〔名〕　院政　上皇若しくは法皇が院中にて政を聽くこと。

ねん-せい　〔名〕　隕星　【地】地上に落下せる流星。和漢三才圖會「陸奧・出羽中夏月晴夜有二隕星一（如流星引白光走屋棟以下不レ見、隕處有レ物如二鐵斧一、名二星屎一）」左傳（僖公十六年）「隕二石于宋、五隕星也」

ねん-せき　〔名〕　隕石　宇宙間に在る小天體が地球の引力範圍內に來たり、地球に引かれて地上に落下したるもの。天降石。天隕石。ほしいし。續紀（世祖廿二寶龜三年）「隕二石於京師一、其大如二柚子一」左傳（僖公十六年）「隕二石于宋、五隕星也」

ねん-ぜん　〔名〕　院宣　院司が院の旨を奉じて下知する文書。院の宣旨。伊呂波字類「院宣」沙汰未練書「院宣とは院法皇奏書也、御氣色所也と可レ書也」

ねん-ち　〔名〕　韻致　おもむき。風致。

ねん-ちゃう　〔名〕　院長　院の稱ある國家機關・法人又は營造物の監理者。

ねん-ちゃう　〔名〕　院廳　ねんのちゃう（院廳）に同じ。

ねん-ちゅう　〔名〕　院中　院の御所の內。又、院の御所。盛衰記（三院御所）「院中に近く召仕はるる公卿殿上人以下、北面の輩に至るまで」神皇正統記（鳥羽）「院中にて廿四年、其の間に御出家ありしかど、猶世をしらせ給ひき」

ねん-つう　〔名〕　員子　ぜに。金錢。金子。二代男「雲龍の卓香爐を賣拾て、皆ねんつうに代へて」若風俗「明け暮れ員子をためける、金銀さへあれば此の戀はかなふと思ひ」

ねん-ない　〔名〕　員內　かずのうち（員內）に同じ。

ねんない-そうり　〔名〕　院內總理　帝國議會の開會中、衆議院內にて自黨の議員を指揮・統理する議員。

ねん-の-くらうど　〔名〕　院藏人　院宮の藏人の中にも。榮華（衣島）「この院の

ねん-の-ごしょ　〔名〕　院御所　上皇の御所。仙洞。仙洞御所。綠の洞。

ねん-の-しっけん　〔名〕　院執權　しっけん（執權）に同じ。增鏡「その子、この比院の執權にて資名といふ」

ねん-の-しつじ　〔名〕　院執事　しつじ（執事）に同じ。公卿補任（後土御門、寶正六年）「左大臣從一位源義政（三十一）（中略）院執事」

ねん-の-しょうでん　〔名〕　院昇殿　院の御所の昇殿を許さるること。平家女護島「院の昇殿をゆりし法性寺の執行俊寬僧都」

ねん-の-ちゃう　〔名〕　院廳　院司（ゐん）の政務を執る所。嵯峨天皇の時より始まる。別當・執事・年預等の職を置く。下文を見よ。職原抄（後鳥羽）「院廳。大別當（長公卿兼任之）、執事（名家人任之）、年預（同前判官代任之）、主典代（諸大夫任之）、官人（官務代任之）、字限（院中一者也）」

ねん-の-ちゃう　の　くだしぶみ　院廳下文　院の旨を奉じ、院の廳の官人等連署して下す文書。參事院の職員あり、別當・判官・主典代は必ず連署す。東鑑（五年閏五月廿一日）「被レ下二院廳御下文於東海道之諸國一」

ねん-の-つかさ　〔名〕　院司　ねんし（院司）に同じ。

ねん-の-つかへどころ　〔名〕　院仕所　院の召仕人の候する所。

ねん-の-てんそう　〔名〕　院傳奏　てんそう（傳奏）を見よ。盛衰記（四月廿六日）「故太政入道の、法皇を鳥羽殿に籠め奉りし後、院の傳奏おかれし時は、八條中納言長方と此の大納言と二人をぞ別當には被レ成ける」

ねん-の-ふどの　〔名〕　院文殿　訴訟を決斷する所。增鏡「「院の文殿議定所にうつされ、評定衆などせうせうかはるもあり」」

ねん-の-べったう　〔名〕　院別當　院中の職員。院の諸事を總理する長官。卽ち、院の廳の長官。猶、おほべったう（大別當）を見よ。三代實錄（貞觀元年四月廿三日）「太上天皇甚親任、以二安仁一爲二院別當一、事無大小、委二決於安仁一」

ねん-の-ほくめん　〔名〕　院北面　ほくめん（北面）に同じ。東鑑（文治二年六月八日）「院北面左衛門尉能盛入道」

ねん-の-みずねじん　〔名〕　院御隨身　みずねじん（御隨身）に同じ。

ねん-の-めしつぎどころ　〔名〕　院召次所　院の召次の居る所。著聞「公晨はもとより院の召次所に候ひけり」

ねん-はふ　〔名〕　韻法　詩韻（「韻法」）

ねん-ふたぎ　〔名〕　韻塞　古詩の句にある韻字をふたきて、其の何の字とあつる遊戲。之をあてたるを明（行）といふ。西宮記（十六、臨時「有二掩韻事一」）源（三雲）「ふみ作り。ねんふたきなどやうのすさびわざ」

ねん-ぶん　〔名〕　院分　ねんきふ（院給）に同じ。榮華（月宴）「つかさめしにも怪しき國をも、院分と撰り奉らせ給へれば」

ねん-ぶん　〔名〕　韻文　句の形式を保ち、韻を佛ふる文。歌・詩・賦などの稱。散文の對）作文志彙「押韻の文を韻文と云ふ」

ねんぶん-げき　〔名〕　韻文劇　韻文にて作れる劇（散文劇の對）

ねんぶん-こく　〔名〕　院分國　仙洞の御領國。玉葉（文治元年十月廿四日）「件國院分國也」

ねん-ぼん　〔名〕　院本　淨瑠璃本又は芝居の筋書の類の書。諸藝太平記「和本に普き院本」草茅危言（五、卷）「淨るり本と云ふは、唐山にて所謂院本也」

ねん-む　〔名〕　院務　院の稱ある國家の機關・法人又は營造物の事務。明治三十一年二月勅令第二十七號衛戍病院條例（第五）「病院長は所在地高級團隊長に隸して院務を總理し」

ねん-もり　〔名〕　院守　院の番人。源（少雲）「この院もりなどに聞かせんことは」

ねん-りつ　〔名〕　韻律　詩の形式。律格。又音樂にて音の高低長短によつて起る變化。

う

う 五十音圖にて第四十八、即ち、和行字列の假名。五十音圖にては此の假名は子音wと母音うとより成る音節を表はすべきものなれど、此の音我が國には存在せず、古代にもなかりしものと見え、之にあてたる假名は阿行のう（ウ音）と區別なし。此の音を表はすに子を以てする事あり。

ゑ

ゑ 五十音圖にて第四十九、即ち、和行衣列の假名。伊呂波歌にて第四十三の假名。歴史的假名遣にて、これと音同じきえ及びへと區別せん爲め「奥の ゑ」又は「末の ゑ」といふは、伊呂波歌にての順序によりてなり。又ゑは惠の字より出でたれば「めぐみ ゑ」ともいふ。

字體 【萬葉假名】惠・慧・隈・畫・回・廻・會・衛・穢・殖・咲。【平假名】ゑ・ゑ・ゑ（惠より）。【片假名】エ・エ・エ・エ・エ（慧の古體字「慧」より）。【ゑ十惠より）。

表はす音 惠・慧・隈・畫・回・廻・會は呉音エ、衛は漢音エイ、穢は呉音ワイ又はキ、殖は訓ウエ、咲は訓エなり。これらを假りてエの音を表はせり。今ゑの表はす音は

一、表音的假名遣にては（イ）子音wと母音エとより成る音節。子音wの說明はわの條一の（イ）を見よ。此の音は平安朝までは存せしが、其の後子音wを失ひてエとなり、今は方言又は外來語の外には存せず。「ゑりんとん」（人名）の如し。この音をまたうぇにて表はすことあり。（ロ）ゑ—は子音wと母音エの長音とより成る音節を表はす。「ゑーねる湖」の如し。

二、歴史的假名遣にては（イ）ゑはエと發音す。「ゑ」（繪）「ゑんせい」遠征の如し。（ロ）ゑい・ゑひはエーと發音するを常とす。「ごゑい」（護衛）。「ゑひ」（醉）の如し。これらは、もとエイ・エヒと發音せしが、エ音及びヒ音が其の子音を失ひ、音同化の結果エーとなりたるなり。（ハ）漢字音中のくゑ・ぐゑは平安朝頃まではクエ・グエと發音せしが今はケ・ゲと發音す。「くゑんじやうらく」（還城樂）・「ぐゑんじ」（源氏）の如し。（ニ）漢語の熟語に於て上の語がんにて終はり、下の語がゑにて始まる時は、ゑをネと發音する事あり。「りん ゑ」（輪廻）の如し。その由來に就きてはわの條二の（ホ）を見よ。

ゑ 餌 （名）一鳥獸・蟲魚などに與へて飼ひ又は其を誘ふ食物。ゑさ。ゑば。神功紀「勾、針爲釣、取粒爲餌」和名抄「餌、以食誘魚鳥也」二人などを誘惑する種となす品物。釣り寄するものの。

ゑ に うたる 被打餌 餌にて捕らへらる。保元物語「はがにかかれる鳥、ゑにうたれん事を知らずして」

ゑ 笑 （名）ゑむこと。わらふこと。「ゑ顔」記「ことなぐし惠ぐしに我れ醉ひにけり」枕「たち居ふるまふさまなど慎しげならず、ものいひ笑ひ」

ゑ 會 （名）物事を行ふため、多人數の集まり會ふこと。又、そのもの。會（クワイ）。集會。多く神佛の事にいふ。法會。榮華物語「めでたき御堂の ゑとののしれど」赤染衛門集「橋造りたるひじりの、河原にて橋の ゑすべしと聞きて」

（諺）會に逢はぬ花 法會などの間に合はぬ花。時期に後れて用に立たぬにいふ。平家「六日の菖蒲、ゑにあはぬ花、いさかひはててのちぎり木かな」

ゑ 繪畫 （名）物の形象を寫したるもの。ぐわ。くわいぐわ。萬葉「我が妻も畫ゑに書きとらむいつまもが、旅ゆくあれは見つつしぬはむ」宇津保「上「ゑにかきたるいと面白し」

ゑ がつく 繪附 幸福めぐりく。福德來たる。風流女大名丹前能「そちが爲めには福德の大臣、よい繪がついた」

ゑ がとけず 繪不解 わけがわからず。埒があかず。三河物語「我れ御身をおろして殺して、我れ此の馬に乘りていきても ゑがとけぬ」

ゑ のひをけ 繪火桶 綿を灰に、花を炭に見立てて、火桶に繪を書きたる風流の作物。人車記「五年十二月繪火桶一口」

ゑ のろくはふ 繪六法 繪をかくに要する六種の法。即ち、一に氣韻生動、二に骨法用筆、三に應物寫形、四に隨類傳彩、五に經營位置、六に傳模移寫。傾城反魂香「凡そ繪の道には六の法あり」

ゑ のをしき 繪折敷 蒔彩色にて花鳥などを描ける折敷。江次第「立二階白木机一脚（上磨居白風子）四方丸繪折敷（蒔繪書）」類聚雜要「繪折敷廿枚、例折敷十枚」

（諺）畫に書いた地震 實際動かざる譬へ。

一慧惠 （名）一智慧。智。さとり。智識。二佛語。事理を分別・決定して疑ひを斷ずる作用。事理に通達するはたらき。「戒・定の對」太平記「三人會戒・定・慧の三學を彫佛し給へる一人の沙門」唯識論「云何爲慧、於所觀境、簡擇爲性、斷疑爲業、謂觀得失俱非境中、由慧推求、得決定故」

ゑ のや 慧矢 惠矢 佛語。密教にて、矢を智慧の表示とし、定の弓と相俟ちて無明を對治するもの。愛染明王の持する弓矢、即ち是れなり。著聞「四天王に誓ひて矢をはなさしむ、定の弓・惠の矢に和順して、遠く走りて逆臣が胸にあたりて」大智度論「禪定爲良弓、智慧爲好箭」

ゑ 穢 （名）きたなきこと。けがらはしきこと。又、そのもの。汚穢。けがれ。室町千疊敷「夕べは戰ぐ荻の風、怨・憎・穢・苦の夢を破り」

ゑ （自動）うゑ（飢）の活用。うゑの略。記「い行きまもらひ戰へば、我れはや惠ゑぬ」推古紀「飯に惠ゑてこやせる、其のたびとあはれ」

ゑ （接）ゆゑ（故）の約。萬葉「一說、まま。とはり。やう。の如く。古事記「萬ゑ思ふ惠ゑに逢ふものならば、しましくも妹が目かれてあれ居らめやも」

ゑ （感）古語。歎息の時の聲。や・よの類。「よし ゑやし」神代紀「妍哉、此云阿那而惠ゑ夜」天智紀「えくるし衛ゑてなぎのもと芹のもと、あれはくるし衛ゑ」

ゑ あはせ 繪合 （名）物合せの一。左右組みな分け、各繪を出だして優劣を挑みかはす戲。「正子内親王繪合」盛衰記「十二、主上島羽殿「扇合・繪合までも忘るる御隙なく」

ゑいーご 一衛護 ごゑい（護衛）に同じ。

ゑいーし 繪石 （名）くわもんせき（花紋石）に同じ。

ゑいーし 一衛士 （名）護衛の士。守護の兵士。史記「項本紀、擁盾入軍門、交戟之衛士、欲止不内」

ゑいーし 一衛史 （名）ふしやう（府生）の唐名。拾芥抄「中本、府生、衛史」

ゑいーじゅ 一衛戍 一じゅしゅ（戍守）に同じ。二陸軍軍隊が其の地方に永久駐屯して警備すること。衛戍條例「第一、陸軍軍隊の永久一地に駐屯するを衛戍と稱し」

ゑいじゅ-じゅんさつ 一衛戍巡察 （名）衛戍隊衛兵の勤情を監察し、定められたる場所を巡回し、軍人・軍屬の非違を戒め、又災害若しくは非常の際に當たりては治安維持の爲め指定の地域を巡視するもの。將校又は準士官を以てこれに充て、必要に應じ下士兵卒を附屬す。衛戍勤務令「第十一、衛戍勤務は主として衛戍衛兵及衛戍巡察を以て之を行ふ」

ゑいじゅ-しれい 一衛戍司令 （名）衛戍衛兵の指揮者。衛戍司令官の命を承けて其の任務に服し、且つ衛兵所及び備付物品の清潔・保存の責めに任ずるもの。勤務の輕重に應じ將校・准士官又は下士を以てこれに充て、衛兵の人員少なき時は上等兵を以てこれとなすことを得。衛戍勤務令「第二、衛戍司令は勤務の輕重に應じ將校准士官又は下士を以て之に充つ」

ゑいじゅ-しれいくわん 一衛戍司令官 （名）衛戍勤務を管轄するもの。東京には東京衛戍總督を置き、各要塞又は警備隊の所在地にては要塞司令官・警備隊司令官、其の他の地にては其の地駐屯團隊の高級團長（駐屯隊長を除く）を以てこれに充つ。衛戍條例「第三、衛戍勤務は中隊其地駐屯團隊（駐屯隊長を除く）の高級團隊長（駐屯隊長を除く）を管轄するものとす」

ゑいじゅ-せん 一衛戍線 （名）衛戍地の境界線。明治二十八年十月勅令第百三十八號衛戍條例「第八條、衛戍線内に騷擾のことあるに方り」

ゑいじゅ-ち 一衛戍地 （名）衛戍勤務執行の區域。衛戍條例「第三、衛戍勤務執行の區域は東京衛戍總督又は衛戍司令官之を定め其區域を衛戍地と稱し」

ゑいじゅ-びやうゐん 一衛戍病院 （名）衛戍地に置き、其の所在地陸軍部隊の患者を敬容・治療し、衛生材料を保管・供給し、衛生部下士以下の教育を掌る所。衛戍地兵員の多少により下四等に分かち、病院長・軍醫正・軍醫・藥劑正・藥劑官・主計・下士等の職員を置く。衛戍病院條例「第一、衛戍病院は之を衛戍地に置く」

ゑいじゅびやうゐん-ちやう 一衛戍病院長 （名）衛戍病院の院長。其の所在地の高級團隊長に隷して院務を總理し、院内の衛生・軍紀・風紀・治病・教育・經理及び衛生材料整理の責めに任ずるもの。

ゑいじゅ-ぶくくわん 一衛戍副官 （名）衛戍司令官の命を承けて衛戍一般の庶務を掌るもの。要塞司令官・警備隊司令官又は其の地駐屯團隊の高級團隊長にて衛戍司令官なる時は、其の副官を以てこれを兼ねしむ。衛戍條例「第四、團隊長又は要塞司令官若は警備隊司令官にして衛戍司令官なるときは其部隊の副官は衛戍副官所。

ゑいーせい 一衛星 （名）【天】惑星の周圍を旋轉する天體の稱。月は地球の衛星なる類。そひぼし。陪星。

ゑいせい の きだう 衛星軌道 【天】各衛星が惑星の周圍を旋轉する道。皆其の惑星を焦點の一とせる橢圓なり。

ゑいーせい 一衛生 生命を衛ぐること。身體の健康を保ち、疾病の治療を怠らざること。養生。內務省官制「第二、衛生」莊子「達生、顔聞衛生之經而已矣」

ゑいせい-がく 一衛生學 （名）衛生に關する事項を研究する學問。

ゑいせい-ぎやうせい 一衛生行政 （名）【法】行政の一。公衆の健康に對する危害の豫防及び排除に關するもの。保健行政と醫藥行政とに分かつ。

ゑいせい-きよく 一衛生局 （名）內務省內の一局。傳染病・地方病の豫防・種痘其の他總ての公衆衛生、檢疫・停船、醫師・藥劑師の業務、藥品・賣藥の取締り、衛生會及び地方病院に關する事務を掌るもの。內務省官制「第四、內務省に左の五局を置く 中略 衛生局」

ゑいせいきよく-しけんじよ 一衛生局試驗所 （名）明治廿年五月卅一日以前に於ける衛生試驗所の稱。

ゑいせい-くみあひ 衛生組合 （名）衛生に關する事務を取り扱ふため、町村內又は區內に一定の區域を限り、其の區域內に一戸を構ふる者を以て組織せる公共組合。

ゑいせい-くわい 一衛生會 （名）中央衛生會と地方衛生會との總稱。內務省官制「第四、衛生會及地方病院」

ゑいせい-くわいぎ 一衛生會議 （名）陸軍衛生會議と軍馬衛生會議との總稱。

ゑいせい-けいさつ 一衛生警察 （名）【法】警察の一。公衆の健康に對する危害の豫防及び排除を目的とするもの。警視廳官制「第十、衛生警察」

ゑいせい-とうがく 一衛生工學 （名）水道及び下水に關する工學。

ゑいせい-けんじよ 一衛生試驗所 （名）內務大臣の管轄に屬し、衛生上の試驗に關する事務を取り扱ふ役所。所長・技師・技手・書記の職員を置く。衛生試驗所官制「衛生試驗所」

ゑいせいしけんじよ-ちやう 一衛生試驗所長 （名）衛生試驗所の長官。技師を以て之に充て、內務大臣の指揮・監督を承けて所內の事務を管理し、所屬職員を統督するもの。

ゑいせい-ねんん 一衛生委員 （名）明治十二年十二月廿七日、戶長を助けて町村內の衛生事務に從事せしむるため、該町村の公選を以て設けたる委員。同十八年八月十二日廢せられたり。明治十二年十二月內務省達乙第五十六號「町村の公選を以て衛生委員を設け中略戶長を助けて該町村衛生の事務爲ス取扱可申」

ゑい-そつ 一衛卒 （名）一守衛の士卒。衛兵。二淳和天皇の天長二年太宰府に置き、雜役に從事せしめたる卒。一年毎に交替し、調庸を免じ、粮鹽・賚丁を給せらる。「延喜類聚」二代格「十八、太宰府政官符」「廢兵士置選士・衛卒事」

ゑいぬ （名）犬の子。いぬころ。伊呂波字類「狗（エイヌ）、犬子（ワカイヌ）、也（コ）」

ゑい-へい 一衛兵 （名）一警衛の兵士。唐書「百官志」左右神策軍大將軍、掌二衛兵及內外八鎮兵」二砲臺・官衙・兵器廠・彈藥庫など、樞要の場所の守衛に任ずる兵。

ゑいへい-しれい 一衛兵司令 （名）衛兵の指揮者。

ゑいほう 〔衛矛〕（名）【植】にしきぎ（衛矛）に同じ。

ゑいり 繪入（名）一書籍に插繪のあること。本文の事實を描きたる繪の處處に挿入してあること。又、その書。雍州府志七、土産下「倭俗以國字假字一作之書謂草子」中興其間加繪稱繪草子、或謂繪入」二京・大阪より流出す一種の紙。

ゑいりよみほん 繪入讀本（名）繪入りの讀み本。插繪のある稗史・小說。浮世床「ゑ入りよみ本を好みて、貸本屋より借本にて見る人」

ゑいん 〔會陰〕（名）肛門と陰部との間の稱。ありのとわたり。（書言字考節用）「屎門之間・會陰同」

ゑうちは 繪團扇（名）繪をかきたる團扇。百日曾我「繪うちはの品品は、武者繪のたけき武士も、ゑやはらぐおやま繪や」

ゑうま 繪馬（名）ゑま（繪馬）に同じ。曠野「繪馬見る人のうしろの櫻かな」

ゑうるし 繪漆（名）蒔繪用の漆。

ゑう・ゑう （副）ゑつゑつに同じ。宇治拾遺「大いなる骨喉にたちて、ゑうゑうといひけるほどに」

ゑ・えん 〔會脈〕（獨 Kehldeckel）（名）【醫】會脈軟骨より成り、喉頭の上口に聳えて開閉の自在なる瓣膜様の器。

ゑえん・なんこう 〔會脈軟骨〕（名）【醫】喉頭にある軟骨の一。舌根の後下部にありて、嚥下の際後下方に屈折して喉頭の上口を閉鎖し、飲食物の喉中に墜落するを防ぐ。

ゑ・か 〔會下〕（名）ゑげ（會下）に同じ。高野山寺にていふ語。諸寮「幼少より出家仕り、あたり近き會下に飲」

ゑ・が 垣下（名）一（ゑがのさ（垣下座）の略）かいもと。ゑんが。宇津保俊蔭「ゑがの御子たち」同初秋「すまひ中略あるじのゑがのまうけに參りたる人人」二ゑんがのまひ（垣下舞）の略。宇津保初秋「ゑがの手にも出ださぬ手をなん、いとめづらかに遊ばしし」同藤原「ゑがにはゆきまさ、樂にはなかより」

ゑ・かう 〔回向・廻向〕佛語。一己れの修むる所の功德を他へ回し向くること。又、自己所修の功德に因りて、自他共に佛果を成就せんと期すること。眞宗にては、佛が其の萬善萬德を廻らして、一切衆生の極樂往生の素因たらしむること。源氏澪「思し捨てつとも、さりがたき御ゑからの内にに先こそは」天台四教義「廻己功德、施衆生中略故名廻向」大乘義章「回己善法、有所趣向故名回向」二讀經又は布施などをして、亡靈の菩提を念じ追善を營むこと。たむくること。なき人をとむらふこと。著聞集七首の歌をよみて廻向せられける」盛衰記「（六）經夜願打「沙金・錦綺を得長壽院へ廻向し奉るべしと」て下し賜ひけり」三ゑかうぶみ（回向文）の略。源氏澪「ゑかうの末つ方の心ばへ、いとあはれなり」榮華玉臺「御念佛はてて、靡よき僧の廻向申したる、いみじう尊きに」

ゑかう・がね 廻向鐘（名）廻向をなす時に叩くかね。新永代藏「剃髮して眞實怠らぬ佛緣を求め、口惜しく廻向鐘を敲き」

ゑかう・ぶみ 回向文（名）法事の時、勤めの終はりに、其の功德を一切衆生に回らし向かはしむる爲め唱ふる願文。

ゑかう・もん 〔回向文〕（名）前條に同じ。

ゑ・かがみ 繪鑑（名）古畫を集めて帖にしたるもの。

ゑ・かき 繪書（名）一繪をかくこと。宇津保俊蔭「ゑかき・ぬひ物したる几帳」二畫を書くに巧みなる人。繪をかくを業とする人。繪師。畫工。孝德紀「畫工（エ）」著聞「鳥羽僧正は近き世には竝びなき繪書也」

ゑかきべ 畫部（名）一ゑし（畫師）に同じ。雄略紀「畫部（エカキ）因斯羅我」二大賣の側にて、畫工司に屬し、繪畫の事を掌るもの。大同三年畫工司と共に廢せられたり。職員令「畫工「畫部六十人」

ゑ・がく 畫（他動）一繪にかく。繪をかく。二寫し出だす。描寫す。「文章にて實景を ゑがく」

ゑが・ぬし 垣下主（名）饗應をする主人。垣下（ヰカヒ）の饗（ヰカヒ）をする主人。宇津保藤原「ゑがぬし大將殿のものいりげなる殿なめり」

ゑが・の・ざ 垣下座（名）饗應の時、正客以外の相伴の人の座。ゑが。ゑんがのざ。かいもと。江次第六月十二日「公卿著垣下座」建武年中行事三月三日「掃部寮垣下の座を竹臺の東にして、使・舞人の座南上西面にしく」

ゑが・の・ところ 垣下所（名）前條に同じ。宇津保藤原「ゑがの所の物のね出だして、遊びあかして」

ゑが・の・ひと 垣下人（名）一垣下の座に著く人。二相伴する人。

ゑ・がは 畫韋・繪革（名）一韋に不動尊・獅子・牡丹など、種種繪様を描きたるもの。內藏寮式「畫韋二十張」二こけがは（苔革）に同じ。

ゑ・がひ 繪貝（名）歌貝の類。名所などの繪と其の歌の上下の句とを、貝の左右兩殼に分かち書きたるを合せて取るもの。

ゑ・がひ 餌飼（名）餌を與へて飼ひならすこと。運歩色葉「餌飼（エ）」大織冠「生猛猛二疋、但し內一疋は下戸にて、胡桃餅を餌飼ひとす」

ゑ・かふ 餌飼（他動）餌を與へて飼養す。餌をあさりて食よ。新六帖「いかにして ゑかふ入江の放れ鵜の、しばし程も心やすめん」

ゑ・かふし 餌合子（名）繪の模様ある合子。

ゑかふし 〔繪合子〕（名）繪をかきたる壁。壁畫のある壁。俳諧新選「秋の旅繪壁の工夫付きにけり」

ゑ・かべ 繪壁（名）繪畫にて裝飾せる壁。壁畫の工夫付きにけり」

ゑ・がほ 笑顏（名）笑みを含める顏。わらひがほ。槍樋三「にっこりと笑顏に開く小風呂敷」

ゑ・がみ 繪紙（名）紙に種種の繪・模様などを彩色すりにしたるもの。ちよがみ。

ゑ・がら 餌殼（名）餌の食ひ殘り。著聞「ゑがらをば餌袋に入れて」後京極鷹三百首「見る度に我が身の上と思ひけり、餌がらを拾つる野邊の鷹飼」

ゑ・がら 繪柄（名）繪の品格。繪の様子。

ゑ・がらし 薇辛（形一）ゑぐくして辛し。ゑがらっぽし。

ゑ・からつ 繪唐津（名）唐津燒の一。慶長以後製したるもの。其の質は赤土にて、青黃黑を兼ねたる釉を施し、最も潤澤あり、繪は草畫なり。

ゑがらっぽし 薇辛（形一）ゑがらし。ゑぐし。

ゑ・かんばん 〔繪看板〕（名）一繪ある看板。繪にてあらはしたる看板。二劇場にて、役者、又は狂言の場面の一部などを繪にかきて檐下に掲ぐる看板。戲場節用「繪看板（ヱカンバン）」戲場年表「中村座繪看板曾我對面の繪割、海老綾・七三郎・升藏・市松・傳九郎・助五郎と六人を出だすと」

ゑき （名）【鵡】からす（烏）の異名なり。戰國時代、さこ（嵯）ゑすた（鳶）と共に三つの軍鳥と稱し、その往來を見て戰ひの勝敗をトしたりと。猫「下文を見よ。甲陽軍鑑「雲氣・烟氣其の外、ゑき・さこ・すた、來り樣・行樣」退私錄「古き軍記に、ゑぎ行けば勝ち、來たるは負け、さこ・すた行けば負け、來たるは勝ちなりといふ。ゑき・さこ・すたを三つの軍鳥といふこと也。ゑぎとは烏、さことは嵯、すたとは鳶なりと」

ゑ・きぬ 繪衣（名）采女が上に著る服の名。表は白練にて、雲に椿花を彩色し、裏は萌黃の生絹。

ゑ・きぬ 繪絹（名）繪をかくに用ふる白き生絹。多く礬水（ドウサ）を引きて用ふ。雍州府志七、土産「繪絹。寫繪之白絹也、所所雖織之、三本木繪絹屋之所織、細密而爲堪用」本朝書史五、畫「畫絹、絲目識細而無片織、色淸白而無纖節者尙之」

ゑ・きやうじ 〔會行事〕（名）佛語。延暦寺の大會の奉行。會奉行。

ゑぐ （名）もみだいこん（採大根）をいふ、宮女の詞。禁中女房詞記

ゑぐ （名）【植】一くろくわゐ（烏芋）の異名。萬葉「君が爲め山田の澤に惠具（ヱグ）つむと、雪げの水にものすそ濡れぬ」同十、あしびきの山澤回具（ヱグ）を摘みに行かむ、日だにも逢はむ母はせむとも」二ほたんづる（女菱）の異名。

ゑぐい・の・て （名）一插み將棊に、左右兩手に懸くること。二ゑぐること。

ゑぐいも （名）【植】天南星科、芋屬の多年生草本。さといもの一品種。春もやしに作りて菜餚に出だす。多く子芋を生じ、塊莖・葉共に食用に供す。此の變種にはよく花を著くるものあり。根に鎌あるを以て、しまいもともいふ。

ゑぐし 咲酒（名）【飲めば心おもしろく咲（ヱ）み榮ゆる酒の義。古事記「すすこりがかみし御酒に我れ醉ひにけり、事なぐし惠具志（ヱグシ）に我れ醉ひにけり」

ゑぐし 薇（形）あく强きため、喉をいらいらと刺戟する如き味あり。ゑがらし。ゑどし。和名「茄子中略味甘醎俗云ゑぐし」蕪集類抄「沈のかうばしき、一つはけちすの香す、二つは菊の花の香する、ゑぐけれどよし」

ゑぐ・な （名）【植】ゑぐ（一）に同じ。最明寺殿百人上臈「妻は手足も土大根、蕪・ゑぐ菜も摘み持ちて」

ゑ・くぼ 靨（名）（笑窪の義）一笑ふ時、頰に生ずる小さきくぼみ。和名「靨（ヱクボ）保面小下也」狂言「頰に天目程なゑくぼが五六十もいった」水滸「運步色葉」二ちすの香す、一つは菊の花の香する、ゑぐけれどよし」

ゑぐ・な （名）【植】ゑぐ（一）に同じ。最明寺殿百人上臈「妻は手足も土大根、蕪・ゑぐ菜も摘み持ちて」

ゑ・くぼ 靨（名）（笑窪の義）一笑ふ時、頰に生ずる小さきくぼみ。和名「靨（ヱクボ）保面小下也」狂言「頰に天目程なゑくぼが五六十もいった」水滸「運步色葉」二ちすの香す、一つはけちすの香す、二つは菊の花の香する、ゑぐけれどよし」

ゑ・くぼ・がほ 靨顏（名）靨の生ずる顏。三代男「どうもいはれぬ靨顏の、其のゆかしさ」

ゑくぼて 靨手（名）瀨戸物の茶入。乙御前。

ゑ・ぐみ 繪組（名）繪の組合せ。繪畫の圖案。又、書籍などに繪を組み入るること。又、その繪。

ゑぐり 刳・抉（名）一ゑぐること。くじること。用明天皇職人鑑「長刀とりのべ障子越し、ぐっと通して一ゑぐり」二深く穿鑿して意表に出でんとすること。一風變はりたる趣向を立つること。ひねること。うがち。浮世風呂三、女郎も好い男を廢てて醜夫を見えにするさうだから、人も段段ゑぐりとやらになったのさ」

ゑぐる 刳・抉（他動）一彫（エ）り轉（ヲ）るべかす義と」二彫（エ）らんとして刳（エ）り廻す。突き込み廻はして刳（エ）りぬく。曾根崎心中「柄も折れよ刀も碎けよと、ゑぐりくりくり目も眩めき」井筒業平河內通「十萬億土を一刀にぐっと ゑぐる刃をつかみ」二甚だ强き感じを與ふ。深く食ひ込ます。「腹を ゑぐる」三深く穿鑿して意表に出でんと工む。ひねりたる工夫を凝らす。うがつ。「ゑぐった趣向」

ゑ・げ 餌器（名）餌を入るるうつは。ゑつぼ。運步色葉「餌器ケ」

ゑ・げ 〔穢氣〕（名）けがれたる氣。十訓「此の程北の方ふさがらず、若し穢氣もこそあればといひて下人を入れて見するに、中門の廊の前に車をたてたるに死人を入れたりけり」

ゑ・げ 〔會下〕（名）佛語。禪宗・淨土宗などにて、一師の下に會集して學ぶ所。又、其の弟子の、一寺を持たずして學寮に居る僧。ゑげそう。下學集「會下（エ）（中略）會下（ヱ）下者（ヱ）之義（禪參學「長老、法門問答量酬立法」知鑑禪師年譜「康永元年壬午、師十四歲、在山東海會下」

ゑ・げ・がき 會下牽（名）會下僧の用ふるかさ。運步色葉「會下傘（ヱガサ）」狂言「我が ゑげがさをはらばると」

ゑげ・そう 〔會下僧〕（名）會下の僧。會下。大鑑狂言「會下（ヱ）（西）僧にて候」甲陽軍鑑「日本にかくれなき會下僧なり」

ゑげ・でら 會下寺（名）會下僧の居る寺。鎌倉大草紙「大寧寺と申す會下寺」北條五代實記「三三師介「會下寺へ引籠りて、道寸と改名し」

ゑげ・にち 遠關日（名）父母並びに夫の終焉の日の稱。永正記「遠關日。以父母并夫終焉日爲遠關日、一年各一日忌之」

ゑ・けん 〔慧劍〕（名）佛語。智慧がよく一切煩惱の絆を斷つを利劍に譬へていふ語。智劍。太平記「四十、長藤寺講演論場の砌には、學海智水を涌かし、慧劍を含・闘事なるに」大智度論「一切利器中、慧劍利爲最」

ゑ・げん 〔慧眼・惠眼〕（名）佛語。五眼の一。眞理を洞觀する眼識。十訓「法門を沙汰してこそ、惠眼は開く事にて侍れ」大智度論「天眼雖復能見、亦是虛誑、見一異說、取男女・樹木等諸物相、慧眼中無如是過」

ゑご （名）【植】ゑぐ（一）の轉。散木集「をかみ河むつきにはゆる ゑごのうれを、つみしなへてもそこのみためぞ」

ゑ・ご 〔衛護〕ゑいご（衛護）に同じ。太平記「七、將軍と申すは弓矢の長者にて、海內の衛護の人なり」

ゑ・こく 〔穢國〕（名）ゑど（穢土）に同じ。淨土和讚「普賢の德に歸してこそ穢國に必ず化するなれ」

ゑ・ごころ 薇心（名）繪の趣きを理解し得る心。畫をかく心得。畫道の嗜み。

ゑごし 薇（形一）ゑぐし（惡）の訛り。

ゑ・ことば 繪詞（名）繪を說明する言葉がき。明月記「三月廿日「源氏繪詞、內府被書、一昨日二三卷書出被送」

ゑご・のり （名）【植】いぎす科、ゑごのり屬の紅色藻類。又狀に分岐する細長き圓柱狀の體を有し、枝の上部は往往膨大して鉤狀に屈曲す。海中に自生す。食用に供し、ゼリーさに混じて凍心太を製す

るに用ふ。うきう。うきうど。

えごひ 餌乞（名）餌を乞ひ求むること。えさをほしがること。順集「えごひする君がはし鷹鞲がれの、野になく放ちそ早く手にすゑ」運歩色葉「餌乞」

えこぶ 一壞劫（名）佛語。四劫の一。火・水・風の三災起こりて、三千大千世界及び一切の生類の破壞し盡くると云ふ時。神皇正統記序「三千大千世界同時に滅盡する是れを壞劫といふ」倶舎論「言壞劫者、謂從地獄有情不復生至外器都盡」

えごよみ 繪暦（名）文字を解せざる者のため、繪にて記したる略暦。盲暦。

えご・えご （名）【植】えぐ（一の異名。爲忠百首「水たまる谷のえごえご掘り返し、わりなくうなふ小田の苗代」

えご・えご （副）體驅ノ肥滿せるにいふ語。でぶでぶ。浮世風呂「大きな腹だよのう、我れながらなぜこんなにえごえごするだらう」

えこん 一慧根（名）佛語。五根の一。眞理を思惟するもの。

えさ 餌（名）えに（餌）に同じ。

えざ 一會座（名）佛語。法會の座席。太平記十三「鷲峯靈鬼山にして法華を說き給ふ。穆王馬より下りて會座に臨んで、即ち佛を禮し奉って」

えざう 一慧藏（名）佛語。㊀三藏一の一たる論藏の稱。㊁さんざう（三藏）の稱。廣弘明集「十成實論義疏序三品慧藏、入ノ道愈通」

えざう 一繪像（名）ゑわざう（畫像）に同じ。古事談三「諸人不見知之繪像一鋪を被ノ獻之」

えざうし 一繪雙紙（名）㊀繪入りの雙紙。古（への繪卷物）より起こりたるもの。始めは淨瑠璃版本にて、唐紙の表紙を以て五段を細字に書き、其の間に一段毎に繪あり、是れをしらみ本と稱して童の翫び物たりしが、享保の頃より江戸大傳馬町鱗形屋にて萌黄の表紙を付けて鳥居流の繪本を出だす、是れ青本の始めなり。後また黄表紙にかはりたれ共、猶それをも青本といへり。赤き表紙の本は昔よりありて赤本と呼ぶ。また表紙の本は昔より錦畫樣となりしは、寶暦十年の春、油町丸小山本九兵衛が家の雙紙、丈阿の戯作の本を始めとす。若風俗七「此の人の事、近き頃繪草紙につくりて」㊁えほんばんづけ（繪本番附）の異稱。㊂轉じて、錦繪（キレエ）。

えざうしうり 繪雙紙賣（名）繪雙紙の讀賣をなす人。よみうり。人倫訓蒙圖彙「繪雙紙賣。世上にあらゆるかはったる沙汰、人の身の上の惡事、萬人のさし合ひを顧みず、小歌に作り淨瑠璃に節付けて、つれ節にて讀み賣る也」

えざうしや 繪草紙屋（名）錦繪など、繪草紙を商ふ家。又、その人。遍歷市中取締類集九、九十五、新吉原町重立惣連名「板元、繪草紙屋共」

えさがし 繪搜（名）畫の中に、ふと見ては心付かぬ他の形又は文字を書き入れおきて、搜しあつること。又、そのもの。

えさく 會釋（名）えしゃく（會釋）に同じ。宇津保吹上下「我が君のおほんえさくのすぢ侍らば」運歩色葉「會釋ヱサク」

えさし 餌刺（名）㊀鷹の餌とする小鳥を刺し捕ふること。又、その人。運歩色葉「餌指ヱサシ」狂言餌差「えさしならば、あけくれ殺生して罪が深からう」㊁江戸幕府の職名。鷹匠の部下に屬し、鷹の餌とする小鳥を捕ふることを掌る。

柳營秘鑑四、慶長人員「御鷹匠頭中略餌差七人」㊂とりさし（鳥刺）に同じ。櫻院比事三「餌差の上手、西の京邊に住むとし申し上ぐれば」

（えし さ）

えさしざを 餌刺竿（名）餌刺に用ふる竿。

えさしぶだ 餌差札（名）餌差の鑑札。敕令類纂「天正十三年閏五月七日、御鷹ノ餌差札之御朱印被仰付候」

えさ・ほり 餌掘（名）魚釣りの餌とする蚯蚓・ごかい等を掘ること。又、其の職の人。

えし 一繪師（名）㊀えかき（繪書）に同じ。雄略紀「畫部ヱ」源氏繪「えにかける楊貴妃のかたちは、いみじきえしと雖も筆限りありければ、いと匂ひなし」㊁大寶の制にて、畫工司に屬し、畫をかくことを掌るもの。大同三年畫工司を內匠寮に併せ、後、繪所と稱するに及びて其の名亡ぶ。職員令「畫工司、畫師四人」㊂江戸幕府の職名。繪畫のことを掌るもの。狩野・土佐の兩流あり。

えじ 一衞士（名）㊀軍團より京師へ上番して、衞士府に屬する兵士。常に仗を持ち、夜は火を燃やして庫藏・大藏及び正門以外の宮門を守る。軍防令「凡理門至夜燃火」讃岐國戸籍「衞士、火丁」㊁誤りて、仕丁（ヒカサ）の稱。

えじかりまた （名）えじかる如き股の狀。東海道名所記「足はくたびれたり、えじかりまたになりて宿を通る」犬子集「火をば燒く衞士かりまたのふぐりだしの句松のちちりのまじるきり枝」

えじかる （自動四）一つくばふに、兩足の膝のあたり、左右へ開く。㊁ひらく。醒睡笑「行きしなにつぼうだ花が來しなには、えじかったりや桶とぢの花」

えしき 一會式（名）佛語。㊀法會の儀式。又、佛事。法會。諸門跡・林鐘牛、彼院比事「餌差の上手、西の京邊に住むとし申し上ぐれば」㊁日蓮宗にて十月十三日、即ち祖師日蓮の忌日に營む法會。就中、上人入寂の遺址、東京府下荏原郡池上の本門寺のもの最も名あり。おえしき。おめいく。東都歲事記八月「法華宗寺院御影供（オヤイ）法會（明治の世、法會は、法會式よりも、法會は、法會式よりも、法會は、法會式よりも

は繪を表として、繪から拵へる地口でごつす」

ゑちご-うさぎ 越後兎 (名) 【動】哺乳類中、嚙齒類の一種。兎の一類。氣候によりて體色を變じ、夏期は一般に褐灰色に少しく黒味を帶び、冬期には全く白色となり、耳の先端のみ黒色を呈す。性極めて馴れ易し。しろうさぎ。

ゑちご-かたびら 越後帷 (名) 越後國に產する帷子。越後上布又は越後縮のかたびら。聽讕嘶餘 自六月朔日越後帷、至七月六日著なり」

ゑちご-ざらし 越後晒 (名) 越後國に產するさらし。ゑちごじやうふ。一代男「二布は越後ざらし、赤染にして」

ゑちご-じし 越後獅子 (名) 一獅子舞の一種。越後國蒲原郡の神社に行はる里神樂にてなす特殊のもの。二かくべゑじし(角兵衛獅子)に同じ。主として越後國蒲原郡月潟村及び其の附近より出づるよりいふ。蒲原獅子。三養雜記「角兵衛獅子といひ、また角兵衛獅子ともいへり」

ゑちご-じやうふ 越後上布 (名) 越後國に產する上布。地合緻密にして、品位甚だ良し。

ゑちご-ちぢみ 越後縮 (名) 越後國魚沼・刈羽・頸城の三郡より產出する、からむしにて織れる縮。質甚だ强く、主として夏衣とす。ゑちごぬの。川中島合戰「越後縮みの雪酒絡は、京も及ばぬ手ざはりに」萬金產業袋「越後縮、幅九寸、丈貳丈七八尺、女物長尺、三丈壹貳尺の餘までも有り、島・しろ・生玉子を」

ゑちご-ぬの 越後布 (名) 前條に同じ。宗吾大卿紙上「すきすはうとは越後布を染めたるを申し候、是れは六月・七月兩月各著候」

ゑちご-まるこばん 越後圓小判 (名) 越後國にて上杉謙信の鑄造せりと傳ふる丸形の小判。重量四匁。

ゑちご-りう 越後流 (名) 一宇佐美駿河守の祖述せる軍學の一派にして、越後の人澤崎主水の唱へたるもの。武術流祖錄「長巢「越後流、澤崎主水」二けんしんりう(謙信流)に同じ。

ゑちぜん-ふね 越前船 (名) はかせに同じ。

ゑちぜん-ぼり 越前彫 (名) 越前國の名產たる彫刻。製作は鎌倉彫に同じ。萬寶全書「越前雕」

ゑ-ぢやうちん 繪提燈 (名) 繪を畫きたる提燈。吉野紙等の涼しげなる薄紙にて貼り、夏の夜燈籠に代へて用ふるもの。岐阜提燈最も名あり。天保十三年物價書上「白張提燈、岐阜提燈、薄紙繪挑燈九寸壹張」

ゑ-づ 繪圖 (名) 土地・建築物などの平面圖。東鑑「八月廿四日「置彼繪圖於中、軍士之可發赴之道路、可有進退用意之所所、皆以合指南給」

ゑづ を ひく 引繪圖 繪圖をかく。圖引きをなす。

ゑ-づく 嘔吐 (自動) 飲みこみたる飲食物を吐き出だす。もどす。はく。ゑなく。へどつく。吐逆す。字鏡集「嘔同ヘドツク」體源抄「管の中に平蜘蛛のありけるを、のんどへ呑み入れてけり、むせてゑづき惑ひけるどに」玉塵「溫泄、はいつゑづいつするぞ」

ゑ-づく 餌付 (自動) 馴れて餌に近づく。餌を食ふやうになる。

ゑ-づけ 繪付 (名) 燒物に繪を燒付くること。其の釉(クスリ)の下に繪を燒付けたるを下繪といひ、釉の上に繪を燒付けたるを上繪付といふ。

ゑっ-けん 一越權 權限を越ゆること。權限外。をつけん。

ゑつ-ごく 一越獄 をつごく(越獄)に同じ。

ゑつざ-こばん 越座小判 (名) 天正中、越後國にて上杉謙信の鑄造せりと傳ふる小判金。重四匁、表には菊桐の紋を上に、其の下に越座の文字を書し、右に天、左に正の字を印し、背には天と正との字を上と下とに印せり。

ゑっ-そ 一越訴 をつそ(越訴)を見よ。

ゑった (名) ゑたの訛り。運歩色葉「穢多ヱタ 賤民」

ゑっ-ちゅう 一越中 (名) ゑっちゅうふんどし(越中褌)の略。甲州眞傳步騎必用口傳「長具」肌帶、當時越中と云ふ有り」

ゑっ-ちゅう-うめ 越中梅 (名) 【植】薔薇科、櫻屬の落葉喬木。梅の一品種。花大にして色白く、やや淡紅なり。豐後梅に似たり。

ゑっ-ちゅう-すねあて 越中脛當 (名) 脛當の一種。細長き鐵の板を編みつらねたるもの。

ゑっ-ちゅう-ばい 一越中貝 (名) 【動】軟體動物中、腹足類の一種。殼は長さ三寸五分許りにして、質厚く卵狀圓錐形をなし、螺層脹れ、細き縱橫線を刻し、殼口は半圓形、前溝淺くして短し。表面汚白色なれども、口內には光澤ありて磁白色なり。日本海に產す。肉は食すべし。

ゑっ-ちゅう-はいだて 越中脛楯 (名) 鎧(ヨロヒ)にて作りたる小形の脛楯。

ゑっ-ちゅう-ふんどし 越中褌 (名) 一男子用の犢鼻褌の一種。三四尺程の小幅の布帛の一端を絎けて紐を通したるもの。紐の方を背後に當て、その紐を前へ廻して結び、他の端を、股をくぐらせ前にて紐に狹みて陰部を蔽ふ。二越中褌は前の方はづれ易きより、あてにする事の、先に至りてはづるるに譬へていふ。

ゑっちゅう-ほほ 越中頰 (名) 武具。鐵面(ヨロヒ)の一種。小さくして、頤(オトガヒ)のみに當つるもの。武用「愚得隨筆「猿頰・越中頰など今云ふ類は、あだほほと云ふものにて、緒だよりのために、おとがひにばかり當つるもの也」

ゑ-つつみ 餌包 (名) 鷹の胸部の名所。たか(鷹)を見よ。

ゑっ-てう 一越鳥 (名) 支那の越國の鳥。

(諺)越鳥南枝に巢を掛く 南國の越より來たれる鳥は、木の南側の枝に巢をつくる。故郷の忘れ難き譬へ。平治「朝敵「越鳥南枝に巢を掛け、胡馬北風に嘶えけるも、生土を思ふ故ぞかし」文選「古詩「胡馬依北風、越鳥巢南枝」

ゑづ-ひき 繪圖引 (名) 繪圖をつくること。又、其の人。

ゑ-つぼ 餌壺 (名) 鳥の餌を入るる器。鷹飼なるは籠にて、形壺に似たり。ゑぶくろ。ゑふど。

ゑ-つぼ 笑壺 (名) 笑み興ずること。盛衰記「さしも懼ぢ恐れつる心いつの間にか替りけん、今は皆咲(ヱ)み會たりけり」

ゑつぼ に いる 入笑壺 笑ひ興ず。悅(ヱ)に入る。參保元「新院方、龍顏顏るゑつぼに入りおはします」今昔「皆ゑつぼに入りにけり」

ゑつぼ の ゑ 笑壺會 一座が皆ゑつぼに入ること。滿座笑ひ興ずること。盛衰記「世間知「其の座に有りける大名・小名興に入りて、ゑつぼの會也けり」

ゑづ-めん 一繪圖面 (名) 繪圖の表面。圖面。繪圖。

ゑつ-ら 一越羅 (名) 支那、越國より產するうすもの。國姓爺「產衣に越羅蜀錦を裁ち」杜甫詩「越羅蜀錦金粟尺」

ゑつらかす 嘲 (他動) 古語。あざける。ゑる。靈異記「船長見」嚴、言煩嘲(ヒロ)」

ゑつり-ざを 餌釣竿 (名) ゑさしざを(餌刺竿)に同じ。

ゑつ-ゑつ (名、副) ゑづく音にいふ語。ゑうゑう。今昔「大きなる骨淨覺が喉に立ちて、ゑつゑつと吐逆しける」

ゑ-でがみ 繪手紙 (名) 繪を文字に代用する手紙。

ゑ-でほん 繪手本 (名) 繪の手本。繪を學ぶに用ふる手本。

ゑてん-らく 越天樂 越殿樂 (名) 雅樂の曲の名。唐樂の盤涉調の一。林越天。林鐘州。扶桑略記「廿六、康治三「殿上有、侍臣舞、中略奏、退出音聲、越天樂、朕即入內」龍鳴抄「越殿樂」

ゑ-ど (名) ゑ(餌)に同じ。醒睡笑「何をがな、鷹のゑどにせうやれ」

ゑ-ど 一穢土 (名) 一佛語。けがらはしき國土。卽ち、凡夫の住する娑婆世界。穢國(淨土の對)平家「並、其れ程まで穢土を厭ひ淨土を願はんと深く思ひ入り給ふこそ、誠の大道心とはおぼえ侍ひしか」觀經妙宗鈔「堪忍穢土、多受衆苦」二くそ(糞)の異名。宇治拾遺「四條の北なる小路にゑどをまる中略壘のやうに黑きゑどを、ひまもなくはるばるとし散らしたれば中略其の小路を糞の小路と付けたりける」

ゑ-とう 一惠燈 慧燈 (名) 佛語。佛法の汎く衆生を照らすを燈火に譬へていふ語。盛衰記「南京(奈良)城・三井寺(園城)・南都(興福)・比叡山(延暦)・東大寺(東大)・高野山(金剛峯)・熊野・日吉・住吉・春日・本願寺等の名社・巨刹の加賀守有房」

ゑどころ-の-べったう 繪所別當 (名) 繪所の長官。五位の藏人之に補す。榮華「月蓂」左の頭には繪所別當藏人少將濟時」

ゑ-とり 餌取 (名) 鷹などの餌とするため牛馬などを屠る人。牛馬などを屠りて皮・肉等を賣るを業とする者。かはは(皮)ぎ。ゑた。屠者。和名「屠兒(屠正居)牛馬肉、取鷹雞餌之義也、殺生、及屠牛馬肉、販賣者也」

ゑ-とり 餌鳥 (名) 鷹などの餌とする鳥。享保集成絲綸錄「享保六、廿九月、御鷹之餌鳥、只今迄は國國限りなく、御餌差、并びに弟子餌差共相廻り、鳥取り候樣に相聞こえ候得共」

ゑ-どり 繪取 (名) ゑどること。彩色。殿中申次記「菊・しのぶなど繪にかきて、金箔・白箔にて美しきゑどり候」

ゑどり-ぼん 繪取本 (名) ゑどりたる本。彩色を施したる本。又、色刷りにしたる書籍。用捨箱「昔ゑどりぼんと稱へしものの粗惡なるにて、丹綠青を筆任かせに彩るともなく點じて」

ゑどり-や 餌鳥屋 (名) 餌鳥を捕ふるを業とする人。又、その家。ゑさし。教令類纂「廿七享保、餌鳥屋雇ひ之餌丟、關八州之內、餌鳥取り申し候管に付」

ゑ-どる 繪取 彩 (他動) 一彩色を施す。いろどる。さいしく。殿中申次記「雲箔のやうにゑどり候うて」狂言「金岡「ゑどらんと、べにやおしろいすり塗りたれど」二書きたる文字の上を更に墨にて塗る。なぞる。なぞる。

ゑ-なき 名なく こと。ゑたき。字鏡「嗚(嗚咽)名義抄「嗚(嗚咽)エナキ。東鏡「嗚(嗚咽)ゑなき」

ゑ-なく (自動) 名義抄「嗚(嗚咽)ゑなく。うめく。うなる。そぶく。呻吟す。字鏡「咏(出言)ゑなく。呻吟(呻吟)ゑなく。又、(風)ゑなく。又、」同「嗚呻(嗚咽)ゑなく。呻吟(呻吟)ゑなく。又、ゑなく」二ゑづくに同じ。

ゑ-なんきん 一繪南京 (名) 繪のある南京燒。

ゑ-にす (名) 【植】ゑんじゅ(槐)の異名。和名「槐(ゑんじゅ)」

ゑ-にす-の-き (名) 【植】いぬゑんじゅ(槐)の異名。本草字鏡「槐(ゑんじゅ)」

ゑ-にち 一慧日 惠日 (名) 佛語。佛智の廣大にして能く世の冥盲を照らすを日に譬へていふ語。諸雪・妄執の雪消えなん、法の惠日の光を頼むなり」普賢觀經「衆罪如霜雪、慧日能消除」法華經「普門品「慧日破諸闇、能伏災風火」

ゑ-ぬ 狗 (名) 「小犬の約か」犬の子。こいぬ。ゑぬころ。ちんころ。和名「狗兒(犬子也)」

ゑ-ぬころ 狗兒 (名) ゑぬ。いぬのこ。いぬころ。

ゑぬのこ-ぐさ 狗尾草 (名) 【植】えのころぐさ(狗尾草)の異名。和名「狗尾草(古久比久佐)」

ゑ-ぬひもの 繪縫物 (名) 繪をかきたる閒閒に縫ひをしたるもの。四季草(秋草)中、「色色の亂紋を染めて、その閒閒に五色の絲・金絲などを交へてぬひ物したるあり、是れは室町殿の頃、繪縫物といひたるものなるべし、昔は今の如く色色の繪を染出す事はせずして、繪を書きて其の閒閒にぬひ物したるなるべし」

ゑ-の-ぐ 繪具 (名) 繪の彩色に用ふる料。ゑのご。顏料。雍州府志「七、土產」繪具。凡畫工之所用彩色雜品、有十五六種、倭俗總稱繪具」

ゑのぐ-さら 繪具皿 (名) 繪の具を溶かし又は磨りなどするに用ふる皿。

ゑのぐ-ずみ 繪具墨 (名) がんれう(顏料)に同じ。

ゑのぐ-ふで 繪具筆 (名) 繪の具を塗る等に用ふる筆。ゑふで。傾城反魂香「家をさいしく繪の具筆・くま筆・藁筆・泥引き筆」

ゑ-の-こ 狗 (名) 犬の子。ゑぬ。平家「十二、白い犬のこの庭へ走り出でたるを

とらんとて、世にうつくしきわか君の」

ゑの-ご 繪具 （名） ゑのぐ（繪具に）じ。

ゑのこ-いぬ 狗犬 （名） ゑのこ。いぬ。定家卿鷹三百首冬「はし鷹の木居取る雉の落ちはまり、鼻つけかぬるゑのこ犬かな」

ゑのこ-ぐさ （名）【植】えのころぐさ（狗尾草）の異名。宇鏡集「秀（ハナウナヒ）ヒトツ」

ゑのこ-づち 牛膝 （名）【植】ゐのこづち（牛膝）に同じ。一代男五「ゑのこづちの根を千本」

ゑの-ころ 狗兒 （名） ゑぬころ（狗兒）の音便。薩摩歌「ゑのころ仕入れて鼠捕らせ、盗人の用心と一疋で埒明け」蕪村句集「名月にゑのころ拾ふ下部哉」

ゑのころ-ぐさ 狗尾草 （名）【植】えのころぐさ（狗尾草）に同じ。

ゑの-のぼり 繪幟 （名） 繪をかける幟。

ゑの-ま 繪閒 （名） 壁・戸・障子などに繪をかきて裝飾とせる室。家屋雜考

ゑ-ば 餌 （名） （餌食（ゑじき）の義と）鳥獸等を誘ふための餌。ゑさ。ゑ。二ゑ（餌）に同じ。室町千墨敷「悖が知行の餌ばにかかって、侍の本意を忘れ」

ゑ-はい 壞敗 （名） くわいはい（壞敗）に同じ。下學集「壞敗」

ゑ-はう 恵方 （名） えほう（吉方）に同じ。醒睡笑「商人、元日に恵方より持ちきたる若夷を迎へんと思ひ」

ゑ-ばうし 烏帽子 （名） ゑぼし（烏帽子）に同じ。宇津保上「御ゑばうしし給ひて」枕「いざ給へ内へなどいふ、それもゑばうしにてはいかでか」

ゑばうし-かけ 烏帽子懸 （名） ゑぼしかけ（烏帽子懸）に同じ。著聞「袴のそば高くはさみて、ゑばうしかけして庭におりたち」

ゑばうし-さう 烏帽子草 （名）【植】（みやこぐさ（百脈根）の異名。

ゑほう-まゐり 恵方參 （名） えほうまゐり（吉方參）に同じ。慰八卦柱曆「此の身になって恵方參り所か」

ゑ-はがき 繪葉書 （名） 裏面に繪畫ある郵便葉書。其の表面の下部二分の一以内に線條を劃して、其の線内に通信文等を記載するを得。郵便規則第十五條四號「郵便繪葉書の表面」明治三十八年遞信省令第六十一號「遞信省より發行する繪葉書」

ゑはがき-てふ 繪葉書帖 （名） 次條に同じ。

ゑはがき-ぶくろ （名）（繪葉書——）あるばむ・の一。繪葉書を插むもの。

ゑ-はけ 繪刷毛 （名） 繪をかくに用ふる刷毛。本朝畫史五「刷子（ヒツシ）以冬鹿毛・結之、自二寸二寸至五寸、又有廣物、是用鵬鞦井糊繪」

ゑ-はざこ 畫始 （名）【動】ぎちの異名。

ゑ-はじめ 畫始 （名） 畫家が、新年に始めて繪を描く式。文晁畫談「畫始の事、土佐守が家にては、正月二日門人寄り集まり、六曲の屏風を新に白張に調じて、鶴亀松竹の繪を燒筆以て寫し又はらひ落として、次の者出でて書く、各皆鶴亀松竹の外なし」

ゑ-ばみ 餌食 （名） ゑばむこと。鶉衣「朝鷹・雀のゑばみに集まり鳴く」

ゑ-ばむ 餌食 （名）（自動四）餌を食む。伽羅千代萩「忠臣蔵「鳥獸のゑばむのを、羨しがる御言葉」

ゑ-はんぎれ 繪半切 （名） 繪・模樣などをあらはせる半切紙。文明日日記「文明十二年十七日」雁金繪半切一卷」

ゑ-はんづけ 繪番附 （名） 番附の一。繪を主として表したるもの。

ゑ-ひ 醉 （名） 醉ふこと。酩酊。宇津保奉納「ゑひのついでに聞こえん」源行幸「かはらけあまた度流れ、皆ゑひになりて」二心のくらむこと。本心を失ふこと。「無明の醉ひ」正治二年百首「不飲酒戒。さとりえぬ浮世のゑひをさめぬ身に、かりの情は離れすむとも」

ゑ-ひ-を-すすむ 進醉 醉ひを助く。醉ひを增さしむ。永久百首「すうす濃く今日咲きあへる桃の花、ゑひをすすむる色にぞありける」

（誹）醉ひを惡みて酒を强ふ 酒に醉ふを憎みながら、酒を强ひ飲む。希望と行爲とが矛盾するに譬ふ。孟子離婁「惡二死亡一而樂二不仁一、是猶二惡一醉而强一酒」

ゑ-び （名） まげ（曲）をいふ、伊勢國の方言。物類呼稱

ゑ-ひ-がほ 醉顏 （名） 醉ひたる顏。すゑがん。俳諧新選「醉顏や西瓜の雫もちながら」

ゑ-ひ-げん 醉機嫌 （名） 酒に醉ひて機嫌よきこと。さかきげん。一杯きげん。二代男五「醉機嫌の解して」

ゑ-ひ-くさる 醉腐 （自動四） 茈だしく醉ふ。いたく酩酊す。泥醉す。又、醉ふを罵りていふ。

ゑ-ひ-ぐるひ 醉狂 （名） ゑひくるふこと。又、その人。酒狂。すゑきやう。義經記七大鼓「例の ゑひぐるひして、男に打たるる」酒食論「蔡太納言の北の方、正月一日の引出物、醉狂ひにぞ取り出でし」

ゑ-ひ-くるふ 醉狂 （自動下一） 酒に醉ひ狂ひまはる。醉ひて心亂る。盛衰記廿六「酒乱、酒飲みけるが、醉ひ狂うてかく舞ひ踊りける也」

ゑ-ひ-ごころ 醉心地 （名） 醉ひたる心地。源花宴「源氏の君ゑひ心ちに見過ぐしがたく覺え給ひければ」

ゑ-ひ-ごころ 醉心 （名） 前條に同じ。諸藝「無明の酒の醉ひ心」

ゑ-ひ-ごと 醉言 （名） 酒に醉ひていふ言葉。酒の上の言語。土佐日記「今のあるじも前のも手取りかはして、ゑひごとに心よげなることして」

ゑ-ひ-ごと 醉事 （名） 酒に醉ひてなすわざ。酒興に乘じてなすしわざ。

ゑ-ひ-さま 醉樣 （名） 醉ひたる樣子。醉ひたるすがた。宇津保俊蔭「さばかり亂れてはしたなかりつるに、こと人のゑひざまには似ずかし」

ゑ-ひ-ざまし 醉醒 （名） 醉ひをさますこと。又、醉ひをさますしわざ。一代男四「醉ひざましに、千年川といふ香爐に、厚割の一本を炷きて聞かせるに」

ゑ-ひ-さまたげる 醉醒 （自動下一） 次條に同じ。本朝宇鏡「酩酊・醒酒・酔・醒」

ゑ-ひ-さまたる 醉醒 （自動下一） 酒に醉ひてしだらなくなる。亂醉す。武烈紀「沈湎（ヒタリ）于酒」後拾遺雜四「祭りのかさに、醉ひさまたれたるかた書きたる所を」

ゑ-ひ-ざめ 醉醒 （名） 酒の醉ひのさむること。又、その頃。

ゑ-ひ-しぬ 醉死 （自動四） 死なんばかりに醉ふ。甚しく醉ふ。今昔「未だ車に一度も不乘ざりける者共にて、此く悲しう醉死にたりける」

ゑ-ひ-しる 醉痴 （自動下一） 醉ひて心痴る。醉ひて正體なくなる。土佐日記「ありとある上下、わらはまでゑひしれて」源少弐盃さし給へば、いたうゑひしれてをる顏つき」

ゑ-ひ-だふれ 醉倒 （名） 醉ひて倒るること。又、その者。

ゑ-ひ-たんぼ （名） 酒に醉ひたる人。よひどれ。よっぱらひ。俳諧新選「賓引や麻上下の醉ひたんぼ」

ゑ-ひつ 繪櫃 （名） 繪ある わげ物の飯櫃。三月・九月の節句に用ふ。俳諧五節句「三月桃の繪櫃 木地の櫃に桃柳を繪がく、櫃の内に草の餅に赤飯も入る、御臺匙といふ物添ふ、是れは繪なし、おつぼ是れ五器也、木地の挽物に繪あり」

ゑ-ひつ-ぶる 醉潰 （自動下一） 醉ひて正體なくなる。泥醉す。

ゑ-ひ-つぶれる 醉潰 （自動下一） 前條の口語。

ゑ-ひ-どれ （名） 酒に茈だしく醉ふこと。又、其の人。

ゑ-ひ-なき 醉泣 （名） 酒に醉ひて泣くこと。續後紀十七「承和四年三月癸巳」「在二飲酒席一、似二非丈夫一、毎至二酒三四杯一、必有二醉泣之癖一」「もだし居てさかしらするは、酒飲みて醉泣するに猶しかずけり」

ゑ-ひ-なされ 醉紛 （名・副） 醉ひにまぎるること。醉ひのまぎれ。酒興に乘ずること。堀川波鼓「醉ひまぎれ、男たる身の道を背く」

ゑ-びぜうぶ 繪屏風 （名） 畫をかきたる屏風。繪の屏風。

ゑ-ふ 衛府 （名） 一王朝時代、禁闕を護衛せし官府。令の制にては衛門府左右衛士府・左右兵衛の五衛府なりしが、再三の變遷を經て、左右の兵衛府・近衛府・衛門府の六衛府となれり。又、その官署。考課令「部統有方、警守无失、爲二衛府之最一」續紀十七「天平勝寶四年」「衛府人等、日夜宿二衛闕庭一、不得二輒離一、其府・散使他處」二衛府所屬の武人。宇津保春蔭「かんたちめ・みこたち・ゑふ・院司」枕「ゑふなどの著たるは、ましていとをかしかりしものを」

ゑふ-ぎとねりのそう 衛府擬舍人奏 太政官を經ずして、衛府より直ちに內侍及び藏人に付して奏すること。中古以後は御畫を加へらるる事となれり。

ゑ-ふ 繪符 會符 （名） 物品に、目標としてつくる札。御幞井御書付留「町人江會符貸渡し、公家衆・門跡方・井武家之荷物に爲二致候儀一」

ゑ-ふ 醉 （自動四） 一酒を飲みて、酒氣全身にめぐる。酒氣に冒され精神亂る。酩酊す。記「すすこりがかみしみきに吾れ惠比壽にけり」儘馬樂「酒を たうべて、たべ惠宇」枝洛記「醉・酗・酒・酗字鏡集」二船・車などの乘物に乘り、其の動搖のため眩暈を感じ、吐氣を催すなど、心地惡しくなる。今昔「車を借りて其れに乘り三人乍ら醉ひぬれば、踏板に物突き散らして」夫木「ころ舟にゑふ人ありと聞きつるは、もたひにとまるけふにやあるらん」三魚肉などを食ひて、其の毒に中てらる。腐肉に中毒す。膝栗毛「まぐろ中醉ふこたあ請け合ひだ」四餘りに多きため、其の氣にむさる。いきれにて、むっとする。「人に醉ふ」夫木「天の川岸邊の桃や咲きぬらん、空さへ花の色にゑひぬる」盛衰記「餘りに平氏多くして、持て醉ひたるに」五心奪はる。僅惚となる。

ゑ-ふ 迷ふ。惑ふ。楚衛「衆人皆醉、我獨醒」

（誹）醉うて筆まく 酒に醉ひて、くだくだしくしゃべる。犬子集「花見にや醉ひて筆まく絲櫻」

（誹）醉ひて本性を顯す 酒に醉へば、平生おしつつみたる本心を表し出だす。

（誹）醉ひても本地忘れず 酒の醉ひ本性忘れずに同じ。さけ（酒）の條を見よ。御伽草子「酒吞童子」常に心に掛かる故、ゑひてもほんち忘れずとて、御持參の酒に醉ひ」

ゑ-ふぎやう 一會奉行 （名） ゑぎやうじ（會行事）に同じ。

ゑ-ふくろ 餌袋 （名） 一鷹の餌を入るる器。鷹狩に携へ行きて獲物をも入るるもの。竹籠製なりと。領記又、人の食品等を入れて携帶する袋やうの物。ゑつぼ。ゑふご。宇津保蔭「小鷹手にする ゑ中將野邊ごとにあさらせ給ひて、御ゑぶくろに入れさせ給へりし」同俊蔭「ほしいひただ少しゑぶくろに入れて」二鳥のものはみ。鳥の胃袋。三人の胃。

（ろくぶ）

ゑ-ふご 餌畚 （名） 一鷹の餌袋。ゑぶくろ。ゑつぼ。平家女護島「狩人のゑふごに小鳥を詰むるが如く、ねぢつけねぢつけ」二餌を入るるふご。新竹取物語「夕こそ魚つるによけれと、竿と餌ふごよと取り出だす」續虛栗「臺に菌の生ゆる水鉢の句取りかへる沙魚は餌畚をかたにして」

ゑ-ふづかさ 衛府司 （名） 一衛府の服務する所。衛府の官廳。宇津保下「ゑふづかさにてまうでて見はや」二衛府の官人。衛府の役人。宇津保俊蔭「侍所に ゑふづかさども知らず侍りけん、心にくく思ひてぬす人いりまうできて」源若菜「上達部なりとも、若き衛府づかさたちは、などか亂れ給はざらん」

ゑ-ふし 繪佛師 （名） 佛像を畫く繪師。本朝世紀「天慶五年七月廿五日」「範舜繪佛」釋家初例抄「繪佛師任二他綱一例」

ゑ-ふで 繪筆 （名） 繪畫をかくに用ふる筆。ぐわひつ。雍州府志「七上」「繪具中略所二畫之筆一是謂二畫筆一」新可笑記「木像の胸なる墨の事御尋ねありしに、何となく繪筆落とせしことを奏聞す」

ゑ-ふの-かみ 衛府督 （名） 衛府の長官。即ち、近衛大將又は兵衛・衛門の督の稱。勢語「此の男のこのかみも、ゑふのかみなりけり」平治「光頼卿内參」今日は衛府の督が一座すると見えて候」

ゑ-ふの-すけ 衛府佐 （名） 衛府の次官。即ち、近衛府の中少將、兵衛・衛門の佐の稱。宇津保俊蔭「少將よりはじめ、ゑふのすけたち」勢語「此の男なま宮づかへしければ、それをたよりにて、衛府の佐ども集ひ來たりけり」

ゑ-ふの-たち 衛府太刀 （名） 武官が發衛の爲めに佩く太刀。非常の時は文官も佩き、行幸には殿上人も佩く。柄に毛拔形の目貫あり。鞘平たくして革緒を著くるを以て、毛拔形の太刀・平鞘の太刀・革緒の太刀等ともいふ。長門平家「ゑふの太刀なれども、みをば少し心得てつくらせたるをぬき合て」

ゑ-ふの-をさ 衛府長 （名） 雜色の長。桃華藻葉「衛府長事、號二雜色長一」裝束抄「衛府長、蔵人・雑色長・滝口・右兵衛尉・左兵衛尉・左近將監・右近將監・左衛門尉・右衛門尉・左衛門尉・右衛門尉・左衛門尉・右衛門尉

の時用ふる事となり、無官の者は平時にも晴れの時にも被る。初めは黒き絹などを袋の如く縫ひたる柔かなるものなりしが、鳥羽天皇以後は紙にて作り漆を塗りて剛くし、位階等に因りて形と塗りとに別あるに至る。立烏帽子を本儀とし、折烏帽子・皺(せ)烏帽子・梨子打烏帽子・揉(モ)烏帽子・細烏帽子・練塗烏帽子・きらめき烏帽子・侍烏帽子など種類多し。えぼうし。西宮記(ニシミヤキ)「烏帽子。太上天皇或晴著之、自餘公卿已下、褻時所用也」枕「えぼしに物忌みつけたるは」㊁紋所の名。烏帽子に象りたるもの。

(ア)みね　(イ)まねぎ　(ウ)ひねまねぎ　(エ)ひたひ　(オ)まゆ　(カ)へり　(キ)かぎくち　(ク)ひねまねぎ　(ケ)ひねまねぎ　(コ)ぼし　(サ)ぼし　(シ)ぼし　(ス)ぼし

ぐうじえぼし　ゆがえぼし　たてえぼし　(ニし)ぼし　(ヌ)ぼし

えぼし　の　つつ　烏帽子筒　烏帽子に、頭の入る所の總名。曾我(六郎)比企(ヒキ)尼(ヒメ)ゆく「烏帽子の筒おし立て、直垂の衣紋ひきつくろひ」

えぼしーを　烏帽子魚　(名)【動】かつを(鰹)の異名。

えぼしーおや　烏帽子親　(名)　古昔、男子元服の時、之に烏帽子を著せ、烏帽子名を附くる人。(烏帽子子の對)平治(中巻)「若殿(ワカトノ)烏帽子親もなければ、手づから源九郎義經とこそ名のり侍れ」

えぼしーかけ　烏帽子懸　(名)　㊀てうづかけ(頂頭掛)ニに同じ。東鑑(九、文治五)「景時(梶原)白直垂折烏帽子(ヒタレ)、義經(記六、悪口)、(義期)を以て髻に結ひて」㊁烏帽子を懸くるために床柱に打つ釘。又、これに懸くるための烏帽子の紐。盛衰記(四、源平)「獄門の樗の木に懸くと名づけて、大床の柱にえぼしかけに貫ぬきて結附けたり」

えぼしーかた　烏帽子形　(名)　刀の柄頭(ガシラ)の尖りたる形。

えぼしーがひ　烏帽子貝　(名)【動】節足動物中、甲殻類の一種。一枚貝に似たる青白色の殻片あり。一方より灰褐色の柄を出だして、他物に附屬す。柄の長さは一寸より五六寸に及ぶものあり。茗荷兒。

(ひがしぼし)

えぼしーがみ　烏帽子髮　(名)　烏帽子をかぶる時に結ぶ一種の結髮。えぼしした。狂言(鳥帽子)「えぼしがみなどいふ物は、結ひつけぬ者はえ結はぬといふが」

えぼしーぎ　烏帽子著　(名)　(昔時、庶人元服の時、小折烏帽子を著けたるよりいふ)　げんぶく(元服)の異稿。羅山文集(六十二)「庶人著小折烏帽子、故呼元服」日(冠禮)「烏帽子著」

えぼしーぎり　烏帽子切　(名)　料理の語。料理すべき品の一方を直く、他の一方をはすに烏帽子の如き形に切ること。又、その切りたるもの。

えぼしーくび　烏帽子首　(名)　烏帽子を著けたる首。曾我扇八景(ニ)粘經が烏帽子首」

えぼしーご　烏帽子子　(名)　烏帽子親により、烏帽子を著せられて、烏帽子名を受けたる者の稱。平治(中巻)「若殿(ワカトノ)烏帽子親我が烏帽子名をどの始めなれば、義の字を盛りにせんとて義盛と付け給へり」

えぼしーした　烏帽子下　(名)　烏帽子をかぶる時の髮のいひ方。元服の時、前髮をとりて結ふ髮のゆひ方。えぼしがみ。

えぼしーだうぶく　烏帽子道服　(名)　(これを著る大納言以上の公卿は烏帽子をかぶるよりいふ)　だうぶく(道服)ニに同じ。和漢三才圖會(廿八)「道服(中略)大臣至極褻著之被烏帽子、呼曰烏帽子道服」

えぼしーたから　烏帽子寶　(名)　卯月潤色(ウヅキウルヒ)「烏帽子寶の親父樣」浮世床(ニ)「呼び聲のする時は何ぞくれるかと思ってかけいって見れば、烏帽子寶の小便をやるのだのう」

えぼしーちりめん　烏帽子縮緬　(名)　うづらちりめん(鶉縮緬)に同じ。

えぼしーつけ　烏帽子附　(名)　かむりづけ(冠附)に同じ。染絲えぼし附け色めくに倣ひて」

えぼしーとどめ　烏帽子止　(名)　はうじやうぐし(保上串)に同じ。(貞丈雜記)「えぼしとどめ・かぶりとどめ」

えぼしーな　烏帽子名　(名)　古昔、男子元服して烏帽子を著くる時、烏帽子親の附くる名。爾後、幼名を止めて專ら稱するもの。大館常興書札抄「無官ならば名字・烏帽子名をたべし」

えぼしーなほし　烏帽子直衣　(名)　直衣に、冠を用ひずして、烏帽子を被ること。源(浮舟)「わりなくやつし給はず、えぼしなほしの袋、いとあらまほしく清げに」

えぼしーはじめ　烏帽子始　(名)　男子元服して、烏帽子を始めて著くること。又、その儀式。源氏烏帽子折(ニ)自らは殿はじめ、おの樣は烏帽子始め」

えぼしーをり　烏帽子折　(名)　烏帽子を造ること。又、其の人。七十一番歌合「えぼし折り。今時の御えぼしは、ちとそりて候」庭訓往來(四月)「烏帽子折」

えぼうし　一絵法師　(名)　絵かきの法師。又、昔時絵師は法體なりしより、其の一稱にもいふ。女用鑑(ニ)友禪といふ絵法師」

えぼん　一絵本　(名)　㊀絵を書籍とせるもの。又、絵の手本。絵手本。絵樣。著聞(ニ)「此の障子の絵本ども、鴨居殿の御倉に召待なる中略絵所の預前加賀守有房、絵本を持たざりければ」傾城反魂香(上)「本朝名木の絵本」㊁插絵のある書籍。絵草紙。㊂次條の略。

えぼんーばんづけ　絵本番附　(名)　演劇の一場一場を絵にてあらはし、傍に役名と俳優の名とを記入して一册子となせる芝居の番附。

えぼん　絵馬　(名)　祈願又は報謝のため、神馬・造馬の代りに、扁額などに馬を畫きて社寺に奉るもの。後には馬以外の種種の絵をも獻じ、轉じては絵以外の種種の額面をも稱す。えうま。日本法華驗記(下)「絵馬(ヱマ)畫馬、前有板絵馬、前足破損、沙門見之、絵馬足損、以絲縫補」今昔(三)「前に板に畫たる絵馬有り」

えぼんいしゃ　一絵馬醫者　(名)　(病家を見舞ふ如く見せかけて外出し、其の實は社寺の絵馬などを見ありくよりいふ)　流行ゐぬ醫師を嘲りていふ語。俳諧職人盡「絵馬醫者のいとど目立つや神無月」

えぼさき　餌撒　(名)　㊀餌を撒き散らすこと。㊁鷹匠の部下に屬し、鷹狩時、鶴を誘ふ餌を撒く人。

えぼさき　絵卷　(名)　次條の略。

えぼさきもの　絵卷物　(名)　絵に詞書を添へたる卷物。絵詞のある卷物。えまき。燕石雜志(四、雜)「絵卷物と唱ふるものは、繪合の餘波なり」

えぼし　笑　(形ニ)　えむべくあり。えみたくなる。えむべし。えまはし。源(藤裏葉)「見るにえましく、世の中忘るるここちぞし給ふ」同(夕顔)「物思ひのなぐさめにしつべく、えましき瓢のにほひにて」

えぼしーむぎ　(名)　えましたる麥。ふやかしたる麥。浮世風呂(三)「えまし麥に海苔のどろどろ交ったのさ」

えぼす　(他動四)　水又は湯などに浸し、水分を含ましめてふやけさす。「麥をえます」

えぼーだう　一絵馬堂　(名)　神社・佛閣などにて、絵馬を掲げ置く堂舍。えまでん。都名所圖會(三)「祇園社(中略)絵馬堂の西にうつす」

えぼーでん　一絵馬殿　(名)　前條に同じ。摂津名所圖會(攷證)「生田神社、絵馬殿」

えぼはし　笑　(形ニ)　えまし(笑)ニに同じ。萬(竹)「油火の光に見ゆる我がかづら、さゆりの花の惠麻波之伎(ヱマハシキ)かも」

えぼひ　笑　(名)　㊀えまふこと。えみ。わらひ。雄略紀「妍咲(ヱマヒ)」萬(竹)「なでしこが花見るごとに、少女らが惠末比(ヱマヒ)のにほひ思ほゆるかも」㊁花のほころぶこと。花の咲くこと。永久百首(春)「春くれど野べの霞につつまれて、花のえまひのくちびるも見ず」

えぼふ　笑　(自動四)　(えむ(笑)の延)　えむ(笑)ニに同じ。續後紀(竹)「梅柳宮より「心には思ひほこりて、惠麻比(ヱマヒ)つつわたる閨に」

えぼーや　絵馬屋　(名)　絵馬をあきなふ家。又、其の人。淺草名所一覽「茅町(中略)絵馬屋は古く住みたし、子孫永續して今も木戸際にあり」

えぼみ　笑　(名)　㊀えむこと。笑ふこと。笑顔をなすこと。萬(竹)「朝の咲(ヱ)ゆふべかはらひ」落窪「つれなきを憂しと思へる人は世に、えみ・せじとこそ思ひ顔なれ」㊁ふくらむこと。ふくらみて口の開くこと。㊂ため(多米)を見よ。回鑑の名所。鳩嶺(上野)の凹みて溝をなせる所。二つあるをもろえみ、一つあるをかたえみといふ。あぶみ(鑑)を見よ。蜻川記「太刀と鑑と請取り渡しの事(中略)あぶみを、前のえみの方表に成るやうに持ち候也」㊃ひ(樋)ニの一稱。

えみーの　まゆ　笑眉　笑みのきざしの、眉のあたりに表はるるもの。えましげなる眉ざし。えめる顔つき。用明天皇職人鑑(ニ)「柔和の相好、忍辱のえみの眉」

えみーの　まゆ　ひらく　笑眉開　悅ばしさに、眉あひ廣がる。破顔一笑す。又、花ほころぶ。源(夕顔)「白き花ぞ、已れひとり笑みのまゆひらけたる」

えみーを　ひらく　開笑　前條に同じ。夫木(雜)「春風にえみをひらくる花の色、昔の人のおもかげぞする」

(諺)笑みの中の刀　外貌には柔和にて、内に害心あるに譬へていふ。綿に針を包む。口に蜜あり、腹に劍あり。新六帖(五)「何事を思ひけりとも知られじな、えみの内にも刀やはなき」唐書(李林甫)「貌柔恭、與人言、愉怡微笑、而除妬禍忌著于心、凡忤意者、告中傷之、時號義府笑中刀」

えみーあ　字鏡(黄精云風俗)「又」

えみーあなかと　(名)　【植】なるこゆり(黄精)の異名。藻鹽草(八)「女菱(ヱミアナカト)」

えみーがほ　笑顔　(名)　えみを含みたる顔。えがほ。わらひがほ。源(空蟬)「何心なき御ゑみがほぞ、いみじううつくしき」

えみーぐさ　(名)　【植】㊀あまどころ(菝葜)の異名。和名(十)「女蔵菝。一名、黄芝(重修本草)、云安蘇(本草)」㊁なるこゆり(黄精)の異名。㊂ぼたんづる(女菱)の異名。

えみーこだる　(自動下二)　わらひしれて、えつぼに入る。笑ひくづほる。笑ひ興ず。宇治拾遺「横座の鬼、盃を左の手に持ちて、えみこだれたるさま」

えみーごゑ　笑聲　(名)　えみを含める聲。えみながら物いふ聲。わらひごゑ。枕(八)「こはたそと問へば、えみ聲になりて」

えみーさかゆ　笑榮　(自動下二)　よろこびえみて顔色はえばえしくなる。わらひさかゆ。記(上)「朝日の惠美佐迦延(ヱミサカエ)きて」源(夕)「髭の男まで、おのが顔ゐならんさまをば知らで、えみさかえたり」

えみーのーね　(名)　【植】ひめしをんの異名。

えみーひろぐ　笑廣　(自動四)　笑みて大口をあく。大口を開きて笑ふ。乳母の草子「思ふさまにえみひろげ、のどの穴見え」

えみーひろごる　笑廣　(自動四)　甚だしく笑ふ。しだらなきまでえむ。源(宿木)「御聲のあてにをかしきを、かばら物の後に近づき參りて、えみひろがりてゐたり」

えみーまがる　笑曲　(自動四)　咲(ヱ)みて眉曲がる。古義(蓬生)「くれなゐ色に匂ひたるおもわの内に、青柳の細き眉根を咲曲(ヱマガリ)我里(ワガリ)」

えみーまく　笑設　(自動下二)　思ひ設けて笑む。笑みて待つ。いたくえつぼに入る。落窪「嬉しくいみじと思ひて、口は耳もとまでえみまけて居たり」源(宿木)「かく世にめづらしョ御けはひのもり匂ひくるをば、なま女房などもえみまけて」

えみーやう　一慧命　(名)　佛語。㊀(知慧を壽命とするよりいふ)　佛法の命脈。太平記(一、自消)「えんとする法燈を挑げ、絶えなんとする慧命を繼がんこと、只此の門主の御時なるべし」四教儀「末代凡夫、於佛法中、起斷滅見(天)、傷慧命(亡)」矢法身(二)㊁びく(比丘)の尊稱。行事鈔(三)上座指(下座)「慧命」

えみーわる　笑割　(自動下二)　栗毬(ヰガ)・果實の皮など熟して、中より裂け開く。はぜる。えむ。罅裂す。

えみーわれる　笑割　(自動下二)　前條の口語。

えみーゑみ　笑笑　(名、副)　笑めるさまにいふ語。にこにこ。えらえら。著聞(六)「えみ・えみとして、いかにおそろしく思召し候らんなど申して、きらきらと笑ひて候ひけり」同(竹)「年よりたる姥の、えみ・えみとしたるかたちをあらはして」

えむ　笑　咲　(自動四)　㊀わらふ(笑)に同じ。多くは聲を發せずして、えみ顔になるといふ。記(上)「朝日の惠美(ヱミ)榮えきて」萬(竹)「朝ょひに惠美(ヱミ)み惠末(ヱマ)ずも、うちなげき語りけまくは」嘱(嘱)㊁花開く。蕾ほころぶ。咲く。曾丹集「花のえむるを見れば、誰れもをかしと見るらめど」㊂栗毬(ヰガ)など熟して裂け開く。えみわる。罅裂す。和名(竹)「榛栗(罅發(草本利)、鮑裂)李善曰、栗皮坼罅而發也」右京大夫集「栗もえみをかしかるらんと思ふにも、いでやゆかしや秋の山里」(夢抄)

えむし　餌蟲　(名)　【動】こかい(沙蟲)の異名。

えむしろ　絵席　(名)　種種の色に染めたる藺にて、花紋などを織り出だしたるむしろ。花むしろ。一代男(二)「二つ折りの絵筵に、木枕の音も亦をかしく」雍州府志(七、土)「絵席。倭俗彩席謂絵席、依有雜

品之文彩也」

ゑ-も 衛門 (名) ゑもん(衛門) 略。小大君集「ゑものかみ公任の君」

ゑ-もとゆひ 繪元結 (名) 元結の一種。鳥の子紙にて製し、太く畳み、兩端にしんを入れて金箔をし、種種の色にて松・竹・鶴・亀などを畫きたるもの。普通の元結の上に、飾りとして覆ひ結ぶ。いれもとゆひ。大もとゆひ。けしやうもとゆひ。(貞丈 宣風刪記 永正八年三月廿七日)「繪本結一結」

ゑ-ものがたり 繪物語 (名) 繪入りの物語り。公任集「繪物がたりにねびたるやもめなる、詠めゐたる所」榮華(樋殿)「世の中の繪物語は書き集めさせ給ふ」

ゑ-もやう 繪模樣 (名) 繪の模様。繪がきたる模樣。繪。

ゑ-もん 衛門 (名) 一 ゑもん(右衛門)の略。二 かしはもち(柏餅)をいふ、女詞。衛門を一に槲木といふより出づ。かしはぎ(槲木)を見よ。

ゑ-もん-ごらう 右衛門五郎 (名) 汁の一種。下文を見よ。料理物語「右衛門五郎。菜を長くも短くも切り、ひらかつをも入れ、ぬか味噌も入れたるをいふ」

ゑ-もん-の-かみ 衛門督 (名) 衛門府の長官。職員令「衛門府、督一人」

ゑ-もん-の-すけ 衛門佐 (名) 衛門府の次官。職員令「衛門府、佐一人」

ゑ-もん-の-たいふ 衛門大夫 (名) 衛門尉の、五位に敍せられたるもの。榮華(後悔大臣)「衛門の大夫むねかた」

ゑ-もん-ふ 衛門府 (名) 諸門の禁衛・出入・禮儀及び牽人・門籍・門膳などの事を掌る役所。督・佐、大少の尉・志等あり。後、左右に分かたる。職員令「衛門府、督一人(管諸門禁衛出入禮儀及牽人門籍門膳等事)、佐一人(助督檢諸門出入)」

ゑ-や (感) よ—ゑやし(絵)に同じ。

ゑ-やう 繪樣 (名) 一 繪のためし。雛形を圖示せるもの。繪の手本。繪の樣式。枕「つくも所の別當する比、中略物の ゑやうやうとて、これがやうに仕るべしと書きたるまんなのやう・文字の、世に知らずあやしきを」源氏「物の下がた・ゑやう」二 繪の下書き。したゑ。著聞「繪樣を書きて、一夜窮よく案じてこそ書きたりしか」三 畫がきたる有樣。繪の模樣。繪のさま。東鑑(五文治元年)「御堂後壁畫圖、終彩色之功中略畫樣頗不叶本說之由」著聞「玄象の撥面の繪樣は、馬上にて珠を打つ物、要目に珠さして舞ひたる姿也」四 建築物等の裝飾に施したる模樣又は彫刻の稱。

ゑ-らぎ (名) ゑらぐこと。神代紀「嘘樂(エラギ)」

ゑ-らぐ (自動四) 咲み榮えて樂しむ。古事記 謀悅す。ゑわらふ。續紀「黑紀白紀(御酒)」酒名、赤丹乃保仁多末倍惠良久(エラク)」懷喜盈(紀略)

ゑ-らふ (自動四) ゆりとよむ。ゆらふ。本居宣長「萬葉「ゆこ先に浪なと惠良比(エラヒ)しるべには子ゐら妻をら置きてらも來ぬ」

ゑ-らふそく 繪蠟燭 (名) 會津蠟燭の如く、周圍に彩色せる種種の畫を書きたる蠟燭。

ゑ-らゑら (名、副) ゑらぐさまにいふ語。ゑみゑみ。萬葉「千歲ほぎほぎきとよもし、惠良惠良(エラエラ)につかへまつるを見るがたふとさ」

ゑ-らん 壞亂 佛語。くわいらん(壞亂)に同じ。盛衰記(廿八、經正、竹生島詣)「金輪際より出生せる故に、劫火の焚燒にも壞亂せず」

ゑり 膠 (名) 一 ゑそこと。ゑりたるところ。源氏(澪標)「御手中略いとわりなうしじかみ、ゑり深う、つようかたう書きたまへり」二 矢筈の名のところ。弦を受くるために彫り込めたるところ。

ゑり-いた 彫板 (名) はんぎ(版木)に同じ。

ゑり-かた 彫形 (名) 船具。帆柱の小名。

ゑり-さる (自動四) 彫りつけたる如く、活動せず。平家九、二「平家の方の馬は飼ふは稀なり乘りしげし、舟に久しう立てたりければ、皆彫りきったる樣なりけり」

ゑり-ぐし 彫櫛 (名) 彫り物のある櫛。宇津保(俊蔭)「さいし・もとゆひ・ゑりぐし」雅亮裝束抄「ゑりぐし・蒔櫛」

ゑりくり-ゑんじよ (名) いりくりいんじよに同じ。

ゑり-つく 彫附 (他動下二) ゑり形を附く。きざみつく。彫刻す。

ゑり-つける 彫附 (他動下一) 前條の口語。

ゑり-もの 彫物 (名) ゑりつけたるもの。ほりもの。彫刻物。建武以來追加「衝重以下畫圖彫物、一向可停止之」

ゑり-わざ (副) わざと(態)をいふ、尾張風の方言。物類稱呼

ゑり-わり (副) わざと(態)をいふ、東武の方言。物類稱呼

ゑる (自動四) 朗り笑ふ。ふざける。宇鏡「嘲・嘲利(觀國)」

ゑる 彫鐫 (他動四) 一 うがつ。くりぬく。ゑぐる。萬葉「門たてて戸はさせれども、盜人の穿(ヱリ)たる穴ゆ入りて見えけむ」靈異記「竊穿(ヱリ)坊壁而窺之者」類聚雜要「障子帳中略槌を惠利(ヱリ)たり」剛(金色)二 きざむ。ほりつく。彫刻す。靈異記「雕(ヱリ)造阿彌陀佛中略觀音菩薩等像」三 所刻みて、金銀珠玉などを欲め込む。ちりばむ。源(梅枝)「心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅をゑりて」榮華(根合)「紅の打ちたるを中へにて、かづらのかたにゑりて」

ゑ-わらひ 笑 (名) ゑわらふこと。ゑみわらふこと。源(帚木)「若き輩どもにくからず、さすがに忍びてわらひ(忍びて物いひゐわらひ)などするけはひ」

ゑ-わらふ 笑 (自動四) ゑみわらふ。わらふ。宇鏡集「咲(ヱラ)」枕「たちゐふるまふさまなどつつましげならず、ものゝひゐ(ゑみ)わらふ」

ゑん 宛 (名) 無實の罪。なきとが。漢書(于定國)「朝廷稱之曰、張釋之爲廷尉、天下無冤民、于定國爲廷尉、民自以不冤」

ゑん 園苑 (名) 一 まろきこと。又、其の形。二(數)一周と稱せらるる曲線によりて圍まれたる平面の部分の稱。又、屬圓周なる語の代りに用ひらる。三 貨幣の單位。錢(セン)の百倍。貨幣法第三「純金の量目二分を以て價格の單位と爲し之を圓と稱す」ゑん のげん 圓弦 (數)圓周上の二點を連結せる直線の稱。

ゑん のしう 圓周 (數)圓の半徑及び其の周を表はすに、夫れ夫れR及びCを以てすれば、 $C=2\pi R$

ゑん のちゅうしん 圓中心 (數)圓周上の總ての點より等距離にある圓内の一定點の稱。

ゑん のちょくけい 圓直徑 (數)中心を通過する弦の稱。半徑の二倍の長さを有す。

ゑん のはんけい 圓半徑 (數)圓周と圓の中心との距離の稱。

ゑん のめんせき 圓面積 (數)圓の半徑をRにて表はせば、其の面積は次の如し。 $S=\pi R^2$

ゑん (援) たすけ。すくひ。

ゑん-あう 鴛鴦 (名) 【動】をしどり(鴛鴦)に同じ。詩經小雅「鴛鴦于飛、畢之羅之」

ゑんあう の ふすま 鴛鴦衾 雌雄甚だ睦まじければいふ。男女ともねのふすま。太平記十二「鴛鴦の衾の下に、恩愛の養育を爲し、連生育奉り」

ゑん-いう 園囿 (名) 草木を種ゑ又禽獸を畜ふ所。その。太平記十二、論「神泉苑中略准周文王囿、方八町に被築たりし園囿なり」孟子梁惠王「園囿汙池」

ゑん-いう 遠遊 遠く他郷に遊ぶこと。論語「父母在不遠遊」

ゑん-いうくわい 園遊會 (名) 庭園を會場とし、模擬店・演藝場などを設け、數多の客を招きて遊興する會。

ゑん-いん 遠因 (名) 遠き原因。間接の原因。(近因の對) 梁武帝文(廣弘明集)「本存遠因」

ゑん-いん 援引 (名)(ゑん(援)は引く義) 後漢書(馬援傳)「其有不更相援引、希附權强者」

ゑん-えい 遠裔 (名) 遠き子孫。唐書(杜黃裳傳)「黃裳征南將軍預遠裔」

ゑん-が 垣下 (名) ゑが(垣下)に同じ。宇津保(藤原實)「ゑんがのみこたち上達部大饗に劣らず」

ゑん-かい 遠海 (名) 海の陸地より遠く隔たれる部分。

ゑん-かう 遠郊 (名) 都會より遠く隔たりたる原野又は村里。(近郊の對) 周禮(地官)「以宅田士田賈田任近郊之地、以官田牛田賞田牧田任遠郊之地」

ゑん-かう 遠行 一 遠方へ行くこと。とほく〳〵赴くこと。とほで。遠征。呂氏春秋「今臣將有遠行、胡可以與門」二 死すること。死去。遠逝。下學集「遠行(ヱンカウ)、死」

ゑん-かう 遠交 遠國と交りを結ぶこと。

ゑんかう きんこう 遠交近攻 遠きに交ぼりて近きを攻むに同じ。とほし(遠)の條を見よ。史記(范雎)「王不如遠交而近攻、得寸則王之寸也、得尺亦王之尺也」

ゑん-かく 遠隔 とほく〳〵だたること。かけはなること。運歩色葉「遠隔(エンカク)」李白詩「雲陽一去已遠隔」

ゑん-がくじ-は 圓覺寺派 (名) 佛語。臨濟宗の一派。圓覺寺を派祖とし、相模國鎌倉圓覺寺を本山とするもの。

ゑんがくじ-ぶぎやう 圓覺寺奉行 (名) 室町時代の職名。鎌倉圓覺寺に關する政務を掌るもの。室町記(永和元年五月廿日)「布施彈正大夫入道爲圓覺寺奉行」

ゑんがの-ざ 垣下座 (名) ゑがのざ(垣下座)に同じ。名目抄「垣下座(エンガノ座)、恵也」

ゑんがの-まひ 垣下舞 (名) 垣下の座にて演ずる舞。地下の座にてする舞。

ゑん-がん 遠岸 (名) 遠方にある岸。はるかに隔たれる岸邊。朗詠「行路之征帆盡去遠岸蒼蒼」

ゑん-がん-ぎやう 遠眼鏡 (名) らうがんきやう(老眼鏡)に同じ。

ゑん-かん-すう 圓函數 (名) 【數】さんかんかんすう(三角函數)に同じ。

ゑん-き 遠忌 (名) 三年忌以上の正忌。中記(寛仁元年)「今日故宇治殿遠忌」太平記(四十中)「後白河法皇の御遠忌追賞の御爲に、三日まで御逗留ありて、法華御讀經あり」

ゑん-き 圓椅 (名) きよくろく(曲〻)に同じ。

ゑん-きく 圓規 (名) 【數】りやうきやくき(兩脚器)の別稱。任意の半徑の圓を畫き、又は二點間の距離を移すに用ひらる。

ゑん-きう 圓球 (名) まろき形のたま。

ゑん-きう 圓丘 (名) 一 まろきつか。圓形の陵墓。太平記(卅四、八、夢中略御廟の震動することやや久し。暫くあって圓丘の中より、誠にけだかき御聲にて」二 古昔、郊野に築きて、天子の天を祭りし圓形のつか。文德實錄八(仁寿三年)「有事圓丘、夜漏上水一剋」唐書(禮樂志)「祀昊天上帝于圓丘」

ゑん-きやう 圓鏡 (名) まろき形のかがみ。圓形の鏡。薩(布刺詩)「皓月(圓鏡、廻流轉曲渠)」

ゑん-きやう 遠境 (名) 遠き國ざかひ。遠く隔たれる土地。絶域。盛衰記(四、六、問答)「見逐る人もなくて、遠境に被遣(罪出)候免、心の中こそ無慙なれ」太平記十、新田義貞、近代遠境聞もすれば武命に不隨」

ゑんきやう-すねじゆんき 遠鏡水準器 (名) 氣泡準器の一。準器の氣泡が中央にある時、遠鏡の視準絲を水平ならしむるやうに裝置したるもの。高低測量に用ふ。

ゑん-ぎよ 淵魚 (名) ふちに棲む魚。盛衰記(廿三、新院崩御)「或は海岸水邊に社壇を竝べて、淵魚を助くる靈應もあり」

ゑん-きよく 婉曲 (名) おだやかにしてかどだたざること。とほまはしにいひて辭骨ならざること。

ゑん-きより 遠距離 (名) ちやうきより(長距離)に同じ。

ゑん-きより-しんかう 遠距離信號 (名) けいしやうしんがう(形象信號)に同じ。

ゑん-きん 遠近 一 とほき所と、ちかき所と。をちこち。遠邇。諸(編引)「遠近の雲むらだちて湖の浪も動搖せり」易經(繫辭)「死し有遠近幽深、遂知來物」二 遠人と近人と。史記(始皇本紀)「遠近畢至」

ゑん-ぎん 圓銀 (名) 一圓の銀貨。

ゑんきん-ぐわはつ 遠近畫法 (名) 【數】立體を、吾人の眼に映ずる如く、平面上に表はす畫法。

ゑんきん し 【植】たうど(蓖麻)の異名。

ゑん-ぐわい 遠外 (名) 遠く隔たれる外方。遠方。太平記(四、中宮)「中宮は又主上を遙遙と、遠外に想像(オモヒ)奉りて」

ゑん-くわう 圓光 (名) どくわう(後光)に同じ。東大寺大佛記「圓光一基、高十一丈四尺、廣九丈六尺」

ゑん-くわつ 圓滑 なめらかにしてかどだたざること。蘇軾詩「鳴夷讓圓滑、混沌甄瘦爽」

ゑん-ぐん 援軍 (名) すくひの軍勢。援兵。

ゑん-けい 圓形 (名) 一 まろきかたち。まるがた。二 【植】葉脚の一形。えふきやく(葉脚)を見よ。

ゑん-けい 遠景 (名) 遠見の景色。王損之文(曙覽)「輕暉幕幕、遠景蕭蕭」

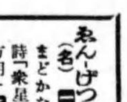
ゑん-けい 遠計 (名) 遠大なるはかりごと。長策。

ゑん-げい 園藝 (名) 庭園を造り、又花卉・果樹などを栽培すること。又、その技術。

ゑんげい-のう 園藝農 (名) 園藝を主とする農業。

ゑん-けう 圓教 (名) 【完全圓滿なる教法の義】佛語。天台宗の教法。

ゑん-げつ 一圓月 (名) ■まろき月。まどかなる月。温庭筠詩「衆星中夜少、圓月上方明」 ■鐶の一種。


(ニつげんゐ)

ゑん-げん 一圓硯 (名) 圓形のすずり。新編錄倉志三「開山所持硯、壺面圓硯、斑石なり」

ゑん-けん 一遠見 遠方を見ること。遠く見渡すこと。とほみ。下學集上「遠見ヱンケン」

ゑん-げん 一怨言 (名) うらみていふ言葉。うらみごと。左傳僖公廿一年「且出怨言、不食其食」

ゑん-げん 一淵源 (名) 物事の本。物事の由って來たる所。盛衰記十二「既天文の淵源を盡くし、古文の祕府を極めたり」漢書成帝紀「儒林之官、四海淵源」

ゑんげんだう 一袁彥道 (名) (支那、晉代の人、袁彥道は博奕に巧みなりしよりいふ) 博奕の異名。晉書袁耽「耽字彥道、少有才氣、嘗隨叔父賞之、賞之曰、卿當不辨作一袁彥道也、遂就局、十萬一擲、直上百萬、耽投馬絕叫、探布帽擲地曰、竟識、袁彥道不」

ゑん-ご 一園戶 (名) 園池司に屬して、其の掌る所の園池に役せらるる戶。令集解雜令「別記云、園戶三百戶、經年一番、役百五十戶、爲品部免調・雜徭」

ゑん-ご 一圓弧 (名) 【數】圓周の一部分の稱。

ゑん-ご 一婉語 (名) とほまはしに柔かにいふこと。婉曲にいふこと。又、其の言語。

ゑん-ご 一怨語 (名) 怨みの言葉。怨言。

ゑん-ご 一援護 たすけまもること。たすけて守護すること。

ゑん-ごう (名) かつぱ(河童)をいふ、周防・石見・四國の方言。物類稱呼

ゑん-ごう 一遠候 (名) とほものみ(遠物見)に同じ。別所長治記「遠候・中候・陣中の候とて三段あり、遠候は敵國發向の時、三日先立ちて輕歩の避士を遠候に放遣し、敵國(可入地形・切所險易、并びに敵欲るか出向んと、敵の虛實空隙を能く能く窺ひみせしむ、これを遠物見と云ふ」

ゑん-ごう 一猿猴 (名) 【動】猿の類に屬する動物の總稱。諸草根記「さてはおことは古への猿丸太夫の流れ、それは猿猴の名を以て我が名をよそに立てんとや」韓愈詩「耳遠地觸途異、吏民似猿猴」(諺)猿猴が月 望むべからざる事を望む時は禍を招く譬へにいふ。諺海集「たやすく窺ひ給はん事、螳螂が斧とかや、猿猴が月に相同じ」

ゑん-ごう 一いもば (名) 【植】あまざ(甘茶)の異名。

ゑん-ごう 一猿猴雞頭 (名) 【植】せんにちこ(老鉗殼)の異名。

ゑん-ごう 一けいとう

ゑん-ごう 一さう (名) 【植】■毛莫科、りうきんくわ屬の多年生草本。りうきんくわの一變形。葉は心臟形、長き葉柄を有し、纖弱にして直立せず、横臥する性あり。晚春、葉間より花莖を抽出し、一二の黃色花を著く。我が國諸所に觀賞用として栽培せらる。 ■りふきんくわの異名。

ゑん-ごう 一すぎ (名) 【植】松杉科、杉屬の常綠喬木。杉の一變種。枝纖長にして稍蔓性を呈するもの。

ゑん-ごう 一ひば いとひばの異名。

ゑん-ごう 一るゐ 一猿猴類 (名) 【動】さるゐ(猿類)に同じ。

ゑん-ごう 一るゐ 一圓口類 (名) 【動】魚類分類の目名。やつめうなぎの類にして、口は圓形をなし、鱗を有せず。すなやつめ・めくらうなぎはこれに屬す。

ゑん-ごく 一遠國 (名) 遠く隔たりたる國。をんごく。(近國の對) 太平記十三「鎌「天馬中略念を遠國に告ぐる時、聊か用ふるに得あらんか」後漢書西域傳「遠國珍產」

ゑんごく-ぶぎやう 一遠國奉行 (名) 江戶時代、京都・大阪・伏見・駿府等の町奉行及び長崎・浦賀・神奈川・箱館・奈良・山田・兵庫・堺・佐渡・新潟・日光・下田等の幕府直轄の要地にて政務を行ふ奉行の總稱。德川禁令考世三・地方「遠國奉行、評定所出座の儀に付御書附」

ゑん-こん 一怨恨 怨みとがむること。うらむこと。うらみ。漢書楚元王傳「諸儒皆怨恨」

ゑん-さ 一怨嗟 うらみなげくこと。何遜詩「握手分岐路、臨風自怨嗟」

ゑん-さ 一圓座 (名) 藁・菅・蘭などにて渦巻のごとく圓く編みたる座褥(ゐしき)。わらふだ。中務內侍日記「すのこに圓座を敷く、關白・大臣のはあつゐんざ、その外の公卿のはうす圓座なり」

ゑん-ざ 一圓坐 まろく寄り合ひて坐わること。車座。管書駕國「以大盆盛酒、圓坐相向、大酌更飲」

ゑん-さい 一遠塞 (名) 遠き國境にあるとりで。曾我十二「出の駒、洲鹿の夜の雨他郷の涙、岸柳の秋の風遠塞の情とかや」

ゑん-さう 一圓相 (名) ■佛語。禪宗にて悟りの表章として圓き形を示す相。兼行法師物見車「兼好が引導せんと獨鹿に向かって合掌し、鉢おっ取ってゑんさうなし」 ■京都五山の僧侶の名附けたる錢一貫文の稱。類聚名物考國課十「圓相は是れ一圓相にて一貫なり、まろきによりてかく名附けしなり」

ゑん-ざ-がき 一圓座柿 (名) 【植】柿樹科、柿屬の落葉喬木。柿の一品種。果實大にして圓きもの。

ゑん-さつ 一圓札 (名) 圓位の紙幣。即ち、百圓札・五拾圓札・貳拾圓札・拾圓札・五圓札・貳圓札・壹圓札などの紙幣の總稱。明治四年十二月達「新製の圓札を發行せしむるに付き」

ゑん-ざ-づる (名) 【植】うまごやし(苜蓿)の異名。

ゑん-ざ-むし 一圓座蟲 (名) 【動】やすで(馬蝨)の異名。

ゑん-さん 一遠算 (名) ちやうけい(長計)に同じ。

ゑん-さん 一遠山 (名) 遠くにゐる山。とほやま。朗詠「宛轉雙蛾遠山色」儒光義詩「落日登高嶺、悠然望遠山」

ゑん-さん 一遠竄 ■遠地にしまながしにすること。遠流。 ■遠方へのがれかくるること。吳志魯肅傳注「志勢微弱、圖欲遠竄」

ゑん-し 一遠志 (名) 遠大の心ざし。遠き將來を慮る心。蘇軾詩「少年負遠志」

ゑん-し 一園司 (名) 領家の命によりて庄園の事務を掌る者。小右記寛仁三年「寺家所領庄園園司等悉收公、地子不納、頗難」今愁申、无承引」

ゑん-し 一遠視 ■遠方を見ること。とほみ。 ■ゑんしがん(遠視眼)の略。

ゑん-じ 槐 (名) 【植】ゑんじゅ(槐)の異名。

ゑん-じ 一遠寺 (名) 遠方にある寺。太平記五「大悲寺、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀れを催す時しもあれ」

ゑん-じ 一遠邇 (名) ゑんきん(遠近)に同じ。書經堯典「明王慎德、四夷咸賓、土地の人。遠國の人。書經益稷「不賓、遠物、則遠人格」

ゑん-じゅく 一遠熟 (名) 【數】圓の中心。

ゑん-じゅく 一遠人 (名) 遠く隔たれる

無し、有は遠邇」

ゑん-しゅ 一怨讎 (名) あだ。うらみ。

ゑん-しゅ 一圓周 (名) 【數】圓を圍む曲線。其の上の總ての點は皆內部の一定點より等距離にあり。

ゑん-しゅ-あんどん 一遠州行燈 (名) まるあんどん丸行燈(或圓周の二字とす中略近世制、圓而有內外三柱、上下設輪、內者不搖、外者能旋、開闔任意、或云、小堀遠江守正政)「始制之、故俗曰遠州行燈」

ゑん-しゅ-いが 一遠州伊賀 (名) 寬永の頃、茶人小堀遠江守政一が伊賀國の陶工に命じて造らしめし伊賀燒の茶器。肉薄くして質精巧なり。

ゑん-しゅ-しがらき 一遠州信樂 (名) 寬永の頃、茶人小堀遠江守政一が陶工に命じて造らしめし信樂燒の茶器。肉薄くして精巧なり。

ゑん-しゅ-たかとり 一遠州高取 (名) 寬永の頃、朝鮮の歸化人八藏及び其の子八郎右衛門と肥前國唐津の浪人五十嵐次左衛門とが筑前國高取にて製せし高取燒の茶壺。陶質緻密にして釉は白色淺碧又は黯灰色を帶び、又青黑のものありて、並びに潤澤あり、火候の度によりて自ら金色を發し、至りて美なり。初め八藏・八郎右衛門が國主黑田忠之の命を受けて陶法の指教を茶人小堀遠江守政一に受けしより此の稱あり。

ゑん-しゅ-ちやりう 一遠州茶流 (名) ゑんしりう(遠州流)に同じ。茶人大系譜「小堀政一(從五位下、備前守、號宗甫、幕府茶道の創始)」

ゑん-しゅ-とう 一遠州燈 (名) ゑんしうあんどん(遠州行燈)に同じ。北禪遺草「天魚、世有遠州燈者、遠江守小堀政一所創、海內莫不用也」

ゑん-しゅ-はぐま (名) 【植】ちんかうはぐまの異名。

ゑん-しゅ-りう 一遠州流 (名) ■茶道の一派。小堀遠江守政一を流祖とするもの。茶傳集茶道「小堀遠江守(神政)、傳授して宗眠と(遠州流茶の創始)」 ■生花の一派。小堀遠江守政一を流祖とするもの。生花評判記當世壺の流義は、千家古流・遠州流」

ゑん-しりう 一圓周率 (名) 【數】圓の直徑と其の周との比は皆一定なる。此の一定せる比の値の稱。πなる文字にて表はし、其の値は次の如し。

π=3.14159……

ゑん-しゃ-がん 一遠視眼 (名) 眼球の水晶體の扁平なるため、又は眼底の淺きため、近距離の物を明視する能はずして、却りて遠距離の物を明視し得る眼。遠視。老眼。

ゑん-しゃ-ぐわ 一遠視畫 (名) うきゑ(浮繪)に同じ。

ゑん-じつ 一圓實 (名) 【圓頓一實の義】佛語。天台宗の教義。一實の理、即ち眞如に圓頓の功德を具すること。平家七「小茶山「親値遇圓實頓悟教」」

ゑん-じつ-てん 一遠日點 (名) 【天】ゑんにちてん(遠日點)に同じ。

ゑん-じゃう 一垣墻 (名) かき。かこひ。戰國策「家之有垣墻、所以合好掩惡也」

ゑん-じゃう-じゅ 一圓牛樹 (名) 佛語。三十三天にある樹。たうりてん(忉利天)を見よ。

ゑん-じゃく 一圓寂 佛語。涅槃に入ること。僧の死すること。入寂。太平記四、雅因人岩「桑門人(ビクニ)と成り給ひしが中略病に被侵、後、圓寂し給ひけるとかや」

ゑん-じゃく 一婉弱 かよわきこと。たをやかなること。太平記廿三「楚三閭大夫「世三千の美人中略窈窕たる婉孌、羅綺にだもたへざる體なれば」

ゑん-しゅ 一園主 (名) 園の主人。園の所有者。陳師道詩「欲如園早知春」

ゑん-じゅ 一槐 (名) 【植】豆科、槐屬の落葉喬木。高さ二三十尺に達す。葉は長卵形、全邊の小葉より成る奇數羽狀複葉にして、互生す。花は大なる圓錐花序に排列し、黃白色の蝶形花冠を有す。果實は長莢にして、各種子の間に括りを有す。東部亞細亞に產し、又庭園に栽培す。木材を建築・器具の用に供す、えにす。くぜまめ。きふぢ。くわいじゅ。ゑんじ。

ゑん-じゅ 一遠樹 (名) 遠くにある樹。遠方に見ゆる樹木。朗詠「望長安城之遠樹」

ゑん-しゅう 一圓宗 (名) 佛語。(圓蒙一實を旨とするよりいふ) てんだいしゅう(天台宗)に同じ。續後紀四「家和二年「天台一門、已立圓宗、大乘三學、流傳未周」」平家四「山門」北嶺は圓宗一味の學地」

ゑん-じゅく 一圓熟 物事によく慣るること。熟練せること。圓繪寶鑑「古人筆法圓熟、用意精到」

ゑん-じょ 一遠所 (名) 遠くはなれたる所。遠地。遠方。庭訓往來二月「遠所之花者、乘物僮僕雖令招期」

ゑん-じょ 一援助 たすけること。たすけ。後漢書馮魴傳「招迎佞奴、爲桓、以爲援助」

ゑん-しょう 一遠稱 (名) 【文法】指示代名詞の一。遠方のものをさすもの。あれ・かれの類。(近稱・中稱の對)

ゑん-しょく 一怨色 (名) 怨める顏色。左傳襄公廿「伊尹放大甲、面相之、卒無怨色」

ゑん-しん 一圓心 (名) 【數】圓の中心。

ゑん-じん 一遠人 (名) 遠く隔たれる人。

ゑん-しん-りよく 一遠心力 (名) 【理】圓運動をなせる物體に作用する求心力の反作用。きりしんりよく(求心力)を見よ。

ゑん-ず 一怨 (他動サ) うらむ。怨みごとをいふ。ゑず。字津保國讓「あやしうはかりし事にて、此の月比ゑんじ給はで」源帚木「例のはらだちゑんずるに」

ゑん-すけ 一圓助 (名) いちゑん(一圓)の隱語。

ゑん-すゐ 一淵醉 (名) 【深く醉ふ義】古昔、禁中にて、正月・十一月の五節の時及び臨時の大饗等の後に、藏人頭以下の殿上人を召して酒宴を殿上に催し、管絃歌舞をなして歡樂を極むること。右京大夫集「五節の比、霜夜の有明に宮の御方のゑんするありて」中右記寛治八年正月二日「今夜及深更、兩貫音以下著殿上、有淵醉事」朗詠今樣之後、已及散樂」三獻

ゑん-すゐ 一淵水 (名) ふちの水。盛衰記十「人形布引瀑「岸にたたへたる淵水は、藍を染むるかとあやまたる」

ゑん-すゐ 一遠水 (名) 遠方にあるみづ。韓非子說林「遠水不救近火也」

(諺)遠水湯を救はず 隔たれるものは急の間に合ひ難し。姑氣質序「遠水湯を救はず、手近に嫁ほど便なるは無く、姑ほど大切なるは無し」

ゑん-すゐ 一遠陲 (名) 遠き國ざかひ。僻遠の地。

ゑん-すゐ 一圓錐 (名) 【數】圓錐面と其の指導曲線の平面とによりて圍まれたる立體の稱。

ゑん-すゐ-の-きよくめん 圓錐曲面 【數】ゑんすゐめん(圓錐面)に同じ。

ゑん-すゐ-の-しだうきよくせん 圓錐指導曲線 【數】母線が頂點を通過しつつ

動くとき、恆に其の周上を過ぐる圓周の稱。

ゑんすゐの そくめん 圓錐側面【數】ゑんすゐめん(圓錐面)に同じ。

ゑんすゐの たいせき 圓錐體積【數】底面の面積をS、高さをHとし、且つ體積をVとすれば

$$V=\frac{1}{3}\pi R^2 \cdot H$$
$$=\frac{1}{3}SH$$

ゑんすゐの たかさ 圓錐高【數】底面と頂點との距離の稱。

ゑんすゐの ぢく 圓錐軸【數】圓錐の頂點と底面の中心とを結ぶ直線の稱。

ゑんすゐの ちゅうてん 圓錐頂點【數】母線が指導曲線の周りを過ぎつつ動きて圓錐曲面を作るとき、常に通過する一定點の稱。

ゑんすゐの ていめん 圓錐底面【數】圓錐面と一平面との交りてなす平面の部分の稱。底面が軸に直交する時は底面は圓にして、斜交する時は楕圓なり。而して前者は直圓錐、後者は斜圓錐と云ふ。

ゑんすゐの はんけい 圓錐半徑【數】底面の半徑の稱。

ゑんすゐの ほせん 圓錐母線【數】頂點と指導曲線の周りとを過ぎつつ動きて曲面を作る直線の稱。

ゑんすゐの めんせき 圓錐面積【數】直圓錐の半徑をR、母線をH、其の側面積及び面積を夫れ夫れS_1・S_2とすれば

$$S_1=\pi R^2+\pi RH+2=\pi R(R+H)$$

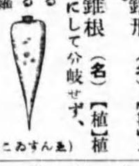
ゑんすゐさくせん 圓錐曲線【數】直圓錐を其の軸に平行なる平面にて切るときは其の切口は圓となり、又、軸に斜交する平面にて切るときは切口は楕圓となり、又、軸に平行なる平面にて切るときは切口は雙曲線となり、母線に平行なる平面にて切るときは拋物線となる故に、此の圓・楕圓・雙曲線・拋物線を總稱して圓錐曲線と云ふ。

ゑんすゐさくせんーはふ 圓錐曲線法【數】圓錐曲線の性質を論ずる數學の一分科。

ゑんすゐーくわじょ 圓錐花序【植】植物學上の用語。總狀花序の一變態。唯其の下部の花の花梗最も長く、上部に至るに從ひ漸次花梗の短くなる爲め、全形圓錐狀を呈する花序をいふ。例へば、萊菔(コイン)の花序の如し。

ゑんすゐーけい 圓錐形【數】ゑんすゐ(圓錐)に同じ。

ゑんすゐーこん 圓錐根【植】植物學上の用語。單一にして分岐せず、基部太く、先端に至るに從ひ、漸次銳尖なる根の稱。例へば、胡蘿蔔(ニンジン)・牛蒡(ゴボウ)の根の如し。


(ゑんこんすんあ)

ゑんすゐーたい 圓錐體【數】ゑんすゐ(圓錐)に同じ。

ゑんすゐーづはふ 圓錐圖法【數】次條に同じ。

ゑんすゐーとうえいはふ 圓錐投影法【數】球面上の圖形を圓錐面上に投影し開展したるもの。通常、地表の一局部を寫すに用ひらる。

ゑんすゐめん 圓錐面【數】一定點を通過し、且つ此の點を含まざる平面上の定圓周上の點に恆に通過しつつ動く直線によりて畫かれたる曲面の稱。

ゑん-せい 遠征 ㊀遠方の地を征伐すること。戴叔倫詩「天兵動遠征」 ㊁遠方へ行くこと。遠行。

ゑん-せい 遠逝 ㊀遠方へ(ゆくこと。後漢書「故變名遠逝」 ㊁遠方へ行きて歸らざること。死すること。

ゑん-せき 遠戚【名】血緣の遠き親戚。

ゑん-せき 圓石【名】まるき石。まるいし。盛褒記「萬丈の谷に圓石を倒ばして敵を亡す」孫子「善戰人之勢、如轉圓石於千仞之山者、勢也」

ゑん-せん 淵泉【名】ふちといづみ。宋書「王者德至淵泉、則河出龍圖」

ゑん-ぜん 淵然【副】水深くして靜かなるさま。柳宗元文「淵然而靜者」

ゑん-ぜん 宛然【副】さながら。あたかも。まるで。

ゑん-ぜん 婉然【副】しなやかなるさま、しとやかなるさまにいふ語。

ゑん-そ 遠祖【名】祖先。先祖。とほつおや。

ゑん-そう 淵藪【名】(魚の集まる淵と獸類の集ふ藪とのの義)物事のより集ふ所。書經「爲天下逋逃主萃淵藪」

ゑん-ぞう 怨憎 うらむことにくむこと。怨みと憎みと。陳子昂詩「怨憎未相復、親愛生禍端」

ゑん-そく 遠足 運動の爲め遠方まで歩行すること。とほみち。

ゑん-そん 遠孫【名】遠き子孫。遠裔。

ゑん-そん 遠村【名】遠く隔たりたる村里。謝靈運「野草の露を分け行けば、遠村に烟滿ち、人屋しるき眺望の」

ゑん-だい 圓臺【數】せっとうゑんすゐ(截頭圓錐)に同じ。

ゑん-だい 遠大 規模の大いなること。運歩色葉「遠大(ヱンダイ)」謝朓文「臣本布衣、不謀遠大」

ゑん-たう 遠島【名】 ㊀離地より遠く離れたる島。謝靈運「小船に棹さして、五湖の遠島をたのしむ」後漢書「深入遠島」 ㊁江戸時代の刑罰の一。追放より重く、死罪より輕し。下文を見よ。しまながし。をんる。御定書百箇條「遠島、江戸より流罪者は大島・八丈島・三宅島・新島・神津島・御藏島・利島、右七島之內遣す、京・大阪・西國・中國より流罪之分は薩摩・五島之島・隱岐國・壹岐國・天草郡遣す」

ゑん-たう 圓墻【數】圓墻面と其の指導曲線の平面及び之に平行なる平面とにて圍まれたる立體の稱。直圓墻と斜圓墻の別あり。前者は母線と指導曲線の平面とが直交するものにして、後者は其れが斜交するものなり。

ゑんたうの きょくめん 圓墻曲面【數】ゑんたうめん(圓墻面)に同じ。

ゑんたうの しだうきくせん 圓墻指導曲線【數】母線が定直線に平行に動くとき、恆に其の周上を通過する圓周の稱。

ゑんたうの そくめん 圓墻側面【數】ゑんたうめん(圓墻面)に同じ。

ゑんたうの たいせき 圓墻體積【數】圓墻の底面積をS、高さを且、體積をVとすれば、

$$V=S \cdot H$$

ゑんたうの たかさ 圓墻高【數】兩端面間の距離の稱。

ゑんたうの たんめん 圓墻端面【數】次條に同じ。

ゑんたうの ていめん 圓墻底面【數】母線と一定の角をなせる二平行平面と圓墻面と交はりて生ずる平面の一部分の稱。直圓墻にありては底面は圓なれども、斜圓墻に於ては楕圓なり。

ゑんたうの はんけい 圓墻半徑【數】指導曲線の半徑を其の圓墻の半徑と云ふ。

ゑんたうの ほせん 圓墻母線【數】指導曲線上の點を通過し、定直線に平行に動きて曲面を生ずる直線の稱。

ゑんたうの めんせき 圓墻面積【數】直圓墻の半徑をR、母線をH、曲面積をS、全面積を夫れS_1とすれば

$$S=2\pi RH$$
$$S_1=2\pi R.H$$

ゑん-だう 遠道【名】遠き道。管子「造父有以感轡筴、故遠獸可及、遠道可致」

ゑん-たう-めん 圓墻面【數】定直線に平行し、且つ其の直線に平行ならざる平面上にある定圓周上の點を恆に通過しつつ動く直線によりて畫かれたる曲面の稱。

ゑんたらう 圓太郎【名】次條の略。

ゑんたらう-ばしゃ 圓太郎馬車【名】(落語家橘屋圓太郎が寄席にて喇叭を吹き、乘合馬車の馭者をまねて喝采を博したるよりいふ)がたくりばしゃ。

ゑん-ち 遠地【名】遠くはなれたる土地。遠所。左傳「嘗曰公矢魚于棠、非禮也、且言遠地也」

ゑん-ち 園池【名】庭園と池と。史記「山川園池、市井租稅之入」

ゑん-ち 圓智【名】圓滿なる智能。釋迦如來誕生會「圓智明らけき御顏」

ゑん-ちし 園池司【名】大寶の制、宮內省の被管たる司の一。宮內省所轄の園池にて供御の蔬菜・樹菓を種殖する等のことを掌るもの。寛平八年內膳司に併せらる。そのいけのつかさ。職員令「園池司」後紀「十七年閏四月、減園池司一員」

ゑん-ちてん 遠地點【名】【天】白道上、地球に尤も遠き點の稱。

ゑん-ちゃう 圓頂【名】まるきあたま。坊主あたま。又、坊主。僧。出家。太平記「世四、欲山門衆、太善事を修せば、方袍圓頂の身としては、共に可悅事にてこそあるに」

ゑん-ちゃう 遠長 遠く長きこと。意味の深遠なること。太平記「句の優美遠長なる體」

ゑん-ちゅう 圓柱【名】 ㊀まろき柱。 ㊁(數)ゑんたう(圓墻)に同じ。

ゑん-ちゅう 淵中【名】深きふちのなか。

(誌)淵中の魚を窺見するは不祥 餘り明察にて、隅隅まで行き渡るはよろしからざること。史記「墨子、察見淵中魚、不祥」

ゑんちゅう-たい 圓柱體【名】【數】ゑんたう(圓墻)に同じ。

ゑんちゅう-とうえいはふ 圓柱投影法【名】【數】球面上の圖形を圓柱上に投影する畫法。地圖を畫く一方法なり。此の方法によるときは、緯線と經線とは直交して碁盤の目の如くなる。

ゑんちゅう-るゐ 圓蟲類【名】【動】蛔形動物分類の綱名。體、圓柱形にして蚯蚓に似たれども、其の兩端尖り、全く環節を有せず。雌と雄との區別あり。之に屬するものには、はらのむし・十二指腸蟲などの寄生蟲多し。

ゑん-ぢょ 怨女【名】(夫なきを怨み歎く女の義)空閨を守る女。孟子「內無怨女、外無曠夫」

ゑん-ぢょう 圓塚【名】そとば(卒都婆)を見よ。

ゑんぢ-らく 圓地樂【名】ちきうらく、地久樂の異稱。樂家錄「八、高麗調、狛雙調、地久(ヂキウ)一名、圓地樂」

ゑんづう-だいし 圓通大士【名】佛語。くわんぜおんぼさつ(觀世音菩薩)の異稱。太平記「十六、(櫻井)の戒」の異稱。太平記「十六、(櫻井)の戒」の異稱。

ゑん-てい 園丁【名】にはつくり。庭師。植木屋。橘錄「園丁種」之、以鬻子市」

ゑん-てい 園庭【名】そのとにはと。庭園。列子「能舍野禽獸、委食於園庭之內、雖虎狼鵰鶚之類、無不柔馴者」

ゑん-てい 淵底【名】事物の窮極の處。どんぞこ。著聞集「昔今をかんがみて、その淵底をあなぐらせ給ふに」下學集「淵底(テイ)義也」

ゑん-てん 宛轉 ゆるやかに動くさま。動作のゆるやかなるさまにいふ語。朗詠「宛轉雙蛾遠山色」劉廷芝詩「宛轉蛾眉能幾時」

ゑん-てん 圓轉 ㊀まろく廻ること。まはること。 ㊁かどだたずして滯りなきこと。自由自在なること。「圓轉滑脫」

ゑんてん くっつたつ 圓轉滑脫 角たず滯滯せざること。よく變化して自由なること。

ゑん-と 遠圖【名】遠大なるはかりごと。又、とほきはかりごと。遠謀。後漢書「傳毅、遠圖謀國」

ゑん-どう 豌豆【名】【植】豆科、豌豆屬の二年生草本。長さ五六尺に達す。葉は羽狀複葉にして、先端卷鬚に變じ、基部に大形にして葉狀を呈する托葉を具ふ。花は帶紫白色、蝶形の花冠を有す。果實は莢なり。地中海沿岸の原產。種子及び果實を食用に供し、莖・葉を肥料又は家畜の飼料に供す。そひまめ。のらまめ。ぶんどう。ぶんどうまめ。

ゑんどう-さう 豌豆草【名】【植】いたちささげ(江芒決明)の異名。

ゑんどう-さき 豌豆宿【名】疱瘡の古名。もがさ。續紀「十二、天平七年、自夏至冬、天下患豌豆瘡、命曰天死者多」

ゑんどう-まめ 豌豆豆【名】【植】ゑんどう(豌豆)の異名。

ゑんどう-めし 豌豆飯【名】豌豆豆を、新米なれば其の儘、ひねなればゆでて米にまぜ、鹽を入れて焚きたる飯。德用食鏡「豌豆飯、豌豆は五月時分ならば生豆を用ふれども、時節おくれては、乾きたる豆なれば、二日ほど水に浸し置き、水にてよく焚きて、鹽を合せて飯を焚きあげ、じやじや時分に入れ、暫くむらして擾きまぜ食すべし、生の時は、米とかきまぜ、鹽を入れ、焚きあげまぜて食する也」

ゑん-とく 怨�「とく(讀)は痛く怨む義」怨みにくむこと。うらみて惡しざまに云ふこと。左傳「昭公八年、怨讟動于民、則有非言之物而言」

ゑん-どく 怨毒 甚だしく怨むこと。怨みて他を害すること。漢書「立自疑、爲長毀醫、常怨毒長」

ゑん-どん 圓頓 佛語。天台の教義。本體の理性により、過く諸法を融和して頓速に成佛すること。功德圓滿して成佛の頓速なること。平家「七、水山(ヤマ)傳教大師入唐歸朝後、圓頓教法弘此所」盛衰記「九、山門受場「念佛三昧の砌あり、圓頓觀堂の窗あり、日出たかりし峰なれども」

ゑんどん-かい 圓頓戒【名】佛語。天台宗にて圓頓の旨を授くる戒法。二水記「九月廿七日、今日御受戒、元應寺長老始參勤、先於小御所圓頓戒之儀有之」

ゑんどん-かい-だん 圓頓戒壇【名】佛語。圓頓戒を授くる戒壇。諸宗階級「眞言」

庭訓往來「十月、茶菖・圓豆・芹」

律宗法義 大乘律と申し候は、梵網經と五十八戒を以て受持仕り、菩薩比丘と呼び候而、一向に小乘之戒法を不受天竺に大乘寺・小乘寺、元來不同有之旨を述べ、其の戒壇も圓頓戒壇と名づけ候」

をんどん-しゅう 【圓頓宗】 (名) 佛語。「圓頓の妙旨を說く宗旨の義」 天台宗の異稱。

をんない 【園内・苑内】 (名) そのうち。にはのなか。庭内。

をんにち-てん 【遠日點】 (名) 【天】わくせいのをんにちてん(惑星の遠日點)に同じ。わくせい(惑星)の條を見よ。

をんのはきはらりう 【遠萩原流】 (名) 生花の流儀の一。武藏國人萩原某の創めたるもの。插華故實集上後篇「近頃東北の人萩原の何某、公務に所せられ、播磨の國に至り在勤の中、遠州流の花を指南す、其の門人誤りて、遠の萩原流と稱す」

をんば (名) 【勤】とんばう(蜻蛉)の異名。和名抄 赤卒 阿波末

をんは 【遠馬】 (名) とぼのり(遠乘)に同じ。

をんばう 【遠邦】 (名) をんごく(遠國)に同じ。

をんばう 【遠方】 (名) 遠きところ。遠隔の地。論語學而「有朋自遠方來、亦不樂乎」

(諺)遠方の鯉類より近所の他人 遠くの親類より近くの他人に同じ。とほしなり。

をんばう 【遠望】 遠方をのぞみ見ること。遙かに見渡すこと。東方朔文七謙「登碧山今遠望」

をんばう 【怨望】 怨みに思ふこと。うらむこと。史記 呂后本紀「百姓怨望、而諸侯有畔者」

をんぱん 【遠帆】 (名) 遠方に見ゆる帆。遠き所を走る帆船。朗詠「遠帆歸處水迎雲」

をんばん 【遠蠻】 (名) 遠く隔たれる所の蠻人。遠き未開の地。太平記三三人物鳥資盤の囚はれと成って、逆旅の月にさすらひ給ふ」

をんぴ 【猿臂】 (名) 猿の臂の如く長きひぢ。吳志太史慈傳「猿臂善射、蹠不盧發」

をんび 【婉美】 しとやかにしてうつくしきこと。

をんぶ 【怨府】 (名) 【ふ(府)は物のあつまる場所】 衆人の怨みのあつまる場所。左傳昭公十二年「吾不爲怨府」

をんぷん 【怨憤】 うらみ憤ること。

をんぶん 【遠聞】 遠方まで聞こゆること。太平記十七、公卿殿上人「此の事兼ねても内内知らせたくはありつれども、事遠聞に達せば、却って難儀なる事もありぬべければ」

をんぺい 【援兵】 (名) 救ひの兵。たすけの兵。家忠日記增補「松平左近直乘を掛川の城援兵として遣はしめ給ふ」

をんべつ 【遠別】 遠く離れ別るること。太平記 名越軍「再會期無うして遠別今にあり」 白居易詩「兄弟唯二人、遠別恆苦悲」

をんべつ 【怨別】 別れをうらむこと。離別をなげくこと。朗詠「織錦機中已辨相思之字、擣衣砧上俄添怨別之聲」

をんぼ 【遠浦】 (名) 遠方のうら。遠く隔たれる海邊。狂言 見物左「遠浦の歸帆」

をんぼ 【園圃】 (名) 【ゑん(園)は樹を種うるその、ほ(圃)は菜を種うるはたけ】 その。はたけ。洛陽名園記「園圃之勝、不能相兼者六」

をんぼう 【遠謀】 (名) をんと(遠國)に同じ。賈至詩「舉酒有餘恨、論邊無遠謀」

をんま 【繪馬】 (名) ゑま(繪馬)の音便。

をん-まん 【圓滿】 ㊀十分に滿ち足ること。平家七、竹生島詣「所願成就圓滿すと承れば」 盛衰記十八、龍神「佛中尊我れ能く萬德圓滿して自在の身を得れども」 ㊁かどだたずおだやかなること。

をんみゃう-りう 【圓明流】 (名) にたうりう(二刀流)に同じ。

をん-みん 【遠民】 (名) 遠所の民。遠國の民(近民の對) 盛衰記廿五、西宮「率土の濱皆王民、遠民何疎、近民何親」

をん-もん 【轅門】 (名) 【ゑん(轅)はながえ】 ぐんもん(軍門)に同じ。下文を見よ。太平記四十、由「隨兵百騎許り召し具して轅門の警固に相隨ふ」 周禮天官「掌舍、掌王會同之舍、設車宮轅門」疏注次、車以爲蔽、則仰車以其轅表門」 疏謂、仰兩乘車轅相向表門、故名轅門」

をん-やう 【遠洋】 (名) 陸地より遠く隔たりたる海洋。遠海。

をんやう-がかい 【遠洋航海】 (名) 遠洋を橫斷して海外の諸港に航行すること。(沿岸航海の對)

をんやう-がせん 【遠洋航船】 (名) 遠洋航海に用ふる船舶。明治二十九年四月法律第六十七號船檢法第三「遠洋航船近海航船沿海航船平水航船の四種」

をんやう-ぎょげふ 【遠洋漁業】 (名) 漁業の一。遠洋にてなすもの。(近海漁業の對) 遠洋漁業奬勵法第一「遠洋漁業を奬勵するため」

をん-ゆう 【圓融】 佛語。分別・妄執の見を去りて、理性により萬法を通ず融通・無碍ならしむること。諸宗問答鈔「融通の法も發りなき月の橫川も見えたりや」

をんゆう-ねんぶつ 【圓融念佛】 (名) ゆうづうねんぶつ(融通念佛)に同じ。著聞「蓋可數迅疾往生之法、所謂圓融念佛是也」

をん-よう 【婉容】 (名) しとやかなすがた。柔和なる態度。禮記 喪服「有愉色者、必有婉容」

をん-よう 【援用】 ひき用ふること。民法第四百三「債務者か相殺を援用したるとき」

をん-らい 【遠雷】 (名) 遠方にて鳴る雷。

をん-らい 【遠來】 遠方より來たること。大鏡 狂言 藤「酒中略此れは遠來ぢや」 晉書 陶侃傳「謝其遠來意」

をん-り 【遠里】 (名) 遠く隔たれる村里。太平記十二、長崎問 夜通骨出「荒村遠里、跣足踏霜」

をん-り 【垣離】 (名) かき。かきね。

をん-り 【遠離】 遠く隔たれること。遠く離れたること。下學集下「遠離、ヱン」

をん-りう 【遠流】 (名) をんる(遠流)に同じ。北齊書 魏收傳「藏寶者悉遠流」

をん-りゃく 【遠略】 (名) ㊀遠き將來のはかりごと。又、深遠なる策略。陸機文賦「洪謨遠略」 ㊁遠國を征服する策略。左傳 僖公九年「齊侯不務德而勤遠略」

をん-りょ 【遠慮】 ㊀遠く後日の利害をおもんばかること。深く思慮すること。とほきおもんばかり。太平記十六、正成「能く能く遠慮を被遇て、公議を可被定にて候」 論語衛靈公「人無遠慮、必有近憂」 ㊁他人に對して言語・動作などを控目にすること。謙退。大鏡 狂言 人「私の存じ寄り申して見ませうか申遠慮なしに云うて見よ」 槍權三「權三は遠慮ながら、當の居間にぞ通りける」 ㊂弔意を表するため、又は悲しみを共にするなどの意にて、一般の祝ひ事などを差控ふること。 ㊃江

戸幕府の制。無服の親の喪に遭ふ吏員をして、日數を定め出仕を止めて家居せしめしこと。御當家令條御仕置、改葬、遠慮 一日、子者不殘遠慮」 ㊄江戸時代、士分僧侶に科せし刑の名。過塞より輕きものにて、門を鎖せども、潛門は引寄せ置きて鎖さず、又、夜中潛門より出入するを得るもの。御定書百箇條御仕置、遠慮門をたて、書置、改中不目立、遠慮不著」 ㊅江戸時代、士分にて、親屬の處刑せられたるものある時、其の出勤若しくは謁見を差控ふること。憲教類典 寛元年八月「切腹・流罪・追放・御預、右者御仕置被仰付輩之親類、忌掛候分、并男・小男・聾、此外は不遠慮事」

をん-りん 【園林】 (名) そのとはやしと。又、その林。儒光義詩「天高風雨散、清氣在園林」

をん-るゐ 【遠類】 (名) 緣の遠き親類。發心集五「八幡別當顯清が遠類にて、永秀法師と云ふ者あり」

をん-れい 【婉麗】 たをやかにしてうつくしきこと。晉書 周處傳「委容婉麗」

をん-ろ 【遠路】 (名) とほきみち。とほみち。長き道中。平家五、文覺「遠路の間で餓へば、土產・糧料如きの物も大切に候」 論語泰伯「任重而道遠。注負重任、致遠路也」

をん-ろ 【援路】 (名) すくひのみち。援兵を送る路。

をん-ろ 【圓顱】 (名) まるきあたま。坊主あたま。

をん-わう 【寃枉】 (名) 無實のつみ。寃罪。獄令「凡死罪雖已奏報、猶聽寃枉、事有可疑、可推覆者、以狀奏聞」

をんを 【怨惡】 うらみ憎くむこと。周禮夏官、方氏「除其怨惡、同其好善」

を

五十音圖にて第五十、即ち、和行於列の假名。伊呂波歌にて第十二の假名。歷史的假名遣にて、ゑと音同じきお及び語中・語尾のほと區別せんが爲めに、之を「編のを」「口のを」(共におに對して)又は「中のを」(お及びほに對して)といふ。伊呂波歌にての位置によりてなり。

字體 【萬葉假名】 寃・遠・怨・惋・烏・鳴・塢・陽・惡・乎・呼・弘・泓・越・溫・廻・尾・小・男・峽・雄・叫・刊・士・麻・緒・少。【平假名】を・をで・をむ・をゑ(遠より出づ)。投(越より)。なよりそ・ゑ・を(惡より)。【片假名】ヲ・ヲ・ヲ・ヲ・ヲ・ヲ(乎より)。

表はす音 寃・遠・怨・惋は吳音チン、烏・鳴・塢・陽・惡・乎・呼は漢音ヲ、弘は吳音ウ、泓は漢吳音チウ、廻は漢音クワイ・吳音エ・古音恐らくチイ、尾・小・男・峽・雄・叫・刊・士・麻・緒・少は訓ヲなり。これらを假りてヲの音をあらはせり。今をのあらはす音は

一、表音的假名遣にては (イ)子音wと母音オとより成る音節。子音wの說明はわの條一の(イ)にあり。此の音・平安朝までは存せしが後には子音、wを失ひてオ音となり、今は方言又は外來語の外には存せず。この音をゐにてあらはすことあり。 (ロ)をーは子音wとオの長音とより成る音節をあらはす。「をーづをーす」(人名)の如し。

二、歷史的假名遣にては (イ)をはオと發音す。「を」(音オ)(尾)・「を」か(音オ)(岡)の如し。 (ロ)をう・をお・をふは通常オーと發音す。「らうをう」(音オー)(老翁)・「をうな」(音オー)(女)・「をふ」(音オー)(絲)の如し。(ハ)二語中にてをが列音の下にある時は、その列音の母音アと合して一のオの長音となる事あり。「あをめ」(音オー)(青梅)・「まをか」(音オー)(眞岡)・「まをす」(音オー)(申)の如し。(ニ)二語中にてをが於列音の下に來る時は於列音の母音オと合して、オの長音となる事あり。「とを」(音オー)(十)・「ををし」(音オー)(雄しし)の如し。(ホ)漢語の熟語に於て、上の語がんに終はり、下の語がをに始まる時は、ををノと發音する事あり。「あんをん」(音オンノ)(安穩)如し。この音の由來につきてはわの條二の(ホ)を見よ。

を 牡雄男夫 (名) ㊀動物にては精子を有し、植物にては雄蘂を有するもの。「牡牛」・「雄花」・萬十「たかまとの秋ぬの上の朝霧に、つま呼ぶ乎つ鹿いかで立つらむ」 穆紀上 神代 ㊁男子。記上「なこそは遠つ神にいませ」中略 あはもよめにしあれば」 萬八「男つ神もゆるし給ひ、めの神もちひ給ひて」 ㊂をつと。つま。良人。記上「あはもよめにしあれば、なをきて遠つまは無し」 和名三、後夫 安産乎。一云、毛止乃乎止右 「二云、毛止乃乎止」 ㊃をとこと。神代紀上「雄詰ヲヲ」

をのかんなぎ 男巫 男のかんなぎ。和名三文字集略云、覡 乎乃加乎奈岐破 男祝也」

緒 (名) ㊀絲・紐など、長くして物を結び或ひは垂れなどするものの總名。記上「たちが遠つも未だとかずて」 神功紀「抽取裳絲爲纏 ヲ 代 ヲ 繫 下 紐名」 ㊁樂器に張る絲又、弓の弦など。萬三「みすず刈る信濃のま弓引かずして、弦つ

ぐるわざをしるといはなくに」 字津保 國王「穴あるものは吹き、をあるものは彈き」 ㊂履物につけてある紐。和名三、履 綫 乎 ヲ 「ヲ ん ゑ ん」 履 ㊃尾。しりを。記下「まなばしら寢つゆきあへ、庭雀うずまり居て」 和名 尾 乎 鳥獸尻長毛也」 ㊄鳳などにつけたる、動物の尾に似たるもの。「鳳の尾」 ㊅みねに對して山の低き部分。を(丘)つに同じ。「一說、山の裾の長く引きたる所。 略傳 古今尊上山櫻我が妻に來れば春霞、峰にも をにも立ちかくしつつ」 濱松二「朝霧の峰にも尾にも立ちこめて、踊らん方もえこそ知られね」 ㊆細長く後方に伸びたるもの。「彗星の尾」 ㊇末。をはり。しり。續俳家奇人談「人麿に尾のなき秋の夕べかな」 一葉集、吹く風は尾細くなるや犬ざくら」

(誹)尾に鰭つける 次條に同じ。後撰夷曲集 「尾に鰭のそふる小歌の一ふしを、中さば鯖のさし踊りかな」

(誹)尾に尾をつける ものを大袈裟にいひ立つ。尾鰭をつける。

(誹)尾も羽もなし 尾羽打ち枯らすに同じ。をは(尾羽)の條を見よ。

(誹)尾を搖かし憐みを乞ふ 獸類に等し

き卑劣なる行ひをなす。韓愈文「雜説」「若俛首帖耳、搖尾而乞、憐者、非我之志也」

(籐)屎を泥中に曳く 高位・高官に居て束縛を受けんより、寧ろ貧賤にして身の安心なるに如かざるに譬ふ。下文を見よ。莊子「秋水」「莊子曰、吾聞、楚有神龜、死已三千歳矣、王巾笥而藏之廟堂之上、本龜者寧其死爲貴乎、寧其生而曳尾於塗中乎。二大夫曰、寧生而曳尾於塗中」

を-丘峰 (名) 一山の高き處。みね。記下「はつせの山のおほ寢ぐにははたりたて、さを寢ぐにははたりたて」萬十「峰ぐの上に降り置ける雪」風のむた、ここに散るらし春にはあれども」 二をか(岡)に同じ。記下「我が逃げのぼり！あり寢ぐのはりの木の枝」萬廿「あは乎ぐろの乎ぐろ田におはるたはみづら、ひかばねるねるあをことなたえ」

を-魚 (名) うを(魚)に同じ。記下「おふ寢ぐよし鮪つくあまよ」

を-杵 (名) きね(杵)をいふ、下總國の方言。

を-麻 (名) 一(植)あさ(大麻)の異名。二あさ又はからむしなどの莖の皮より製したる絲。萬廿「あさ乎ぐらををけにふすさにうまずとも、あすきせざめやいざせをどこに」 和名廿「麻苧、説文云麻乎、云阿佐、枲屬也」

を-うむ 麻績麻又は苧ぐを細くさきて、長く合はせ緒ぐる。績ぐむ。仁德紀「耕績ぐの時」字鏡「績乎麻」

を (助) 一他動詞の目的たる名詞を表はす語。記上「おすひ遠ぐも未だとかねば」萬一「秋山の木の葉乎ぐも見ては、もみづ乎ぐばとりてぞしぬぶ」 二自動詞に接して動作の行はるる地位を表はす語。記下「つくば寢ぐ遇ぎて幾夜か寢つる」萬廿「はしけやし家乎ぐはなれて、浪の上ゆなづさひきにて」 三事の吾が意に違ひたるさま又意外なるさまを表はす語。もの。を。なるものを。記上「ひとつ松人にありせば、たちはけまし寢ぐ、きぬ著せまし寢ぐ」萬一「つばらにも見つつ行かむ雄ぐ」古今秋下「白露の色は一つを、いかにして秋の木の葉をちぢにそむらん」 四この意を表はす語。記上「おほさかにあふやをとめ寢ぐみちとへば、ただにはのらずたぎまぢをのる」萬廿「いはたぬにやどりするきみいへひとの、いづらとわれ乎ぐとはばいかにいはむ」 五この意を表はす語。萬廿「みはかし乎ぐつるぎのいけの」同廿「やきたち乎ぐとなみのせきにあすよりは、もりへやりそへ君をとどめむ」

を (感) 一感嘆の意を表はす語。記上「雲立ついづもやへ垣つまごみに、やへ垣作るそのやへ垣寢ぐ」 二同上「阿那邇夜志、愛寢登古寢ぐ」萬三「うまるればつひにも死ぬものなれば、このよなるまは樂しく乎ぐあらな」 歟紀上

を-小 (接頭) 一ちひさき又こまかなる、又さきやかにやさしきをいふ語。記中「菅原のしけこき寢ぐやに、すが疊みいやさやしきてわが二人ねし」 二おきへには寢ぐふねつらら、くろさやのまさつこわぎもくにへくだらす」 三少し。いさか。わづか。萬廿「ぬばたまのひだの大黑見るごとに、こせの小ぐろし思ほゆるかも」字鏡「鄙志毅」

を (接頭) 兩つ並びたるものの中にて、いかめしきもの又大なるものなどを男性に見たてていふ語。神代紀上「雄柱(タケ)」 和名上「牡瓦乎加波良」

を-男 (接頭) 一けがれたること。よごれたること。又、其のもの。史記奉本紀

を-あい 一汙穢。

「除糞」收帑汙穢之罪、使谷反其鄉里」 二糞溷に排泄したる糞尿。

を-あさ 牡麻 (名) 「植」大麻の雄本。

を-あはせ 絃合 (名) 絃樂器の合奏。新六帖「我よはひたつる琴柱のをあはせの、ただせめにのみせめも行く哉」 謠千手「王琴の絃合せに」

をい (感) おいを見よ。浮世風呂三「何でも角でもをいをいさ」

を-いくさ 男軍 (名) 一男子を以て編制したる軍。書紀「神武紀」「果以男軍、越嶺攀坂、從後夾擊破之」 二說、奇兵に對する正兵の義。

をう (翁) 一男の老人。おきな。老翁。 二老人の尊稱。揚子方言「凡尊老周秦秦隴謂之公、或謂之翁」

をう (感) おうを見よ。

をう-うつ (蓊鬱) (副) 一樹木などのしげれるさまにいふ語。左思文賦「松柏蓊鬱於山峰」 二雲霧の盛んなるさまにいふ語。觀文帝賦「瞻玄雲之蓊鬱、仰沈陰之杳冥」

をうかましい (形口) おろか(愚)なるをいふ、豐州の方言。

をう-ご 一撫護 (名) 一神佛などのたすけ護ること。神佛などの加護。ようご。平家十「熊野」「大悲擁護の霞は熊野山に靉き」 二嚴經「我與其人暗中摩頂、擁護安慰、令其成就」

をう-し 牡牛 (名) をすの牛。ぼきう。狂言「女牛吟ずれば男牛聞く」

をう-じゃく 溫石 (名) をんじゃく(溫石)、訛り。

をう-つばり 男梁 (名) 門の冠木(カブキ)に直角なる長き梁(ハリ)。紙上蜃氣「男梁(ヲツバリ)又云雄丸張」

をうと 夫 (名) 〔男人(ヲト)の音便〕をっと。を。つま。和名「後夫、伊乎乃乎止」

をうな 女 (名) 〔をみな(女)の音便〕。をんな。婦人。女。靈異記「嬢(ヲウナ)」古今馬たとへば繪にかけるをうなをみて、いたづらに心を動かすがごとし」

をうなご 女子 (名) をんなの子。ぢょし。にょし。をんなご。をんな。源若紫「はしり來る女子、あまたに見えつる子どもに似るべくもあらず」同若菜「をうなどを、おほしたてん事よ、いとかたかるべきわざなりけり」

をうなめ 妾 (名) めかけ。てかけ。をなめ。せふ。字鏡集「妾ヲウナメ」

をうま 牡馬 (名) をすの馬。をとこ馬。節用文字「牡馬ヲウマ」

をう-ぬ 一蓊蔚 (副) 草木の生ひしげれる、又盛んに起こり立つさまにいふ語。衡文賦「瘞醯蓊蔚、含芬吐芳」漢武內傳「望閣上、有丹霞蓊蔚而起」張

をえ 小江 (名) 小さき江。萬廿「おしてるや難波の小江ぢに」 二ほつくり、なまりてをゑ。

をえつ 〔嗚咽〕なきむせぶこと。十訓「悲泣・嗚咽し給ふことなのめならず」

を-か 岡丘 (名) 〔峰處(カ)の義と〕 一地の少しく高き處。山の低くして平らかなるもの。丘陵。記下「をとめのいかくきは寢ぬるもの。丘陵。記下「をとめのいかくきは寢ぬるもの」萬廿「さなづらの乎可(カ)に栗まきかなしきが、駒はたぐともわはそともはじ」和名「丘乎加」岳記代上「坵。陵」 二をかもめん(岡木綿)の略。

を-か 陸 (名) 一くが(陸)に同じ。夫木「鳴海潟をかをめぐりてゆく人は、都のつとに何をかたらん」 二浴場の湯壺の外。流し場。浮世風呂三「さあさあ出やうを出やうと、をかへ出るよ」

をか 傍 (名) かたはら。そば。局外。

「をか目八目」「をかやき」

を-かい 小櫂 (名) 〔をは接頭〕かい(櫂)に同じ。萬廿「玉鑣の小櫂(ヲカイ)」

を-か-かばほね (名) 〔植〕りふきんくわの異名。

を-かがみ 尾鏡 (名) 山鳥の尾の水にうつれるもの。萬代三「やまつどりをろの長尾ぢをかがみに、かかる心を見るやとほ妻」

を-がき 男餓鬼 (名) 男の餓鬼。(女餓鬼の對)萬廿「寺寺の女餓鬼まをさく、おほみわの男餓鬼ぢをたばりてその子產まはむ」

を-かきつ 小垣內 (名) 〔をは接頭〕かきつ(垣內)に同じ。萬廿「小垣內(ヲカキツ)の麻をひきほし」

を-かけ 尾掛 (名) しりかけづな(尻掛綱)に同じ。

を-か-ごえ 岡越 (名) 岡を越えて行くこと。夫木「をかごえの路を苦しみ川ぞひの、あすかの方を行きてめぐらん」

を-がさ 小笠 (名) 〔をは接頭〕かさ(笠)に同じ。萬廿「すがさ小笠(ヲガサ)」謠鬼笠「小笠の內(見參申さん」

を-がさがけ 小笠懸 (名) 〔遠笠掛の遠き昔に始まりしといふに對していふ語にて、馬場の長さ、的間も同事なりと。貞文「細記」一說、遠笠掛より的の距離近きものと」かさがけ(笠懸)に同じ。(遠笠懸の對)東鑑三、弾左三年「於杜戸松樹下、有小笠懸、是土風也」笠掛記「小笠がけのついでに、ほんの笠がけの事を申すには、遠笠がけといふべし」

をがさがけ-ひきめ 小笠懸蟇目 (名) 小笠懸の射藝に用ふる矢。ひきめ(蟇目)を見よ。

をか-ざき 岡崎 (名) をかざきをどり(岡崎踊)の略。

をかざき-おどり 岡崎女郎衆 (名) をかざきをどり(岡崎踊)に同じ。絲竹初心集「をかざき。をかざきぢよろしゆ、をかざきぢよろしゆ、岡崎女郎衆はえい上らうしゆう、岡崎上らうしゆはえい上らうしゆ」

をかざき-づきん 岡崎頭巾 (名) 熊坂頭巾(クマサカ)より鍛(ヒ)の短きもの。本朝三國誌「岡崎頭巾、羅綾の袂」

をかざき-はっちゃらみそ 岡崎八丁味噌 (名) 味噌の一種。三河國岡崎の名產。大豆を二三晝夜煮て、つぶし丸めて適當の塊をつくり、筵の上に數日ならべおき、塊を碎きて數十日放置し、鹽を混ぜて桶に入れおき、約一年を經て用ふ。

をかざき-みそ 岡崎味噌 (名) 前條に同じ。

をかざき-をどり 岡崎踊 (名) 小唄節の名。初めは踊唄なりしならんも、後には拍子・三味線の手ほどきとして用ひられ、今に行はる。あうむ新ことば「岡ざき踊りといふ小歌を筑紫琴に合はせてひきけることあり、是れ今にあるをかざき女郎衆といふ小歌なり」

をかざき-だけ (名) 〔植〕きむらだけ(肉蓯蓉)の異名。

をかざはら 小笠原 (名) 一次條二の略。二產地を以て名とす」 うぐひすずた(鶯砂)に同じ。

をかさはらりゅう 小笠原流 (名) 一武家禮式の一派。足利義滿の時、小笠原長秀の定めたるもの。二射術及び馬術の一派。源頼朝の臣、信濃國の人小笠原長清騎射に精通し射法を定め、七世の孫貞宗に至りて更にこれを增補したるもの。武術流祖傳「小笠原流、小笠原信濃守源貞宗」家流問答「小笠原は、鎌倉將軍頼朝卿の御代より、弓馬の故實を家に傳へられたり、さるによりて京都將軍家も、弓馬の故實は、皆小笠原流を用ひ給ひし故、其の頃小笠原流を弓馬の御當流といひしも也」 三兵法の流儀の一。小笠原宮內大輔氏隆の創めたるもの。同志雜話「信州流といへるは、小笠原流の事なるが、小笠原軍術、もっぱら雲氣烟氣等の怪異を記し、浮屠妄浮を正とし、多くは附會、信用に不足」

をかし 犯 (名) 罪を犯すこと。犯罪。罪科。源帚「古への人もまことにをかしあるにても、かかることに當らざりけり」

をかし 可笑 (名) 一をかしきこと。わらふべきこと。著聞「法師を捕へてをかしの物につくりなして」 二あひのきやうげん(間狂言)に同じ。

をかし (形シ) 一笑ふべくあり。笑ふべし。源蜻「いかにをかしともの笑ひし給ふ心ちに、月頃おぼしわたりらん」同紅葉「をかしをねんじて」 二おもしろし。よろこばし。趣味あり。興あり。蜻蛉日記上「みちのくにをかしかりける鹿盛を繪に書きても上りて」枕「夏中夜闇」もなほ螢とびちがひたる、雨などの降るさへをかし」 三すぐれたり。みごとなり。美し。優美なり。伊勢集「撫子のいとをかしきを隣にやるとて」今昔「心ばへなども可咲かりければ」永久百首「少女子がいかにをかしき袿にて、見るたび毎に打ちゑまるらん」 四怪しむべし。あやし。奇怪なり。枕「をかしきすぢなど立てたることはなくて、ただありなやうなるを」當流小栗判官「目を細めてをかしい目附が氣に入らぬ」

をかし-か 可笑 (副) をかしくあるさま。もかしさう。榮華「小野のいとをかしかなるも、御覽ぜまほしく思し召し」

をかしがる 可笑 (自動ラ) をかしと思ふ。撰集抄「をかしがらせたまひて」

をかしげ 可笑氣 (副) をかしさう。をかしきやう。宇津保忠「をとこのいとをかしげなるを生み給へり」

をかしさ 可笑 (名) をかしきさま。をかしき度合。著聞「田におきては早早取られぬといひたりけり。をかしさこそ」

をかしなかま 可笑仲間 (名) をかしがるなかま。をかしがる人だち。をかしがる連中。二代男「京中のをかしなか間の集まり、をかしがらぬは口惜し」

をか-しね 陸稻 (名) をかぼ(陸穗)に同じ。

をかしみ 可笑味 (名) をかしき趣。をかしきあぢはひ。

をかしや 可笑 (副) をかしくあるさま。をかしさう。源少女「をかしやかにけしきばめる御文」

をか-しょうき 陸蒸氣 (名) 汽船を蒸汽船といふに對して、汽車の舊稱。

をか-しらし 可笑 (形シク) いかにもをかしきさまなり。さもをかしさうなり。傾城買二筋道「泣くことがあるものか、をかしらしい」

をかしらつき 尾頭附 (名) 神事の供物、祝ひ事の料理などにいふ語。一四の魚をそのままなること。賀古教信七墓廻三「尾頭附の大燒物」

をかす 犯侵 (他動サ) 一法を破る。道に悖る。祝詞式「大祓」「過犯(アヤマチ)、罪(ツミ)、雜雜罪乎」源若菜「悔しくぞ罪をかしける葵草、神のゆるさぬかざしならぬに」名義抄「犯カス」 二しのぐ。打ち勝つ。强ひてなす。神代紀下「直冒(シヲカ)風波、來到海邊」 三攻めいる。拔めとる。侵略す。害す。雄略紀「侵(シヲカ)之惡傍郡」「醫心方、人爲蛇侵(ヤマ)者」

大和物語等ことに國人のいかで此の國の地をばをかすべき」劫字鏡集 ㊃病を受く。塵袋「風にをかさるるによりて」㊄猥褻なる行ひをなす。たはく。姦淫す。祝詞式大祓「己母犯罪、己子犯罪、母與子犯罪、子與母犯罪、畜犯罪」雄略紀「妊娠其采女」㊅先方の意にさかふ。たがふ。ふる。反對す。史記抄「其上を干犯して陳ぶるによりて」㊆下より上の人に向って求む。願ひ求む。玉塵「人にあひ對面しことばをまじへなどするをかすといふぞ」㊇他人の姓を稱す。假りに名乗る。假稱す。續紀廿九、神護景雲二年五月丙午「是近レ冒レ姓、復用佛菩薩及聖賢之號」名義抄「冒ヲカス」冒。

をがせ 麻桿（名）麻を絡ふ桿。字鏡「布櫛」狂言「筒麻や綜麻やをがせを酒手の賃にかいやり」

をがせのやう 麻桿様 麻の亂れたるが如く亂るること。

をかぞめ 陸染（名）うはぞめ（上染）に同じ。

をかだ 陸田（名）はた（畠）に同じ。（水田の對）

をかたいふ 岡大夫（名）わらびもち（蕨餅）の異名。狂言「延喜の帝御寵愛なされたによって、官を被下て蕨餅を岡大夫と申します」

をかたどる （名）（峡方摩か。和訓）杜鵑の夜鳴く聲。夜の聲。

をかたち 岡立（名）岡の上に立つこと。夫木「をかたちの松の嵐の音聞けば、思ひしかりも涙落ちけり」

をがたなさかき （名）【植】ちがたまのきの略。

をがたなさかき 廣心樹 黄心樹（名）【植】木蘭科、をがたまのき屬の常綠喬木。高さ六十尺内外に達す。葉は長楕圓形或ひは長倒卵形、全邊、葉質厚くして、長き葉柄を有す。花は微黄色を帶びたる白色にして、もくれん類の花に酷似すれども、小形なり。果實は圓形又は楕圓形にて簇生す。暖地に自生し、又觀賞用として栽培せらる。木材を建築用及び器具に供す。くわうしんじゅ。古今雑名「をがたまのき。みよしのの吉野のたきに浮かび出づる、あわをかたまのきゆと見つらん」

をがたまもくれん （名）【植】前條の異名。

をかぢ 小梶（名）（をは接頭）かぢ（舵）に同じ。萬五「さにぬりの小船をまけて、たままきの小舵（をがぢ）しじぬき」

をかちいし 雄豚石（名）陸前國桃生郡雄豚濱より産する色黑き石。最も硯材に良し。又、石磐・敷石・屋瓦に用ひらる。玄昌石。

をかづき 尾被（名）【動】むささび（鼯鼠）の異名。

をかづつき 陸續（名）りくづつき（陸續）に同じ。

をかつつじ 岡躑躅（名）【植】に つつじの異名。堀河百首「紅のふりでの色のをかつつじ、妹がま袖にあやまたれける」㊁みやましきみ（茵芋）の異名。和名抄「茵芋仁豆之乎、一云乎加豆之」

をかっぴき 陸引（名）をかひき（陸引）の音便。

をかつら （名）【植】㊀ふう（楓）の異名。和名抄「楓。一名、構豆保、爾雅云、有脂而香、謂ノ楓」名義抄「楓ヲカツラ、タカカツラ」㊁【植】かつら（桂）の異名。

をかづり 陸釣（名）㊀陸地に居て魚を釣ること。五元集「岡釣のうしろ柔や秋の暮」艷道通鑑「風波の難なく安泰なるは岡釣なり」㊁わざとするにはあらざる如く見せかけて人をつりこむこと。

をかとき （名）【植】ききやう（桔梗）の異名。字鏡「桔梗阿止支」

をかとらのを （名）【植】とらのを（珍珠菜）の異名。

をかはー 小川（名）細き流れ。小さき川。細流。新六帖「おのづからきしに滴る山水の、末は小川になりにける哉」

をかはあつがみ 小川厚紙（名）厚紙の一種。あつがみ（厚紙）を見よ。

をかはさぬ 小川絹（名）越中國より産する薄地の絹織物。

をかはしょ 岡場所（名）江戸時代、江戸にて、官許の吉原以外に私娼の居りし所の稱。（嬉遊笑覽三「新町は江戸の吉原のごとく御免の場所でムりやす、其の外江戸でいふ岡場所といふやうなが、幾等もありやす」

をかはだたき （名）料理の名。下文を見よ。料理物語「小川だたき。生がつををおろしよくたたき、杉いたにつけ、煮え湯をかけ、しらめてつくりたたみ候、右のかきだいにもりあはせよし、鯉にてもつかまつり候也」

をかはら 牡瓦（名）半圓狀をなせる長き瓦。まるがはら。つつがはら。なまこがはら。和名抄「牡瓦、武波良」疏瓦。筩瓦。

をかひ 小貝（名）こがひ（小貝）に同じ。

をかーび 岡邊（名）をかべ（岡邊）に同じ。萬五「梅の花散りまがひたる乎加肥（をかび）には、鶯鳴くも春かたまけて」

をかひ 小峡（名）小さきかひ。山と山との間の小なるもの。（大峡の對）。祝詞式大祓「奥山乃大峡、小峡」

をかぶら 陸歩（名）文化の頃、江戸深川の遊里に通ふに、陸よりすることの隠語。當時多くは船にて通ひしよりいふ。船頭新話「をかぶらの足」

をかべ 岡邊（名）をかのほとり。をかのあたり。萬四「みやじろの緒可敵（をかべ）に立てるかほが花、な咲きいでそねこめてしぬばむ」

をかほ 陸稻（名）【陸穂の義】【植】禾本科、稻屬の一年生草本。稻の一品種。畑に作り得るより此の名あり。元來別種にして、水稻を人工もて馴致したるものにして、水利不便の地に適用せらる。普通、五月中に下種し移植を行はず。品種頗る多し。はたけいね。

をかほれ 傍惚（名）親しき關係なきに、ひそかに戀ひ慕ふこと。

する義）江戸時代、捕吏（とうり）に使はるる賤しき者。てさき。（岡引と申候は平人に而も科人に而も、惡者壹人差定め、岡引と名附け、手引爲致、其者之罪を免し、外科人を召捕候」反古の裏書「惡罪の囚一等をゆるして、他賊の巣穴を探らしむる者岡引といふ」

をかひじき （名）【植】藜科、をかひじき屬の一年生草本。高さ一二尺に達す。葉は肉質針狀にして互生し、花は小形、葉腋に單生す。歐羅巴・亞細亞及び北亞米利加の海邊に自生す。此の植物を燒き、其の灰より曹達を製することを得。くがひじき。はままつ。はままつな。みるな。

をかひやうぎ 傍評議（名）當事者以外の評議、むだひやうぎ。

をかふ 陸生（名）陸に生ふること。陸に生ふる物。夫木「あづま野のをかふの稻穂いでざれば、なにを頼みとすぐるわがよぞ」

をかぶら 陸歩（名）文化の頃、江戸深川の遊里に通ふに、陸よりすることの隠語。當時多くは船にて通ひしよりいふ。船頭新話「をかぶらの足」

をかべ 岡邊（名）をかのほとり。をかのあたり。萬四「みやじろの緒可敵（をかべ）に立てるかほが花、な咲きいでそねこめてしぬばむ」

をかほ 陸稻（名）【陸穂の義】【植】禾本科、稻屬の一年生草本。稻の一品種。畑に作り得るより此の名あり。元來別種にして、水稻を人工もて馴致したるものにして、水利不便の地に適用せらる。普通、五月中に下種し移植を行はず。品種頗る多し。はたけいね。

をかーませ 拜（名）かいちやう（開帳）をいふ。京都の方言。武邊大記錄「開帳拜業覽」等、京都御役所計り願ひ相濟み、寺社奉行衆江不二相屆一分は、開帳と稱し候事不二相成一、只爲二拜と可レ書事」

をかーみ 岡見 傍見（名）㊀をかめ（傍目）に同じ。㊁陰夜、蓑笠を倒に著て岡に上ぼり、梢の上にて我が家を見て、明年あるべき吉凶を卜なひ知ること。堀川百首「をこと、こずゑながらに年を越す哉」

をかみ （名）【動】いさぎ（鮗）の異名。字鏡「鮗、知知夫、伊佐佐古、久乎知、倭」

をかみ 拜（名）をがむこと。又、齋會を設くること。敏達紀「大會設齋（をがみ）會」

をーがみ 男神（名）男の神。（女神の對）神代紀上「陽神（をがみ）」

をーがみ 尾髮（名）馬の尻尾。尾。盛衰記「馬中略、太く逞しきが、尾髮あくまで足つたり」太平記十二「公家白瓦毛なる馬の、尾髮飽くまで足って太く逞ましきに」

をがみいし 拜石（名）造園法の語。庭園の中の淨地に据ゑたる平石の稱。

をがみいる 拜入（他動）ふかく拜む。熱心に神佛に祈請す。源玉鬘「手を引きはなたずをがみいりてをり」

をがみーうち 拜擊（名）をがみぎり（拜切）に同じ。源氏鳥帽子折「牛若が引導にて成佛せよと拜み打ち」

をがみかがり 拜掛（名）をがみはじむること。

をがみかがりの雪隱 片意地に我を張ること。やせがまんの强きこと。新永代藏「拜みがかりの雪隱とて、それは遣ひたるといふても、合點で拜むと片意地を張る男」

をがみ-ぎり 拜切（名）〔合掌して拜むさまなるよりいふ〕太刀の柄を兩手に握りて頭上に高く構へ、上より下へ切り下ぐること。太平記「坂本樣の拜み切り、八方を拂って火を散らす」

をがみたふす 拜倒（他動）ひたすら憐みを乞ひて我が意に從はしむ。なきつきて賴む。

をかみる 拜（他動）【植】をかひじきの異名。

をがむ 拜（他動）㊀身を折り屈めて禮をなす。をろがむ。ぬかづく。禮拜す。神代紀下「迎拜（をがむ）延入、歷聘來慰」枕「すぢ押し揉みなどして、ふしをがみ居たる」再拜・頓首紀「鋼致地禮功禮抄」㊁掌を合はせて禮拜す。合掌す。古今雜上「しひてかのむろにまかり至りてをがみけるに」宇津保中「大宮ををがみ奉り給ふ」㊂見るの敬語。拜見す。「御顔を一寸拜みたい」夫木「初雪の降りすさみたる雲間より、拜む甲斐ある三日月の影」

をーがむなぎ 男並（名）男のかむなぎ。をのこかむなぎ。

をかーめ 傍目 岡目（名）他人の所作を他より見てをること。をかみ。傍觀。外見。（諺「傍目八目」局外より他人の圍碁を見れば、局に當たりたるより八目も勝れてよく見ゆること。局外より觀察すれば、其の物事の是非得失の明かに認め得らるる譬へ。

をかーもち 岡持（名）桶の、平たくして、手あり蓋あるもの。中に食物を入れて運ぶ。

をかーもの 陸物（名）をかに出でくるもの。陸地に生ずる物。

をかーもめん 岡木綿（名）尾張國岡地方より產する白木綿。中形染・更紗染等に用ふ。岡。

をーがや 小萱（名）小さき萱。又、萱。千載「あづまやのをがやの軒の忍草、しのびもあへずしげる思ひに」

をかーやき 傍燒（名）自分に關係なきに、やきもちをやくこと。をかやきもち。

をかやきーもち 傍燒餅（名）前條に同じ。浮世風呂「己己の好き好きだから、をかやきもちはいらねえ事だが」

をかーやなぎ （名）【植】やまならしの異名。

をかーゆ 陸湯（名）あがりゆ（上湯）に同じ。浮世風呂「うしろの人、立ってゐてをかゆをあびる」

をかーよし （名）【植】㊀くさよし（蒲草）の異名。㊁しば（芝）の異名。

をーがら 麻幹（名）あさがら（麻幹）に同じ。曾丹集「夏はぎの麻のをがらとあだ人の、心輕さといづれまされり」

をがらーづさん 麻幹頭巾（名）からむしづきんに同じ。持統天皇獸軍法「持統天皇行「麻幹頭巾ひっこうで、大獵刀指して行く人」

をがらーばし 麻幹箸（名）麻幹を折りて箸としたるもの。盂蘭盆の時、精靈棚に供ず。

をがらーぶき 麻幹葺（名）麻幹を束ねて屋根を葺くこと。又、その屋根。

をがるかや 雄刈萱（名）【植】われもかう（地楡）の異名。

をがるかや （名）【植】禾本科、をがるかや屬の多年生草本。高さ一二尺。葉は細長くして尖り、平行脈を具へ、二縱列に排列す。花は小穗狀花序に排列す。小穗狀花序に二形あり。無柄のもの及び有柄のもの之にして、無柄のものは長き芒を具ふ。小穗狀花序は集まりて穗狀をなし、往往下垂す。我が國、山野に自生す。

をかーを 陸餌（名）みみず（蚯蚓）をいふ。魚釣の語。

をかん 惡寒（名）ぞっとして身體の寒さを感ずること。さむけだつこと。さむけ。源氏鳥帽子折「惡寒五體を苦しむれば」

をーぎ 男木 雄木（名）㊀蓼を具へたる木。㊁【植】大麻（ぎ）の雄木。㊂大工の語。木のくひ合せの凸狀をなすものの稱。（凹狀なるをめぎといふ對）

をぎ 荻（名）【植】禾本科、芒屬の多年生草本。高さ五六尺に達す。葉は硬質にして、細長く、平行脈を具へて互生し、二縱列に排列す。小穗狀花序は芒を有せざる一箇の花より成り、基部に絹狀の毛を叢生す。小穗狀花序多數集まりて長き穗狀の花叢をなし、此の花叢は更に大形の圓錐花序を構成す。水邊に自生す。土砂の崩壞を防ぐ爲めに堤防に植ゑ附けらるることあり。うみがや。かぜきぐさ。かぜもちぐさ。とほれぐさ。ねがらぐさ。ねざめぐさ。ねながらぐさ。のもりぐさ。ふみみぐさ。ふゆみぐさ。めざましぐさ。やましたぐさ。をぎよし。萬十「あしべなる荻（をぎ）の葉さやぎ、秋風の吹き來るなへに雁なき渡る」和名「荻、乎木」蔑字鏡「蘆、本字鏡」

をぎ のともずり 荻共擦 荻の葉ゝ葉とすれあふ音。

をぎーかぜ 荻風（名）荻を吹く風。荻に吹く風。和泉式部日記「をぎ風の吹かばいもねで今よりぞ、驚かすかと聞くべかりける」

をきーかぶ 招飼（他動）鷹を手放しにし、餌を見せて招き飼ふ。

をきーさじ 雄雉（名）をすの雉。男の雉。神代紀下「無名雄雉（をさじ）」

をきーなは 招繩（名）鷹をなつくるため繫ぎおく繩。大鷹にいふ語。小鷹には

へをといふ。廣故實抄「喚綱(ヲキ)の節縛(ヘチ)と同じ物也、小國に樂器と云ひ、大國に樂器と云ふ也」

をきの-りう 荻野流 (名) 砲術の流儀の一。寛文頃、上野國の人荻野六兵衛安重の創めたるもの。國朝砲煩權輿錄「我が國にて、古今火術の諸流に分かれたるを舉ぐれば中略荻野六兵衛安重より出でし流派は、荻野流と稱し」

をきのりう-ぞうほ-しんじゅつりう 荻野流增補新術流 (名) 砲術の流儀の一。坂本孫八郎俊豈の創めたるもの。國朝砲煩權輿錄「我が國にて、古今火術の諸流に分かれたるを舉ぐれば中略坂本孫八郎俊豈より出でし流派は、荻野流增補新術流と稱し」

をきはた 荻畑 (名) 江戸時代、檢地に用ふる畑の稱。高を受けて荻を仕立つる畑。無位にて、石盛も低く、年貢も少なし。地方凡例錄「荻畑」

をきーはら 荻原 (名) 荻の生えたる原。荻の生ひたる處。源夕顔「荻はらや軒端の露にそぼちつつ、やへ立つ霧を分けぞ行くべき」

をきはら-せん 荻原錢 (名) 〔勘定奉行荻原重秀の指揮の下に鑄造せるよりいふ〕元祿十二年、京都七條及び江戸龜井戸にて鑄造せし寛永銅錢。白色、徑八分、重量八分、小なるは徑七分五厘。新寛永錢譜「荻原錢、元祿十二年、平安七條及江戸龜井戸所鑄」

をきーむし 尺蠖 (名) 一〔動〕しゃくとりむし(尺取蟲)の古名。和名抄「說文云、蠖、屈伸蟲也」二次條の略。江次第「元亨、正月、無文紙、屈伸蟲也」「練作法有二、或稱荻蟲樣、是毎歩落立也、爲凡(オホ)ど猶如糊(ネリ)、可放紙也」

をきむし-ねり 尺蠖練 (名) 舞樂の足踏みの練(ネリ)の一。尺蠖の歩む狀に似たる足の踏み方。後足を兩足の所に運び、然る後に前足を踏み出すこと。をきむし。

をきーよし 荻葦 (名) 〔植〕をぎ(荻)の異名。

をきれ-なる-うた 尾切歌 (名) 下の句のつまりたる歌。耳底記「慶安元年十月廿四日、尾きれなる歌とは、如何樣なるを申し候ぞ、答、下句のつまりたるをいふなり」

をきーね 招餌 (名) 鷹を招き寄する爲めの餌。拾遺物名「はし鷹のをきゑにせんと構へたる、押あゆがすた鼠とるべく」

をく 一屋 (名) 一いへ。家屋。や。易經上經、豐「其屋(ヲク)其家」二やね。詩經國風「誰謂雀無角、何以穿我屋」

をく 招 (他動) 招きよす。よびよす。招く。記上「其邊岐(ヲク)斯八尺勾璁鏡及草那藝劍」萬十「さならべる鷹はなけむと中略呼久(ヲク)由のそこになければ」同十「月立ちし日より乎伎(ヲク)つ、うちしぬび待てど來鳴かぬ時鳥かも」招魂(神代紀上)

をく-う 一屋宇 (名) いへ。家屋。舍。後漢書雷義「葺(ヲク)理屋宇」

をく-ぎ 小岫 (名) 〔をは接頭〕くき(岫)に同じ。萬四「武藏野の乎具奇(ヲグキ)が雉子立ち別れ」

をく-くわ 一屋瓦 (名) 屋根に葺きたる瓦。やねがはら。史記趙策「秦軍鼓譟勒兵、武安屋瓦盡振」

をく-ぐわい 一屋外 (名) 家屋其の他の建造物のそと。家のそと。治安警察法第四「屋外に於て公衆を會同し若は多衆運動(ウゴ)せむとするとき」

をくぐわい-かせんはふ 一屋外架線法 (名) 電力傳送及び分配等の爲め電線路を布設する方法。架空式及び地中式の二方式あり。架空式は木製又は鐵製の電柱を地表上相當の高さに立て之に電線を架設するもの、地中式は電線を適當なる裝置により地中に布設するもの。

をく-ぐま 小草 (名) ちひさきくさ。又、草。曾丹集「わがせこがきませりつるか見ぬ程に、夏の小草もかたまよひせり」

をくさ-おひ-ぐさ 小草生月 (名) 〔此の月より小草山野に生ずる義〕陰曆二月の異名。藏玉十二月「二、小草生月。綠なるけに色あさく小草生ふ、月まちえたる武藏野の原」

をく-し 小櫛 (名) 〔小(ヲ)は接頭〕くし、櫛に同じ。萬三「しかのあまはめかれしほ焼きいとまなみ、くしげの小櫛(ヲグシ)とりも見なくに」

をく-しゃ 一屋舍 (名) いへ(家)に同じ。管書王莽「屋舍妾財、悉爲公軍人所」略」

をく-じゃう 一屋上 (名) 屋根の上。朗詠「明月仍在、誰追月光於屋上」楚辭漁父「鳥次兮屋上、水周兮堂下」

(謎)屋上屋を架す 無益の仕事なるに譬ふ。

をく-じゃう-ていゑん 一屋上庭園 (英 Roof garden) (名) 洋館の屋上に造りたる庭。花壇などを設く。

をく-ぜい 一屋稅 (名) 家屋に課する稅金、家屋稅。宋史食貨「奏減城中居民屋稅」

をく-そ 苧屑 (名) 苧(ヲ)のくづ。麻絲のくづ。

をく-そ-づさん 苧屑頭巾 (名) 頭巾(ヅキン)の一種。苧(ヲ)の屑にて製りたる强盜頭巾(ガウタウ)。「苧屑頭巾」

をく-ぢ 尾口 (名) 馬の名所。をぼね(尾骨)に同じ。盛衰記「尾口沈まば前輪にすがれ」

をく-ぢら 雄鯨 (名) 鯨のをす。

をく-つ 麻沓 (名) 麻にてつくりたる草鞋。總嶋を踏むに適したるを以て、後世軍用に充つ。いはぐつ。字鏡「麻鞋(ヲク)和名抄「麻鞋(ヲク)久」

をくづ-づさん 苧屑頭巾 (名) をくそづさん(苧屑頭巾)をいふ、北國の方言。

をくな 童男 (名) をのわらは。男の子。男兒。記上「當時童男(ヲグナ)」景行紀「日本童男(ヲグナ)」

をく-ない 一屋內 (名) 家屋其の他の建造物の內部。家の內。治安警察法第八「屋內の集會」

をく-に 小國 (名) 一小さきくに。せうこく。二〔をは接頭〕くに(國)に同じ。萬十「こもりくのはつせ小國(ヲグニ)によばひせす」

をく-はい 一屋背 (名) 一屋根の上。やねのむね。陸游詩「北風卷野天聲晦、雨如(ヲ)弩譏一穿屋背」二家の後。

をく-へさき 尙書初出「于屋壁(ヲク)折散絕」

をく-ま 牡熊 (名) をのくま。雄のくま。字津保俊蔭「めぐま・をぐま、子をうみつれて棲むうつぼなりけり」

をく-ら 小倉 (名) 一次條の略。二をぐらじるこ(小倉汁粉)の略。

をぐら-かん 小倉羹 (名) 小豆又は隱元豆などの粒を交じへたるねり羊羹。をぐら。

をぐら-とぼん 小倉小判 (名) 小田原藩小判の一。其の重量四匁三分の銀貨。

をぐら-さ 小暗 (名) をぐらきさま。をぐらき度合。

をぐら-し 小暗 (形ク) 少しくらし。うすぐらし。ほのぐらし。源宿木「山のかたをぐらくて、なにのあやめもみえぬに」

をぐら-じるこ 小倉汁粉 (名) 白留の汁粉の中に、小豆又は隱元豆を粒のまま入れたるもの。

をぐらす 小暗 (他動) かきくらす。くらます。源蜻蛉「かきくもり日かげも見えぬおく山に、心をぐらすところにもあるかな」和泉式部物語「をぐらし給ふに心うきとて」

をぐら-の-しきし 小倉色紙 (名) 藤原定家が、山城の小倉の山莊にて、百人各一首づつの和歌を色紙に書きたるもの。

をぐら-をどり 小倉踊 (名) 小唄の一。絲竹初心集「小倉踊の引きやう」

をぐり-の-いた 緒繰板 (名) つぼいた(壺板)に同じ。幸若舞曲高館「たかのの四郎がこまひっそばめて中略馬手のはいだて・をくりのいた」

をぐり-は 小栗派 (名) 繪畫の一派。丹波國の人、小栗宗丹(ニ)の創めたるもの。

をく-りゃう 一屋梁 (名) 家のうだつ。家のはり。晉書嵇紹「有野鷹、飛集屋梁」

をぐる (他動) しかる(叱)をいふ、肥後の方言。物類呼稱

をく-ぐるま 小車 (名) 一小さき車。長秋記保延元年三月廿日「東門置宮御料遊具等」中略「有小車、作馬等類也」二(をは接頭)くるま(車)に同じ。風雅舞樂法のため我が身を變へば小車の、浮世にめぐる道や絕えなん」

をく-ぐるま 旋覆花 (名) 〔植〕菊科、旋覆花屬の多年生草本。高さ二三尺に達す。葉は披針形にして、緣邊に小鋸齒を具へ、互生す。花は黃色、頭狀花序に排列し、周圍の花は舌狀花冠を具へ、中部の花は筒狀花冠を具ふ。我が國、原野に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。のぐるま。

をぐるま-の-にしき 小車錦 (名) 小車の形をちがへて丸にしたる文を織れる錦。黑地に黃絲にて車を織りたると黃地に黑絲にて車を織りたるとあり。伊勢大神宮の御衣には、この錦を用ふといふ。新千載雜歌「君が代に又めぐりあふ小車の、にしきぞ神の手向けなりける」

をく-ぐるみ 雄胡桃 (名) 〔植〕おにぐるみ(山胡桃)の異名。

をく-ぐろ 小畔 (名) 小さきくろ。又、くろ。夫木「ひまもあらばをぐろにたてるあをさぎの、こまごまとこそいはまほしけれ」散木集「山里ははれせぬ霧のいぶせきに、をだのをぐろに鶉なくなり」

をく-ぐろ 小黑 (名) 色の黑きこと。萬十「ぬはたまの飛騨の大黑見るごとに、こせの小黑(ヲグロ)し思ほゆるかも」月詣集春「群れてはむ遠里小野の春駒の、をぐろにまかふをきの燒け原」

をく-ろう 一屋漏 一家の西北隅の稱。又、轉じて人の見ぬ處。爾雅釋宮「西北隅謂之屋漏」二雨の、屋根よりもり入ること。やもり。あまもり。

(諺)屋漏に愧ぢず 人の居らざる處に在りても、行ひを愼みて恥づることなし。詩經大雅「相(ミ)在爾室、尙不愧于屋漏」

をく-け 麻筒 (名) 麻をうみて納るわげ物。をこけ。貌詞式「敷田馬、金鼎麻筒(ヲケ)・金鼎樽」萬十「あさをらを遠家(ヲケ)にふすきにうまずとも、あすきせざめやいざせをどこに」筒(ヒラ)

をく-け 桶 (名) 〔前條の轉〕杉又は椹(ヲケ)などの細長の板をならべ合せて側(ガハ)とし、箍にて締めたる圓形の器。和名抄「桶、平釜汲(ミ)水於井器也」檜垣集「手づから水汲むきはになりて、をけひき提げて出づるにしも」こが上四下、樂訓歌「とうど常陸かい豊後佐賀そう長崎物類稱呼」

をけ-がは 桶側 (名) 桶の側(ガハ)の板。

をけがはどう 桶側胴 (名) 鎧の胴の制の一種。かなどう(金胴)に同じ。幸若舞曲高館「くろがねを厚さ五分にきたはせたるを、をけがはどうと名づけ」

をけがはどう-の-よろひ 桶側胴鎧 (名) 桶側胴に袖と草摺とを著けたるもの。

をけ-じり 桶尻 (名) 船の艫(ヘモ)の端。戶立(ヒタテ)の付く處。をけぞこ。

をけ-ぞこ 桶底 (名) 一桶のそこ。二前條に同じ。

をけ-だいく 桶大工 (名) をけや、桶屋に同じ。德川禁令考四十五、享保「桶大工共江札渡之儀町觸」

をけつ 一惡血 (名) 病によりて變じたる血。病毒を含みたる血。あくち。くろち。

をけっこう (名) 〔動〕をこっけい(烏骨雞)の訛。

をけ-つぼ (名) 〔笹〕あくしばの異名。

をけ-どう 桶胴 (名) をけがはどう(桶側胴)に同じ。大友興廢記「桶胴の鎧著たる早り雄の若武者」

をけ-とり 桶取 (名) 壬生狂言に用ひたる假面(ノ)の一。滑稽雜談「此の俳優に用ひる假面、佛工定朝が作三面あり、所謂俳優の名目、猿・桶取等の面を第一とす」

をけ-ねだん 一桶直段 (名) 帳合米取引にて取引當日の最終の値段。即ち、上水(ジヤウ)が水を撒布せる時より、其の水桶を俯伏にするまでの間に定まれる値段の稱。うはみづ(上水)を見よ。

をけ-はな (名) 〔植〕かんあふひ(杜衡)の異名。

をけ-ばん 麻筒盤 (名) 桶の如き盤なるべし。內膳寮式年料「麻筒盤十二口四口鹽二料、八口鹽三料、製太醬二料」

をけ-び 桶火 (名) 火桶の火。和泉式部續集「むかひゐて見るにも悲し、烟りにし人ををけびの灰によそへて」

をけ-ぶせ 桶伏 (名) 一桶をかぶせ置くこと。二遊里の詞。古へ、揚錢を拂ふことの出來ぬ者に、入湯用の桶を打ちかぶせ、强制して、其の仕拂ひをうけあはしめしこと。吾嬬物語「やかれつつ金のある程とられんぼ、後は必ず桶ぶせと知れ」

をけ-ぶね 桶船 (名) 肥料を汲み集め置く桶を載せたる船。どをけぶね。

をけ-ぶろ 桶風呂 (名) 橢圓形の浴槽。

をけ-むじん 桶無盡 (名) 江戸の湯屋にて、每年十月廿日前に留桶を新調し、其の費用の寄付を留湯の客に仰ぐこと。

をけもの 牡 (名) をすのけもの。和名抄「牡(ヲケモノ)」

をけ-や 桶屋 (名) 桶・井戶側などを作り又修繕するを業とする人。又、其の家。雍州府志七、土產「桶屋中略在堀河一條南、大小桶無不有之」用明天皇職人鑑「人間がらぬ木竹ねぢまげて締めて底いを月ぞすむ、桶屋が妻」桶匠。

をけ-やく 桶屋役 (名) 江戶時代、桶屋に課せし役錢。地方凡例錄「桶屋役、是れも大工役同然なれども、職之上中下無差別、一人何程と極り相納む」

をけ-ゆひ 桶結 (名) 桶をゆふ人。桶をつくる人。をけや。醒醉笑「桶結ありしが」用明天皇職人鑑「桶ゆひの久馬平」

をけら 蒼朮 (名) 〔植〕菊科、蒼朮屬の多年生草本。高さ二三尺に達す。下部は木質。葉は楕圓形の單葉なるか又は深く三裂し、或ひは三箇乃至五箇の小葉より成る複葉にして、互生す。花は白色或ひは淡紅色の筒狀花冠を有し、頭狀花序に排列す。總苞は葉狀にして覆瓦狀に排列

し、魚骨・肉の業に関まる。我が国・山野に住す。穢を食用に供し、又故かしたるあかをけらつけら。けらけらがは「けら」。えそみこそ。さきいそ。和名抄「虎魚カ」

そけら　白朮（名）【植】びゃくじゅつ（白朮）の異名。天武紀「白朮ヲ」字鏡「白朮ハ」

そけら-の-おおい　蒼朮餅（名）のの朮の餅・つくみの鳥など鶏を茶り、卯餅の卯餅を「蒼朮」尾張・清洲。

（**蒼**）**蒼朮の蒼名は高麗に出おす**　蒼朮の高名はなすてから。保元・平治物語「高麗」

そこ-ひ-ろ-ら　底ひ（名）の高名は公に出おす」

そこ-ひ-ろ-ら（自動）〔小屋（ごや）の義なるべし〕草木などしげりゆく。次第に茂る。

そこ-ひ-がま-し　痴（形）❶おろかなるけたり。愚者・愚人なり。あはかしし。たはけたり。愚者・愚人なり。愚者・愚人なり。「そこひがましき」「そこひがましき」「そこひがましき」「そこひがましき」「そこひがましき」❷きまりなく、ものすごきなり。きわしらなり。こしゃくなり。

そこ-ひ-がま-しげ　痴気（形動）をこがましきまでなり。愚者・愚人なり。「そこひがましげに思ひて」

そこ-ひ-がま-しさ　痴（名）をこがましきまでなり。

そこ-ひ-がる　痴（他動）をこに思ふ。をこがましがる。字鏡「痴ヲ」「聞く男ども、をこがりあきけりて」

そこ-ひけ　麻小苧（名）をけ（麻苧）に同じ。月令広義「麻小苧ヲ」字鏡「麻ハ麻小苧ヲ」

そこ-ひ-ぞ　小琴（名）ちひさき琴。又、琴を略にいふ。「琴ハ琴ノ略ニ用ヒル」

そこ-ひ-ぞ-ま　絡小柿（名）手品の一種。茶道の内に入れて身を隠しなどする茶に茶・茶道・茶利・茶・茶・茶

ぐさ屬の多年生草本。高さ七八寸内外に達す。葉は羽狀複葉にして、短き莖に簇生す。花は晝開より出でたる花莖に總狀に排列し、小形白色の花瓣を有す。我が國、高山に自生し、又、觀賞用に供せらる。

をさ-びゃくしゃう 長百姓 (名) 一くみがしら(組頭)の異稱。地方凡例錄「村役人の唱へ之義、關東方にては名主・組頭と云ひ中略又庄屋・長百姓と云ふ處もあり」二其の村の内の高持ち、若しくは其の村の創設の際より在住の百姓、又は當時零落して小高になりたるも其の村にて頭立ちたる百姓の稱。地方凡例錄「村役人の唱へ、元來長百姓と云ふは、上方・關東・遠國とも、一村の内高持、又は其村開基の節より之百姓、當時零落して小高に成りたる者にても、頭立ちたる百姓を長百姓と唱へ、村役人にてはなし」

をさ-ふね 長船 (名) 備前國長船村に住する鍛工の打てる刀劍の稱。一條帝の頃の人、正恒を祖とす。名品多し。大句數上今が最後備州長船ふり上げて」

をさ-ふねうち 長船打 (名) 備前國長船村の鍛工の打ちたるもの。太平記「長船打ちの鎌の五分整程なる、菅本迄中子を打ち徹しにしてねぢすげ」

をさ-まり 治 (名) 平穩になること。

をさ-まり 納 收 (名) 一をさまること。二かたづくこと。落著すること。終はり。終結。甲陽軍鑑「晴信なればこそ芝居をふまへ、をさまりには敵の押付をみ給ひ候」

をさ-まる 修 (自動ヰ) 行狀など正しくなる。ととのふ。備はる。「身をさまる」

をさまる 治 (自動ヰ) 一おだやかに定まる。平穩になる。安泰になる。雄略紀「百姓艾安ヲサヤカニ、四夷賓服」金葉集「松風の雄琴の里にかよふにぞ、をさまれる世の聲は聞こゆる」二苦痛いゆ。しづまる。おちつく。落窪「いみじく痛き程は起きておきへたるなん、少しをさまる心ちする」源氏物語狂言綺語「大きなる狐矢先に中つて死すれば、君の御惱も治まらせ給ふ」

をさ-まる 收 納 (自動ヰ) 一手に入る。「年貢をさまる」「多人數一室にをさまる」三きちんとはまる。當て嵌まる。「刀、鞘にをさまる」四事がむ。かたづく。をはる。まとまる。落著す。「議論をさまる」五消ゆ。なくなる。源氏物語「月は有あけにて光をさまれるものから、かげさやかに見えて」同柏木「いと忍びがたければ、あまりにをさまらず、亂れ落つる涙こそはしたなけれ」六息を引きとる。死ぬ。

をさむ 修 (他動ヰ) 一ととのへ正す。整理す。二かざりつくろふ。修飾す。三學ぶ。習ふ。研究す。四繕ふ。修復す。

をさむ 收 藏 納 (他動ヰ) 一取り入れる。取り上げる。受け入る。神功紀「參鹽バ土物」天武紀上「沒官ヲ收」狂言八句「それほどにおしやるならば納めて置かう」二しまひおく。かくす。入れおく。藏す。萬「わがもこが赤裳ひづちて植ゑし田を、刈りて藏ム」むくらなしのはま」夫木「鶯のねぐらに夜はをさめたる、聲朝な朝なはこび出づなり」同「春も過ぎ夏たけぬれど氷室山、冬ををさめておけるなりけり」拾遺三をさめいる。納る。支拂ふ。拂ひ込む。納入す。「租稅ををさむ」「利子ををさむ」四しまふ。終ふ。かたづく。果つ。五葬る。神代紀上「葬ヲ筑紫日向可愛山陵ニ」源氏物語「限りあれば、例の作法にをさめまつるを」

をさむ 治 (他動ヰ) 一おだやかに定む。平定す。鎭む。萬廿「あまさかるひなを平佐平流ムますらをや」二統治す。まつりごつ。すべる。神代紀上「理ヲサメ、此國ヲ唯吾一身而已」萬「眞木柱太高しきて、食國を收ヲサメ賜へば」三いとなむ。經營す。神武紀「披ヲ拂山林、經營ヲサメ宮室」四いやす。治療す。神代紀上「定ヲ其療ヲサメ病之方」五身に引き受けて處分す。處理す。記「若此御子矣、天皇之御子所思看者、可ヲ治ヲサメ賜ヘ」續紀「弱兒ヲ養治事乃如久治ヲサメ賜ヒ」

をさ-むし 歩行蟲 (名) 【動】昆蟲類中、鞘翅類の一種。觸角は十一節にして、絲狀をなし、頭部を突出し、眼は中大にして餘り突起せず。食肉性にして、農家に有益なるもの多し。晝間は塵芥の下に隱れ、夜に至りて他蟲を暴食す。又、路傍を疾行し、田圃の畦間・畦上を横行することもあり。營喩抄三「本「百足ムカデ」

をさむる-つかさ 治部省 (名) ぢぶしやう(治部省)の異。和名「治部省ヲサムルツカサ」

をさめ 治 納 (名) をさむること。終ふること。をはり。狂言鶴太郎「納めにも一つ飲ましませ。それならも一つ飲うでをさめに致さう」

をさめ の さかづき 納盃 なふはい (納盃)に同じ。

をさめ 長女 (名) 老女。たうめ。又、官女の卑きものにて、局の世話などする者。和名三專。日本紀私記、專領二字讀太宰女平佐女」宇津保嵯峨院「我れら如何なれば、宮のをさめ・みかやうどのしりに立つらんり腹立つ」

をさめ-がほ 納顏 (名) すましたるかほつき。まじめなるかほつき。浦島年代記「睡たい事やと空嘸けの大欠伸、ああ納め顏見たくない」

をさめくるつかさ 修理職 (名) 一しゅりしき(修理職)に同じ。和名「修理職ヲサメクルツカサ」二しゅりのだいぶ(修理大夫)に同じ。玉葉建久元年「左大將云、修理大夫訓讀如何、答云、北山之所注作納むる官也、見貴仲記也、仍召云、修理大夫ヲサメクルツカサ」

をさめ-ど 納戸 (名) 【次條の略なるべし。伊勢・眞丈】物を納め置く所。鎌倉年中行事「御納戸も三間也」

をさめ-どの 納殿 (名) 一金銀・衣服・調度等を納め置く所。後世の納戸の類。源頼朝「みくらまち・をさめどのなどいふ事まで」二禁中にて、累代の御物を納め置く所。西宮記「納殿、累代御物納ヲ之」

をさめどの-ぶぎやう 納殿奉行 (名) 鎌倉幕府の諸奉行の一。納殿の納殿を管して衣服・什器の出納を掌るもの。東鑑脫漏建暦三年「納殿造畢之後、今日始而御物等被納之、後藤左衞門尉基綱爲奉行」

をさめ-の-ます 納枡 (名) 年貢米などを納むる時に用ふる枡。古文零藁八「山田金田西寺寺領三年、納斗ヲサメ枡ニ、一合六勺ヲ、內ヲ增減分」安東郡事當沙汰文「在地御倉付之時、御料納之升勢寸法事」

をさめ-ぶだ 納札 (名) 一江戸幕府の金藏又は淺草の米廩に納めたる金米に對して、金奉行又は藏奉行より渡す請取書。地方凡例錄「米は淺草御藏へ納め、御藏奉行より納札渡る」納札と云ふは、其の内納めたる伏數を小書に書く、右は同之方數を書切渡す、是れを納札と云ふ、從前代官等、其數に書切渡す、是れを納札と云ふ、從前代官等、納めたる金之納札」

札、同書卷之行德山記に同書之」二なふさつ(納札)に同じ。

をさめ-もの 納物 (名) 一上に納むる物品。又、租稅。仁德紀「輕減薄斂ヲサメ」二神社・佛閣等に奉納するもの。

をさめ-やど 納宿 (名) ふださし(札差)に同じ。淺草米廩奮例「納宿骨折給被下之儀、御尋に付奉申上候」

をさめる 治 (他動下) をさむ(治)の口語。

をさめる 納 (他動下) をさむ(納)の口語。

をさ-ゆづる 儲弦 設弦 (名) うさゆづる(設弦)に同じ。神功紀「武內宿禰中號令曰、各以儲弦ヲサユヅル藏于掌中」

をさ-ゑぼし (名) たてゑぼし(立烏帽子)なるべしと。下文を見よ。古今要覽稿「をさゑぼしとは、此の名義いまだ詳ならず、或曰、立ゑぼしの事なるべき歟、其の故は立ゑぼしは烏帽子第一なれば、をさなるといふ意にて、時にとりて立ゑぼしを、をさゑぼしと名付けしなるべし」

をさ-をさ 小棹 (名) (をさは接頭)さを(竿)に同じ。萬「玉まきの小棹ヲサもがも」

をさ-をさ (副) 大方。大抵。あまり。まんざら。下に打消しの語を添ふ。萬「やのねにをさぎねらはり、乎佐乎佐ヲサもねなへ故に母にころはえ」宇津保俊蔭「そこにゐて物の給へど、をさをさいらへもせず」

をさ-をさし 長長 (形ニ) 一立ち優りたり。かひがひし。はかばかし。さかし。成務紀「取ヲ當國之幹了ヲサヲサシ者、任ヲ其國郡之首長」勢語「まだ若ければ文もをさをさしからず、詞もいひしらず」宇鏡「了事乎佐乎之」軌範「明瞭」正訓「おとなびたり。おとならし。おとなし。枕「のさうぞく麗しくて、今日は一人づつをさをさしく乘りたる」宇鏡集「號長同ヲサヲサシ」

をさ-をさ-さしげ 長長氣 (副) をさをさしさう。をさをさしきやう。

をさ-をさ-さし-さ 長長 (名) をさをさしきさま。をさをさしき度合。散木集「稍もなびやかに草むらもよしばみて、主のをさをさしさもあらはれ」

をし 食 (名) 一のみくひすること。飲食すること。のみくひ。いんしよく。しよくじ。神代紀上「且當飲食ヲシ」二景行紀「北小島而進食ヲシ」三鷹の餌。

をし する 鷹に餌を飼ふ。

をし 鴛鴦 (名) 【動】をしどり(鴛鴦)の略。孝德紀「山川に鳥志ヲシ二つ居てたぐひよく、たぐへるいもを誰れかねにけむ」萬「乎之ヲシの住む君が此の島今日見れば、あしびの花も咲きにけるかも」和名「鴛鴦乎之ヲシ雌雄未分雄相隨、人得其一、則一思而死、故名匹鳥也」

をし の くつ 鴛鴦香 鴛鴦の水上に浮びたる姿の、香に似たるよりいふと。俗語記「玉海集「をしの香や張良ならで流れ足」

をし の ふすま 鴛鴦衾 鴛鴦を綴ひものにして、或は畫きたる衾。鴛鴦は雌雄仲よきものなれば、男女共寢の事に譬へてもいふ。新六帖「涼しもさこそさゆらめ鳴くをしの、ふすまだに猶閨寒き夜に」

をし 愛 (形ニ) いつくし。愛ヅベし。

をし 惜 (形ニ) 一愛ヅでて手離し難し。思ひ切れず。捨て難し。萬「吾が命は惜雲ヲシあらずさにつらふ君によりてぞなかくはりせし」枕「命よりは膠りてをしかるべきことを」著聞集「しきりに請ひけるを、汝がほしう思ふ程に我れはをしう思らぞ」二殘りをしむ。くやむべし。殘念なり。萬「ま玉つくをちの菅原吾が刈らず、人の刈らまく惜ヲシ菅原」三ほし。望まし。拾遺「忘らるる身をば思はず誓ひてし、人の命の惜しくもあるかな」續古今「手折りつる花橘に香をしめて、我が手枕に惜しき袖かな」

をし けども をしけれどもの約。萬「白妙の袖の別れは離惜ヲシケドも、思ひ侃れてゆるしつるかも」

をし-か 牡鹿 (名) をすの鹿。さをしか。仁德紀「牡鹿ヲシカ謂牝鹿曰」萬「たかまどの秋野の上の朝霧、妻よぶ乎之可ヲシ」いでたつらむか」雄鹿記下

をし-かい-どり (名) 【動】にはとり(雞)をいふ。山城國山崎の方言。

をし-かは 韋 (名) もみかは(揉皮)に同じ。仁德紀「以韋ヲシカハ鞦、著其足」和名「韋乎之加波柔皮也」

をし-かも (名) 【動】をし(鴛鴦)の異名。夫木「心せよ霰をしきてをしかもの、しばしまどろむきしの白浪」

をし-がる 惜 (他動ヰ) 一片木ヘにて作れる角盆にて、食器を載する具。脚あるものを足打ヲシガル折敷といふ。拾遺「名くちばいるのをしき」源氏物語「淺香のをしき二つばかりして、果物・盃ばかりさし出で給へり」二(動)灰條の略。

をし-さうを 折敷魚 (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種。體の長さ三四寸にして、鱗細かく腹少しく赤し。淡水產にして、近江の琵琶湖に多し。鮒。

をし-ぐさ 遠志草 (名) 【植】ひめはぎ(遠志)の異名。

をし-ぐつ 鴛香 (名) (鴛鴦の劍羽に似たるよりいふ) 先のそりたる沓。はなたかぐつ。びかうぐつ。はなたか。びかう。

をし-げ 惜氣 (副) をしきさま。をしきやう。古今序「折り取らば惜しげにもあるか櫻花、いざ宿かりて散るまでは見んん」

をし-けし 惜 (形ニ) をし(惜)に同じ。雄略紀「山のへのこしまこ故に人てらふ、馬のやつけは鳴思稽矩ヲシケもなし」萬「わぎもこに戀ふるにあれば、たまきはる短き命も乎之ヲシ家久ケもなし」

をし-さ 惜 (名) をしきさま。をしき度合。新古今秋下「なべて世の惜しさにそへて惜しむかな、秋より後の秋の即りを」

をし-ざめ 韋鮫 (名) 鮫の皮を柔にしたるもの。宗五大草紙「打刀ノ之をしざめ又藍鮫などかけたるは、年寄りたる人は差され候ひし」

をし-だ 綿馬 (名) 【植】水龍骨ヲシダ科、綿馬屬の多年生羊齒植物。葉は一回羽狀複葉にして、大形の鱗毛を具へ、長さ三四尺内外に達し、多數叢生す。小葉は披針形にして、羽狀に分裂し、子囊群は腎臟形にて、葉の下面に生じ、暗褐色の腎臟を有す。我が國、山地に自生す。地下莖を條蟲驅除劑に用ふ。めんば。みやまのめ。めんま。

をし-どり 鴛鴦 (名) 一【動】鳥類中、游禽類の一種。雌雄、其の形狀及び彩色を異にす。雄は頭上に冠毛を有し、羽毛美麗なり。雌は雄より小さく、冠毛なく、色も亦鮮ならず。東方亞細亞・北米に產す。雌雄常に偶居す。をし。萬「磯のうらに常よびきすむ乎之ヲシの、惜しき我が身は君がまにまに」二夫婦の緣めて

る。を左右に分け、弟の上にたすきにかけたもの。

そしどりの 鴛鴦（枕）雄と雌が一緒に寝ることから、夫婦の相愛ふよびきすむ手之行田能ゆ／鴛鴦の雄しき我が身は君がまに手まに」

そしねは 小稲（名）〔「そは」は接頭〕「蘇食稲（そしね）」の略。いね（稲）に同じ。「新嘗祭の時、天皇が自ら新穀を食べられる儀式。」わが田のをしねは今や刈らまし」

そしぶ 教（他動）①なし得るようにさとし導く。導ゆる。「花散らす風のやどりは誰れか知る／我れに教へよ行きて恨みん」和名抄「教」之日」古今下「春に教へよ行きて恨みん」②いましめ。さとす。「訓」「教」字類抄「訓」「教」之」本朝部用訓アリ。名義抄「訓」「教」「教」「教

記「あさぢはら袁陀面(ヲダ)を過ぎて、もも傳ふぬてゆらぐもおきめくらしも」

をたはら 小田原 (名) 一をだはらぢ やうちん(小田原提燈)の略。二をだはら ひやうぎ(小田原評議)の略。

をたはら-あしだ 小田原足駄 (名) 一種の足駄。下文を見よ。東海道名所記「小田原足駄、けやきの丸木履なり」

をたはら-うゐらう 小田原外郎 (名) 相模國小田原にて賣る外郎藥(ガイラウ)。古來、同地の名物。丹波與作(著六)「小田原うゐらう」

をたはら-さきこばんぎん 小田原菊小判銀 (名) 相模國小田原にて、鑄造せる小判銀にて、表に菊の紋あるもの。六種あり、重量四匁又は四匁二分。

をたはら-こばんぎん 小田原小判金 (名) 相模國小田原にて鑄造せる小判金にて、表に小田原座の極印あるもの。重量六匁、品位上。金銀圖錄(ヒ)「相模國小田原小判金」

をたはら-さきこばんぎん 小田原笹小判銀 (名) 相模國小田原にて、鑄造せる小判銀。重量四匁二分五厘、品位中の上。金銀圖錄(ヒ)「相模國小田原笹小判銀」

をたはら-だんがふ 小田原談合 (名) 長引きて決定せざる評議。纏まらずに終はる評定。小田原評議。むじな評定。下文を見よ。關八州古戰錄十七(源本著神)「小田原の本城へ苔みしかば、氏政父子、畑・湯本・石橋・米神へも出張して、防戰を遂ぐべきやの旨、評議せられける處に中略彼れも是れも手を拱き、松田が吻而已を守りて、虚虚と日を送りけるは情なかりし次第なり中略されば其の比關東の俚俗、果敢果敢しからぬ評議をば小田原談合と云ひ觸らして、今の世まで常談に傳へ此の時に起これる事なりとぞ」

をたはら-ぢやうちん 小田原提燈 (名) 一提燈の一種。引き伸ばせば細長き圓筒狀となり、用なき時は小さく折り疊むを得るもの。新編相模國風土記稿(サ)「小田原(ヲダ)土產提燈、俗に小田原挑燈と稱するもの是れなり」二老人の陰莖の一稱。

をたはらうは 小田原鐔 (名) 相模國小田原の住人、正次一派の鐔師の造りたる鐔。

をたはら-はち 小田原鉢 (名) 相模國小田原にて明珍信家の造りたる冑(ヨロイ)。常山紀談(ヒ)「飯沼が冑は小田原鉢中略なり」明珍家系圖「小田原鉢と云ふは、明珍信家相州小田原にて作る冑を云ふ也」

をたはら-ひしこばん 小田原菱小判 (名) 相模國小田原にて鑄造せる金銀貨にて、表に菱形の極印あるもの。金小判は重量三匁三分、摸造のものといふ()、銀小判は重量三匁二分と四匁と四匁三分との三種あり。金銀圖錄(ヒ)「相模國小田原菱小判金、同上銀三品」

をたはら-ひやうぎ 小田原評議 (名) をたはらだんがふ(小田原談合)に同じ。

をたはらひやうぢやう 小田原評定 (名) 前條に同じ。

をたはら-ぶき 小田原葺 (名) こけらぶき(柿葺)に同じ。

をたはら-ぼり 小田原彫 (名) 鎌倉彫に倣ひ、相模國小田原にて製したるもの。鎌倉彫に比し、彫り淺しと。萬寶全書(ヒ)「小田原雕中略物牡丹・菊・唐草、紋大なり、ほりあさし」

をたはら-やう 小田原樣 (名) 後北條氏が相模國小田原城にありて勢ひ盛んなりし頃、其の家臣等に行はれたる特殊の形式又は氣風などの稱。北條五代記(長五)「上下の裝のためやう衣紋のかき中略うに至るまでも、小田原やうとて皆人學べり」

をたひ 小鯛 (名) 小さき鯛。こだひ。曾丹集「をだひ釣るかるもの蜑も春くれば、浦浦ごとに眺めをぞする」

をたま 苧玉 (名) 績苧(ウミ)を玉の如く圓く卷きたるもの。又、をだまき。曾丹集「をだまくりかけて手びきし絲よりも、長しや夏の暮るる待つ間は」相模集「をだまくり葛の裏葉にあらねども、かへらぬ野べはなしとこそ聞け」

をたまき 苧環 (名) 一績麻(ウミ)を、内の空しき圓形に卷きつけたるもの。古今單上「古の賤のをだまき、賤しきもよきも盛りはありしものなり」二枝の無き一種の木と。(狹衣下)「一說、梓・杉・をだまきの形に見立てていふ語。(中略)狹衣下「爲くしみを狹衣与谷深み立つをだまきは我れなれや、思ふ心の朽ちてやみぬる」夫木(ヒ)「朽ちねただ思ひくらぶの山高み、たつをだまきは知る人もなし」三蒸菓子の一。中に餡を入れたる牛皮餡の表面に、蕎麥粉を溶かしたるものにて、緒の如き筋を數多群がらせて附けたるもの。四をだまきむし(苧環蒸)の略。五紋所の名。

(五きまだた)

をたまき-むし 苧環蒸 (名) 茶碗蒸の一種。饅頭又は蕎麥を臺とし、蒲鉾・鳥肉・椎茸などを加へ、解きたる雞卵をかけて蒸したるもの。其の麵類を苧に見立ていふ。

をたまき-さう 樓斗菜 (名) 【植】前條の異名。

をたまき-むし 苧環蒸 (名) 茶碗蒸の一種。饅頭又は蕎麥を臺とし、蒲鉾・鳥肉・椎茸などを加へ、解きたる雞卵をかけて蒸したるもの。其の麵類を苧に見立ていふ。

をたもり 小田守 (名) 田を守る人。たもり。亞機集「これをさ(眼)ふならひよ、小田守のなぐさみぬべき鹿の聲かな」曾我(四郎)「我れを慢して小田守の庵」

をたやみ (名) をだやむこと。をだゆみ。をやみ。武家義理物語(ヒ)「雨ふりつづき中略なかなかをだやみなく」

をたやむ (自動四) をだゆむ(小弛)に同じ。武家義理物語(ヒ)「雨もをだやみて」

をたや-もり 小田屋守 (名) 田の庵を守る人。をだもり。吳竹集「をだや守りとは、田の庵もる人也、ひたと云ふ物を鳴らして鹿を追ふなり」

をたゆみ (名) をだゆむこと。をだやみ。

をたゆむ 小弛 (自動四) 少し、ゆるやかになる。雨など、暫時小降りとなる。をやむ。をだやむ。曾我會稽山(ヒ)「五月雨の一頃りをだゆみて、空さりげなくせいせいと、北斗の光鮮かに晴れ渡れば」

をたより-のかね 緒便金 (名) 兜の緒あてに附くる金物。忍びの緒を掛くる所。

をだ-りう 小田流 (名) 劍術の一派。應安年中、常陸國小田城主なる小田讃岐守孝朝の創めたるもの。武術流祖錄(刀術)「小田流、小田讃岐守孝朝」

をたるき 尾垂木 (名) 枡組(マス)より突出する化粧木。紙上蜃氣(ヒ)「大垂木(オホタルキ)、又云尾垂木(ヲタルキ)」

をたれ 尾垂 (名) 一はなかくし(鼻隱)に同じ。堀川波鼓(ヒ)「門に手をかけて、

柱を傳ひ門ふまへ、をだれより這上って」三ひさし(庇)を云ふ。關西の方言。(俗物類呼)(俗物類呼)商家の暖簾をかくる具。江戸の方言。(俗物類呼)「我が宿に咲ける撫子まひはせむ、ゆめ花散るないや乎知(ヲ)に咲け」

をたんくわ (名) 【植】ぼんでんくわの異名。

をち 復 (名) をつること。初めにかへること。元へもどること。萬(ヒ)「た放れも乎知(ヲ)もかやすき」同(ヒ)「我が宿に咲ける撫子まひはせむ、ゆめ花散るないや乎知(ヲ)に咲け」

をち (名) 【植】あぶらな(蕓薹)の異名。和名(ヒ)「蕓薹乎知」

をち 彼方 遠 (代) 一場所の隔たること。又、その所。あち。かなた。をちかた。古今(戀四)「白雲の八重に重なるをちにても、思はん人に心隔つな」源(椎本)「川よりをち」二時の隔たること。又、その時。昔又は此の後。萬(ヒ)「此の頃は戀ひつつもあらむ、玉櫛笥あけて乎知(ヲ)よりすべなかるべし」拾遺(ヒ)「昨日よりをちを知らず、百歲の春の始めは今日にぞありける」

をち 小父 (名) 一父又は母の兄弟。父、をばの夫。伯父。叔父。孝德紀「輕皇子、殿下之舅(ヲチ)也」和名(ヒ)「伯父(乎知)」同(同)「母之昆弟爲舅(乎知乃)」二おきな。老翁。ちち。神代紀(ヒ)「老翁、此云(ヒ)烏滸(ヲチ)」皇極紀(ヒ)「岩の上に小猿米燒く、米だにもたけて通らせかましの烏賊(ヲチ)」萬(ヒ)、まつがへりしひにてあれかも、さ山田の乎治(ヲチ)が其の日に求めあはずけむ」

(諺)小父が甥の草を刈る 目上の者が目下の者に使はる。物事あべこべなるにいふ。世話盡「伯父が甥の草を刈る」

(諺)小父鴟(ヲチ)鬼千匹むかふ 小舅一人は鬼千匹にむかふに同じ。こじうと(小舅)の條を見よ。世話盡「伯父嫗鬼千匹むかふ」

をち-おや 小父親 (名) 小父は父と同じものなりとして嫁びいふ語。國姓爺後日合戰「勿體なくも叔父親を、忠義にかへぬ不孝の劍」

をち-かた 彼方 (名) をちの方向。あちらの方。遠き方。又、その所。をち。遠方。皇極紀「烏知可拖(カヲチ)のあはぬのきぎしとよもさず、吾れはねしかど人ぞ〻よもす」萬(ヒ)「泊瀨の河の乎知可多(ヲチカタ)、妹らは立たし、この方に吾れは立ちて」

をちかた-どゑ 彼方聲 (名) をち方に聞こゆる聲。遠方にて立つる聲。夫木(ヒ)「大崎のありそのわたり霧こめて、をちかた聲も船よばふなり」

をちかた-なみ 彼方波 (名) をち方にたつ波。遠方より寄せくる波。夫木(ヒ)「泉河涼む此の夜は明けぬらし、遠かた波の岩越ゆる見ゆ」

をちかた-のべ 彼方野邊 (名) をち方にある野。萬(ヒ)「おほなこを彼方野邊(ヲチカタ)に刈るかやの、つかのあひだも吾れ忘れめや」新後撰(春上)「まづ咲ける花とやいはんうち渡す、をち方のべの春の沫雪」

をちかた-びと 彼方人 (名) をち方の人。遠く隔たれる人。あちらに居る人。萬(ヒ)「わが持ちし秋萩咲きぬ、今だにもはひにゆかな越方人(ヲチカタビト)に」古今(戀五)「打ちわたすをちかた人にもの申す我れ、其のそこに白く咲けるは何の花ぞも」

をちかた-ぶね 彼方船 (名) をち方の船に居る船。續撰吟抄「友よばふをちかた舟の末こえて、月に浮かるる宇治の里人」

をちかた-め 彼方目 (名) をち方を見る如き目。即ち、すがめ。字鏡(ヒ)「眇(須加目)、又乎知加目」

をち-かへる 復返 (自動四) 復(ヲ)ちにかへる。をつ。元へかへる。萬(ヒ)「いはつなのまた變者反(ヲチカヘル)の釧」青丹よし奈良の都を又見なむかも」拾遺(ヒ)「杜鵑をちかへりなけ、うなゐこが打垂髮の五月雨の空」

をち-さ 小父貴 (名) 〔小父君の略〕小父(ヲチ)の尊稱。

をち-ど 小父御 (名) 小父(ヲチ)の尊稱。狂言(鬼)「をちど樣の方から、栗田口の書が來たは」

をちどく 男地獄 (名) をとこぢごく(男の獄)に同じ。

をち-こち 彼方此方 (代) 一をちとこちと。かたこたな。かしここ。そちこち。そこらあたり。遠近。萬(ヒ)「いもも若き子どもは、乎知許知(ヲチコチ)に騷ぎ泣くらむ」古今(春上)「をちこちのたづも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼ぶ子鳥かな」二そちとこちと。そこととここと。別別の場所。曾丹集「天の原をちこちにすむ棚機も、わがごとや物や思ふらんかも」三隔たる時と今と。昔、又は此の後と今と。過去又は未來と現在と。萬(ヒ)「ま玉づく彼此(ヲチコチ)兼ねてことはいへど、あひて後こそ悔いはありといへ」同(ヒ)「ま玉づく越乞(コチ)兼ねて結びつる、吾が下紐の解くる日あらめや」

をち-こち-びと 彼方此方人 (名) をちこちの人。そちこちの人。他郷又は近邊の人。勢語「信濃なる淺間のたけに立つ烟、をちこち(かた)人の見やは咎めぬ」續千載(秋上)「玉鉾の道に行く手のはちぐもみち、をちこち人の折りてかざさむ」

をち-ぢや-ひと 小父人 (名) 小父なる人。をちぢ。狂言(鬼)「身共の伯父ぢや人」櫻陰比事「伯父ぢや人、手形も無い事申されなといふ」

をち-つかた 彼方方 (副) をちの方。以往又は以後。をち。續紀(ヒ)「(大宝元年)「自今以後(ヲチツカタ)」」

をち-と 一越度 一一主朝時代の罪名。關門又は津渡に由らずして間道を行くこと。衛禁律「私度關者、徒一年。謂三關者、攝津長門減二等、餘關各減二等、越度者各加二等」二あやまち。過失。失錯。十訓(ヒ)「人は用意ふかくて中略うちあるふるまひに、越度の出來ぬるは、口をしき事なり」著聞(ヒ)「奉行の越度に候、雜掌が不當不日に沙汰しなほすべく候」三おちめ。失敗。失意。甲陽軍鑑(ヒ)「主君戲(ヲチ)け給ひて、賢人を見知り給はずして崇敬なければ、逃懷ありとても其の君越度の時も心を離さず、そこにて全く賢人と知るべし」

をち-な (名) 【植】あぶらな(蕓薹)の異名。

をち-なく 復鳴 (自動四) 復(ヲ)ちて鳴く。をちかへりて鳴く。撰集抄「杉むらにをちなく子規の初音」

をちなさ (名) をちなきさま。をちなき度合。

をち-なし (形二) 一ををしからず。かよわし。臆病なり。懦弱なり。怯懦なり。雄略紀「性懦弱(ヲチナシ)、緣樹失色」五情無主」欽明紀「敵大、我國微(ヲチナシ)弱」二つたなし。劣れり。拙劣なり。佛足石歌「乎遲奈伎(ヲチナシ)や吾れに劣れる人を多み、わたさんためとうつしまつれり」續紀(ヒ)「弁乃人(中略)謀手遲奈之(ヲチナシ)、我方能久都與久謀天必得天(中略)」

をち-にん 一越任 (名) 飲めば元にかへりて若くなるといふ水。萬(ヒ)「月よみの持てる越水(ヲチニンの誤)いとりきて君にまつりてをちえしむもの」

をち-みづ 復水 (名) 飲めば元にかへりて若くなるといふ水。萬(ヒ)「月よみの持てる越水(ヲチミズの誤)いとりきて君にまつりてをちえしむもの」

をちや-ちぢみ 小千谷縮 (名) ゑちごちぢみ(越後縮)に同じ。主として同國北魚沼郡小千谷地方より產するよりいふ。

をち-や-ひと (名) をちぢやひと(小父

人の略。大鏡狂言「伯父や人に言傳なりともせうものを」

をちよく　をち-をち　一〔汚濁〕をだく（汚濁）に同じ。くだりくだり。條條。件件。神代紀下「故更條條（イヲヂ）而勅之」玉塵「條はをちをちと尚書によんだぞ、それぞれと云ふ心ぞ」

をつ　復（自動）　初めへかへる。もとへもどる。をちかへる。復す。萬一我がさかりいたくくだちぬ、雲にとぶ藥はむともまた遠知（オチ）めやも」祝詞式鎮魂祭「須須伎振遠止美乃水乃彌乎知（オチ）御寶知（オチ）坐」

をつ-かい　一越階　位階の順序を追はず飛び越えて進むこと。盛衰記紀「正四位下に叙す中略もと從五位下なれば已に五階の賞に預かる、勳功の越階、其の例あるに依りてなり」

をつかい はれ て　越階晴　天下晴れて。少しも憚らず。公然と。おほびらに。

をつ-かた　彼方（名）　一をちかた（彼方）に同じ。二をち（彼方）に同じ。名義抄「以往カタ」

をつ-づかひ　尾使（名）　鳥・獣などの、尾を動かしあつかふこと。又、其の樣。日本振袖始「鳥、あの尾使の忙しなさ」

をつ-つかみ　（名）　久しく剃らずして、つかまるる程に毛髪の亂れ生ひたるもの。ざんぎりあたま。古事談「首をつかみと云ふ程に生ひたる法師」宇治拾遺「かしらをつ髪なる法師ども」

をつ-つざ　小續（名）　めしつぎ（飯櫃）に同じ。和訓栞東鑑四十二、建仁四年三月十九日「小續五十前菜五種」

をつ-さやう　一越境　さかひを越ゆること。境八月、越境違亂」運歩色葉「越境キヤウ」

をつさ-やさ　小月燒（名）　長門國豐浦郡小月村より產する陶器。花瓶・茶器等の日用品を主とす。

をづく　（自動）　うくづくに同じ。名義抄「躍ウクヅクヲドル」

をつけ　緒附（名）　釣り的にて、釣り緒をつくるところ。著聞「緒附を射きりて、的土に落ちにけり」

をつけ-はし-て　（副）　をつかいはれて（越階晴）の音便。をつかい（越階の條を見よ。

をつ-けん　一越權　をつけん（越權）に同じ。

をつ-ど　一越期　一期を越すこと。久しきに渉ること。狂歌咄「癌こいふ事を仕出し、さまざま藥を用ふれども落ちず、後には越期になり、日毎におこりしかば」

をつ-ごく　一越獄　獄を越えてのがれ出づること。牢やぶり。牢ぬけ。

をつ-す　越訴（名）　をつそ（越訴）の訛り。

をつ-せき　越關（名）　關道を廻りて關所を越すこと。せきしよやぶり。折たく芝の記下「始め越關の事を知らずといへども、既に其の事をさとりたらんには、すみやかに告訴ふべきに」

をつ-そ　一越祖　佛祖を超越すること。教範の上に出づること。太平記世四「依二山門堂一、宗旨を說く時は、超佛越祖の手段ありといへども」

をつ-そ　一越訴　一正當の順序を經ず、次第を越えて訴へ（出づること。訴ふべき所を越えて、長上に直訴すること。類聚國史七百年八月、弘仁「因幡・伯耆兩國俘囚等、任情入京、越訴小事」類聚三代格「太政官符寛平六年六月廿日」「訴人無錄官司姓名、謀反含寃、越訴、尚非合勘問」二鎌倉・室町時代の訴訟手續の一。前裁判が理由不十分なるに、引付頭人が覆勘に及ばざる時、訴人又は論人が申狀を以て越訴奉行に訴へ出づること。御成敗式目「諸司領家成敗式目及關東御口入、不帶本所舉狀、致二越訴事一」簡禮記「越訴の事。是れは奉行頭人を越え而、上へ訟へを申し上ぐる目安の事也」

をつ-そ-がしら　越訴頭（名）　「引付頭人たるもの、越訴奉行を兼ねるよりいふ」次條に同じ。北條九代記下文永元年「越訴頭、實時・泰盛」

をつ-そ-ぶぎやう　一越訴奉行（名）　鎌倉・室町兩幕府の諸奉行の一。本奉行の裁判遲滯し、或ひは偏頗の處置ある時、控訴せしむる爲めに設けたるもの。關東評定傳二、文永元年「越後守平實時（中略）十月廿五日、北條九代記下、文永元年、宗宣中略永仁元年五月爲二越訴奉行一」

をつち　現（名）　うつつ（現）に同じ。蜻蛉日記「神ながら神さびいますくしみ魂、今の遠都豆（ヅ）に、かくしこそ見る人毎にかけてしぬばめ」

をつつ　尾筒（名）　一馬の尾を包む袋。をぶくろ。二尾のつけ根の圓く脹れたるところ。曾我八、箱根「をづつを手綱に取り」井筒業平河内通「のら犬めと、尾筒を取って引き戻し」

をつつかみ　（名）　をつかみの音便。心集二頭はをつかみと云ふ程おひたる法師」義經記二、法師なれども常にかしら剃らされば、をつかみかしらに生ひたる」

をつと　夫（名）　（男）二人の轉なる、をうとの音便）妻の配偶者。せ。つま。良人。をうと。松風村雨束帶鑑「夫は神にも譬へしものを」とのちやう雜髮（長町物語）

をつと-す　夫をもつ。十訓「人あまた懸想しけれども、夫なくもせで思ひありけるを」

（諺）夫に對して嗔を返すな　すの言には口ごたへすべからず。

（諺）夫の前の見せ硯　簡（ヒ）亭主の前の見せ麻小筒に同じ。ていしゅ（亭主）の條を見よ。

をつと-ぶ　膃肭（名）　【動】をつとせい（膃肭臍）の略。

をつ-ど　一越度　をちど（越度）に同じ。盛衰記九、山門「對決處無二其證一歟、設有二不慮越度一、何及二重科一耶」運歩色葉「越度ヲツド」

をつ-とせい　膃肭臍（名）　【動】おっとせい（膃肭臍）に同じ。

をつ-な　麻綱（名）　麻を綯ひて作りたる綱。あさづな。東鑑十、建久元「東大寺作事總料亭中略東大寺亭、綱事」

をつ-にん　一越任　官の陞遷に、順序を踏まず飛び越えて昇ること。をちにん。

をつ-ねん　一越年　年を越すこと。年を取ること。翌年を迎ふること。太平記六「四位殿「淀八幡に越年して、猶諸國の勢を待ちかねて」

をつねんせい-さらほん　一越年生草本（名）　一植物學上の用語。にねんせいさうほん（二年生草本）の異名。

をつ-ぼ　小壺（名）　つぼざら（壺皿）に同じ。書言節用「小椀ヲツボ」

をつ-め　（名）　（つめは集まりの約と。略解）多くの田舍人の出で集まりて遊ぶこと。萬葉「今の世の人の小集樂ヲツメに出でて、うつつにもおのづますらを鏡と見つも」

をつ-でい　一汚泥　（名）　きたなきどろ。父、そのある所。どぶ。用明天皇職人鑑「玉世筥「濁りにしまぬ白蓮の、汚泥を出でし御容」詩合神籬「齊之地中略土地汚泥」

をつ-ぶ　雄蝶（名）　一をすの蝶。雄性の蝶。二折形の名目。瓶子と銚子と二樣あり。國姓爺後日合戰「瓶ハ三「瓶子の口の雌蝶を下にあふのけ、雄蝶を上にうつむけて」

をつも　彼方面此面（名）　をちの面（モ）と此方の面（モ）と。をちこちの方面。彼のも此のも。萬葉、ふたかみの乎底母許能母（コノモ）に綿さして、あが待つ鷹をいめにつげつも」

をつ-てん　一汚點（名）　一けがれたるほし。汚染せる箇所。しみ。二きず。缺點。「昭代の汚點」

をと　彼方（代）　をち（彼方）に同じ。古事記下「天宮の寳登（ヒ）つはたで、すみかたぶけり」

をと-ぐ　一汚瀆　けがすこと。よごすこと。養蚕犯處罰令「榜標を汚瀆し若は撤去したる者」

をと-こ　男（名）　一人類の男子の、若盛りなるもの。青年又は壯年の男子。壯夫。壯士。（をとめの對）記上「阿那邇夜志、愛袁登古（ヲトコ）」神代紀上「可美少男（ヲトコ）焉少男（ヲトコ）共云云」續紀「少女らに乎止古（ヲトコ）立ち添ひ蹈みならす、西の都はよろづ代の宮」壯子萬「壯（ヲトコ）」二老幼を問はず、男子たる人間。雄性の人類。をのこ。男子。（をんなの對）神代紀上「所以成二此男女一」宇津保俊蔭「女三十人ばかり、をとこ上下合せ百餘人ばかり中略をとこはかちぶりし、上の衣きでに御前へ出でず」前田元服して一人前となりたる男子。十訓「高季が子の未だ童にて年十四なるを召して、藏人所にて俄に男になして」平家三阿波「七歳になられば男になして」四男の子。男兒。子息。をのわらは。源氏賢木「大きおとどの御をとこの十ばかりなる」五雄性のもの。をす。「男犬」「をとこへし」「男ばしら」六妻の配偶者。をっと。つま。良人。土佐日記「よき人のをとこにつきて、下りて住みけるなりけり」和名「夫元字氏、男古」」七まをとこ。情夫。密夫。八男らしき男。ををしき男。男として恥ぢざる男子。丈夫。曾我五「三男と首をきざまるる者が」假名手本忠臣藏「天河屋の儀兵衛は男でござるぞ、子に絆され存ぜぬ事を存じたとは得申さぬ」九男としての面目。男の一分。男の意氣地。「男を上げる」狂言「鬼瓦」胸板などを折られたなどといへば男もならぬ、そなたのを折りかやさねばきかぬ」十在俗の男。出家せざる男子。清輔集「靜蓮入道書をとこにて、同じく出家せんなどいひけるが」十訓「男の身にては敵の陣へ入られじと、愈に頭を剃りて」同下「西行法師、男なりける時」十一奉公する男子。下男。しもべ。薩摩歌「晒らし搗きの女子・男ども」十二男ぶり。男つき。男の容貌。一代男「男もすぐれて、女のすくべき風なり」浮世身持談義「男を作り、衣裳好みして」十三男色。若道。三代男「近き國にはかかる男色もなし。此の上は名にし負ふ花の都人こそゆかしけれと、順禮にはあらぬ男修行の君」

をとこ-す　一男を持つ。夫を持つ。嫁す。大和物語「此の筑紫の女、忍びて男したりけり中略かく男すなりと聞きて」二男らしくす。男の面目を保つ。甲陽軍鑑「是れ迄來たり男をたてん者、本人の歸れと云ふとて戻りて、侍が何方にて男せんや」

をとこ になる　爲男　一男元服して成年となる。一人前の男となる。雅亮裝束抄「をとこになるあひだのこと」二女の、年老いて月經閉鎖す。

をとこ の きれ　男切　男の中の一人。男の端くれ。用明天皇職人鑑「いはずとも御供と望んで軍に立ってこそ、男のきれともいふべけれ」

をとこ の と　男兒　一をのこど。男兒。薩摩歌「金持って來る男の子を養うて」二むすこ。子息。

をとこ の たましひ　男魂　男子の魂魄。

をとこ を　時、刀劍の稱。長町女腹切「男たる身の魂の御刀・脇指」

をとこ を うる　賣男　をとこ氣ある名譽を廣む。任侠を標榜す。

をとこ を とこしらへる　拵男　情夫を持つ。私通す。

をとこ を たつ　斷男　男に接することを止む。男を斷ち物とす。

（諺）男一匹　一人前として毫も恥ぢざる男なること。

（諺）男の我には居屎をたれる　男子の意氣地は善惡ともに貫徹する覺悟あるべし。大倭故事「男の我には居屎をたれるとは、思ひ立ちたる事は善事なるぞとさへ心得たらば、是非共に其の念を通すべきものぞといふ義なり」

（諺）男の心と秋の空　變り易きこと。

（諺）男の目には絲を引け、女の目には鈴をはれ　男の目はきりりと眞直に、女の目はぱっちりとしたるがよし。

（諺）男は氣で寳へ　男は意氣を以て世に立つべし。普世俗談「少しの事はおせおせ、男は氣で食へ（といふ事もあり」

（諺）男は氣でもて　前條に同じ。曾我扇八景「大名とても何のその、男は氣で持つ竹柱」和歌民のかまど「男は氣で持て」

（諺）男は醫儀に餘れ　男子は謙遜の心深かるべし。大倭故事「男は辭儀に餘れ」狂言「今打ち果たすといふに殿といふ事があるもの中略なぜにめといはぬ中略男は辭儀に餘れといふ事がある」

（諺）男は闘（ケン）を跨げば七人の敵あり　男子家を出づれば七人の敵ありに同じ。だんし（男子）の條を見よ。雙蝶經曲輪日記「殊に喧嘩はふり物、男は敷居を踏出すと、七人の敵があるといへば」

（諺）男は七人あてがひ　男は七人までは妻を持ちても苦しからずと。世間用心記「男は七人あてがひとはいはんか」

（諺）男は裸百貫　男子は裸にしても猶百貫の價値あり。雪女五枚羽子板「裸花鄙百貫」

（諺）男は松、女は藤　男は女の頼みとするものなる譬へ。薩摩歌「男は松、女子は藤と元から譬へ、があるげな、松の力で藤も這ふ、男頼みに女も立つ」

（諺）男は妻ながら　男子は其の妻次第にて如何やうとにもなること。榮華物語「男は妻がらなり、いとやんどとなきあたりに參りぬべきなめり」

をとこ-あぶさ　小床（名）　とこ（床）に同じ。萬「きべ人のまだらぶすまに綿さはに、入りなましもの妹が乎抒許（ヲトコ）に」

をとこ-あぶさ　男扇（名）　男持ちの扇。本朝書史「男扇（ヲトコアブサ）」男扇本有二裏面一、今世只本邪之紋色」結之以引二鈴一、有二作法一」

をとこ-あるじ　男主（名）　男のあるじ。男子なる主人。又、をっと。宇治拾遺「男あるじはなくて、妻ばかりありけるが」

をとこ-いでたち　男出立（名）　男にいでたつこと。男の扮裝。をとこでたち。

をとこ-えらみ　男選（名）　好む男を選ぶこと。配偶者たる男を選擇すること。持統天皇歌軍法「男選みのいろ女」日本武尊吾妻鑑「男選みに年長けて、今日まで親のふところ娘」

をとこ-おび　男帶（名）　男子の用ふる帶。角帶・丸は「こ帶。（女帶の對）萬金產業袋「幅二尺五寸、たけ一丈また一丈二尺、帶だけに織出す、二つわり女帶、三つわりにして男帶とす中略男帶に琥珀・みょし・劍子・博多・薩摩・丹後じま」

をとこ-おもひ　男思（名）　男の爲めを

思ふこと。夫を大切にすること。泥細出世雅樂寮「男思ひの女だと、主思ひの男と」

をとこ-おや 男親（名）父おや。父。（女親の対）雅楽寮「少將も餘りなれども、男おやに從ひたるぞとよなといふを、母宮聞き給ひて」

をとこ-すがた 男姿（名）男の人影。日に眩ぞ時に通る男の姿。源松「小令人いふ者は見給ひつつ」

をとこ-がさ 男笠（名）男のかぶる笠。菅笠・銀笠・朝笠・古風な「でん中と云ふ菅笠を川ふ」

をとこ-がざり 男飾（名）男が飾りとするもの。男の身の飾り。天鈿女「内裏でも外面「男飾りの小袖」

をとこ-がた 男方（名）男の男の組。男女と二組。分れたる其の仲間。（女の対）宇津保俊蔭「ふぶの七日の夜、男方おはのみあるじの事どもを、をとこがた・女方おはしましの所にうらふこと仕らまつる」源「男方の遊びにまじりなどして」

をとこ-がた 男形（名）作像の、主としての男に拵ふること。又、その物の（女形の対）雨夜三遍樂「男形中頃大和屏風其其書」

をとこ-がな 男假字（名）男女字も假字。漢字の字音を借りて假字とした字。本書起所、用假字反切義解「雪雅書紀・日本紀所、用假字数多書申定也」

をとこ-がはら 男瓦（名）（瓦）をがはら（瓦）に同じ。宇鏡樂「翼詩」

をとこ-がほ 男顔（名）男らしき顔。男の如き顔つき。作麗源「春駒や男顔なる女の子」

をとこ-がみゆひ 男髪結（名）昔時、男の頭髪を結ふを業とした者。男髪を「男ら、男正しくて、「男相撲」「男相撲」「男はしり」

をとこ-ぐ 男柄（名）男の人が男髪「男結」として「男相撲」「男はしり」

をとこ-ぐ 男氣（名）男らしき氣象。男の氣「男氣」打ち笑ひ」宗鑑日記「酒盛「神八の出入りも「愛なお人の男氣」

をとこ-ぎ 男らしき氣象。男らしき氣象。

をとこ-ぎみ 男君（名）男の尊稱。男のきみ。たち。源「男君のふし給へるは、うづもれて忘れたる」

をとこ-ぎらひ 男嫌（名）❶女の、男に近づくのを嫌ふこと。又、其の女。❷男男のことを、男嫌ひとなすこと。男えらみ。一代女「時女「男嫌ひとなすこと」

をとこ-ぎれ 男切（名）男の切れ。男のはしくれ。男の片影。一代女「勝手見れども、男ぎれも、男ぎれ、男ぎれ、男ぎれ」

をとこ-ぎんだち 男公達（名）男の君達。男君の方。宇津保俊蔭「男の君達二人、此の姫君とおはすれば」

をとこ-ぐさ 男草（名）【植】はぎ（萩）の異名。凝玉集「男草、忘られずまた雷づれ」

をとこ-ぐし 男臭（名）男子に特有な臭。男の手の匂ひ。嘱野「男くさき匂ひ」

をとこ-ぐるひ 男狂（名）女の男に溺れること。女の色狂ひをなすこと。一代男「遊郭おのが心をかせの男ぐるひ」

をとこ-ぐわ 男柄（名）❶男の人が男「男柄」として「男相撲」「男はしり」

❷男に適する品がら。男むきの格好。

をとこ-ざ 男氣（名）男らしき氣象。

をとこ-ざか 男盛（名）男の氣盛。

をとこ-ざかり 男盛（名）❶男の、元氣盛りなる時。壯年。一代男「今男盛り」「二十六の春」壯年「男盛り」❷男の盛りなること。又、其の盛りなる男。

をとこ-ざと 男郷（名）男の住む郷。男の住む郷。

をとこ-ざと 男里（名）男の住む里。

をとこ-ざと 男郷（名）男の住む郷。

をとこ-ざと 男郷（名）男の住む郷。

をとこ-ざと 男郷（名）男の住む郷

榮華物語「をとこ男御子生まれ給へり」

をとこ-みこ 男神子 (名) 男にして神子たるもの。諸祭式男神子の來たり候が、小弓に短冊を付け歌占を引き候が」

をとこみや 男宮 (名) 皇子。をとこみこ。榮華月宴男宮九人、女宮十人ぞおはしける」

をとこみやうが 男冥加 (名) 男に生まれたる冥加。男の事に就きての冥加。德和歌後萬載集雜上「ふき自在ならぬ女子の身の上に、男みやうがのあらせ給へ(や)」

をとこみやうり 男冥利 (名) 男に生まれたる丈のかひあること。男に生まれたる冥利の手前。博多小女郎波枕上「男冥利・商ひ冥利、虚言ござらぬ」

をとこ-むき 男向 (名) 男に適すること。男に似合ふこと。又、そのもの。

をとこ-むすび 男結 (名) 緒の結方の名。右の端を左の下にまはし、更に、右にかへして輪をつくりおき、左のはしをまはして、その輪にひきとほして結ぶもの。垣・やらい等に用ふ。一茶句集「夕顔や男結びの垣に咲く」

をとこめかけ 男妾 (名) 婦人にかかへられて、寢所の伽をなす男。膝栗毛「厄介のない男めかけを抱へたい」

をとこめし 男郎花 (名) 【植】をとこへし(男郎花)の異名。

をとこめしたぎ 男飯焚 (名) 飯焚をする男。新氷代藏「男飯焚のなり上り者」

をとこ-もじ 男文字 (名) 一男の書きたる文字。二男子の用ふる文字。漢字。(女文字の對) 土佐日記「事の心を男文字に、さまをかき出だして」曾我會稽山「男文字に和訓をつけ」

をとこ-もち 男持 (名) 男向きの持ち物。(女持ちの對)

をとこ-ふやう 男模樣 (名) 男むきの模樣。男に適する模樣。三代男「嗅、男模樣の古衣著て」

をとこ-やく 男役 (名) 一男としての役目。男の勤むべき役。男に相應の役。二男らしき役。男役ををしき役。男としてはればれしき役。信長記「小子不肖に候得共、時の仕合せにて男役を勤めたる事三度也。然れども敵を突き留め、首を取りて後夢の如し、其の場に於て目に見る所、朧朧として首尾分明ならず」三をとこがた(男形)に同じ。

をとこ-やくしゃ 男役者 (名) 男の役者。男の俳優。男優。(女役者の對)

をとこ-やさ 男山 (名) やうざん(陽山)に同じ。

をとこやさ-しゅど 男山守護 (名) 山城國石清水の男山八幡宮を警衛することを掌るもの。石清水八幡宮奉行の出で來てより此の職廢せられたり。

をとこ-やまめ 男鰍 (名) をとこやめ(男鰍)に同じ。宇鏡集「鰍男也」

をとこやま-やき 男山燒 (名) 紀伊國有田郡廣莊男山より產する陶器。紀伊續風土記物產十三「文政年中より、在田郡廣莊男山にて燒くものを男山燒といふ」

をとこ-やめめ 男鰍 (名) 妻帶せざる男。男の獨もの、やもを。(女やもめの對) 字鏡「鰍・鰍男也」醒睡笑「さすが男やもめにて送らん由もなければ、重ねて妻を求めおきしに」

(諺)**男やもめに蛆がわく** 男やもめは世話するものなくして汚ならし。

(諺)**男やもめに難魚たかる** 前條に同じ。

をとこ-ゆ 男湯 (名) 湯屋にて男の浴する湯。(女湯の對) 浮世風呂「男湯孤ならず、女湯必ず隣りにあり」

をとこ-よばはり 男呼 (名) 我れこそ男なりと高言すること。壽門松「や生臭い男呼ばはり、おけおけおいてくれ」

をとこ-よもぎ 牡蒿 (名) 【植】菊科、艾屬の多年生草本。高さ二三尺。葉は楔形にて、上部に缺刻を有し、互生す。花はよもぎに酷似すれども、只小形なるを以て區別し得べし。我が國、山野に自生す。からよもぎ。はははぐさ。はまな。

をとこ-らし 男 (形シク) 一男の如くにあり。男子に類す。雪女五枚羽子板「小訛りに訛って、男らしらしやらうぞや」二男として恥ぢず。男子としての氣象あり。ををし。

をとこ-ろくしゃく 男六尺 男陸尺 (名) 女六尺に對して男の六尺、特に女乘物を舁く男の六尺の稱。守貞漫稿後三「女乘物も路次は男陸尺也」

をとこ-ゑ 男繪 (名) 男の姿を書きたる繪。(女繪の對) 榮華根合「この題の心ばへを男繪・女繪とかきたるに」中右記長治元年八月「色紙下繪、左方女繪、右方男繪、皆書歌情・歌」

をとこをとこ-し 男男 (形シク) いかにも男らしし。さも男らし。ををし。四季物語四月「廳の下部のをとこをとこしきよそひ」

をとし 緘威 (名) をどすこと。又、其のをどしたる物。其の綴りたる革・絲等の並べる肌、毛を伏せたる如くなれば、緘毛(ヒゲ)、又略して毛(ケ)とも云ふ。其の種類は、材料によりては絲緘・革緘・絞緘・練貫緘等、綴方によりては荒目(アラメ)・毛引(ケビキ)・素懸(スガケ)・敷目(シキメ)等、色によりては緋緘・小櫻緘・黑革緘・卯花緘・紫下濃緘・萌黃匂緘など種類甚だ多し。平家四宮河原「伊勢武者は皆火緘の鎧きて、宇治の網代にかかりぬるかな」

をとし-ぎぬ 緘衣 (名) 鎧の裏につくる布帛又は革。

をとし-け 緘毛 (名) 鎧の緘の絲。をとし(緘)を見よ。太平記十七「出「戚毛こそよくも候はねども、我れ等が手づから撓め拵へて候物具」

をとし-たつ 緘立 (他動ナ) 緘し仕立つ。立派に緘す。平治「鎧五十領、追ひ様に遣はされけり」

をとし-たてる 緘立 (他動下) 前條の口語。

をとす 緘威 (他動サ) (緒通すの略。一說おどし(威)にて敵を威嚇する義と) 鎧の札(サネ)を革・絲又は布帛にて綴る。小札を綴りて鎧を造る。保元新院御所「膝丸と申すは、牛千頭が膝の皮を取り威したりければ」

をとす-はたで 彼方鰭手 (名) をちの鰭手。はたの鰭手を見よ。記下「大宮の袁登都波多傳(ハタヅタヘ)すみかたぶけり」

をとつ-ひ 一昨日 (名) (遠ザツ)つ日の轉と。(和訓) 昨日の前の日。前前日。萬十一「山のかひそこも見えず、乎登都日(ヲトツヒ)も昨日も今日も雪の降れれば」同四「あし鴨のすだくふる江に、乎等都日(ヲトツヒ)も昨日もありつ」

をとつ-とし 一昨年 (名) (遠ザツ年(トシ)の轉と。(和訓) 昨年の前年。こぞのこぞ。いつさくねん。萬四「前年(ヲトツトシ)のさきつ年より今年まで、戀ふれどなぞも妹にあひがたき」宇津保俊蔭「をととしの秋まゐり給ひにしままに對面せざりつる」

をとつ-とひ 一昨日 (名) をとつひ(一昨日)の轉。役撰四「をととひたん歸りまうでこしかど」枕「きのふ・をととひ・けふなどは」

(誤)**一昨日來い** 不可能の意にて、二度と來る勿れと恥づかしめ、又は追ひ拂ふ意にいふ。

をとこ-ひめ 少姫 (名) をとめ(少女)に同じ。夫木「曇りなき豐の明りに見つるかな、あまつをとひめ舞の袖を」

をとみ 沈澱 (名) をどむこと。よどみ。沈澱。祝詞式(延喜)「須須伎盪遠止美(ヲトミ)乃水乃、彌乎知(ミヲチ)御寢知坐」

をとむ 沈澱 (自動ハ) 水底に沈みとどまる。よどむ。沈澱す。

をとめ 少女 (名) 一小つ女(ヲ)の義。(和訓) 記上「阿那邇夜志、愛袁登賣(ヲトメ)袁」同中「袁登賣(ヲトメ)の床の邊に、我が置きし劍の太刀」二未婚の娘。きむすめ。處女。藻鹽草「をとめ(女)とはいまだ男(オ)せぬ女(メ)を云ふ也(といへり)」未通女。

をとめ 夫妻 (名) をとめと。夫婦。神代紀上「夫婦(ヲトメ)」雄略紀「張(ハリ)夫婦(ヲトメ)四支於本」

をとめ 緒止 緒留 (名) 一をじめ(緒締)に同じ。目覺鯉「蒔絵梨子地の印籠きげ、からのやまとの緒とめして」二りんろく(林鹿)に同じ。

をとめ-ぐさ 少女草 (名) 【植】きく(菊)の異名。少夫草「乙女草。菊也」

をとめ-こ 少女子 (名) をとめなる子。をとめ。萬十「幼婦(ヲトメ)は同じ心に、しまらくもやむ時もなく見なむとぞ思ふ」同十八「人の親の未通女兒(ヲトメ)す惡てもる山邊から、朝なさな通ひし君がこねばかなしも」

をとめ-さう 少女草 (名) 【植】一きく(菊)の異名。二やはたさうの異名。

をとめ-さび (名) ますます少女らしくなること。少女らしきぶり。萬十「少女らが遊等咲佐備(ヲトメサビ)すと、から玉を袂にまかし」政事要略「少女ども筥度綿左備(ヲトメ)すも、からたまをたもとにまきて乎度綿左備(ヲトメ)すも」

をとめ-の-かしら 少女頭 (名) 【植】かやものーの異名。

をとめ-はな 少女花 (名) 秋の草の異名。

をとめ-みこ 少女巫 (名) 少女なる神子。日本武尊吾妻鑑「是れは勢州五十鈴の川上に現れ給ふ天照る神の少女巫女」

をど-やき 尾戸燒 尾土燒 (名) 土佐國土佐郡尾戸より產する陶器。寛永年間、野野村仁清の門人松伯の燒き始めたるもの。茶家醉古樓「土佐、尾土燒元祖松柏、是れを松柏やきと云ふ」尾戸燒物飴識「尾戸燒、凡何形の物にても出來せずといふ事なしとなり、取別き茶碗の類、極めて良なり」

をとり 雄鳥 (名) をすの鳥。をんどり。(めとりの對) 和名「雄(ヲトリ)度」拾遺物名「きじのをとり」

をとり 媒鳥 囮 (名) (招(ヲ)き鳥の義と) 一鳥を捕へんとする時、そを誘ひ寄するために出だしおく鳥。和名「媒鳥(ヲトリ)」類字鏡「囮(媒上同)鳥」二他を釣り寄するために用ふるもの。ゑさ。川中島合戰「母を囮に掛けて、此の勘介を味方に招き取る謀合」

をどり 踊 躍 (名) 一おどること。胸騷ぎすること。曾我「最早や氣遣ひ無けれども、胸のをどりは未だ止まず」二ひよめき。をどりこ。和漢三才圖會「鵲巢兒、腦骨未合、軟而跳動處曰囟門(ヲドリ)」四舞の類。歌曲・音樂に合はせて足踏みならし、種種の身ぶりして舞ふもの。狂言「盆になれば、わかい衆が踊りをせらるる」享保集成絲綸錄三年七月「町町之內に兩踊など致候」

をどり 踊草 (名) 【植】をどりこさう(野芝麻)の異名。

をどり-こ 踊子 (名) 一踊りを演ずる少女。又、をどり手。丹波與作「をどり子寄する笛・鼓」俳諧新選「踊子の夜食に母の給仕かな」二踊りをなすを業とする女。女藝者の類。一代男「遊山遊興に數を盡くしぬ、いまだ踊子舞子といふ者を見ず」俳諧古選「妓を送る。踊子の跡しら波や迎へ舟」三ひよめき。をどり。身體和名集「をどりこ、をどり、をんどり、顱顖」四【動】どぢやう(泥鰌)の異名。もと僧侶の隱語。本草綱目「すっぽんどり、顱顖」

をどり-こさう 踊草 (名) 【植】唇科、野芝麻屬の多年生草本。方莖を有して、高さ一二尺に達す。葉は卵形或ひは心臟形にして尖り、緣邊に粗鋸齒を具へ、長き葉柄を有して對生す。花は白色或ひは帶紫色の唇形花冠を有して葉腋に叢生す。我が國、原野に自生す。こもそうばな。うぐさ。こもそうばな。はみ。

をどり-こ-じる 踊子汁 (名) どぢやうじる(泥鰌汁)に同じ。

をどり-ことば 躍言葉 (名) 同音の語を重ねたる語。主として意味を强むるもの。ちらちら・びかびかの類。

をどり-こむ 躍込 (自動ハ) をどりて內に入る。とびこむ。

をどり-さう 踊草 (名) 【植】をどりこさう(野芝麻)の異名。

をどり-じ 躍字 (名) 熟語にて、同じ字の重なりたるもの。その下の字をゝ・々・〻・〳〵などと略して記す。はゝ・つねゝ・揚々・次第〻等の類。送り字。重ね字。和字大觀鈔下式同字を重ねたるを疊字と云ひ、又重文とも云ふ。和に是れをおくり字と云ひ、又をどり字と云ふ。

をどり-だいこ 踊太鼓 (名) 踊りに合せて打つ太鼓。踊りに用ふる太鼓。又、その音。五人女五十四日の夕ぐれ中藏門前は踊太鼓響きわたりて」

をどり-だいもく 踊題目 (名) 踊りながら唱ふる題目。踊りに合せて唱ふる題目。顱顖「四【動】どぢやう(泥鰌)の異名。もと僧侶の隱語。本草綱目「すっぽんどり、顱顖」

をどり-こえもの 躍越者 (名) 高きものを、飛びこゆる遊戲。異會我「馬ト・かちだち・打物・うで・とり・をどりこえのは、武士のしわざなり」

をどり-こ-ざさう 野芝麻 (名) 【植】唇科、野芝麻屬の多年生草本。方莖を有して、高さ一二尺に達す。葉は卵形或ひは心臟形にして尖り、緣邊に粗鋸齒を具へ、長き葉柄を有して對生す。花は白色或ひは帶紫色の唇形花冠を有して葉腋に叢生す。我が國、原野に自生す。こもそうばな。うぐさ。こもそうばな。はみ。

をどり-こ-じる 踊子汁 (名) どぢやうじる(泥鰌汁)に同じ。

をどり-ことば 躍言葉 (名) 同音の語を重ねたる語。主として意味を强むるもの。ちらちら・びかびかの類。

をどり-こむ 躍込 (自動ハ) をどりて內に入る。とびこむ。

をどり-さう 踊草 (名) 【植】をどりこさう(野芝麻)の異名。

をどり-じ 躍字 (名) 熟語にて、同じ字の重なりたるもの。その下の字をゝ・々・〻・〳〵などと略して記す。はゝ・つねゝ・揚々・次第〻等の類。送り字。重ね字。和字大觀鈔下式同字を重ねたるを疊字と云ひ、又重文とも云ふ。和に是れをおくり字と云ひ、又をどり字と云ふ。

をどり-だいこ 踊太鼓 (名) 踊りに合せて打つ太鼓。踊りに用ふる太鼓。又、その音。五人女五十四日の夕ぐれ中藏門前は踊太鼓響きわたりて」

をどり-だいもく 踊題目 (名) 踊りながら唱ふる題目。踊りに合せて唱ふる

題目。大鏡狂言綺語愚僧も負くる事ではない、踊題目を始めて浮かいてやらう」

をどり-つく 跳附（自動四）跳りあがりて飛びつく。とびつく。宇治拾遺三今一丈ばかりをばをどりつかで、海に落ちいりぬ」

をどり-て 踊手（名）踊りををどる人。太祇句集「踊りても減りし芝居や秋の暮れ」

をどり-てぶり 踊手振（名）踊りの手振。踊る姿。狂言笠三「われにをどれとおしやる、をどりてぶりを見せ参らせう」

をどり-とうろ 踊燈籠（名）いただきどうろ（戴燈籠）に同じ。

をどり-ねんぶつ 踊念佛（名）鼓・かねなどをうち、踊るやうにして念佛を唱ふること。一遍上人に創まりたりといふ。攝津國四天王寺の念佛堂にて、彼岸の中日に行ふもの名あり。空也念佛。狂言記鑑「一遍上人の踊念佛が御座る」老人雜話「或人一遍上人を嘲りて云、踊念佛をなすは佛の踊躍・歡喜といへる心なるべし」

をどり-は 踊場（名）㊀をどる場所。踊りをする所。俳諧新選惣踊り場に遣水ほしく思ひけり」㊁階段中に設けたる足休めの場所。

をどり-ば 雄鳥羽（名）をどりのつばさ。右の方より、左の方へむけておほふといふ。

をどり-ばな 踊花（名）【植】おにのやがら（天麻）の異名。

をどり-ぶ 踊歩（名）踊りをとなる歩合。二重の利子。

をどり-ぶし 踊節（名）踊りに合はする歌などのふし。俳諧新選惣「題目や感に堪へたる踊節」

をどり-ぶね 踊船（名）乗りて踊りをする船。續海道其の頃五間一丸・八間一丸といふ舟有り中略八間一を樂屋にして、九間一を踊舟となす」

をどり-ぶり 踊振（名）踊るそぶり。踊姿。平家女護島「對の浴衣しやんと著た、踊りぶりがゆかしい」

をどり-ぼこ 踊鉾（名）京都祇園祭りに出す矛山車（ほこ）の中の一。尺素往來「祇園御霊會中略處處跳鉾」季瓊日錄「正中六祇園祭禮、北畠跳文（ほこ）、歌舞、加賀舞會御所、舊例也」

をどり-やたい 踊屋臺（名）祭禮などに引き出して、踊りを演ずるための屋臺。蜘蛛の絲卷追加「山王祭礼、昔飾り屋臺をどり屋臺と唱へ、正面に腰掛を置き、毛氈を掛け、女子三人三味線を弾き歌を謠ひ、其の姿は髷の正面に、花かんざしの長きをさし、其をたよりとして、紫絹紅裏手拭やうの長を著たる後見あり、此の屋臺の後に附けて、男或ひは女のはやし方、いづれも銀地の扇の上に、牡丹の花の作り物を附け、皆紅裏の絹の手拭やうの物を縫ひ附けて被り、ありきながらわざをなす」

をどり-ゆかた 踊浴衣（名）盆踊りなどに著る浴衣。永代藏「盆は踊浴衣も拵へ」丹波奥作「美しき踊り浴衣」

をどる 踊躍跳（自動四）㊀人が、手又は足を擧げなどして跳ねぬ。飛び上がる。踊躍す。萬「立ち乎抒利（ヲドリ）足すり叫び」枕「わらはべ中略あやしう（字鏡）をどりてありくものどもの」蹈・跳（字鏡）㊁稍はげしく動搖す。はねあがる。仁德紀「鮑（中略）濟渚汎（ヲドリ）、以遠流」萬「すぎのぬにさ乎朦流（ヲドリ）きぎし、いちじろくれにしもなかなむこもり妻かも」㊂踊り（四）をなす。舞蹈す。狂言愛宕山「雨ごひには、をどりを踊らうの、いや相撲をとらうと」㊃さわぐ。おちつかず。靜まらず。どきどきす。「胸がをどる」㊄をどり歩とな

る。をどり五となる。丹波奥作「借錢の利を、一月に二月をどる松坂越えて」心中二枚繪草紙「我れ等が儲の商ひの、元手も利ぐひの月をどる」

をとをとし 【植】おにのやがら（天麻）の異名。和名「赤筍平上平上之、天加美乃夜加良」遠者似筍有羽、故以名之」

をなが-ざめ 尾長鮫（名）【動】魚類中軟骨類の一種。鮫の一種。體の長さ八尺許り。紡錘狀をなして、口吻短く、口大なり。尾の上葉頗る長く、殆ど體長に同じ。背部は濃青、腹部は灰白色なり。八九月頃、胎生す。なでぶか。

をなが-ざる 尾長猿（名）【動】哺乳類中、猿類の一種。體の長さ一尺五六寸。形貌一般に日本猿に異ならず。尾は著しく長く、顏面及び耳は四肢と共に黑く、背面は美しき褐櫨色にして、腹部は白し。東亞非利加洲の森林中に群棲して、跳躍に巧みなり。果然。

をなが-どり 尾長鳥（名）【動】㊀にはとりの雄鳥の稱。芭蕉句「此の花のあるじ頗なり尾長鳥」一代男「萌黃の薄衣に紅の唐總を附け、尾長鳥の散らし形」㊁ふうてう風鳥の異名。爲忠集「飛びかふにさはるやつらき尾長鳥、しこきておるる松のうは枝」

をなご 女子（名）㊀女の子供。をんなのこ。をんなご。女兒。㊁をんな。をみな。をうな。婦人。婦女。狂言鶴法師「をなごの事やほどに、まだ程遠くは行くまい」娥歌加留多「をなごを見ればびろびろと」

（誹）**をなごは惡性もの** 佛說より出でて、女子の惡しき性質を有するをいふ。娘道成寺「どうでも女子は惡性もの」

をなご-うし 女子牛（名）めうし（女牛）に同じ。天神記「をなご牛とて、けものや」

をなご-おび 女子帶（名）をんなおび（女帶）に同じ。心中刃氷朔日「紺縮子の女子帶」

をなご-ぎ 女子氣（名）次條に同じ。

をなご-ごころ 女子心（名）をんなごころ（女心）に同じ。

をなご-ざかり 女子盛（名）をんなざかり（女盛）に同じ。

をなご-しゅう 女衆（名）㊀をなごだち。をんなだち。婦人がた。㊁下婢。女ども。

をなご-じょたい 女所帶（名）をんなじょたい（女所帶）に同じ。

をなご-だけ 女竹（名）【植】めだけ（山竹）の異名。

をなご-たつ 女子立（名）和船の水押（オシ）の一稱。

をなご-だて 女達（名）女子の俠客。（男達の對）

をなご-ていしゅ 女子亭主（名）女子の主人。女子の家主。をんなあるじ。心中刃氷朔日「女子亭主の譯よし」

をなご-ぶみ 女子文（名）女子よりおくれる手紙の文句。女の手紙。心中萬年草「小舌だるい女文」

をなご-むすび 女子結（名）をんなむすび（女結）に同じ。小町踊「上、春來ては女子むすびか朝氷」

をなご-らし 女子（形三）をんならし（女）に同じ。

をなさかもり 女子牛（名）【植】あせび（椒木）の異名。

をなは 麻繩（名）麻にてなひたる繩。をづな。

をなびそ 女子（名）【動】やくちなは（尾蛇）をいふ。攝津國の方言。

をなぶそ 女子（名）【動】やくちなは（屋蛇）をいふ、播磨國の方言。

をなみ 雄浪 男波（名）浪の一種。女浪（をんなみ）の次に來りて强く打つ浪。（女浪の對）行宗集「鴨島の群れゐて鹿ぐ入江には、おのが羽風にを浪立つらし」萬代「嵐吹く時雨の雨のそばえには、せきのをなみの立つ空もなし」

をなめ 妾（名）をうなめ（妾）に同じ。欽明紀「遂許爲妾（ヲナメ）」

をな-もと 女子（名）魚の名所。うを（魚）を見よ。

をなもみ 菜耳（名）【植】菊科、菜耳屬の一年生草本。高さ四五尺に達す。葉は尖れる卵形にして、缺刻及び鋸齒を有し、互生す。花は單性、雌雄同株、雄花は小形の頭狀花序に排列して、花軸の上部につき、雌花は頭狀花序に排列し、囊狀に結せる總苞内に集まり、此の總苞は外面に刺を有す。我が國、原野に自生す。此の植物の淺出液を收斂藥に用ふ。なみたけ。なもみ。

をならし-へび 尾鳴蛇（名）【動】きやうびた（響尾蛇）の異名。

をなり 養（名）まかなひすること。煮炊きすること。

をなれ 養（名）前條に同じ。宇鏡集「養（ヲナレ）」

をに-じ 雄虹（名）二筋あるにじの中、大なるにじの稱。塵添埃囊抄十五「虹はをにじ、覺はめにじといふ事あれど」

をにふやき 遠敷燒（名）若狹國遠敷郡三宅村より產する陶器。

をぬ 小野（名）をの（小野）に同じ。記「さねさしさがむの寢怒（ヌ）にもゆる火の、ほたかに立ちてとひし君はも」萬「住の江の濱松が根の下ばへて、わが見る乎努（ヲ）の草な刈りそね」

をねこ 男猫（名）をとこの猫。をとこねこ。

をねぢ 雄螺旋（名）螺旋の雌（ぢ）の高く、めねぢの凹み に當て嵌むるやうに作りたるもの。（めねぢの對）

をねつ 惡熱（名）惡寒の後に發する熱氣。

をの 斧（名）木を伐る具。鉞（マサカリ）に似て小なるもの。よき。萬「斧（ヲノ）取りてにぶの檜山の木こりきて、を舟に作り」和名「木工具、斧。兼名苑云、斧（乎末）・鉞（ヲノ）」斧・鉞（字鏡）

をの いる 斧入 斧にて木を伐る。斧にて木を伐り はじむ。蕪村句集「斧入れて香に驚くや冬木立」

をの つまづき 斧躓 工事に障害あること。工事のあやまち。水鏡「たとひよき佛師にあひ給ふとも猶をののつまづきあるべし、よき畫師にあひ給ふともいかでか筆の過ちなからん」

をの 小野（名）（をは接頭）の（野）に同じ。後撰「淺茅生の小野の篠原忍ぶれど、餘りてなどか人の戀しき」

をの-あさおほひ 尾雨覆（名）尾のつけねの毛。猶、あまおほひ（雨覆）を見よ。

をの-うへ 男神（名）【動】鷗の一種。灰色にして羽の端黑く、全身采麗なるもの。和訓栞

をの-かみ 男神（名）男の神（めのかみ）の對）

をのぎ-がさ 小野木笠（名）鐵の笠の稱。下文を見よ。常山紀談「鐵の笠中略」

をの-がさ 小野木笠（名）鐵の笠。

をの-こ 男子（名）（男子の子の義）㊀をとこ。をを。なんし。だんし。（女子の對）萬「鳥が鳴くあづま乎能故（コ）は出でむかひ、か（りみせずて」和名「男子古乃

丈夫也」㊁禁中殿上に奉仕する人。枕「をのこども召せば、藏人忠隆まゐりたるに」增鏡「何にてもをのこども賜はせぬべからん賜物と申させ給ひたるに」㊂奉公する男。しもべ。部屬。侍。宇津保「さざあるをのこども」㊃名の下に附けて親しき目下の者にいふ語。徒然草「又五郎男（コ）を師とするより外の才覺候はじ」

をの-かむなぎ 男巫（名）をかむなぎ（男巫）に同じ。和名「覡乎乃加乃加男祝也」

をの-こ-ど 男子子（名）男の子。男兒。又、をとこ。男子。宇津保「俊蔭」みこ腹にをのこ子一人もたり」宇治拾遺「あはれをのこどにてあらましかば、あふかたき無くてぞあらまし」

をの-こ-はらから 男同胞（名）男の兄弟。源少女「をのこはらからとて近くもよせ侍らねば」

をの-こ-みこ 男子御子（名）男の御子。皇子。源桐壺「玉のをのこみこさへうまれ給ひぬ」

をの-こ-やつこ 男子奴（名）男の奴。下男。僕。孝德紀「奴（ヤツコ）婢」

をの-こ-やめめ 男子鰥（名）をとこやもめ。やもを。名義抄「鰥（ヤモメ）」

をの-こ-わらは 男子童（名）をのわらは（男童）に同じ。宇津保「村島（り）」て、をのこわらは使ひてゐ給（り）」

をの-さんりう 小野三流（名）佛語。小野流の三流。即ち、勸修寺流・安祥寺流・隨心院流の總稱。密門雜抄「東寺十二小野三流（勸修寺流・安祥寺流・隨心院流）」

をの-ずみ 小野炭（名）丹波國小野細川より產する木炭。庭訓往來「小野炭」

をの-のたすけ 尾助（名）たすけ（助）に同じ。猶、たか（鷹）を見よ。

をの-ね （名）【植】まを（苧麻）の異名。

をの-の-え 斧柄（名）斧につきたる柄。和名「柲乎乃乃良、斧柄名也」

をのの-え くつ 斧柄朽（下文の王貫の故事より出ず）暫くと思ふ間に久しく年月を經過す。又、年久しくなる。古今「古里は見しごともあらず、をのの え の朽ちし處ぞ戀ひしかりける」遠異記「晉王貫伐木、至信安郡石室山、見數童子圍棊、與貫一物、如棗核、含之不飢、局未終、斧柯爛盡、既歸、無復時人」

をのの く 戰慄（自動四）おそれてふるふ。ふるふ。わななく。せんりつす。綏靖紀「手脚戰慄（ヲノノク）不能放矢」宇鏡「慴乎久」振怖（漢學）

をのの-みやーりう 小野宮流（名）朝廷の有職家の一派。小野宮實頼の傳へたる禮式・故實を祖述するもの。江次第抄「無記」「小野宮流、貞信公一男攝政實頼公、號小野宮、二男右大臣師輔公號九條殿、公事祕說、出此兩流、小野宮流尤多名賢、佐理・公任・實資・資仲・季仲・通俊其選也」

をの-はじめ 斧始（名）家を作る時、材木に始めて斧を入ること。此の日祝ひをなす。てうなはじめ。東鑑四十七、正嘉元年九月十八日「斧始事終、給祿物」

をの-ふえ 笛（名）せう（簫）に同じ。宇鏡「簫乎乃江」

をの-へ 尾上（名）〔峰（ヲ）の上の約〕山のみね。山のいただき。萬「とのくれの繁き乎乃倍（ヲノ）を、時鳥なきてこゆなり今しくらしも」拾遺「尾上なる松の梢は打ちなびき、波の聲にぞ風も吹きける」

をのへ の しらべ 尾上調 尾上の松風の音。後拾遺五「高砂と高くな言ひそ、昔聞きし尾上の調べまづぞ戀ひしき」

をのまんねんぐさ 小野萬年草 (名) 【植】景天(ベンケイ)科。景天屬の多年生草本。高さ六七寸に達す。莖・葉共に肉質にて多汁。葉は細長くして尖り、淡綠色を呈す。花は黃色にして小形なり。我が國、山野に自生し、又觀賞用として栽培す。たかのつめ。ねなしぐさ。ほそばのまんねんぐさ。

をの-みっぱ 小野密派 (名) 佛語。次條に同じ。元亨釋書「釋仁海傳」元果阿闍梨に悉曇・密學・博錯・綜衆流・醍醐之御、小野之地、海啓密講之席「四來受業之者多、世號小野密派」

をの-りう 小野流 (名) 一佛語。眞言宗の古義派の一。弘法第四世の法孫聖寶の創めたるもの。傳統して仁海に至り、醍醐の小野縣に曼荼羅寺を開き、大に其の流義を鼓吹す。其の居所により世人小野流と呼べり。勸修寺流・安祥寺流・隨心院流及び醍醐流に分かつ。小野密派。二劍術の一派。小野二郎右衛門忠常の創めたるもの。武術流組錄刀術「小野流、小野二郎右衛門忠常」

をの-ろくりう 小野六流 (名) 佛語。小野三流と醍醐三流たる三寶院流・理性院流・金剛王院流との總稱。宥快法印御物語之事「小野六流者、安祥寺・勸修寺・隨心院・理性院・三寶院・金剛王院也」

をの-わらは 男童 (名) 男のこども。男の子。をのわらべ。土佐日記「年九つばかりなるをのわらは」

をの-わらべ 男童 (名) 前條に同じ。和名三「童男、乎乃波良倍」

をのをれ-かんば 斧折 (名) 【植】次條の略。

をのをれ 小野折 (名) 【植】樟木(カシワバ)科、かんば屬の落葉喬木。高さ五十尺內外に達す。葉は尖れる卵形にして、互生す。花は小形、單性、雌雄同株に生ず。果實は乾燥せる多花果なり。我が國、下野國日光、武藏國秩父等に自生す。木材は堅きを以て器具又は薪炭の料に供す。みねばり。

をは 尾羽 (名) 尾と羽と。萬「うちなびく春さり來れば、ささのうれに尾羽(ヲバ)打ちふ[illegible]て鶯鳴くも」

蹠尾羽打ち枯らす おちぶれてみすぼらしき姿となりたるにいふ。若風俗「尾羽を枯らせし浪人者」最明寺殿百人上臈「尾羽打ち枯れ、修行の旅」

をは 小母 (名) 父又は母の姉妹。伯母。叔母をば。宇鏡「姨母(平聲)」宇津保(祭使)「おとどの御をば」姨紀(神代下)姑記(中)

をはぎ (名) 【植】よめな(雞兒腸)の異名なるべし。宇鏡集「莪(ヲバギ)」新六帖「けふはまた雪間のをはぎ摘まませて、野邊の若菜の數や添ふらん」

をばぎ 小母貴 (名) 次條に同じ。

をばぎみ 小母君 (名) をば(小母)の敬稱。源若菜上「まことのをばぎみはただまかせ奉りて、おゆどのの扱ひなどをつかうまつる」

をはこべ 雄繁縷 (名) 【植】みみなぐさ(卷耳)の異名。

をばさま 小母樣 (名) 一をば(小母)の敬稱。狂言(伯耳)「をばさま、內に御座りまするか」二女の髮の、つとの內より別にはみ出だしたる毛。

をはさみ 尾挾 (名) 鞦の馬の尾にあたる所。さんがい(三繫)を見よ。

をばさん 小母樣 (名) 一をばさま(小母樣)の轉。二平長なる他人の妻女を親しみて呼ぶ稱。

をはし 小橋 (名) 小さき橋。又、橋。景行紀「朝霧のみけのさ鳥麻志(ハシ)、まへつ君い渡らすもみけのさ鳥麻志(ハシ)」をはせ(玉莖)の轉。

をはし 玉莖 (名) をはせ(玉莖)に同じ。

をはしがた 玉莖形 (名) をはせがた(玉莖形)に同じ。

をはしき 姥鷸 (名) 【動】鳥類中、涉禽類の一種。鷸の一類。體の長さ一寸二三分、翼の長さ六寸に餘る。背面灰色、腹面白く、嘴・脚共に黑し。冬期、我が國に渡來す。

をはしし 斷 (名) はじし。はぐき。

をばしら 男柱 (名) 櫛の左右兩端の大いなる齒。神代紀上「取櫛津爪樹、率折其雄柱(ヲバシラ)」

をはしり 瞰 (名) こばしり(小走)に同じ。宇鏡「瞰(顧視)」

をはせ 玉莖 (名) はせ。をはし。陰莖。男根。

をはせ-がた 玉莖形 (名) をはせの形狀に擬してつくりたるもの。男根の形。をはしがた。古語拾遺「作男莖形以加之」

をはたぶ (自動) 古語。をはる。死ぬ。仁德紀「自死(ヲハタブ)焉」

をば-ぢゃ-ひと 小母なる人。小母樣。流(狂言)伯母「伯母者人、御座りまするか」

をばな 尾花 (名) 〔花の形、尾に似たるばいふ〕一薄の花。又、芒。萬「たかまどの乎婆奈(ヲバナ)吹き越す秋風に、紐ときあけなただならずとも」古今一「秋の野のをばなにまじり咲く花の、色にや戀ひんあふ由をなみ」二襲の色目の名。花薄の類なるべし。襲束色葉 三秋用ふ。

をばな が そで 尾花袖 尾花の風に吹かれて動くさまの人を招くに似たるより、人の袖に見立てていふ語。伊勢集「人もきぬ尾花が袖に招かれて、いとどあたなる名をや立てなん」

をばな の ねみ 尾花波 尾花の、風のために吹き寄せらるるさまの波の如くに見ゆるにいふ語。金葉「鶉なくまのの入江の濱風に、をばな波よる秋の夕暮」

をばなあしげ 雄花 (名) 雄蕊のみある花。

をばなあしげ 尾花葦毛 (名) 馬の毛色。あしはなげ(葦花毛)に同じ。堀河百首「駒のとに尾花蘆毛の見ゆるかな、御坂の駒を引くにやあるらん」

をばないろ 尾花色 (名) 枯れたる尾花の如き色。宇津保上「をばな色のほそなが」

をばながゆ 尾花粥 小花粥 (名) 古昔、すすきの花を黑燒にして粥の中に交へたるもの。江戶時代には早稻の黑燒、又時としては黑胡麻を交へたりといふ。八月朔日に食ふ。疫病のまじなひなりと。康富記「文安五年八月朔日尾花粥」海人藻芥「八月朔日に小花粥內裏仙洞以下令用給、皇藥と中略彼の粥の調法は、薄を黑燒にして粥に入れ合はす也」

をばなくりげ 尾花栗毛 (名) 馬の毛色。栗毛の一種。

をばなげ-うま 尾花毛馬 (名) をばなあしげ(尾花葦毛)に同じ。

をばなずり 尾花摺 (名) 尾花に衣服などのすること。爲忠百首「朝露に野邊の草原分け行けば、尾花ずりして玉裳そぼちぬ」

をばなずり-の-たか 尾花摺鷹 (名) 鷹の、のり毛の落ちたる後の毛の、尾花の如くなるもの。和訓栞

をばな-つきげ 桃華馬 (名) 白色にして、さし毛ある馬。運步色葉「桃華馬(ツキゲモノ)」

をば-なり 小放 (名) 〔をは接頭、放りは放髮(ホウハツ)〕うなゐばなり(髫髮放)に同じ。萬「八歲兒の片なりの時ゆ、小放(ヲバナリ)に髮たぐまでにならびをる」

をば-ぢこ 小母聲 (名) 父又は母の姉妹の夫。小母の夫。盛衰記「四十六、信濃野猿當湛增法師に、鎭朝には外祖の姨聲なり」姨夫。

をばやし 小林 (名) 〔をは接頭〕はやし(林)に同じ。皇極紀「鳥屢野始(ヲバ)にわれをひきれてせし人の、おもてもしらず家もしらずも」萬「乎波夜之(ヲバヤシ)に駒をばささげ、心のみいもがりやりてわはここにして」

をばら 小原 (名) こっぱ・の異名。轉じて小塵。

をばら-ぎ 小原木 (名) おはらぎ(大原木)に同じ。七十一番歌合「かこたるるる身の程ならばをはら木の、ふすべらるるも嬉しからまし」大鏡狂言(藤原道隆)「あの山見さいこの山見さい、頂やつれた小原木」

をばら-さかづき 小原盃 (名) 小きを盃にて、黑木の蒔繪などあるもの。安齊藤書「小原盃は、小原權兵衛といふ者、元祿の比作り出す」

をばら-め 小原女 (名) おはらめ(大原女)に同じ。燕村句集「小原女の五人揃うて拾かな」

をばり 終 (名) 一をはること。すること。はて。しまひ。かぎり。天武紀下「四尅(ヲバリ)」萬代集「年ふれど戀は終りもなかりけり、思ひそめしは始めなれども」二死ぬること。末期。臨終。千載「西行法師身まかりける時、をはり正念なりける由を聞きて」續古今「一靡の鐘の音こそ哀なれ、いかなる人の終りなるらん」

をはり とる 終取 死ぬ。往生す。宇津保(國讓)「おほいまうちぎみのをはりとり侍るとて」

をはり の えん 竟宴 きやうえん(竟宴)に同じ。著聞「をはりの宴になぞらへて、詩歌・管絃の興を催す」

をはり の けぶり 終烟 火葬の烟。拾遺「無常所說けて侍りけるが、いとおもしろく侍りければ。惜しからぬ命や更にのびぬらん、をはりの烟しむる野邊にて」

をはり を よくす 善終 無事に天年を終はる。

をはり-あづき 尾張小豆 (名) 【植】だいなごんあづき(猪肝赤)の異名。

をはり-がき 尾張柿 (名) 【植】はちやがき(蜂屋柿)の異名。

をはり-がさ 尾張笠 (名) 尾張國より產する笠。康富記「文安元年八月一日「自大宮檜木十帖中略尾張笠遣」之畢」

をはり-けつめい (名) 【植】かはらけつめい(山蔦豆)の異名。

をはり-どめ 尾張米 (名) 尾張國より產するおこしごめ。新猿記「拾遺物名」をはりごめ。池をはりこめたる水の多かれば、いひの口より餘るなるべし」

をはり-せいじ 尾張青磁 (名) 尾張燒の青磁。江次第「八七日「以上並尾張青瓷、有朱漆菲盤」」

をはりた 小墾田 (名) 〔をは接頭〕はりた(墾田)に同じ。差「小墾田(ヲバリダ)のさかだの橋の崩れなば、桁より行かむな戀そわぎも」

をはり-だいこん 尾張大根 (名) 【植】みやしげだいこん(宮重大根)の異名。傾城反魂香「尾張大根見るやうな」

をはり-はちぢゃう 尾張八丈 (名) 尾張國より產出する八丈絹。庭訓往來四月「尾張八丈・信濃布」

をはり-はつもの 終初物 (名) 其の期節の最終に成熟したる果物を、初物の如く却りて珍重していふもの。

をばり-やき 尾張燒 (名) せとやき(瀨戶燒)に同じ。

をはる 終 (自動) 一末となる。限りとなる。はてとなる。はつ。すむ。仁德紀「同惡者何何(ヲバリヲバリ)、十數群」萬「こと乎波里(ヲバリ)まかり歸りて」二死ぬ。みまかる。往生す。仁德紀「乃自死(ヲバル)焉」砂石集「禪定に入るが如くして終はりぬ」

をひ 甥 (名) 兄弟・姉妹の生みたる男の子。宇鏡「甥(平聲)」和名三「甥、爾雅云、兄弟之子爲甥」平兆

をひ-ぎ-の-つむじ 小原木の草を翼が刈る (諺)弱の草を翼が刈る 小父が甥の草を刈るに同じ。をぢ(小父)の條を見よ。

をびき 尾引 (名) おほびき(大引)に同じ。

をびき-の-つむじ (名) へうび(豹尾)に同じ。

をびく (他動) 〔招(ヲ)引くの義にて〕の假名なるべけれど、暫くおびくをも并取れり〕おびく(誘)に同じ。超象平家「一束、鼓答謝」「師高ををびき出して首を刎ぬべき由を支度したりける程に」運步色葉「偽引(ヲビ)」

をひ-ご 甥御 (名) をひ(甥)に敬稱。狂言(長)「をひご、內に御座るか」平家女護島「能登殿甥ご、頼み入る」

をひ-じは (名) 【植】禾本科、をひじは屬の一年生草本。高さ一尺餘に達す。葉は細長くして尖り、平行脈を有して互生す。花は小穗狀花序に排列し、此の花序集まりて長き複穗狀花序をなし、數箇の複穗狀花序は更に花莖の頂に集まる。我が國、原野に自生し、家畜の飼料に供す。ちからぐさ。もどりぐさ。

をひじ 夫 (名) 〔夫(ヲ)人の義〕をうと。をっと。つま。景行紀「夫(ヲ)婦之道、古今通則也」

をひとめ 夫婦 (名) ふうふ。めをと。をうとめ。景行紀「夫婦(ヲヒトメ)之道、古今達則也」

をひも 小紐 (名) したひも(下紐)に同じ。孟子「汝所堅之美豆能小佩(ヲヒモ)者誰解」

をひも 雄紐 (名) いれひも(入紐)を見よ。(雌紐の對)

をひゃうし 雄拍子 (名) 樂器の打物を雌拍子(メビョウシ)に連續して、右の手にて擊つこと。歌儀品目「雄(ヲ)拍子(雄拍子に連續して右手にて擊つを總拍子と云ふ)」

をひれ 尾鰭 (名) 尾と鰭と。又、魚類・游水類の尾端にあるひれ。續俳家奇人談「掛鯛に尾鰭もちけり藁細工」

をひれ を つける 附尾鰭 事實以上に種種つけ加へをなす。おまけをつく。言葉を飾る。女殺油地獄下「尾鰭をつけていはしやんせ」孕常磐「尾鰭を附けて、生臭い言分めきされど」

をふ 麻生 (名) 麻の生ひたる地。萬「櫻をの苧原(ヲフ)の下草露しあれば、あかしていれ行け母は知るとも」

をふ 終 (自動) をはる(終)に同じ。萬「天地と共に將終(ヲフ)と思ひつつ、仕へまつりし心たがひぬ」公任集「たな上や山まの紅葉は敷しあれば、秋はをふともの、けきを見よ」

をふ 終 (他動) 極め盡くす。果たす。遂ぐ。すます。はつ。祝詞式「新年」「稱辭竟(ヲ)奉」萬「睦月立ち春の來たらば、かくしこそ梅を折りつつたのしき乎倍(ヲヘ)め」源明「おのづから犯しありければ、其の罪ををふる程いとまなくて」

をぶくろ 尾袋 (名) 唐鞍の時、馬の尾をつつむに用ふる長き布の袋。をづつ。又、鷹にもあり、すずしの袋ともいふ。和名抄、尾絹。考靡切韻云、紛帔云所以蔽馬尾也」左右馬寮式「青馬鑣頭鑣甲尾袋、當額花形」

をぶさ (名) にじ(虹)の異名。歌枕名寄 夫木抄「かつらぎ山に虹の立ちければ。更に又そり橋渡す心ちして、をふさかかれる葛城の山」

をぶさ 鞦 (名) 〔尾房の義〕鳥の尾の名所。和名抄、鞦乎布佐 李善曰、鞦爽尾之閒也」堀河百首冬「降る雪に行方も見えず、はし鷹のをぶさの鈴の音ばかりして」

をぶさ 緒總 (名) 玉鬘(たまかづら)の下に垂るる飾りある緒。綬。

をぶし 小柴 (名) こしば(小柴)に同じ。永久百首秋「片岡のをふしまじりに生ひしげる、柞のさ枝初もみぢせり」

をぶし 男節 (名) ほんぶし(本節)に同じ。(めぶしの對)

をぶち 小斑 (名) 〔をは接頭〕ぶち(斑)に同じ。後拾遺秋上「逢坂の關の杉村ひくほどは、をぶちに見ゆる望月の駒」

をぶつ 一汚物 (名) けがれたる物。きたなきもの。

をぶと (名) 〔をひとの轉〕をつと(夫)に同じ。字鏡「犖乎不比。又加太皮」註和名三「夫乎布度」平安古「水鏡「をふとの男聞かざりき」

をぶと 緒太 (名) ■草履・下駄などの鼻緒の太きもの。續武家閑談「奥には後に緒太の金剛が數多御座りました」 ■うらなし(裏無)に同じ。裝束抄元武「如木綿色、一鳥帽子中間一緒太」雍州府志巻七土產「緒太以麻造之、其形如草鞋而鼻緒闊大也、故號緒太」

をぶね 小舟 (名) 小さき舟。こぶね。記下「沖べには震夫泥(ヅチ)つららく、ろざきのまさづこわぎも臨へくだらす」和名三「艇乎夫小船也」

をぶさき (名) 〔をは接頭〕ふぶき(吹雪)に同じ。倭名類聚抄「近江路の篠のをぶきはやひかず、こもちまちやしぬらん、しのの」

をぶり 尾振 (名) 尾をふること。尾を動かすこと。新六帖「招くとやをちかた人の思ふらん、尾花あしげの駒のをふりを」

をへ-と (名) 〔麻經兒の義。和訓栞〕京都西陣にて、はた織り女をいふと。

をへ-びいちご (名) 〔植〕薔薇科、きじむしろ屬の多年生草本。莖の高さ五六寸。葉は掌狀複葉、下部のものは五箇、上部のものは三箇の小葉より成り、皆鋸齒を有す。初夏、黃色の小花を枝端に開く。我が國、各地の原野・畦畔に多し。うつまたぐさ。うつまめぐさ。きらんさう。

をへる 終 (他動下一) をふ(終)(雅動)の口語。

をほこる (自動四) ほこる(誇)に同じ。字鏡集「伐多古ム」宴集

をほす 果 (他動四) 〔終ふの義なればをの假名なるべけれど、暫くおほすをも并せ取れり〕おほす(果)に同じ。紫式部日記「舟に乘りをほせたるを」

をほそ 尾細 (名) 〔その形よりいふ〕〔動いわし鰯をいふ、女詞。續山井・牛頭馬頭に負けぬ尾ぼその頭がち〕

をほて (名) にしき(荷敷)を見よ。

をほに (名) 〔植〕しをん(紫苑)の異名。延喜式紫苑。乃之。之乎爾。乎保爾」

をほね 尾骨 (名) 馬の尾の附け根。名義抄「尾根ヲホネ」和名三「尾株。辨色立成云、尾柱。一云、尾根」

をま 牡馬 (名) をとこの馬。をうま。和名三「牡馬。一名、駿馬平萬」

をまき 緒卷 (名) ■ちきり(襷)をいふ、關東の方言。物類稱呼 ■つむ(紡錘)をいふ、關東の方言。物類稱呼

をまく 男幕 (名) 外幕(とまく)の第一幅の上端を表へ折り返し、右横の端を表へ、左横の端を裏へ折り返し、右横の端を表へ折り返せるものを女幕(めまく)といふ。小笠原宗實記「一條まくの時は、男まくの方出入る事可然候」

をまつ 雄松 (名) 〔植〕くろまつ(黑松)の異名。狂言鶯五「向おちやるか、男松でおちやるか」

をみ 小忌 小齋 (名) 〔をいみの略〕■大嘗會・新嘗祭などの時、特に齋戒を嚴にし、小忌衣を著けて親しく神事に奉仕するもの。又、齋戒を嚴にせず、小忌衣を著けざるものをも小忌といふ。內裏式「小齋親王已下、參議及非參議」江次第「小齋親王已下、小忌參議一人、參議新嘗會儀」 ■をみごろも(小忌衣)の略。江次第十月「行事藏人令頒小忌於殿上侍臣」小忌裝束抄「私小忌身一幅用二幅合四幅也」 ■をみびと(小忌人)の略。儀式「十月「小齋十人」四時祭式上「卜定供奉今良」之小齋人」

おみのゆ 小忌湯 大嘗祭などにて小忌人の湯を數度めさるる中、二度目にめさるる湯の稱。其の一度目にめさるる湯を大忌湯といふ。儀式「主殿寮供奉湯場(已時大嘗)」北山抄「主殿寮(已時小嘗)」「主殿寮供御浴(已時大忌)」大嘗會儀式「主殿寮供奉小忌御湯」

をみのよ 小忌夜 豐明節會・新嘗祭などに、小忌衣を著る夜。榮華物語「小忌の夜は、宰相の五節に童の汗衫、おとなの唐衣に皆青摺をして赤紐をなんしたりける」

をみ 麻績 (名) 麻をうむこと。萬六「うちそやはし麻績(をみ)のこら」

をみ-ごろも 小忌衣 (名) 大嘗祭・新嘗祭・五節・豐明節會等に、上卿・宰相・辨官又は近衛司及びそれに與かる女官・舞妓等の小忌人が、裝束の上に著る單の服。製、狩衣の如くにして、白布に春の草・小鳥等を青摺にしたるもの。左右の袖の中後に紙捻を下げ、右肩に赤紐二條を前ほど瓦らせて垂れたり。をみ。をみのころも。後拾遺雜五「まことにやあまた重ねしをみ衣、豐の明りにかくれなきよに」金葉雜上「日かげにはなき名立ちけりをみ衣、きて見よとこそいふべかりけれ」

をみ-な 女 (名) をうな。をんな。記下「まよがき濃にかき垂れ逢はしし哀美那(ヲミナ)」萬三「秋の野に今こそ行かめ、ものの男(ヲ)美奈(ヲミナ)の花にほひ見に」蜻蛉日記上「纖字鋼」

をみな-がみ 女神 (名) 紙にて造りたる人形にて、晴れを祈るもの。てりてりばうずの類。草綠集「をみな神祈りし幣の鑑衣、晴るべくなりぬ五月雨の空」

をみな-と 女子 (名) 女のこども。をなご。をんなご。雄略紀「女子(ヲミナ)」

をみな-どころ 女心 (名) をんなごころ(女心)に同じ。

をみなし 女郎花 (名) 〔植〕次條の異名。

をみな-へし 敗醬 女郎花 (名) ■〔植〕敗醬(ハイセウ)科、敗醬屬の多年生草本。高さ四五尺に達す。葉は羽狀複葉又は羽狀裂葉、對生す。花は黃色、小形、聚繖花序に排列す。我が國、山野に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。秋の七草の一。おもひぐさ。かまくさ。くちめぐさ。こ

のてがしは。ちめぐさ。萬三「秋の田の穗むき見がてり、吾がせこがふさ手折りける乎美奈敵之(ヲミナ)かも」和名三「女郎花、和歌云、女倍芝」 ■襲の色目の名。表は經青に綠黃、裏は青。類聚抄 女房の五衣にはすべて表女郎花色、裏青、單は紅とす。雅亮裝束抄 秋用ふ。源重黃「をみなへしのおりもの」榮華物語「女郎花・桔梗・萩などのおり物」 ■あはもち(粟餅)をいふ、女詞。宗因千句「あだ名のみ種種にいはれの野べの露の萩のもちならをみなへしなら」

をみなへし-あはせ 女郎花合 (名) 物合せの一。女郎花にてなすもの。古今秋上「朱雀院のをみなへしあはせによみて奉りける」朱雀院女郎花合、亭子院の帝おりゐさせ給うて又の年、后と帝のせさせ給ふ女郎花合なり」

をみなへし-いろ 女郎花色 (名) をみなへし(女郎花)に同じ。字津保巻下「若やかなるをみなへしいろの下襲」同巻「をみなへしいろの汗衫」

をみなへし-くわ 敗醬科 (名) 〔植〕蘰花植物、雙子葉類の一科。草本。對生葉を有し、托葉を缺く。花は聚繖花序又は繖房花序に排列し、緣部の不明瞭なる萼又は冠毛を有す。花冠は筒狀又は漏斗形にて、三裂乃至五裂す。雄蕊は通常四箇、稀に三箇或ひは一箇のことあり。子房は下生して三室を有し、其の中一室のみ一箇の胚珠を含む。果實は閉果、無胚乳種子を有す。凡そ八屬三百五十種より成り、我が國に自生或ひは栽培せらるるもの凡そ五屬十二種。藥用・食用或ひは觀賞用に供す。はいしやうくわ。

をみなへし-づき 女郎花月 (名) 〔女郎花の盛んなる月なればいふ〕陰暦七月の異名。藏玉十二月「七。女郎花月。七夕の契りの色にたたへてや、名を得し華もをみなへし月」

をみなめ 妾 (名) をんなめ(妾)に同じ。

をみなめし (名) 〔植〕をみなへし(敗醬)の異名。謎女郎花(ヲミナ)。

をみねは 小峰 (名) 〔をは接頭〕みね(峰)に同じ。萬四「相模嶺の乎美嶺(ヲミネ)見そぐし忘れくるゝいもが名呼びてあをねしなくなん」

をみ-のはたどの 麻績機殿 (名) 荒妙の神御衣(ヲミ)を織る殿。和妙の神御衣を織る殿を神服機殿といふ。百錬抄六、保元三年「大神宮麻績機殿燒亡」神宮雜例集「麻績機殿」

をみ-びと 小忌人 (名) 大嘗會・新嘗會などに、卜に合ひて神事に奉仕する官人。小忌。公任集「をみ人のゆふかたかけて行く道を、同じ心に誰れながむらん」

をむかさり (名) よめ(嫗)をいふ、仙臺の方言。物類稱呼

をむ-がひ 峰向 (名) 向ひの峰。むかいを。萬五「足引の山鳥こそは、峰向(ヲムカヒ)に妻どひすとへ」

をむく (名) 〔植〕むくのき(椹樹)の異名。

をむく-の-き (名) 〔植〕らふばい(臘梅)の異名。

をむな-め 妾 (名) そばめ。めかけ。てかけ。をなめ。和名三「妾乎毛奈女(ヲモナメ)」非正嫡小妻也」若草記

をめい 一汚名 汚名 (名) けがれたる名。恥づべき噂。惡名。不名譽。管子中篇「入者不悅、出者不譽、汚名滿天下」

をめき-ぐさ (名) 〔植〕はしりどころ(莫宿)の異名。異名分類抄四「其莨子(ヲメキグサ)」

をめき-さけぶ 喚叫 (名) (自動) ■よびわめく。きけびよぶ。うめきさけぶ。謠篇三「をめき叫んで戰うたり」國姓爺二「喚き叫ぶ鯨波の聲に聞こゆるとも」 ■なきさけぶ。さけびなく。わめく。

をめく 喚 (自動四) 大に叫ぶ。高く呼びたつ。うめく。わめく。叫喚(ケウクワン)す。枕草「あはせてをめけば」宇治拾遺三「ひはぎありて人殺すやとをめく」

をめる (自動) 叱らるをいふ、尾張・遠江の方言。物類稱呼

をも 尾本 (名) をぼね(尾骨)に同じ。

をもと-じろ 尾本白 (名) 馬の尾の根元の白きもの。騮。

をもの 食物 (名) 〔食(ヲ)物の略かと。おもの(御物)(ヲ)を見よ。神武紀「嘗其嚴瓮之粮(ヲモノ)」

をや 小家 (名) 小さき家。こいへ。記「葦原のしけき賣(ヤ)に、すが蟲いやさや敷きてわが二人ねし」

をや (助) ■事の意外なるを表はす助詞。感動詞やの添はりたる語。しかなるものをいかで。しかなるをいかがせん。萬七「廣瀨川袖ぐくばかり淺き乎也(ヤ)、心深めてわが思へらむ」 ■をに疑問のやの添はりたるもの。延喜式平家五六、民部法家 本朝文粹「家家に行き待つべき」同六六、重盛「若し自害をやし給ふとの謀也」 ■一を擧げて他を推し定むるにいふ語。上に於ての語を受け、更に況んやの語を伴ふを常とす。延慶本平家六六、新盛內「一日の命の惜しきも父の行くへを知らんとなり、況んや軍においてをや」同同六末、屋島「草木愁ひたる色あり、況んや霜凌の松においてをや」

をやしろ 小社 (名) 小さき社。せうしや。夫木雜四「うなる子が垣ねにいはふをやしろも、思ふことだにならば頼まん」

をやぶ 小山田 (名) 〔をは接頭〕やまだ(山田)に同じ。後撰雜三「小山田の苗代水は絶えねとも、心の池のいひはなたじ」

をやぶじらみ (名) 〔植〕繖形科、をやぶじらみ屬の一年生草本。概形やぶじらみに似るも、全形やや大にして、高さ三尺餘に達す。花は小形、帶紫白色を呈し、複繖花序に排列す。果實は長くして二尖を有し、能く動物體に附著す。路傍に自生す。

をやま 小山 (名) ■小さき山。こやま。 ■小山人形(ヲヤマヒト)の小山より起こる」 歌舞妓の女形。劇場新話「をやま。下げ髮・片はづし中島老女」 ■いうちよ(遊女)をいふ、畿內の方言。物類稱呼 扁額軌範二五「今遊女をおやまといふは、承應の頃、江戸の淨瑠璃芝居に小山次郎三郎といふ者、若き女の人形をよく使ふ、是れより婦人の形容のよきをおやま人形の如き也といふより、遊女の稱となれり」

をやま-がた 小山形 (名) 俳優が女郎に扮したるかたち。

をやま-がへり 小山返 (名) あがけたる鷹の、正月十五日より內に打ち落としたるもの。貞丈雜記

をやまぐるま (名) 〔植〕かせんさうの異名。

をやまだ 小山田 (名) 〔をは接頭〕やまだ(山田)に同じ。後撰雜三「小山田の苗代水は絶えねとも、心の池のいひはなたじ」

をやま-にんぎやう 小山人形 (名) 承應の頃、江戸の人形遣小山次郎三郎、巧みに虚女の姿をつかひたること。

をやま-りんだう (名) 〔植〕龍膽科、龍膽屬の多年生草本。高さ一尺に達す。葉は披針形にて先端狹く、全邊にして三縱脈を有し、無柄にて對生す。花は上部の葉腋に生じ、紫碧色を呈し、龍膽に似て小形なり。我が國、北部の高山に自生す。

をやみ 小止 (名) をやむこと。やむこと。後撰雜四「をやみせず雨さへ降れば

澤水の、ままさるらんとも思ほゆるかな」源明集ただ例の雨のをやみなく降りて」

をやむ　小止（自動四）一少しの間やむ、止む。源氏雨少しをやみぬるほどに」後拾遺三見し人に忘られてふる袖にこそ、身を知る雨はいつもをやまれ」夫木八斧の音もしばしはをやめ、まきもくのひばらの山に時鳥鳴く」二をりをりときる。中止す。榮華玉鳥「講師は呆れつつをやみがちなり」

をやらふる（他動）〔食遣ヤラフの義〕飲食す。顯宗紀「美飲喫哉」

をゆ　瘁　瘻（自動下二）病み弱る。衰へ弱る。病む。苦しむ。記「御軍皆遠延而伏」和名「瘻臥平江切韻」瘁紀

をらす　居（他動四）すわ（座）をいふ、長崎の方言物類呼称

をらち　雄埒（名）流鏑馬ヤブサメの馬場にて、兩側に結ひたる埒の中、射手の弓手、即ち、的の方に結びたる高き埒の稱。又、その右手の方に結ひたる低き埒を雌埒ヤブサメといふ。宇槐雜抄保延三九月廿二「二人手也、女埒と云ふは馬手の方也、是れは流鏑馬の時の事也」

をらん　雄蘭（名）〔植〕するがらん（建蘭）。異名。

をり　檻（名）〔居りの義〕猛獸・狂人・罪人などを籠め置く爲めに造れる閉ひ室。天武紀「檻ヲリ穽」著聞「くま鷹のをり」圓名義抄

をり　折（名）一折ること。又、をりたるもの。「三つ折り」右京太夫集「著なれける衣の袖のをりまでも、ただ其の人を見る心もちして」二幾度もくりかへすこと。記上「八繩折ヲリ酒」三ころ。時候。季節。元恭紀「當于此時、季冬之節ヲリ、風亦烈寒」枕「更に手のあしさ・よさ、歌のをりにあはざらんをも知らじ」節。四恰も其の時。場合。其の際。折節。折柄。機會。時機。顯宗紀「赴節ニヨリテ歌曰」土佐日記「この折りにある人人、をりふしにつけてから歌ども時に似つかはしきをいふ」五をりばこ（折箱）の略。看聞日記嘉吉元年六月十「食ヲリ合云檜重」六をりづめ（折詰）の略。甲陽軍鑑「樽出す時の事、先へ盃、其の次に折り・公卿・食籠、其の次に餅など」本朝三國誌「折りを昇かせ登山し」七をりびつ（折櫃）の略。

をり　がな　折　機會あらばと覗ひ居るさまにいふ語。よきをりあれかしと願ふこと。傾城酒呑童子「折りがな折りがな此のお願ひと、朋輩殘らず申合せおきしは」

をり　し　まれ　をりしもあれの約。宇津保俊蔭「うちにも、をりしまれかかる頃しも」

をり　しも　其の時に當たりて。をりから。丁度。折りも折り。枕「うたてをりしも、などてさはたありけん、いとをかし」

をり　しも　あれ　をりもをりとて。其の時ちやうど。をりしまれ。

をり　に　ふる　折りに當たる。時に從ふ。場合に應ず。徒然草「をりにふれば何かは哀れならざらん」源氏冷泉節「花の晨に餐汲み、紅葉を焚く月の暮、時に隨ひ折りに觸れ御心を慰むる」

をり　も　をり　折折　恰もその時に當たりて。丁度その時に。源氏烏帽子折「時も時折りも折り、大事の追手に行く者に話しせんとは譯もない」

をり　を　ら　得折　好き時機に出會ふ。時を得。新後撰「今ぞ見る君が心もをりをえて、春の時しる花の一枝」

をり　汙吏（名）心の汚れたる官吏。邪惡なる官吏。孟子離婁上「暴君汙吏、必慢其經界」

をり　居（自動四）一其の處に止まる。すわる。ゐる。記「人さはに來入り寒里ヲリ、人さはにし入り寒里ヲリ」萬「あまさかるひなにし居ばヲリ」二あり。存在す。爲忠百首「夏ながら氷をりける奥山は、この世の外の心ちこそすれ」三同一なる動作・狀態を繼續す。古今雜下「人にあはんつきのなきには思ひおきて、胸走り火に心燒けをり」夢語「あるにもあらぬ身を知らずしてと思ひ居り」

をり　折（助數）一折りたるものを數ふるにいふ語。五人女「小判紙一折り」二折りに入れたるものを數ふる語。「菓子一折り」

をり-あげ　折上（名）〔建築〕天井などの張方の一種。上方に至るに從ひ、曲線を以て漸次突出する樣に造れるもの。

をりあげ-からてんじゃう　折上格天井（名）次條に同じ。

をりあげ-くみてんじゃう　折上組天井（名）〔建築〕折上になれる格天井。寛政御造營記「折上組天井・折上小組天井」

をりあげ-だな　折上棚（名）四十八棚の一。床の間・書院などの脇に設くる化粧棚の一種。

をりあげ-てんじゃう　折上天井（名）〔建築〕天井の周圍を、曲線を以て壁に取りつけたるもの。

をり-あし　折脚（名）机・飯臺などの、自由に折り疊みの出來るやうに作りたる脚。又、そのものの附きたること。

をり-あし　折惡（形）時機わるし。まがわるし。生憎なり。源氏「折りあしき御惱みかな」同柏木「折りあしういぶせうあはれにもありしかな」

をり-あひ　折合（名）をりあふこと。和合すること。相互の間に妥協すること。碧岩錄「作什麼折合」

をりあひ-くぎ　折合釘（名）襖屏風などに緣を打ちつくるに用ふる釘。中部の屈曲せるもの。

をり-あぶ　折合（自動四）互ひに和合す。やはらぐ。和熟す。雙方妥協す。

をり-いっ-て　折入（副）ひたすら。是非に。ひとへに。

をりいり-かく　折入角（名）紋所の名。かく（角）を見よ。

をり-いる　折入（他動下二）一折りて中に入る。をりこむ。二言葉又は其の意味を挿み入る。よみこむ。大鑑狂言歌五「三十一字に限りて、萩の花ををり入れ、當座によむ歌の事でござる」同三人汝等が名を折入れ、歌を一首よめ」

をり-うづ　折櫃（名）をりびつ（折櫃）の音便。

をりうづ-もの　折櫃物（名）折櫃に入れたる物。源氏御前のをりうづもの。こもものなど、右大辨なん承りて仕うまつらせける」

をり-えいさう　折詠草（名）詠草の一種。料紙を横に長く二つに折り、更に縱に四つ折りにしたるもの。よこえいさう。千鳥のあと「詠草に、竪詠草本儀なり、料紙は杉原を用ふべし、又折詠草には三折四折の二式あり、大方は四つ折を用ふべし」

をり-えだ　折枝（名）折りたる木の枝。又、作り花をつけたる枝。枕「長きね、をかしきをりえだにも」萬代集「世の中の人のえやすき物なれど、花のをりえを折りえて、春の時しる花の一枝」

だ思ふ心あり」

をり-えり　折襟（名）洋服・襯衣などの襟を折りたること。又、そのもの。（たちえりの對）

をり-かがみ　折屈（名）一をりまがること。をりこごみ。をれかがみ。二曲人に對して禮儀を行ふこと。行儀作法。をれかがみ。浮世風呂「内において、どのやうにやかましく申しても、折屈みが直りませぬ」

をり-かく　折懸（他動下二）一折りて掛く。二折りさしておく。折りて其の儘になし置く。保元「射向けの袖に立ちたる矢ども折り懸けげ」三をりかへし寄せかく。たたみかく。散木集「風吹けば浪折りかけてかへりけり、岸には植ゑじ山吹の花」極樂本家「折懸ヲリかけ戰ふ」

をり-かけ　折懸（名）一折りて引きかくること。二乳付ヲリカケの旗の上の乳ヲリカケに通すための折金。一方は乳に通し、一方は旗竿に添ふ。をりがね。三をりかけばた（折懸旗）の略。四をりかけどうろう（折掛燈籠）の略。曠野雜集「折りかけの火を取る蟲の悲しさよ」

をり-かけ-がき　折懸垣（名）柴・竹などを折り曲げて作れる垣。菅家後集「山里のをりかけがきの梅の花、いかなる人の見じといふらん」諸家本「山里の折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみしに」

をりかけ-どうろう　折掛燈籠（名）細く削りたる竹二本を、四つ手の如く四角の薄板にさして紙を張りたる燈籠。盂蘭盆の時、魂棚に供す。五人女「亡き人の來る魂祭るわざとて中略折掛燈籠かすかに、棚經せはしく」俳諧世話盡「をりかけ燈籠、腰折れ燈籠」

をりかけ-ばた　折懸旗（名）旗の一種。四半ハン）に似て横手あるもの。武用田家譜黑田家譜「最初に播州にて制せられし旗は折懸旗なり」

をり-かご　折籠（名）折りの如くに造れる籠。食品などを入れて客に供ふる籠。國姓爺「折籠二三千合も拵へ、樣樣の菓子・餉・酒・肴したため」

をり-かさなる　折重（自動四）かさなる。疊まる。重なりあふ。

をり-かさぬ　折重（他動下二）折りて重ぬ。太神宮式「小文緋絹一疋折黑ヲリカサネ敷料」

をり-かた　折形（名）一古昔、造物を包みて贈る紙の折樣の形式。二赤飯などの進物に、紙を折りて中に鹽・黃粉などを包み入れて添ふるもの。風俗文選「蕎麥・大根は君臣佐使の附合なるを、越路の國に胡椒の粉の折形を備へ」三紙を折り疊みて物の形を作ること。又、そのもの。をりすゑ。「折形の鶴」俳諧三疋猿「折形の舟流さばや杜若」

をり-かね　折金（名）一刀の鞘の名所。帶に差せる刀の鞘の脱け出づるを防ぐ爲め、鞘につけたる角・木又は金屬製の鉤。おひかへり。か（りづの。さかさづの。おびどめ。大内問答「金作の腰刀は御禁制の事にて候中略折がね」刀劍略說「折金ヲリ、一に負金と云ふ、今は平角を以て作るもの多き故、逆角と云ふ、古代は金具なる故、折金といへり」二をりかけ（折懸）に同じ。武家事記「乳付の旗には横手・折金あり」

をり-かばん　折革鞄（名）折り疊むやうにしたる革鞄。

をり-かへし　折返（名）一をりかへすこと。又、其のをり目。浮世床「兩手で羽織の折返しをずういとしどいて」二書狀の返書などを、引き返し直ちにすること。三倍まし。二倍。

をり-かへす　折返（他動四）一折りて重ぬ。折りて二重にす。蜻蛉「白妙のそで手利可弊之ヲリカヘし、紅の赤裳裾ひき」二繰り返してなす。再びなす。枕「高砂ををりかへし吹かせ給へば」三書狀の返書など、引きかへして返事をやる。「折りかへして返事をやる」

をり-かみ　折紙（名）一折りたる紙。たたうがみ。長秋詠藻「折紙に御宸筆なりけるものを傳へ贈られしなり」玉葉「夢に折紙に書きて、定家卿の前にさしおく」二特に、奏書紙・鳥の子紙・檀紙等を横に二つ折りにしたるもの。進上物の目錄又は交名等を記すに用ふ。又、其の書きたる書附け。東鑑建仁元年九月三日「中動功賞一事、折紙給預候畢」長祿二年以來中次記「刀金覆輪御所日野殿御進上也」三をりかみもの（折紙物）又、をりかみだらぐ（折紙道具）の略。雍州府志「乃蔓、凡價黃金五枚以上稱折紙」四武藝・水泳術などにて、修行により得る一定の資格。五手紙。書翰。武德安民記「御折紙拔見申候」

をりかみ-がた　折紙方（名）室町幕府の職名。將軍贈遺の物に關する事務を掌るもの。

をりかみ-じゃう　折紙狀（名）折紙に書きたる書狀。折紙に認めたる文書。東鑑「院奏折紙狀」同九文治五年十二月廿九日、謹言、折紙狀云」

をりかみ-だい　折紙臺（名）進上物の折紙を載する臺。贈遺の物の目錄書を載する臺。陸摩歌「大鯛・昆布・柳樽・五色の縮緬・紅眞綿・附紙臺・折紙臺三荷に擔はせ」

をりかみ-だらぐ　折紙道具（名）一鑑定書の附きたる道具。折紙附の道具。雪女五枚羽子板「折紙道具失せたりと中略」

をりく　折句（名）一和歌にて五文字ある語の假名を、一字づつ各句の首に置きて詠むもの。奥義抄上「折句歌ヲリクのかみにおくなり、毎句」俊目抄「折句の歌といふものあり、五文字あるものの名を、五句の上にするてよめるなり、小野小町が人に琴をかりにやるとてよめる歌。ことのはもときはなるをとたのまなん、まつはみよかしへてはちるやと」二俳諧にて、判者より上の一句を出だして、下の二句を附けしむるもの。俳諧「後世前句付の外に、折句といへる名目あり中略一句の上五文字を判者の方より出だし、中七文字・下上五文字を附けしむるもの。諸藝本平記「袖崎が藝を折紙道具といへり、きはめのよいといふ心なるべし」

をりかみ-つき　折紙附（名）一折紙のつき添はりてあること。鑑定書及び價格などの書附けの添はりてあること。二その物事の價値の、現に定まれること。三一定の資格を得たるもの。

をりかみ-もの　折紙物（名）一折紙つきのもの。二特に、大小刀の價の、金四枚以上なるもの。下文を見よ。新刀銘盡「一具凡札といふは金一枚より三枚五兩までの極めあるを札物といふ、四札より乃至五枚・十枚・五十枚・百枚に及ぶ、皆折紙物といふなり」

をり-から　折柄（名、副）丁度其の時。をりしも。後撰秋中「折りからに我が名は立ちぬ女郎花、はちふ人なみ濡れつつやふる」源竹川「物あはれなる折りからにて、とりて見給ふ」

をり-からど　折唐戸（名）折り疊むやうに作りたる唐戸ヲリ。

をり-さど　折木戸（名）戸の折り疊まるるやうにしたる木戸。門出八島「竹垣に折木戸」

をり-ふし　折節（名）一をりから。時。時候。二保證附きのよきもの。譬喩尽「袖が藝を折紙道具といへり、きはめのよいといふ心なるべし」

をり-ふし　折伏（名）心の汚れたる官吏。

をり-ふし　折合（名）をりあふこと。和合。碧岩錄「作什麼折合」

をりふし-くぎ　折合釘（名）襖屏風などに緣を打ちつくるに用ふる釘。中部の屈曲せるもの。

をり-ふす　折合（自動四）互ひに和合す。やはらぐ。和熟す。雙方妥協す。

をり-ふす　折入（副）ひたすら。是非に。ひとへに。

をりいり-かく　折入角（名）紋所の名。かく（角）を見よ。

をり-いる　折入（他動下二）一折りて中に入る。をりこむ。二言葉又は其の意味を挿み入る。よみこむ。大鑑狂言歌五「三十一字に限りて、萩の花ををり入れ、當座によむ歌の事でござる」同三人汝等が名を折入れ、歌を一首よめ」

をり-うづ　折櫃（名）をりびつ（折櫃）の音便。

をりうづ-もの　折櫃物（名）折櫃に入れたる物。源氏御前のをりうづもの。こもものなど、右大辨なん承りて仕うまつらせける」

をり-えいさう　折詠草（名）詠草の一種。料紙を横に長く二つに折り、更に縱に四つ折りにしたるもの。よこえいさう。千鳥のあと「詠草に、竪詠草本儀なり、料紙は杉原を用ふべし、又折詠草には三折四折の二式あり、大方は四つ折を用ふべし」

をり-えだ　折枝（名）折りたる木の枝。又、作り花をつけたる枝。枕「長きね、をかしきをりえだにも」萬代集「世の中の人のえやすき物なれど、花のをりえ

五文字を作者より織がせいふなるよし」

をり-くぎ 折釘 (名) 折り曲げて作れる釘。物を懸くるに用ふ。をれくぎ。甲陽軍鑑「おし板の折り釘に、物かきたる扇をかけておきたるを」二代男「竹花入れ懸けし折り釘幾りて」

をり-くぎぬき 折釘貫 (名) 紋所の名。(くぎぬき(釘貫)を見よ。

をり-くぶ 折燻 (他動ヤ) をりたく(折焚)に同じ。

をり-くぼ 折窪 (名) 烏帽子のひなさきのまはりのくぼみたる所。

をり-ぐわし 折菓子 (名) 折りに入れたる菓子。折詰の菓子。五元集「折菓子や井筒になりて雛のたけ」

をり-け 折堺 (名) 紙に折目をつけて畳(たた)むものもの。をりげい。西宮記三、置文「令(持)大側(著)議所」清書、仰(外記)令(遣)折畳黄紙」

をり-げい 折堺 (名) 前項に同じ。季連宿禰記(天暦九年)「黄紙一枚折堺(畳)等入之歟、折堺(ガイ)之事、古體不(慥)知、近代用(宿紙)歟」

をり-こごみ 折屈 (名) をりかがみ(折屈)に同じ。

をり-ごと 折琴 (名) 折り畳みの出来るやうに造りたる琴。十訓抄「かの庵にも折琴・つき琵琶などを伴へりけり」

をり-こみ 折込 (名) 一をりこむこと。又、をりこみたるところ。二俳諧に、題の漢字二字の一を頭に置き、一をその中に挿むもの。其の一種に同一の漢字を首尾に置くものあり、これを天地といふ。例へば、遠頭といふ題にて、遠くから白く頭の目だつ富士。戸といふ題にて、戸袋は戸隠山か引く雨戸の類。

をり-こみ-くわん 折込鐶 (名) 船具。檣に附けて、折込綱(ツナ)を通す鐶。

をりこみ-だな 折込棚 (名) 四十八棚の。床の間・書院などの脇に設くる化粧棚の一種。

をりこみ-づな 折込綱 (名) 船具。檣を立て又は倒すに用ふる綱。根上綱(ネアガリ)。

をり-こむ 折込 (他動四) 折りて中に入る。中の方へ折る。二代男「三鼻紙半帖思ひきりて折込み、道行づくしの浮瑠璃本」

をり-ごも 折薦 (名) 折り返して作れる薦。(松屋筆記)「主計寮式「折薦八百五十八枚、葉薦四百六枚」朝野群載十五(中務)「識薦、折薦卅八枚」

をり-こんぶ 折昆布 (名) 昆布を折り畳みて製したるもの。字賀の昆布。うが。

をり-ざやのたら 折鞘黨 (名) 烏帽子を著用せる輩。三光院内府記「風折地下諸太夫(右衣井)儒除輩、殿上之中にも著用之家家有之、世號此折鞘黨」候」

をり-しき 折敷 (名) 右足を尻の下に敷き、左の膝を立ててなす射撃の構へ。

をり-しく 折敷 (自動四) 折り返し繁く立つ。新古今巻上「嵐ふく岸の柳のいなむしろ、をりしく波にまかせてぞ見る」

をり-しり-がほ 折知顔 (名、副) 時節を知りたるらしきさま。時を得たるらしき様子。新後撰雑下「見るたびに露けさまさる森が花、をり知りがほに何匂ふらん」曾我十(虎)「ひとり伏屋の軒の月、涙に曇る折りからや、折知顔の鹿の聲」

をり-すけ 折助 (名) 武家にて使役する奴僕。浮世風呂大「旦那さまも折助も、孰れが孰れやら一般(ヨウ)裸體(ハダカ)」

をりすけ-こんじやう 折助根性 (名) 勞苦を厭ひ、主人の眼を偸みなどする性質。奉公人根性。

をりすけ-ぜん 折助膳 (名) (折助などの常に用ひしよりいふ) 箱膳をなし、食事するとき蓋を伸けて其の上に食器を置き、食後これ等の食器を入れ置くやうに造りたる膳。箱膳。切溜。江戸の方言。

をりすけ-べや 折助部屋 (名) 大名・旗本などの邸内にて、折助の居る部屋。

をり-すゑ 折居 (名) 紙を折りて種種の形を作ること。折形。一代男「折居(ヲリヰ)を遊ばし、比翼の鳥の形は是れぞと賜はりける」

をり-せつ 折節 (副) をりふし(折節)に同じ。

をり-だい 折臺 (名) 折りを載する臺。大内家壁書、饅頭「折臺略すべし」

をり-たく 折焚 (他動四) 折りて火に燃やす。をりくぶ。萬三「磯のへにつまぎ折燒(ヲリタ)ながためと、わがかづきこし沖つ白玉」新古今(哀傷)「思ひ出づる折りたく柴の夕煙、むせぶもうれし忘れがたみに」

をり-たくむ 折疊 (他動四) 折りて重ね畳む。たたむ。

をり-たて 折立 (名) 織物などの裏ばりしたるを折りて箱の角に立つるもの。をたて。雅亮装束抄「唾壺の筥の蓋を置きて、だこをするたり、ふたの中に錦のをりたてあり」

をり-たむ 折廻 (自動四) 道ををりまはる。(宣長)「萬三「衣手を折廻(ヲリタム)の古義里にある吾れを、知らずぞ人は待てどこそ待ける」

をりつき-かっせん 折附合戰 (名) 敵の吾が領地に攻め來り、その先陣已に著して後陣の未だ達せざる内に、此方より急に攻め掛かること。

をり-づきん 折頭巾 (名) 頂に襞積(ヒダ)を多く折りつけたる頭巾。

をり-つまど 折妻戸 (名) 折り畳むやうに作りたる妻戸。(諸職)「折妻戸を小櫛に取って」

をり-づめ 折詰 (名) 食品などを折りに詰めこむこと。又、そのもの。一葉集「餅を夢に折詰齒朶の草枕」

をり-づる 折鶴 (名) 一紙を折り畳みて鶴の形にしたるもの。をりすゑの鶴。俳諧新選「折鶴の羽も動くや今朝の秋」二紋所の名。つる(鶴)を見よ。

をりづる-らん (名) 【植】百合科、をりづるらん屬の多年生常綠草本。多數の鐵匙枝を有し、所所に葉を叢生し、又數箇の氣根を出だす。葉は細長にして尖る。花は白色にて、葉間より抽出せる花莖上に春開く。我が國、各地の山地に自生すれども、亦觀賞用として栽培せらる。

をり-でほん 折手本 (名) 折り本にしたる手本。

をり-ど 折戸 (名) 開き戸、即ち、舞戸。又、中央より折り畳むやうにしたるもあり。一枚なるを片(カタ)折戸、二枚にて左右へ開くを兩(リヤウ)折戸といふ。東鑑「脱漏(元仁三年)、鰭板中門、并織戸可被立之由、有其沙汰」

をり-どころ 居所 (名) 居る場所。ゐどころ。きよしよ。新六帖「徒らに聊燒衣ぬれてのみ、哀なる蜃のをり所かな」

をり-にくし 居惡 (形ク) ゐづらし。ゐにくし。居るに心苦し。

をり-のし 折熨斗 (名) 方形の紙を熨斗包(ツツミ)の折形にしたる中に、熨斗鮑の小片を貼り附けたるもの。略しては熨斗鮑を黄色に刷り出し、又は其の全體を印刷したるもあり。(長熨斗の對)

をり-の-もの 折物 (名) 折りに盛りて出す酒の肴。折りに入れたるもの。折詰。

をり-は 折羽 (名) 雙六の類。雙方十二づつの駒を用ひ、十二に劃したる盤の一より五までの間に二つづつ列べおき、竹筒に入れたる二つの采を振りだして采の目の數を取り合ひ、多く取りたる方を勝ちとする戯れ。油渣「一二一二と文字ぞ見えける」の句をりは打つさい將棋のさまをして」曾根崎心中「をりはの乞ひ目、三六の十八九なる顔よ花」下端。居るべき位地。たちば。地位。

をり-はこ 折箱 (名) 薄き板又はボールる紙などを折り曲げて作れる箱。

をり-はし 折端 (名) 俳諧の附合せにて、眞表の終りの短句の稱。燕石雜誌二「俳諧の附合に、裏表のをはりの短句を折端(ハシ)といふ」

をり-はし 折箸 (名) 一本を折り屈め、一對として食を取る箸。續後紀七「みどり兒のをさな語に、折箸(ハシ)のもとす五知らず、亂れ絲の亂れてあれど」

をり-はしよ 居場所 (名) をりば(居場)に同じ。

をり-はふ 折延 (他動ハ) 時を延ばす。をりをを長びかす。長びく。打ちつづく。打ちはふ。古今夏「足引の山時鳥をりはへて、誰れか優るとねをのみぞ鳴く」

をり-びつ 折櫃 (名) 檜の薄板を折り曲げて作りたる筥。形は四角・六角さまざまにて、蓋あり。古くは看・菓子など盛り、檜葉をかし敷き、四すみに作り花などを立てて飾りとせり。主計寮式「折櫃五合(長三尺、廣一尺四寸)」和名七「櫃(比波)、俗有(長櫃・鰹櫃・朝比奈・折櫃・小櫃等之名)」

(つびりを)

をり-びつ-もの 折櫃物 (名) 押櫃に入れたるもの。桑華(衣身)花籠や折櫃物など殿上人などの給はせたれば」

をり-ぶぎやう 折奉行 (名) おをりぶぎやう(御折奉行)に同じ。

をり-ふし 折節 (名、副) 一差し當たる時時。其の場合場合。土佐日記「ある人人、折節につけて、から歌ども時に似つかはしきをいふ」源氏帚木「折りふしのいらへ、心えて打ちし」二丁度その時。折柄。延喜式「平家(小松)「太政入道二位殿は、をりふし福原におはしけるが」境節(往來)三時節。期節。新古今夏「折節も移ればかへつ、世の中の人の心の花染の袖」徒然草「をりふしの移りかはるこそ、物どとに哀れなれ」四時時。折り折り。たまさか。一代男「御ド屋敷に置かせられ、折節の御通ひ女に」浮世床「今も折りふしは見かけるが、昔ほど澤山はない」

をり-ふばこ 折文匣 (名) 折りたむやうにしたる文匣。大江俊光記(元徳二年)「旦、折文匣日向へ、中の文匣、お堆へ、(嘉)年玉送り給了」

をり-べい 折塀 (名) 折れ曲がりたる塀。高忠聞書「をりべいのさまよきやう口傳有り、外へよせて切るべし」

をり-べんたら 折辨當 (名) 折詰の辨當。

をり-ぼね 折骨 (名) 一馬の三頭(サン)に隆くあらはれたる骨。うま(馬)を見よ。(保元白河殿攻落)「右手の膝節片手切りにつと射(ヲ)て、鎧のみづをがね・馬のをりぼね五六枚さっときれて」二腰の骨。義經記六、忠信「柄を心もとへさしこみ、鞘はをりぼねの下へつき入れて」

をり-ほん 折本 (名) 綴じずして、折り畳みたる本。蘭波三(紙)「今の折本となる紙をもへ(折)して、軒の眞中に、水の始めの處を形付にたるあいだ、はじめ文の屏かの如くなりて、左宋板の佛經、折(ヲリ)折本なれば、唐末・宋初よりの事ならん、これを摺本と云ふ」摺本。

をり-まがり 折曲 (名) をりかがみ(折屈)に同じ。

をり-まつ 折松 (名) 薪の料に折りたる松の枝。籌火又は炬火にする松の折枝。源氏宵(ヒ)「折松おどろおどろしからぬ程におきて、さししぞきて、ともしたれば」辨内侍日記「枯れたる萩の枝など、折松にせられけり」

をり-みーぐさ 折見草 (名) 一(折りによりてかはる義)人の心の稱。二【植】まつ(松)の異名。藏玉「折見草。松。折見草枝もやあらん事によせ、なぐさみ多き今日の夕べれ」

をり-みまひ 折見舞 (名) 時節の見舞。時候見舞。狂言「「それは常の折見舞、舞入りではをりない」

をり-め 折目 (名) 一物を折りたるまは。折りたる所。新六帖「散るをわれ惜しみ持ちたる後までも、折目はつけじ櫻うすやう」運歩色葉「折目(ヲリ)」二たちゐふるまひ。行儀作法。雪女五枚羽子板「「卷舌の諸體、折目正しき正月言葉」三鷹の翼の名所。たか(鷹)を見よ。

をり-めーたか 折目高 (名) 一折りめの著しく高く表はるること。二起居振舞の行儀正しきこと。起居動作の堅苦しきこと。

をり-やなぎ 折柳 (名) 元祿頃、流行したる若衆の髮の結び方。又、其れに擬したる髮の結方。若風俗「白鷺の清八(中略)手妻もすぐれて、折柳とて一流結ひ出し」

をり-やびし 折矢菱 (名) 紋所の名。や(矢)を見よ。

をりゆう 汚隆 (名) 衰ふることと盛んになること。盛衰。隆替。庾信詩「馳輪有盈缺、人道亦汚隆」

をり-よし 折好 (形シク) 時分よし。場合よし。間がよし。(次條の對)

をり-わるし 折惡 (形シク) 惡しき時なり。折りよからず。時期惡し。まがわるし。(前條の對) 曾我扇八景「「折りわるう鬼王は、弓弦買ひに鎌倉へ」

をり-をほし 折烏帽子 (名) 立てゑぼしに對して、折りふせたる烏帽子。右の方へ折りふせたるを右折、左の方へ折りふせたるを左折といふ。大きびの折烏帽子・横さびの折烏帽子・柳さびの折烏帽子などあり。圖は横さびの折烏帽子なり。東鑑(サ)、(イ)ひしがた、(ウ)やはがた、(エ)ひゆが、(オ)ひねり、(カ)つつ、(キ)くしがた、(ク)ふぼしとめ、(ケ)まねき、(コ)ひねがた

(をりゑぼし)

三(仁安)五「改(ヒ)折烏帽子」日五「於子於立烏帽子、(エ)裝束ホ干、(ク)幕府(ヒ)給」

をり-をり 折折 (名、副) 時時。をりふし。萬三「君と時時(ヲリヲリ)いでまして遊び給ひし」枕「内侍のすけなどいひて、をりをり内へまゐり」

をる 居 (自動四) 一をり(居)の口語。二助動詞の如く他の動詞の下につきて、賤しめ又は罵りていふ語。狂言(宮松)「いやといふ酒をくれをって」同(内證)「なぜにこしをった」

をる 折 (自動四) 浪など折れ返るやうに搖り動く。穆重にもたたまり寄る。萬三「今日もかも沖つ玉藻は、白浪のやへ折(ヲ)が上に颯れてあらむ」同三「白浪のやへ折乎流(ヲ)が上に、蜃小舟はららに浮きて」

をる 折 (自動ラ) 一搖み曲がりて二重となる。屈みて離る。搖みて斷ゆ。源氏玉鬘「目つぶれ足をれ給へ(りとも)」(夏)平家六(斷官物)「きらんとするに、太刀俄にをれてけり」二曲がりてゆく。横へまがる。まがる。源氏一「條より洞院の大路ををれ

給ふ程」同行記「五條の大路を西さまにをれ給ふ」㊁氣挫く。屈す。服從す。負く。源創記「春の色はえおとさせ給ふまじかりけりと、花にをれつつ聞こえあへり」保元「我が僻事と思し召す時は、忽に折れさせ給ひて」

をる 折（他動ヨ）㊀押し曲げて二重にす。曲げ屈む。撓めて重ぬ。㊁曲げて離し取る。屈めて斷つ。萬ニ「むつきたち春のきたらばかくしこそ、梅を乎利(ヲリ)つつたぬしきをへめ」延喜式「平家」本山門奏「擲刀の柄を、蛭卷の許より打ちをられにけり」㊂疊み重ぬ。折形を作る。諸子拾遺「鳥帽子は何番に折り候べき。三番の左折りに折り て賜はり候へ」圓曲ぐ。屈す。「節を折りて士に下る」

をるふらむ （獨 Wolfram）（名）【化】鎢に類する光澤と硬さとを有し、融點の極めて高き（約三〇〇〇度）金屬。少量の炭素を含めるものは其の硬さ略金剛石に匹敵す。空氣及び酸の作用に抗する性强く、靭性加里には水素を發生して溶解す。硬さを增すために鋼に加へ、又細線となして電燈に使用せらる。たんぐすてん。

をれ 折（名）折るること。又、そのもの。「釘の折れ」

をれ-かがみ 折屈（名）㊀をりかがみ（折屈）に同じ。㊁身體の關節。

をれ-かへる 折返（自動ヨ）折れて元の方へかへる。折れ曲がる。又、折れに折る。赤染衛門集「わが宿の庭の尾花のをれかへり、招くとだにも見てや過ぎぬる」新六帖「あらし吹く野なる草木のをれかへり、やすくも見えぬ世の習ひかな」㊁巧みに折れ旋る。舞ふさまにいふ。宇津保俊蔭「仲すみの侍從らくそん舞ひて御階のもとに舞ひ出でて、をれかへり舞ふ」榮華御賀「をれかへり舞ひ給ふ程中將鳥など の翔けるらんやうに見え給へば」

をれがむ 拜（他動ヨ）をがむ。をろがむ。

をれ-き 折木（名）折れたる木。折れたる樹の枝。又は幹。夫木「みゆき狩人那須の夏野は心せよ、高草隱れをれきふすなり」

をれ-くぎ 折釘（名）㊀折れ碎けたる釘。釘の折れ。釘のこはれ。㊁をりくぎ。蕪村句集「折れ釘に烏帽子かけたり春の宿」

をれ-くち 折口（名）㊀折れたるところ。俳諧新選「折れ口はさすがに生し冬木立」㊁喪に遇ひたることを忌みていふ、東京の方言。

をれ-けた 折下駄（名）なかぎりげた（中切下駄）に同じ。守貞漫稿

をれ-こだる （自動ヨ）折れ傾く。こだる。辨內侍日記「をれこだれ、身をなきになして舞ひたりし」盛衰記三「うれしや水鳴るは瀧の水と眺ひて、をれこだれをれこだれ、一時ばかりぞ舞ひたりける」

をれ-こむ 折込（自動ヨ）㊀折れて內へ入る。㊁孕む。懷妊す。浮世床「かかしめが又をれ込んだあな。取上婆さん所か」同「伯母御の子息が泊客に來てゐた娘と出來て、懷胎コヤしましたもんだから」

をれ-だち 折太刀（名）折れたる太刀。折斷せられたる太刀。曾我十五郎御前召し鳥「黑鞘卷に赤銅作りの折れ太刀」

をれ-は 折葉（名）折れたる葉。折れ破れたる葉。和泉式部續集「難波潟華のをれ葉を押しわけて、漕ぎはなれゆく蜑の釣舟」夫木「鶉ふす小野の茅生は霜枯れて、をれ葉片寄り風さやぐなり」

をれめ 折目（名）物の折れたる所。折れたるきは。

をれ-や 折矢（名）折れたる矢。斷筒。

をれ-ゆみ 折弓（名）折れたる弓。佐竹宗三聞書「折れ弓のたいはいの事」

をれる 折（自動ヨ）をる（折）の口語。

をろ 尾（名）（ろは添辭）を（尾）に同じ。萬ニ「山鳥の乎呂(ヲロ)のはつをに鏡かけ、となふべみこそなによそりけめ」

をろ-の-かがみ 尾鏡（名）やまどりのをろのかがみ（山鳥尾鏡）の略。やまどり（山鳥）の條を見よ。

をろ-の-はつを 尾秡尾（名）やまどりのをろのかがみの略。やまどり（山鳥）の條を見よ。新拾遺「にほ鳥はをろのはつをにあらねども、鏡の山の陰になくなり」

をろ 閼（名）（ろは添辭）をか（岡）に同じ。萬ニ「あは乎呂(ヲロ)の乎呂(ヲロ)たにおはるたはみづら、ひかばぬるぬるあをことなえ」

をろ 緒（名）（ろは添辭）を（緒）に同じ。萬ニ「まかなしみぬればことにづ、さねなへば心の緒呂(ヲロ)に乘りてかなしも」

をろ-がむ 拜（他動ヨ）（をれがむの轉）をがむ（拜）に同じ。推古紀「かしこみてつかへまつらむ、鳥呂餓彌(ヲロガミ)てつかへまつらむ」頓宮紀

をろ-しい （形ロ語）わるし（惡）をいふ。豐前國の方言。

をろ-だ 岡田（名）（ろは添辭）岡にある田。丘上の田。萬ニ「あはをろの乎呂田(ヲロダ)におはるたはみづら、ひかばぬるぬるあをことなえ」

をろ-ち 大蛇（名）（をろは尾にて、ろは助辭、ちは靈の義と。和訓栞）稱めて大なる蛇。うはばみ。だいじゃ。記「高志之八俣遠呂智(ヲロチ)、毎年來喫」神代紀「有大蛇(ヲロチ)頭尾各有八岐」

をろ-わい （汚穢）汚れたること。けがす こと。けがらはしきこと。けがれ。漢書宰嚭「汚穢朝廷」

をろ-ゑ （汚穢）前條に同じ。太平記十二、萬「不淨汚穢之男女出入無制止」

をを-し 雄雄（形シク）男らし。たけし。いさましい。（めめしの對）綏靖紀「少有雄拔(ヲヲ)之氣」崇神紀「幼好雄略(ヲヲシコトヲ)」源藤長「心もちひををしくすくよかに」

をを-し-げ 雄雄氣（副）ををしやう。ををしさう。

をを-し-さ 雄雄（名）ををしきさま。ををしき度合。

をを-つ 南風（名）みなみかぜ。南風。

をを-り （名）遲歩色葉「南風ヲヲ」

をを-る （名）萩の花咲きの乎乎人(ヲヲ)を見よとかも、つく夜の清き戀ひまさらくに」

をを-る （自動ヨ）茂くしてわわく。たわわになるほど茂し。萬三「打ち橋に生ひ乎鳥醴(ヲヲ)る川藻ぞ、刈るればはゆる」同八「春されば乎乎理(ヲヲ)に乎乎里(ヲヲ)、鶯の鳴く吾が島ぞやまず通はせ」

をん-えき 瘟疫（名）流行の熱病。はやりやまひ。えやみ。疫病。疫癘。時疫。雜病記聞「時疫又疫癘とも云ひ、溫疫とも云ふ、流行熱病の事なり」橘黃年譜「築地土州邸瘟疫流行す」

をん-が 溫雅（名）おとなしくしてみやびやかなること。もの柔かにして雅量あること。北史「性溫雅寡欲、有祖父風」

をん-がい 怨害（名）怨靈のなすわざはひ。太平記十二「怨害は是れ非事、亡卒・怨靈共の所爲なるべしとて、止其怨害、爲令穩善所」

をん-がん 溫顏（名）やさしき顏つき。柔和なる顏色。諸佛要集「妓王・妓女・佛刀自とて、溫顏舞曲花めきて、世上に名を

得漢書賈誼「以溫顏遲鈍承接上下」

をん-さ （名）ゑんき（遠忌）に同じ。盛衰記「故禪門相國の遠忌を迎へて、傘ねて堂塔をも起立し」

をん-さ 溫氣（名）だんき（暖氣）に同じ。

をん-さ 瘟鬼（名）疫病がみ。

をんざゃう-ち 遠行地（名）佛語。十地の一。念念、諸法を寂滅して遠く上地に趣き向かふ地位。

をん-さよう 溫恭（名）おだやかにしてうやうやしきこと。溫良にして恭謙なること。管子「溫恭自虛」

をん-くわん 溫官（名）役德ある官。溫職。本朝文粹「溫官特賞天恩、皆帶顯職・溫宣、或傘二寮之頭助、爲一朝之要樞」

をん-けつ 溫血（名）あたたかき血液。（冷血の對）

をん-けつ-どうぶつ 溫血動物（名）【動】體の表面に防寒・防熱の裝置を有して、外圍の氣溫に關らず、一定の體溫を維持する動物。鳥類・獸類の如し。

をん-けん 穩健（名）文章・議論などの、穩當にしてしっかりしたること。「筆力穩健」

をん-けん 溫言（名）やさしきことば。溫和なる言語。後漢書明帝紀「外親有謙素義行者、輒假借溫言賞以財位」

をん-こ 溫故（名）ふるきをたづぬること。昔の事を研究すること。論語爲政「溫故而知新、可以爲師矣」

をんこ ちしん 溫故知新（名）故きを溫ねて新しきを知ることに同じ。ふるし（古）の條を見よ。

をん-こう 溫厚（名）溫順にして篤實なること。後漢書王龔「疾惡嚴刻、務崇溫厚、仁賢之政、流聞後世」

をん-ごく 遠國（名）ゑんごく（遠國）に同じ。盛衰記「五十六ヶ國、遠國へ赴き給はんこそ悲しけれ」

をん-ごく-がた 遠國方（名）遠き地方。遠國の方。遠方。狂言「遠國方の者で御座る」

をん-ごく-ひにんてか 遠國非人手下（名）江戸時代、庶人に科する附加刑の一。遠國に遣はして非人手下とするもの。御定書百箇條「遠國非人手下（遠島・江戸追放・遠國・左遷）」江戸・相模「姉妹・伯母・姪と密通いたし候もの遠國非人手下」

をん-ごく-ぶぎゃう 遠國奉行（名）ゑんごくぶぎゃう（遠國奉行）に同じ。

をん-ごく-やく 遠國役（名）遠國に赴任する役。又、其の役人。淺草米廩舊例「番替番行（四月・八月）、遠國役のものは、都て江戸渡に無之候」

をん-こ-やき 溫古燒 溫故燒（名）（嘉永年間、清水溫古（瑞歌）の燒き始めたより いふ）美濃國不破郡赤坂町邊より產する磁器。昔古燒に似て白色、質硬からず。

をん-こ-りう 溫故流（名）槍術の一流。明良帶錄「溫故流・新習流」

をん-ざ 穩座（名）（をん（穩）はくつろぐ義）㊀嚴重の威儀の座に非ずして、くつろぎたる席。大饗などの時、正式の勸杯終はりて後、樂集して懷を述べ興を催す處。猶、えんざ（宴座）を見よ。江次第「大饗・穩座、尊者以下著穩座」同抄「穩座者、非嚴重威儀之座、自他舒懷、故曰穩座」雅亮「東抄、大饗の穩座とは、事はて大床におりゐて中略有菜物をまるらせて中略催馬樂あなたふとなどうたひて」㊁轉じて、物の盛りを過ぎて、最末に殘る物。「をんざの初物」

をんざ の きゃう 穩座饗 穩座にてなす饗。林歌の饗。

をんざ の はつもの 穩座初物 をはりはつもの（終初物）に同じ。嬉遊笑覽 傾城色三味線「七十に及んで分知といはるるは、誠にをんざの初物也」

をん-じ 溫座（名）安心して座し居ること。東鑑「九月九日、見傍輩之所爭、蘇溫座歟」

をん-じ 遠志（名）【植】ひめはぎ（遠志）に同じ。

をん-しう 怨讐（名）うらみてあだとなすこと。太平記「自是天下大に亂れて、父子・兄弟怨讐を結び」

をん-じう 溫柔（名）おだやかにやはらかなること。溫順。禮記「其爲人也、溫柔敦厚」

をんじう-さゃう 溫柔鄕（名）（暖くやはらかき鄕里の義）ねや。閨房。又、色里。遊廓。飛燕外傳「后遣合德・帝大悅以輔屬體無所不靡、謂之溫柔鄕、曰吾老是鄕、奚不能致武帝更求白雲鄕也」

をん-しつ 溫室（名）㊀あたたかなる設備をなしたる室。漢書「獨夜設九賓溫室」㊁寒地に於て暖地の植物などを培養し、又は冬期の寒冷を防ぎ、又は普通の時期以外に開花・結實等をなさしむる爲めに設けた建物。㊂佛語。浴室の稱。法隆寺伽藍緣起并流記資財帳「溫室壺口長七丈八尺、」多武峰略記「溫室（管見七・開闢・元五・開闢）」

をん-しつ 溫疾（名）をんえき（瘟疫）に同じ。保元（後白河・治承）「病み出だして、灸治など多くして、溫疾大切の間」

をん-しふ 溫習（名）（をん（溫）に冷めぬやうに暖むる義）繰り返し習ふこと。さらふこと。復習。袁凱詩「朝向泰岡杰游衍、暝歸雪案同溫習」

をん-しゃ 溫藉（名）度量ひろくしてやさしきこと。溫雅なること。漢書「溫雅有溫藉」

をん-じゃう 溫情（名）やさしき心。なさけ深き心情。

をん-じゃう-じ 園城寺（名）香の名。蘭奢よりは薄く柔かなる香ありて涼し。火末は少し辛し。

をん-じゃく 溫石（名）㊀輕石又は麤に包みたる瓦などを燒きて綿又は布などに裹み、冬日又は病氣などの時、懷中して身體を暖むるに用ふるもの。今は懷爐を用ふ。やきいし。運歩色葉「溫石」續猿蓑「溫石の飽かるる夜半や初櫻」㊁「溫石は襤褸などに裹むよりいふ」襤褸を纏へる人を嘲りていふ語。

をん-じゃく-いし 溫石石（名）信濃國、高遠の山中より產出する黑色の石。溫石に適す。

をん-じゅん 溫順（名）物やさしくすなほなること。おとなしくさからはざること。溫和。從順。後漢書宋弘「弘少而溫順」

をん-しょく 溫職（名）役德ある職。溫官。本朝文粹「請殊蒙鴻慈、拜任溫職狀」

をんすゐ-さ 溫水器（名）蒸氣機關より排泄せらるる蒸氣を利用し、蒸汽鑵に送給する冷水に熱を與ふる裝置。

をん-せん 溫泉（名）【地】地下水が、地熱の爲めに高溫度を享けて、地上に湧出するもの。火山活動の餘勢なるを以て、火山地方に多し。（冷泉の對）續紀「寶元年十月、車駕至武蒲溫泉」續後紀「寶元年十月、玉造塞溫泉石神霊驚祟、晝夜不止、溫泉流川、其色如漿、水經注「溫泉水其水溫熱若湯、能愈百疾、故世謂之溫泉」醫

をん-ぜん 溫然（副）おだやかなるさま、やさしきさまといふ語。羊士諤詩

「臥閑幸相宜、温然承宴息」

をんせんは 温泉場 (名) 温泉の在る所。湯治場。

をんせんやど 温泉宿 (名) 温泉場のやどや。

をんぞう 一怨憎 ゑんぞう(怨憎)に同じ。盛衰記(四十五内大臣京上被斬)「妻子眷属は恩愛苦界の波を起こし、我執怨憎は邪見放逸の劍をとぐ」

をんぞうゑく 一怨憎會苦 (名) 佛語。八苦の一。我が怨み憎む人又は忌み嫌ふ事物に會する苦しみ。榮華玉葉「心と事と相かなへば愛別離の苦もなし、慕眼ひと〻くれば怨憎會の苦もなし」涅槃經「怨憎會苦、所〻不〻愛者而共業集」

をんたい 一温帶 (名)【地】寒帶と熱帶との間、即ち赤道より各二十三度半より六十六度半間の氣候温和なる地帶。

をんたいしょくぶつ 一温帶植物 (名)【植】温帶に繁殖する植物。栗・櫻の如き落葉濶葉樹なり。

をんたいりん 一温帶林 (名) 山毛欅・栗・櫻・楓・胡桃及び其の他の落葉濶葉樹等の森林の連續せる地帶。又、その地帶の森林。我が國にては本洲の北半部、北海道の南半部の平地、并びに本州の南半部及び四國・九州の山岳地方此れに屬す。

をんたう 一温湯 (名) 一適度なる温度の湯。あたたかき湯。二をんせん(温泉)に同じ。水經注「有〻大醜小醜山、其山峰舉右、出〻温湯、療〻冷萬病」

をんたう 一穩當 (名) 一おだやかにあたること。よく道理にかなひて無理のなきこと。適當なること。運歩色葉「穩當オンタウ」二柔順にして人に逆らはざること。おだやかにすなほなること。

をんたん 一温暖 (名) あたたかなること。ぬくきこと。洪範五行傳「盛陽南水温暖而湯熱、陰柔脅之不〻相入、則轉而爲〻雹」

をんだんかひ 温煖飼 (名) 蠶をかふに、火力を以て室内をあたたむるもの。(清涼飼の對)

をんてき 一怨敵 (名) うらみある敵。あだかたき。仇讎。保元(新院御所焼討)「敵相〻從群臣謀」、平家(十二、逆櫓)「今も朝の怨敵をほろぼし給ふべきにや」

をんど 雄鳥 (名) をんどり(雄鳥)の略。狂言(鶯)「をんどがうたふたら起こしませい」

をんど 一温度 (名)【理】他の物體に熱を付與する狀態。寒暖の程度。

をんどり 雄鳥 (名) をどり。(雄鳥ヲドリの對)

をんどり (名) をどり(踊)に同じ。身體和名集「をどりこ、をどり、をんどり」

をんどる 温突 (名) 朝鮮などにて床下に土にて造りた坑を通じ、之に火氣を送りて暖を取るもの。

をんどれ 女 (名) おとろんに同じ。

をんな (名)(をみなの音便) 一をなご。をうな。めのこ。め。女子。婦人。神代紀「乾坤之道相參而化、所以成二此男女一」中哥伊弉諾尊・伊弉冉尊「土佐日記「男もすといふ日記といふものを、女もしてみんとするなり」二かくし女。情婦。「他に女をこしらへる」三はしためめ。下女。四生まれつき温順なる性質をもてるものとしての婦女。五おとなとなりたる女。月經のはじまりたる女。

をんな きんぜい 女禁制 にょにんきんぜい(女人禁制)に同じ。にょにん(女人)の條を見よ。曾我虎磨「女禁制の大峰山上、女の行人あるべきか」

をんな にて 一我が身、女になりて。自ら女として。源氏(若紫)「女にて見奉らまし」同手習「兵部卿宮ぞいといみじくおはするや、女にて馴れつかうまつらばやとなんおぼえ侍る」二其の人を女にして。源氏(葵)「院の御ありさまは、女にて見奉らまほしきを」同(夕顔)「口のうち黑みてふみ給へるかをりうつくしきは、女にて見奉らまほしうきよらなり」

をんな の こ 女子 女の子ども。むすめ。をなご。俳諧新選(春駒)「や男顔なる女の子」

(誹)**女さかしくて牛賣りそこなふ** 女の賢しきは却って事を仕損ふ譬へにいふ。出世景清「女さかしくて牛賣られぬとは御ぶんが事ぞ」

(誹)**女に五障三從あり** 下文を見よ。世說故事苑「女人は五障三從の障ありて佛と成り難しと云ふは、超日明三昧經云、不〻可〻以女身得成佛道、所以者如何、女人有三事隔九事礙、三事とは少制父母・嫁制夫・不自由、長大難子、五礙とは一日、不得作天、帝釋、二不得作梵天、三不得作魔天、四不得作轉輪聖王、五不得成佛」

(誹)**女に七去あり** しちきよ(七去)を見よ。

(誹)**女に白い齒は見せられぬ** 笑顔を見すれば親しみ馴れて、男を侮るに至るよりいふ。

(誹)**女に三つの家なし** 女は三界に家なしに同じ。北條五代記「女に三つの家なし」

(誹)**女の足駄にて作れる笛には秋の鹿よる** 男の女に迷ひやすきをいふ。徒然草「女のはける足駄にて造れる笛には、秋の鹿必ずよるとぞいひ傳へ侍る」

(誹)**女の一念岩をも通す** 女の執念の强きをいふ。

(誹)**女の髮の毛には大象も繫がる** 女の色香には男の迷ひやすきをいふ。徒然草「女の髮筋にてよれる綱にては大象も能くつながれ」大威德陀羅尼經「一切女人爲不除欲、乃至以女人髮爲作綱維、香象能繫、況丈夫輩」

(誹)**女の猿智慧** 女の智慧の淺はかなるを嘲りていふ。近世江戸著聞集「何とぞして退けんと、色々工夫を廻らしける、誠に女の猿智慧に、手代忠七が奸計の工みより思ひ設けて」

(誹)**女の智慧は後へ廻る** 下種の智慧はあとから出るに同じ。げす(下種)の條を見よ。世話盡「女の智慧は後へ廻る」

(誹)**女の智慧は鼻の前** 女の智慧の淺薄なるをいふ。鷹筑波「女房の智慧や末つむ鼻のさき」

(誹)**女の情に蛇が住む** 女の情の執念深きをいふ。

(誹)**女の話は一里限り** 話題の範圍の甚だ狹きをいふ。

(誹)**女の目には鈴をはれ** 女の目はばっちりとして大きなるをよしとす。

(誹)**女は相見互ひ** 互ひに思ひやりの念ありたきをいふ。天智天皇「女はあひみたがひぞや、やあ誰れしもよい男は持ちたいもの」

(誹)**女は衣裳髮容** 女には衣裳と髮容のよきが肝要なり。

(誹)**女は氏なくて玉の輿に乘る** 氏なくして玉の輿に同じ。うぢ(氏)の條を見よ。日本武尊吾妻鑑「下司下郎賤の女でも、女は氏なうて玉の輿、次第に出世し經上るこそ身のほまれ」

(誹)**女は寶物** 他に嫁すべきものなればいふ。

(誹)**女は髮容** 女は髮の恰好によりて一段と際立つ。槍權三「兎角女子は髮容」

(誹)**女はさげて育てよ** 女は其の家柄より低き程度に教養せよ。

(誹)**女は三界に家なし** 女は幼少なれば父母に從ひ、嫁しては夫に制せられ、母となりては子女の爲めに困難をなすよりいふ。女に五障三從ありを見よ。世話盡「女三界一家なし」

(誹)**女は地獄の使** 女色に迷ひて佛戒を犯すに至るもの多きよりいふ。華嚴經「女人地獄使、能顚倒佛種子、外面似菩薩、內心如夜叉」

(誹)**女は會釋にあまれ** 女は萬事にひかへめがちにあれ。

をんなあふぎ 女扇 (名) 女の携ふる扇。をなごもちの扇。形やや小さし。諸藝太平記「戀風含む女扇の模樣にも、此の君の紋所を繪がき」

をんなあるじ 女主 (名) 一家の主人たる婦人。主婦。枕草子「げすの家の女あるじ」

をんなあんじゃ 女案者 (名) 訴訟ごとなどの案文を作る女。娘氣質「訴訟の目安を書き習ひて、女案者と名を取り」

をんなあんま 女按摩 (名) 女の按摩とり。膝栗毛「大あばたの女あんま」

をんないうひつ 女右筆 (名) 女にて文筆の巧みなること。又、文筆に從事する女。一代女「京に女祐筆とて」纖留「物を書く事、女右筆ともいふ程なり」

をんないしゃ 女醫者 (名) ぢょいしゃ(女醫)に同じ。世間娘氣質「異樣なる疾ひも男もたせば大方はなほる物と、氣の通りたる女醫者の申されしは道理」

をんなおび 女帶 (名) 女のしむる帶。女の帶。一代女「女帶六尺五寸に限りしに、近年長うして物好見よげに」

をんなおや 女親 (名) ははおや。ははは。實方集「ある人の娘を惡びてかたらふに、女おや聞きつけて、いみじう腹立ちて」曾我七「女親とて賤しみ候ふか」

をんなかうぶり 女冠 (名) 女の位階ゆう(川柳)の異名。

をんなかな 女假字 (名) ひらがな(平假名)に同じ。

をんなかぶき 女歌舞伎 (名) 萬治、元祿の頃、主として婦人の行ひたる歌舞伎。孝亮宿禰記(長享十三年正月廿日)「向〻四條女歌舞妓(令〻見物)」東海道名所記「歌舞妓過ぎては、祇園靈山丸山に、頽城共をあげ夜もすがら遊ぶ、これにぞ歷歷樣たち名をかへ品をかへて御通ひなされし故に、女歌舞妓はとどめられぬ」

をんながほ 女顏 (名) 女の顏。又、女の如きやさしき顏。新可笑記「四十路に餘る女貌、今も昔の形幾りて」

をんながみ 女神 (名) めがみ。女神。

をんながみゆひ 女髮結 (名) 婦人の髮を結ぶを業とする者。寛天見聞記「寛政の初めは、をんなかみゆひと云ふも、をんなかみゆひと云ふもの出來たり、遊女は此の女にのみ結はする事の由」

をんなぎ 女氣 (名) 婦人のしとやかなる氣質。女の內氣なる心。をんな心。

をんなぎだ 女義太 (名) 次條の略。

をんなぎだいふ 女義太夫 (名) 女の語る義太夫節。又、義太夫節を語る婦人。をんなぎだ。

をんなきゃく 女客 (名) 女の客人。二代男「夜更けて女客も歸り、枕も定めず睡りけるに」

をんなきらひ 女嫌 (名) 男子の、婦人に接するを好まざること。又、其の人。若風俗「女は譬へは繪に書いても入るべからず中略かかる女嫌ひも世に又あるものかな」

をんなかつら 女葛 (名)【植】せんきゅう。

をんながな 女假字 (名) ひらがな。

をんなかぶき 女歌舞伎 (名) 萬治、元祿の頃、主として婦人の行ひたる歌舞伎。孝亮宿禰記(長享十三年正月廿日)「向〻四條女歌舞妓(令〻見物)」東海道名所記「歌舞妓過ぎては、祇園靈山丸山に、頽城共をあげ夜もすがら遊ぶ、これにぞ歷歷樣たち名をかへ品をかへて御通ひなされし故に、女歌舞妓はとどめられぬ」

をんながほ 女顏 (名) 女の顏。又、女の如きやさしき顏。新可笑記「四十路に餘る女貌、今も昔の形幾りて」

をんながみ 女神 (名) めがみ。女神。

をんながみゆひ 女髮結 (名) 婦人の髮を結ぶを業とする者。寛天見聞記「寛政の初めは、をんなかみゆひと云ふも、をんなかみゆひと云ふもの出來たり、遊女は此の女にのみ結はする事の由」

をんなぎ 女氣 (名) 婦人のしとやかなる氣質。女の內氣なる心。をんな心。

をんなぎだ 女義太 (名) 次條の略。

をんなぎだいふ 女義太夫 (名) 女の語る義太夫節。又、義太夫節を語る婦人。をんなぎだ。

をんなきゃく 女客 (名) 女の客人。二代男「夜更けて女客も歸り、枕も定めず睡りけるに」

をんなきらひ 女嫌 (名) 男子の、婦人に接するを好まざること。又、其の人。若風俗「女は譬へは繪に書いても入るべからず中略かかる女嫌ひも世に又あるものかな」

をんなぐるま 女車 (名) 女房の乘りたる牛車。簾の下より下簾(シタダレ)を出し垂る。枕「道に逢ひたりける女車の、深き所におとしいれて」今昔「下簾を垂れて、女車の樣にて見んは如何に」

をんなげいしゃ 女藝者 (名) 女の藝者。げいこ。藝妓。(男藝者の對) 賤者考「藝子(江戸にて女といふ)奴師勞之「女藝者の事を昔はをどり子といふ、明和・安永の頃より藝者と呼び、者(モノ)などとしやれたり」

をんなご 女子 (名) 一女の こ。むすめ。女子。土佐日記「京にて生まれたり草「女の髮筋にてよれる綱にては大象も能くつながれ」大威德陀羅尼經「一切女人爲不除欲、乃至以女人髮爲作綱維、香象能繫、況丈夫輩」

をんなごころ 女心 (名) 婦人の心。女の心。「女心如夜叉」

をんなさぎ 女鷺 (名) 女の髮形の鷺。女の鷺。三代男「舞臺子共三人、女かづらして出づる時は」

をんなさぐり 女探 (名)【植】せんきゅう(川芎)の異名。

をんなさぐり 女草 (名)【植】せんきゅう(川芎)の異名。

をんなさくし 女臭 (形) 一女子に特有なる臭氣あり。二女らし。めめし。

をんなくじ 女公事 (名) 女に關するくじ。又、女より起こしたる訴訟。砂石集「女公事ばかりして、男公事はゆるされて」

をんなくせまひ 女曲舞 (名) 女の行ふくせまひ。くせまひ(曲舞)を見よ。

をんなくひ 女食 (名) 多くの婦人を欺き弄ぶこと。女をくひ物にすること。

をんなくび 女首 (名) 城中の女を殺し、男子の首の如く詐りて功となさんとすること。

をんなぐるひ 女狂 (名) 女にくるふこと。女色に溺るること。一代女「女狂ひも其の夜に限りて、三條の鯉屋などに遊び」

をんなぐるま 女車 (名) 女房の乘りたる牛車。簾の下より下簾(シタダレ)を出し垂る。枕「道に逢ひたりける女車の、深き所におとしいれて」今昔「下簾を垂れて、女車の樣にて見んは如何に」

をんなげいしゃ 女藝者 (名) 女の藝者。げいこ。藝妓。(男藝者の對) 賤者考「藝子(江戸にて女といふ)奴師勞之「女藝者の事を昔はをどり子といふ、明和・安永の頃より藝者と呼び、者(モノ)などとしやれたり」

をんなご 女子 (名) 一女の こ。むすめ。女子。土佐日記「京にて生まれたり

をんなざれ 女切 (名) 女の切れは し。女の片影。

をんなさだち 女君達 (名) 貴族の女子。女のきんだち。宇津保(藤原)「女きんだちいと薄げにて」同(蜂)「女きんだち・女宮よりはじめ奉りて」

をんなさぶ 女草 (名)【植】せんきゅう(川芎)の異名。

をんなくさし 女臭 (形) 一女子に特有なる臭氣あり。二女らし。めめし。

をんなくじ 女公事 (名) 女に關するくじ。又、女より起こしたる訴訟。砂石集「女公事ばかりして、男公事はゆるされて」

をんなくせまひ 女曲舞 (名) 女の行ふくせまひ。くせまひ(曲舞)を見よ。

をんなくひ 女食 (名) 多くの婦人を欺き弄ぶこと。女をくひ物にすること。

をんなくび 女首 (名) 城中の女を殺し、男子の首の如く詐りて功となさんとすること。

をんなぐるひ 女狂 (名) 女にくるふこと。女色に溺るること。一代女「女狂ひも其の夜に限りて、三條の鯉屋などに遊び」

をんなけ 女氣 (名) 一女子の氣質。二女らしき氣。

をんなけ 女毛 (名) 女の毛。女の髮。

をんなけ 女毛 (名) 女の毛。女の髮。

をんなけ 女毛 (名) 女の毛。女の髮。

をんなけ 女毛 (名) 女の毛。女の髮。

しをんな子、ここにて俄に失せしかば」源春太「をんなごをなん生みて侍りけるを」㊁をんな。婦女。婦人。二代男五「女子どもを呼びて床を取らせ」

をんな-ごころ 女心 (名) ㊀女の心。をなごごころ。經信母集「世の常の女ごころならば、さしおきものすべきものにあらず」諸国話「女心のはかなさは、都を獨りあくがれ出でて」㊁男の、女に執著する心。十訓抄「仁俊は女心ある者の、堂聖立ちける」㊂男を持たんとする心。男を解する女の心。五人女三「りんが、女心は有るまじきと思ひしに」

をんな-ごし 女輿 (名) によようばうごし(女房輿)に同じ。諸国話「女輿と見えて來たり候」

をんな-こしゃう 女小姓 (名) 女の小姓。二代男三「鬢切りしたる女小姓」

をんな-こしゅ 女戶主 (名) 女子たる戶主。民法第七百三十六條「女戶主か入夫婚姻を爲したるとき」(註)女戶主は三年限り　女の獨身生活の困難なるをいふ。

をんな-こども 女子供 (名) ㊀女と子供と。㊁女の子供。をんなわらは。

をんな-ごろし 女殺 (名) ㊀女を殺すこと。㊁女を逃はすこと。又、女を逃はす程の美男子。

をんな-ごゑ 女聲 (名) 女のものいふ聲。又、女らしき聲。發心集三「花がらを谷に散らし給ひてといふを聞けば、をんなごゑなり」

をんな-どんぜつ (名) [植]こしあぶらのきの異名。

をんな-どんりゃう 女今良 (名) 女にて今良たるもの。(男今良の對)

をんなざか 女坂 (名) 神社・佛閣に通ずる坂の二筋あるうち、其の傾斜の少なき方の稱。(男坂の對)

をんなさかもり 女酒盛 (名) 女のなすさかもり。女ばかりの酒盛。五人女「女酒盛、男とては清十郎ばかり」

をんなざかり 女盛 (名) 女の容貌の最も美しき年頃。をなござかり。一代女三「我れ女盛りに枕並べし男に」

をんなさじき 女棧敷 (名) 女の席として設けたる棧敷。新可笑記二「女棧敷は蘭帳ぢく簾を心の外に打ちあげ」

をんなざむらひ 女侍 (名) 女の如きさむらひ。氣質のめめしき武士。甲陽軍鑑三「詮索なしに、むざと我が贔負をほむる女侍澤山なり」

をんなさるがく 女猿樂 (名) 猿樂の一種。婦人の行ふもの。看聞日記応永十四年「五人歌舞中略拍子咲などは男也、女共は如遊君・音聲殊勝、觀世などにも不劣、猿樂之體神妙也」

をんなざんまい 女三昧 (名) 女色に溺るること。

をんなし 女 (形二) 女らし。女のやうなり。源帚木「なよびかに女と見れば、餘り情にひきこめられて」同夕顔「いとあてに女しうなまめいたるけはひ」

をんな-しごと 女仕事 (名) 女のなす仕事。女の仕事。唐船噺今國姓爺三「手元まじやうに紡ム合はせ組み合はせ、繼ぐまとしさも女仕事の拂取りて」

をんなししゃう 女師匠 (名) 女にて遊藝などを教ふるもの。女の師匠。俳諧新選雪中吹や女師匠の片折戶」

をんなしばゐ 女芝居 (名) 女役者の一座にて興行する芝居。古今役者大全四「舞踊・女芝居は永禄の頃にはじまり」

をんな-しゃうぐわつ 女正月 (名) 京都にて正月十五日の稱。この日を京都にては婦女の年始の回禮のはじめとするよりいふ。俳諧歳時記正月「京の婦女、正月十五日を年始の始めとして、女正月といふ類にや」

をんな-じゃうるり 女淨瑠璃 (名) 婦人の語る淨瑠璃節。女義太夫。天保集成絲綸錄八十一「文「町家之内定見世同樣に而、女淨瑠璃。申す義相催し、町家之娘共五十人づつ相集まり、席料を取り淨瑠璃を語り」

をんな-じゅんれい 女順禮 (名) 女の順禮。三代男三「彼の美しき女順禮は」

をんな-じょたい 女世帶 (名) 女のみにて張る世帶。女の世帶。をなごしょたい。

をんな-じょゐ 女敍位 (名) によじょゐ(女敍位)に同じ。

をんなすがた 女姿 (名) 女のすがた。女らしき姿。七十一番歌合「でんがく。よそへてもげに芝戀しき人まねの、おほひかつらのをんなすがたを」

をんなずき 女好 (名) ㊀男子の、特に婦人を好むこと。㊁女のすき好むこと。女のすくこと。

をんな-せつぶん 女節分 (名) 正月十九日に女の京都吉田の疫神に詣づること。節分に詣づる代りなるよりいふ。

をんな-たいこ 女太鼓 (名) 女の太鼓持。女の幇間。二代男五「女太鼓の藤も御機嫌取り」

をんな-だいぶ 女太夫 (名) 義太夫などを語る演藝を職とする女。女の太夫。㊁女の門附芸。塵塚談「をんなだいふに出ると、よき家に緣組出來ず」

をんな-たうか 女蹈歌 (名) たうか(蹈歌)を見よ。西宮記正月「女蹈歌十六人。倭舞・倭琴・倭笛・倭歌・倭琴女房・簡司等・同元日・踏・坊等外・鼓女・内裏・及内侍人・自内侍・殿・經・稱物・稱・稱元・日・踏・坊等外・鼓女・内裏・及内侍人・物・右・内侍・任・奏・者・内・侍・付・内侍人・奏之」

をんなだて 女達 (名) 女にして男達の行ひをなすもの。女俠客。女俠。

をんな-たび 女旅 (名) 女の旅をすること。女の旅あるき。源氏十二段長生島臺三「急ぐとすれど行惱む、道はかどらぬ女旅」

をんな-ため 女溜 (名) 江戶時代、罪を犯せる婦女の重病者などを囚禁し置きたる所。德川禁令考後集「女溜、二間樂に四間之處相建て候處」

をんな-たらし 女誑 (名) 女をたらすこと。又、其の男。

をんな-ぢから 女力 (名) 女の力。女のかよわき力。吉野都女楠「蔵く手先に力なき女力も念力の」

をんな-づかひ 女使 (名) 昔時、陰曆二月・十一月の上の申の日に、大和國春日神社へ勅使として派遣されたる内侍。又、賀茂の祭にも行はれたり。(男使の對)金葉雜上「左大臣中將にて侍りける頃春日祭の使に下りけるに、周防の内侍女使にてくだりけるに」尺素往來「今日賀茂祭中略近衛使之餝車、女使之絲毛車」

をんなつき 女付 (名) をんなぶり(女振)に同じ。

をんな-っぷり 女振 (名) をんなぶり(女振)の音便。

をんなで 女手 (名) ㊀(昔時、女の多く用ひたるよりいふ)ひらがな(平假名)の稱。をんなもじ。宇津保俊蔭「書きて奉られたる本をこそは、男手も女でも習ひ給ふめれ」源乙女「さうのもただの、女

手をいみじうかきつくし給ふ」㊁女のしわざ。「女では無理だ」

をんな-てがた 女手形 (名) 婦女の、關所の通り手形。此の手形には年齡・性質・旅行の目的・目的地・人相・日限など、男の手形より一層精密に記載するを要す。教令類纂九十七「寛政元年六月「町中より所所御關所女手形申請け度き者有之候はば、自今以後者、兩御番所江可申上候」

をんな-てがた-しょうもん 女手形證文 (名) 女手形の交付を請求する者より、其の手形發行の權ある役人に差し出す證文。武家嚴制錄七「女手形證文案」

をんな-でたち 女出立 (名) 女のいでたち。女の衣裳。女の仕度。大織冠三「此の女出立をば脫ぎ捨て、錄足が嫡子淡海公と名乘って討ってかからん」

をんな-でんか 女天下 (名) 女が男よりも權力を振ふこと。

をんな-とうぐう 女東宮 (名) 皇女にて東宮に立ち給ふこと。取替「まうけの君おはしまさぬによりてこそ、女春宮も立ち給ひしか」

をんな-どころ 女所 (名) 禁中にて女官などの居る所。女の居る所。源夕顔「女どころにてしどけなく萬の事習ひたる」輔親集「女所の宮づかへする頃、そこにきぶらふ女房などのゐて戲れごとするに」

をんな-なぢち 女達 (名) 女のなかま。女のつれ。源蜻「きの守國に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇」

をんな-とぼりてがた 女通手形 (名) をんなてがた(女手形)に同じ。柳營祕鑑四「慶長元年以後出入の女之關所(慶長元年以後出入の女の關所)手形」西國筋より女通手形」

をんな-ともだち 女友達 (名) 女なる友達。女同士の友達。古今雜下「女ともだちと物語して、別れて後に つかはしける」後撰春下「常にせうそこ遣しける女と

もだちの許より」

をんな-ながえ 女長柄 (名) 乘物の一種。長柄輿に下簾あるもの。古へ、貴婦人の乘用。嬉遊笑覽「車長柄」

をんな-なかま 女仲間 (名) 女のなかま。をんなどち。若風俗三「二幅まではづされ廣庭を追ひ廻るは、同じ女仲間もうたてかりき」

をんな-ねこ 女猫 (名) めすの猫。ねこ。

をんなのう 女能 (名) ㊀女の演ずる能樂。長澤聞書「京師專ら女能はやり申し候、則吉野と申す傾城の大夫、四條河原にて能いたし候」㊁女にいでたつ能藝。藤涼軒日錄寛正六年十月廿五日「田樂永阿彌勤女能、殊不著面爲可笑也」

をんな-のりもの 女乘物 (名) をんなごし(女輿)に同じ。井筒業平河内通三「下向の女乘物、玉を飾りて花蔓」

をんな-ばら 女腹 (名) 女子を多く分娩する腹。(男腹の對)

をんな-はら 女濟 (名) 女の方方。女の人だち。をんなども。源蜻「ふるき女ばらなど」

をんな-ひでり 女旱 (名) 女の少なきこと。思ふやうなる女の乏しきこと。織留三「世界に女旱はせず、お物好なる當世娘が何程にても御座る」

をんな-ぶ 眉ぬき鐵鬢つけなど女びさせたれば」(自動)女らしくなる。取替

をんな-ぶだう 女武道 (名) 芝居にて武術に達する忠義の女に扮する役。

をんな-ぶで 女筆 (名) 女の筆蹟。用明天皇職人鑑三「女筆のちらしがき、ことになまめく贈物」

をんな-ぶみ 女文 (名) 女の書きたるふみ。源帚木「まんなを走り書きて、さるまじきどちの女ふみになかば過ぎて書き

すくめたる」

をんな-ぶり 女振 (名) 女の顏かたち。女の容貌。をんなつき。

をんな-ぶんべつ 女分別 (名) 婦女子のなす分別。思慮の淺きをいふ。

をんな-べや 女別屋 (名) ㊀侍女又は下婢などの住む部屋。ながつぼね。㊁女の常に居る室。㊂をんなら(女牢)をいふ。江戶時代、牢内の語。牢獄祕錄牢「牢内之言葉に、女牢を女部屋と云ふ也」

をんな-ほうばい 女朋輩 (名) 女の朋輩。女のともだち。一代女「同じ枕の女朋輩も目覺めまして」

をんな-ほぶし 女法師 (名) 女の法師。あま。あまほぶし。今昔「留守に可し死氣なる女法師一人居たり」

をんな-まかせ 女任 (名) 物事を女に任せておくこと。家事を女中などに任せておくこと。

をんな-まじり 女交 (名) 女のまじり居ること。女が男の中に交り居ること。一代女「それに指さし、數多の女交りに笑ひつるが」川中島合戰三「輝虎程の大將が、女交りに國の仕置・軍評定するでもあるまじ」

をんな-まらうど 女客人 (名) 女のまらうど。をんなきやく。和泉式部續集「女まらうどのまで來て、物語りなどして歸りぬるに」

をんな-みこ 女御子 (名) 皇女。內親王。宇津保藤原「宮より始め奉りて、女みこたちあまた」

をんな-みや 女宮 (名) 內親王。ひめみや。宇津保俊蔭「女宮たちにも數へ奉らん」

をんな-むき 女向 (名) 女にむくこと。女にふさはしきこと。

をんな-むしゃ 女武者 (名) 女の武者。女にて甲冑を著け戰場に出づるもの。謠「巴と云ひし女武者」

をんな-むすび 女結 (名) 紐の結び方の名。をとこ結びの結び方を左より始めたるもの。をとこむすび(男結)を見よ。

をんなめ 妾 (名) めかけ。をみなめ

をんなめかし 女 (形二) 女らし。女らしく見ゆ。宇治拾遺「さこそ綱やかに女めかしくおはすれど」

をんな-もじ 女文字 (名) をんなで(女手)に同じ。賀古教信七墓廻「是れは流れの女文字、情色めくいろは假名」

をんなもち 女持 (名) 形などの、女の所持するにふさはしきこと。「女持の時計」

をんな-もの 女物 (名) 女の身に著け又は携帶するもの。

をんな-やく 女役 (名) ㊀女の勤むる役。一代女三「表使の女役を勤めし時」㊁をんながた(女形)に同じ。

をんな-やくしゃ 女役者 (名) 女の役者。女優。

をんな-やま 女山 (名) いんざん(陰山)に同じ。

をんな-やもめ 女寡 (名) やもめ。寡婦。(諺)女やもめに花が咲く　女はやもめになれば、却りて世話の仕手多くて世に持て囃さる。

をんなゆ 女湯 (名) 女の入浴すべき方の湯。浮世風呂「個祖右屑の湯上りに浴衣容のかほよはあるとも、當時の師直さらに女湯を覗かず」

をんな-らう 女牢 (名) 婦女を入るる牢屋。牢獄祕錄牢「女牢は西口之揚り屋にて、緣類有り」

をんな-らし 女 (形二) 女子にふさはしきさまなり。しとやかなり。をなごら

し。

をんなるにん 女流人 (名) 流罪に處せられたる婦人。科條類典七、女流人は船中別園に而差遣し申し候」

をんな-れらけん 女料簡 (名) をんなふんべつ(女分別)に同じ。

をんなろくしゃく 女六尺 女陸尺 (名) 昔時、家家の定紋を染めたる看板を著て、貴人の女樂物を奥より玄關までの間舁くために召し使ひたる下婢。路次は男六尺の舁くものとす。

をんな-わざ 女業 (名) 女のするわざ。女の仕業。津國女夫池「いとあぶなげに女わざ」

をんな-わらは 女童 (名) 一女の子供。めのわらは。をんなわらはべ。土佐日記「ありける女童なん此の歌をよめる」盛衰記(卯三、續方三)「付き仕へける女童是れを見咎めて、父母にかくとぞ語りける」女孺。二女わらはと。

をんな-わらはべ 女童 (名) 前條に同じ。宇津保(春日)「逸物のものども、をんなわらはべ」

をんな-わらべ 女童 (名) 前條に同じ。諸藝太平記「女童のみにても其の儘會得する樣に、平假名のよき抄あらば重寶なるべし」

をんな-ゑ 女繪 (名) 女の姿をかきたる繪。女を主として描きたる繪。(男繪の對) 蜻蛉日記「女ゑをかしくかきたるがありければ(中略)見れば釣殿とおぼしき勾欄におしかかりて、中島の松をまはりたる女あり(中略)又やもめずみしたる男の文書きさして、つらづゑつきて物思ふさまにしたる所に」紫式部日記「劣らじとしたてたる女ゑのをかしきに」

をんな-をどり 女踊 (名) 女の演ずる踊。享保集成絲綸錄(四十六、享保、二月)「町中に而女をどりを仕立て、女子共召され屋敷方江遣し、をどらせ候由」

をん-ねん 怨念 (名) うらみの念。うらみ。保元(院御所)「此の君怨念に依つて、生きながら天狗の姿にならせ給ひける」

をんのうれん (名) 【植】をのをれかんばの異名。

をん-のざ 穩座 (名) をんざ(穩座)を見よ。建武年中行事(中略)「上卿の外も參りて、ぐうはいにたち寶穩の座につく」

をん-のれ (名) 【植】次條に同じ。

をん-のれい (名) 【植】次條に同じ。

をん-のれん (名) 【植】をのをれかんばの異名。

をんば 穩婆 (名) さんば(産婆)に同じ。民事訴訟法(第二九十)「穩婆」

をん-ばう 溫袍 (名) わたいれ。布子。論語子罕「衣敝縕袍與衣狐貉者立而不恥者、其由也與」

をんびゃう 瘟病 溫病 (名) をんえき(瘟疫)に同じ。難病記聞(醫)「時疫又疫癘とも云ひ、溫疫とも云ひ、溫病とも云ふ、流行熱病の事なり」

をん-びん 穩便 一事の便宜に從ひておだやかなること。おだやかにかどだたざること。保元(新院御所)「大勢にて罷り上らんこと、上聞穩便ならず」舊唐書食貨「仍各逐穩便收貯」二便利なること。輕便。手輕。寛天見聞記「赤坂御門外溜池の端に麥飯といふ娼家(中略)價五六にて、至極穩便の遊所也」

をん-めん 溫麪 (名) たうへい(湯餅)に同じ。

をん-りう 溫溜 (名) 漢方醫の語。腕の背部にある灸穴の稱。

をん-りゃう 怨靈 (名) 怨みて祟りをなす死靈又は生靈。東鑑(六、文治二年七月廿日)「爲仙洞御願、被宥平家怨靈於高野山、被建立大塔」

をんりゃう 溫良 溫順にして善良なること。論語(學而)「夫子溫良恭儉讓」

をんる 遠流 遠國・島嶼に流罪とすること。しまながし。(近流などの對) 平家(二、座主)「遠流、還俗、遠流を可被宥か」

をん-わ 溫和 一暖にしてのどかなること。氣候の程よきこと。朗詠「醉鄕氏之國、四時獨誇溫和之天」二おだやかにしておちつきたること。やさしくしてすなほなること。溫順。俳諧新選冬「かはし行く水鳥どちの溫和なり」宋史(郭逵傳)「性溫和」

をん-わ 穩和 おとなしきこと。

をん-わてうてい 穩和調停 (名) 【法】國際紛爭を穩和の手段によりて調停すること。即ち、周旋・居中調停の類。

をん-わ 溫溫 (副) 氣象のおだやかなるさま、やさしきさまにいふ語。詩經(大雅)「溫溫恭人、維德之基」

ん

五十音及び伊呂波歌中に存せざる假名。通常之をウンと稱す。また撥假名(はねがな)ともいふ。

字體 【平假名】ん【片假名】ン・ン・レ・レ・ン(二の異體レより出でたるか)。マンスンスン(字源未詳)。又む・ムなどの假名を用ふる事あり。

一、表音的假名遣にては (イ)加行・佐行・也行・和行の諸音、及び母音の前にあるもの、及び語の最後にあるものはng音を表はす(ng音の說明は が の條一の(ロ)を見よ)。「こんき」(根氣)・「かんご」(漢語)・「はんし」(半紙)・「たん」(痰)・「あん」(鮑)・「しんやく」(新藥)・「でんわ」(電話)の如し。但し舌の後部と硬口蓋との閉鎖十分ならずして、鼻母音ウとなる事も少なからず。(ロ)ま行音・奈行音(但しに及び奈行拗音を除く)・良行音の前にあるものはn音を表はす(n音の說明はなの條一の(イ)を見よ)。「さんど」(三度)・「あんない」(案内)・「あんらく」(安樂)の如し。(ハ)波行濁音・バ行音又は末行音の前にあるものはm音を表はす(m音の說明はまの條一の(イ)を見よ)。「あんま」(按摩)・「さんば」(産婆)・「らんぷ」(洋燈)の如し。(ニ)に及び奈行拗音の前にあるものはr音を表はす(r音の說明はにの條一の(イ)を見よ)。「はんにゃ」(般若)・「てんにん」(天人)の如し。

二、歷史的假名遣にては その發音すべて表音的假名遣の場合に同じ。此の音は日本古代の言語には全く無かりしか又は甚だ稀なりしものの如くなるが、漢語と共に多く輸入せられたり。漢語に於ては此の種の音にn・m・ngの三種ありしが、平安朝にてngはイ又はウとなり、時にはnと混同し、mも亦nと混同せり。而して國語に於ても平安朝よりむ・み・に・ぬ・り等の音のンに變じたるものあり。これを表はす文字も初めは特別のものなく、む・ぬ・に等を用ひしが、後にはこれ等の文字より轉化したる特別の假名を用ふるに至れり。

(助動) むの助動に同じ。

(感) うんを見よ。

(をはり)

大正八年十二月十五日 初版印刷發行
昭和四年四月十五日 十八版印刷發行
昭和十六年三月三十一日 修訂版發行

著作權所有

發行所

著作者 松井簡治
著作者 上田萬年
發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 冨山房
右代表者 同所 合資會社冨山房社長 坂本守正
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 寺井藤左工門
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

修訂 大日本國語辭典第五卷
定價金拾五圓

東京市神田區神保町
明治二十九年三月設立 合資會社 冨山房
電話神田(25)自二、一七一番 至三、一七八番 電信略號(ヤマフ) 振替貯金口座東京五〇一番

859
21=

終